越谷市埋蔵文化財発掘調査報告書　第１集

大道遺跡発掘調査報告書Ⅰ

―西大袋土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書―

２０１６

越谷市教育委員会

越谷市埋蔵文化財発掘調査報告書　第１集

大道遺跡発掘調査報告書Ⅰ

―西大袋土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書―

２０１６

越谷市教育委員会

大道遺跡出土遺物　集合写真

序

埼玉県東部は関東平野の中心的な位置を占め、数多くの河川が集中する全国有数の地域として知られています。越谷市は元荒川や古利根川をはじめとする中川水系の諸河川に囲まれ、高次の都市機能と交通利便性を備えつつも、これらの河川が育んだ豊かな自然に恵まれています。本市においても「水と緑と太陽に恵まれた人と地域が支える安全・安心・快適都市」を将来像に掲げ、実現に向けて取り組んでいるところです。

このたび、西大袋土地区画整理事業地内において遺跡の存在が明らかとなり、越谷市教育委員会が発掘調査を実施いたしました。

元荒川流域では河川による浸食や自然堤防の形成などが見られ、低地部における水害から逃れるために、自然堤防上の微高地に古代の遺跡が形成されていることがあります。大道遺跡も自然堤防上に営まれた集落遺跡であり、発掘調査の結果、越谷市では初めてとなる平安時代（９世紀頃）の竪穴住居跡や、土師器を焼いた窯跡（土師器焼成坑）の発見など、貴重な成果をあげることができました。

本書は、これらの発掘調査成果をまとめたものです。埋蔵文化財の保護および普及・啓発の資料として、また、学術研究の基礎資料として広く活用していただければ幸いです。

結びに、発掘調査・本書の刊行にあたり特段のご理解とご協力を賜りました土地所有者、地域の多くの方々並びに関係者の皆様に対し、深く感謝申し上げます。

平成28年３月

越谷市教育委員会

教育長　吉田　茂

例　言

1　本書は、埼玉県越谷市大字大道に所在する大道遺跡（大道第１遺跡、大道第２遺跡の総称）の発掘調査報告書である。

2　埼玉県埋蔵文化財包蔵地台帳における県遺跡番号と調査・整理時の略号は以下のとおりである。

大道第１遺跡（No.78－011）、大道第２遺跡（No.78－012）

略号ＯＭＴ１（平成13年度調査）、略号ＯＭＴ２（平成15年度調査）

3　本調査は、越谷都市計画事業西大袋土地区画整理事業に伴う事前記録保存のための発掘調査であり、越谷市教育委員会が実施した。

4　発掘調査、整理・報告書作成事業は第Ⅰ章２に示した組織により実施した。

平成13年度発掘調査を平成13年７月31日から平成13年11月16日まで、平成15年度発掘調査を平成15年７月14日から平成15年９月16日まで、平成26年度発掘調査を平成26年５月12日から平成26年５月13日まで、及び平成26年12月１日から平成27年３月13日まで実施した。整理・報告書作成期間は、平成26年１月４日から平成28年３月11日までである。

5　本書の編集は植木・菟原が行い、執筆は第Ⅰ章・第Ⅱ章を菟原、第Ⅲ章・第Ⅳ章１（１）・第Ⅳ章２（１）・第Ⅵ章を植木、第Ⅳ章１（２）・第Ⅳ章２（２）を植木・鬼塚が行った。なお、平成15年度調査において得られた炭化物等の資料についてはパリノ・サーヴェイ株式会社に自然科学分析を委託し、結果を第Ⅴ章として収録した。遺物の実測は鬼塚・安井・植木が、実測図トレースは菟原・三上が、遺物の写真撮影は菟原・鬼塚が行った。

6　本書にかかる記録類及び出土遺物等は、越谷市教育委員会が保管している。

7　本書の作成にあたり、下記の方々から御教示、御協力を賜った。記して感謝申し上げる。

（敬称略、五十音順）

鬼塚知典　小坂延仁　髙﨑光司　長島正弘　宮川博司　八尾隆夫　大道自治会　越谷市郷土研究会

凡　例

1　本報告書におけるＸ・Ｙの数値は、全て日本測地系（旧測地系）で表記をしている。

ただし、調査時点ではその年度により日本測地系（旧測地系）と世界測地系（新測地系）が混在している。平成13年度調査及び平成15年度調査では日本測地系を、平成26年度調査では世界測地系を用いている。そのため、今回報告する平成26年度調査については報告書作成にあたり座標系を世界測地系から日本測地系へ変換している。

2　各挿図に記した方位は、全て座標北を指す。

3　調査で使用したグリッドは､国土標準平面直角座標に基づく10ｍ×10ｍの範囲を基本（１グリッド）とした。

4　グリッドの名称は、北西を基点とし、北から南方向にアルファベット（Ａ・Ｂ・Ｃ･･･)、西から東方向に数字（１・２・３･･･）を付し、アルファベットと数字を組み合わせて呼称した。

なお、グリッド名は本報告書で報告する平成13年度調査及び平成15年度調査では調査区ごとに設定しており、今回報告する平成26年度調査箇所もそのグリッドに組み込む形で報告した。

5　遺構断面図に記した水準数値は、海抜標高（単位ｍ）を表す。

6　本書の本文・挿図・表・写真図版に記した遺構の略号は、以下のとおりである。なお、遺構一覧表の計測値はｍ単位とし、()は残存値を示す。

ＳＩ･･･竪穴住居跡　　ＳＢ･･･掘立柱建物跡　　ＳＡ･･･柱列跡　　ＳＤ･･･溝跡

ＳＫ･･･土坑　　Ｐ　･･･ピット

7　遺物観察表の表記方法は、以下のとおりである。

・土器計測値の（）は残存値を示す。

・胎土は特徴的な鉱物等及び含有量の程度を、以下のとおり記号で示した。

Ａ：白色粒子　　Ｂ：赤色粒子　　Ｃ：黒色粒子　　Ｄ：金雲母　　Ｅ：雲母　　Ｆ：角閃石

Ｇ：長石　　Ｈ：石英　　Ｉ：砂粒　　Ｊ：小礫　　Ｋ：骨針

多：多量　　少：少量　　微：微量

目　　次

巻頭図版

序

例言

凡例

目次（挿図目次・挿表目次・写真図版目次）

Ⅰ　発掘調査の概要…… 1

1．発掘調査に至る経過…… 1

2．発掘調査、整理・報告書刊行の組織…… 2

（1）発掘調査

（2）整理・報告書作成

Ⅱ　遺跡の立地と環境…… 4

1．地理的環境…… 4

2．歴史的環境…… 5

Ⅲ　遺跡の概要…… 8

Ⅳ　遺構と遺物…… 9

1．大道第1遺跡（平成13年度・平成26年度調査地点）…… 9

（1）遺構

（2）遺物

2．大道第2遺跡（平成15年度調査地点）…… 43

（1）遺構

（2）遺物

Ⅴ　大道第2遺跡の自然科学分析…… 83

Ⅵ　調査のまとめ…… 100

写真図版

挿図目次

第１図　越谷市の位置…… 1
第２図　土地区画整理事業位置図…… 1
第３図　埼玉県の地形…… 4
第４図　越谷市の地形…… 6
第５図　大道遺跡位置図…… 7
第６図　調査地点位置図…… 7
第７図　グリッド配置図…… 8
第８図　大道第１遺跡　調査区全体図…… 10
第９図　ＳＩ１　遺構実測図…… 11
第10図　ＳＩ１　遺物・個体分布図…… 12
第11図　ＳＩ２　遺構実測図…… 13
第12図　ＳＩ２　遺物・個体分布図…… 14
第13図　ＳＩ３　遺構実測図…… 15
第14図　ＳＩ３　遺物・個体分布図…… 16
第15図　ＳＩ４　遺構実測図…… 17
第16図　ＳＩ４　遺物・個体分布図…… 17
第17図　ＳＩ５　遺構実測図…… 18
第18図　ＳＩ５　遺物・個体分布図…… 18
第19図　ＳＩ６　遺構実測図…… 19
第20図　ＳＩ６　遺物・個体分布図…… 20
第21図　ＳＫ１　遺構実測図…… 20
第22図　ＳＫ１　遺物・個体分布図…… 20
第23図　ＳＫ２　遺構実測図…… 21
第24図　ＳＫ２　遺物・個体分布図…… 21
第25図　ＳＫ３　遺構実測図…… 21
第26図　ＳＢ１　遺構実測図･エレベーション図…… 23
第27図　ＳＩ１出土遺物（１）…… 33
第28図　ＳＩ１出土遺物（２）…… 34
第29図　ＳＩ１出土遺物（３）…… 35
第30図　ＳＩ２出土遺物（１）…… 35
第31図　ＳＩ２出土遺物（２）…… 36
第32図　ＳＩ３出土遺物…… 36
第33図　ＳＩ４出土遺物…… 37
第34図　ＳＩ５出土遺物…… 37
第35図　ＳＩ６出土遺物（１）…… 38
第36図　ＳＩ６出土遺物（２）…… 39
第37図　ＳＫ１出土遺物（１）…… 39
第38図　ＳＫ１出土遺物（２）…… 40
第39図　ＳＫ２出土遺物（１）…… 40
第40図　ＳＫ２出土遺物（２）…… 41
第41図　ＳＫ３出土遺物…… 41
第42図　ＳＤ１出土遺物…… 42
第43図　ＳＤ５出土遺物…… 42
第44図　大道第２遺跡　調査区全体図…… 51
第45図　ＳＩ１　遺構実測図…… 52
第46図　ＳＩ１　遺物・個体分布図…… 53
第47図　ＳＩ２・SK17　遺構実測図 …… 54
第48図　ＳＩ２・SK17　遺物・個体分布図 …… 55
第49図　ＳＢ１　遺構実測図…… 56
第50図　ＳＢ２　遺構実測図…… 57
第51図　ＳＢ３　遺構実測図…… 58
第52図　ＳＡ１　遺構実測図…… 59
第53図　ＳＡ２　遺構実測図…… 60
第54図　ＳＡ３　遺構実測図…… 61
第55図　ＳＡ４　遺構実測図…… 62
第56図　ＳＡ５　遺構実測図…… 63
第57図　ＳＤ１　遺構実測図…… 64
第58図　ＳＫ１～SK４　遺構実測図 …… 65
第59図　ＳＫ５～SK９　遺構実測図 …… 66
第60図　ＳK10～SK16　遺構実測図 …… 67
第61図　Ｐ１～P11　遺構実測図 …… 68
第62図　ＳＩ１出土遺物（１）…… 76
第63図　ＳＩ１出土遺物（２）…… 77
第64図　ＳＩ２出土遺物（１）…… 77
第65図　ＳＩ２出土遺物（２）…… 78
第66図　ＳＩ２出土遺物（３）…… 79
第67図　ＳＫ１・ＳＫ４出土遺物…… 80
第68図　ＳＫ４・ＳＫ６出土遺物…… 81
第69図　ＳＫ・Ｐ・ＳＤ等出土遺物…… 82

挿表目次

第１表　市内遺跡一覧…… 6
第２表　住居跡一覧表（大道第１遺跡）…… 24
第３表　土坑一覧表（大道第１遺跡）…… 24
第４表　掘立柱建物跡ピット一覧表（大道第１遺跡）…… 24
第５表　住居跡出土土器観察表（大道第１遺跡）…… 27
第６表　住居跡出土土製品・鉄製品・石製品観察表（大道第１遺跡）…… 30
第７表　土坑出土土器観察表（大道第１遺跡）…… 31
第８表　土坑出土鉄製品観察表（大道第１遺跡）…… 32
第９表　住居跡一覧表（大道第２遺跡）…… 48
第10表　土坑一覧表（大道第２遺跡）…… 48
第11表　掘立柱建物跡ピット一覧表（大道第２遺跡）…… 49
第12表　柱列跡ピット一覧表（大道第２遺跡）…… 50
第13表　ピット一覧表（大道第２遺跡）…… 50
第14表　住居跡出土土器観察表（大道第２遺跡）…… 71
第15表　住居跡出土鉄製品観察表（大道第２遺跡）…… 73
第16表　柱列跡・土坑出土土器観察表（大道第２遺跡）…… 73
第17表　土坑出土鉄製品観察表（大道第２遺跡）…… 75
第18表　掘立柱建物跡・柱列跡出土金属製品観察表（大道第２遺跡）…… 75
第19表　ピット・溝・遺構外出土土器観察表（大道第２遺跡）…… 75

写真図版目次

巻末図版１
　写真１　大道第１遺跡遠景（北から）
　写真２　調査区空中写真（上が北）
巻末図版２
　写真３　ＳＩ１　遺物出土状況（南から）
　写真４　ＳＩ１　東カマド　検出状況（西から）
　写真５　ＳＩ１　北カマド　支脚出土状況（南西から）
　写真６　ＳＩ１　完掘状況
　写真７　ＳＩ２　遺物出土状況（南から）
　写真８　ＳＩ２　完掘状況（西から）
　写真９　ＳＩ３　完掘状況（南から）
　写真10　ＳＩ３　完掘状況（東から）
巻末図版３
　写真11　ＳＩ４　遺物出土状況（南西から）
　写真12　ＳＩ４　カマド　土層断面（南から）
　写真13　ＳＩ４　完掘状況（東から）
　写真14　ＳＩ５　完掘状況（西から）
　写真15　ＳＩ６　遺物出土状況（西から）
　写真16　ＳＩ６　完掘状況（西から）
　写真17　ＳＩ６　カマド　遺物出土状況（西から）
　写真18　ＳＩ６　カマド　支脚出土状況（西から）
巻末図版４
　写真19　ＳＫ１　土層断面（南から）
　写真20　ＳＫ１　遺物出土状況（北から）
　写真21　ＳＫ２　遺物出土状況（西から）
　写真22　ＳＫ２　完掘状況（南から）
　写真23　ＳＫ３　土層断面（南から）
　写真24　ＳＫ３　遺物出土状況（南から）
　写真25　ＳＢ１　完掘状況（上が東）
　写真26　ＳＤ１～５　完掘状況（北西から）
巻末図版５　ＳＩ１出土遺物（１）
巻末図版６　ＳＩ１出土遺物（２）
巻末図版７　ＳＩ１出土遺物（３）
巻末図版８　ＳＩ２出土遺物（１）
巻末図版９　ＳＩ２出土遺物（２）
　　ＳＩ３出土遺物
巻末図版10　ＳＩ４出土遺物
　　ＳＩ５出土遺物（１）
巻末図版11　ＳＩ５出土遺物（２）
　　ＳＩ６出土遺物（１）
巻末図版12　ＳＩ６出土遺物（２）
巻末図版13　ＳＩ６出土遺物（３）
巻末図版14　ＳＩ６出土遺物（４）
巻末図版15　ＳＩ６出土遺物（５）
　　ＳＫ１出土遺物（１）
巻末図版16　ＳＫ１出土遺物（２）
巻末図版17　ＳＫ１出土遺物（３）
　　ＳＫ２出土遺物（１）
巻末図版18　ＳＫ２出土遺物（２）
巻末図版19　ＳＫ２出土遺物（３）
　　ＳＫ３出土遺物
巻末図版20　ＳＤ１出土遺物
　　ＳＤ５出土遺物
巻末図版21
　写真27　大道第２遺跡遠景（東から）
　写真28　調査区空中写真（上が北）
巻末図版22
　写真29　ＳＩ１　遺物出土状況（東から）
　写真30　ＳＩ１　完掘状況（南から）
　写真31　ＳＩ１　カマド　遺物出土状況（南から）
　写真32　ＳＩ１　ピット内　遺物出土状況（南から）
　写真33　ＳＩ２　完掘状況（南東から）
　写真34　ＳＩ２　完掘状況（南から）
　写真35　ＳＩ２　カマド　土層断面（東から）
　写真36　ＳＩ２　カマド　完掘状況（南から）
巻末図版23
　写真37　ＳＢ・ＳＡ　完掘状況（上が北）
　写真38　ＳＢ・ＳＡ　完掘状況（東から）
　写真39　ＳＡ１　完掘状況（南から）
　写真40　ＳＡ５　完掘状況（上が西）
　写真41　ＳＤ１　完掘状況（北から）
　写真42　ＳＫ１　土層断面〈北から）
　写真43　ＳＫ２　完掘状況（東から）
　写真44　ＳＫ３　完掘状況（東から）
巻末図版24
　写真45　ＳＫ４　土層断面（東から）
　写真46　ＳＫ４　完掘状況（西から）
　写真47　ＳＫ５　完掘状況（西から）
　写真48　ＳＫ６　土層断面（東から）
　写真49　ＳＫ７　土層断面（西から）
　写真50　ＳＫ８　土層断面（東から）
　写真51　ＳＫ９　完掘状況（東から）
　写真52　ＳＫ10　完掘状況（南から）
巻末図版25
　写真53　ＳＫ11　完掘状況（東から）
　写真54　ＳＫ12　完掘状況（東から）
　写真55　ＳＫ13　土層断面（東から）
　写真56　ＳＫ14　完掘状況（西から）
　写真57　ＳＫ15　完掘状況（西から）
　写真58　ＳＫ16　土層断面（西から）
　写真59　１区全景（南から）
　写真60　２区全景（南から）
巻末図版26　ＳＩ１出土遺物
巻末図版27　ＳＩ２出土遺物（１）
巻末図版28　ＳＩ２出土遺物(２)・ＳＫ１～４出土遺物(１)
巻末図版29　ＳＫ１～４出土遺物（２）
巻末図版30　ＳＫ１～７出土遺物
巻末図版31　ＳＫ・ピット・遺構外出土遺物
巻末図版32　鉄製品Ｘ線撮影写真

Ⅰ　発掘調査の概要

１．発掘調査に至る経過

越谷市（第１図）では、越谷市施行による土地区画整理事業として、越谷都市計画事業西大袋土地区画整理事業（以下「西大袋土地区画整理事業」という。）を実施している。西大袋土地区画整理事業は健全な市街地の造成を図り、公共の福祉を増進することを目的に、平成８年５月10日に都市計画決定、平成９年１月28日に事業決定されている。施行区域は越谷市の北東部、東武鉄道伊勢崎線の大袋駅から西へ約1.5kmに位置する区域で、越谷市大字三野宮、大字大道、大字大竹、大字恩間及び大字南荻島の各一部が含まれる。事業面積は125.9haである（第２図）。

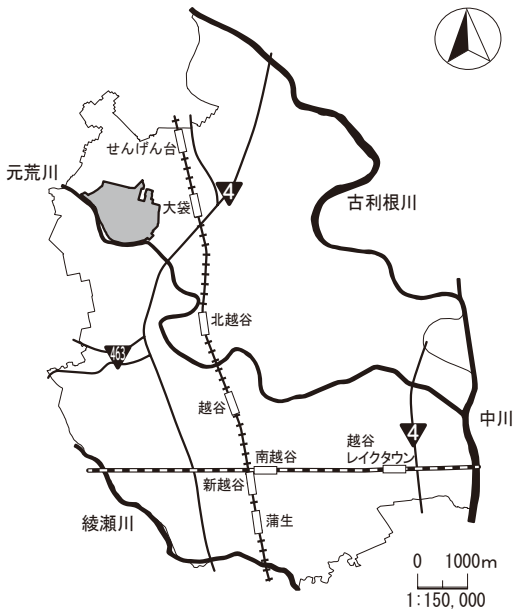
区域内には昭和62年における遺物の表面採集により、周知の埋蔵文化財包蔵地として大道第１遺跡、大道第２遺跡（総称して大道遺跡と呼称）が定められていた。そのため、土地区画整理事業との調整を図るため、平成９年度から越谷市教育委員会により試掘調査を実施し、大道遺跡の範囲の確認及び事業区域内の埋蔵文化財の有無の確認を行った。

その結果、昭和62年に大道遺跡として定められた埋蔵文化財包蔵地の範囲内から古代の遺構・遺物が確認された。また、埋蔵文化財包蔵地の範囲外にも遺跡が広がることが確認され、試掘調査の結果を踏まえて順次、埋蔵文化財包蔵地を拡大した。なお、昭和62年当時、大道第１遺跡、大道第２遺跡は遺跡範囲の中心部が直線距離にして約130ｍ離れていたが、範囲の拡大により、平成28年３月１日現在では両範囲は接している。

第１図　越谷市の位置

埋蔵文化財包蔵地の取り扱いについては埼玉県教育委員会、越谷市の区画整理事業所管課及び社会教育課（のち生涯学習課）で協議を重ね、調整を図ってきたところであるが、事業の性質上、公園等で遺跡が現状保存される場所以外については、工事により埋蔵文化財の保存に影響を及ぼすことが予想され、また、埼玉県教育委員会の通知においても、工事着手前に発掘調査を実施することとされたため、整備工事前に埋蔵文化財の発掘調査を行うこととした。なお、発掘調査にかかる費用は市の一般会計から支出した。

発掘調査は平成13年度、平成15年度、平成24年度、平成25年度、平成26年度、平成27年度に実施しており（第６図）、今後も区画整理事業の進捗に合わせて、継続して発掘調査を実施する計画である。



第２図　土地区画整理事業位置図

２．発掘調査、整理・報告書刊行の組織

主体者　越谷市教育委員会

（１）発掘調査

平成13年度

教育長	中野　茂	社会教育課長	那倉　保夫
生涯学習部長	川上　金蔵	社会教育課文化財係長	長谷川士郎
生涯学習部次長	池上　彰	社会教育課文化財係主事	橋本　充史（調査担当者）
生涯学習部副参事	本田　次男		

平成15年度

教育長	中野　茂	社会教育課長	那倉　保夫
生涯学習部長	川上　金蔵	社会教育課文化財係長	長谷川士郎
生涯学習部次長	池上　彰	社会教育課文化財係主事	橋本　充史（調査担当者）
生涯学習部副参事	福井　一雄		

平成26年度

教育長	吉田　茂	生涯学習課文化財係主事	菟原　雄大（調査担当者）
教育総務部長	横川　清		
教育総務部副部長 兼生涯学習課長	斉藤　美子	生涯学習課文化財係主事	宮川　博司（調査担当者）
生涯学習課副主幹	木村　和明	生涯学習課文化財係臨時職員	鬼塚　千花
生涯学習課文化財係長	前田　博志	生涯学習課文化財係臨時職員	安井　陽子

平成15年度　調査風景

平成26年度　調査風景

（2）整理・報告書作成

平成25年度

教育長	吉田　茂	生涯学習課文化財係長	中村　清彦
教育総務部長	横川　清	生涯学習課文化財係主事	菟原　雄大
教育総務部参事	鈴木　宏孝	生涯学習課文化財係主事	宮川　博司
教育総務部副部長 兼生涯学習課長	斉藤　美子	生涯学習課文化財係臨時職員	鬼塚　千花
		生涯学習課文化財係臨時職員	安井　陽子
生涯学習課主幹	山梨　一弘		

平成26年度

教育長	吉田　茂	生涯学習課文化財係主事	宮川　博司
教育総務部長	横川　清	生涯学習課文化財係臨時職員	鬼塚　千花
教育総務部副部長 兼生涯学習課長	斉藤　美子	生涯学習課文化財係臨時職員	島田　睦子
		生涯学習課文化財係臨時職員	三上　由佳
生涯学習課副主幹	木村　和明	生涯学習課文化財係臨時職員	安井　陽子
生涯学習課文化財係長	前田　博志	生涯学習課文化財係臨時職員	山﨑　京子
生涯学習課文化財係主事	菟原　雄大		

平成27年度

教育長	吉田　茂	生涯学習課文化財担当主事	菟原　雄大
教育総務部長	横川　清	生涯学習課文化財担当主事	植木　雅博
教育総務部副部長	植田　春夫	越谷市市史専門委員	鬼塚　千花
生涯学習課長	福田　博	越谷市市史専門委員	安井　陽子
生涯学習課副課長	木村　和明	生涯学習課臨時職員	中村恵津子
生涯学習課副課長	前田　博志	生涯学習課臨時職員	新岡　秀章
		生涯学習課臨時職員	三上　由佳

整理作業風景（実測）

整理作業風景（トレース）

Ⅱ　遺跡の立地と環境

１．地理的環境

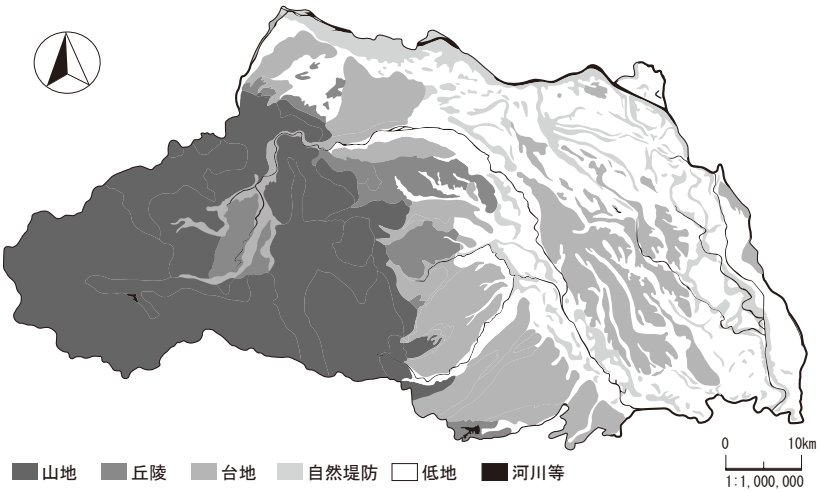
越谷市は埼玉県南東部に広く発達する中川低地のなかに位置している。中川低地は埼玉県西南部に分布する荒川低地と川口市南部で合流し、東京の下町低地に続いている。市域は元荒川・古利根川・綾瀬川の顕著な曲流によって地形が形成され､その流域に沿って自然堤防の微高地が発達していることから、市域の土地形成にはこれらの河川が大きな役割をはたしていたことがうかがえる。

現在までに元荒川の曲流部分については直線化がなされているが、元荒川・古利根川の流路については比較的一定していたと考えられ、現在の流路に沿ったかたちで自然堤防が発達している。これに比べて綾瀬川の流路は自然堤防が分散しており、乱流して流路を変えていたことがうかがえる。

越谷市域の標高は北部で６ｍ前後、南部で４ｍ前後を示し、平均傾斜1,000分の0.4程度の非常にゆるい傾斜をしている。市域の地形としては自然堤防と後背低湿地との微地形が顕著であり、高度差１ｍ前後のゆるい起伏が見られるにすぎない。近年までは自然堤防の微高地に住宅が集まり集落が作られ、後背低湿地が水田として耕作されるという、地形に合わせた土地利用がなされていたが、現在では後背低湿地にも住宅等が建てられ、土地利用の様子が急激に変化している。

第４図は市域の自然堤防に遺跡の位置を追加した図であるが、遺跡は全て自然堤防上に立地していることが分かる。調査の実施されていない遺跡がほとんどであるため、その範囲等が不明であるものの、遺跡は自然堤防の中心部というよりは、縁辺部に立地している場合が多いようである。なお、現状では元荒川由来の自然堤防上に遺跡が多く存在しているようであるが、市域には未発見の遺跡も多く存在している可能性もあるため、詳細な分布は不明と言わざるを得ない。

大道遺跡は元荒川の左岸に位置し、すぐ北側が元荒川の氾濫原となる自然堤防上の縁辺部に所在している。標高は５ｍ前後で、今回報告する大道第１遺跡は北側が低く、調査区の北側と南側では直線距離約80ｍに対し、約１ｍの標高差がある。大道第２遺跡でも北側が低く、調査区の北側と南側では直線距離約40ｍに対し、約0.3ｍの標高差がある。



第３図　埼玉県の地形

２．歴史的環境

越谷市域で現在のところ最古の遺跡と呼べるのは古墳時代後期の見田方遺跡である。見田方遺跡は昭和41年、昭和42年の２回にわたって発掘調査が行われており、竪穴住居が検出され、土器、土錘、紡錘車などが出土した。ほとんど遺跡が無いとされていた中川低地における代表的な遺跡として評価されている。それ以前の遺跡は確認されておらず、いつ頃から市域に人が住みはじめたのかは判然としない。

しかしながら、草加・八潮遺跡確認調査団による昭和56年発行の『中川低地遺跡確認調査報告書』によれば、越谷市増林地内で縄文時代の遺物が、越谷市東越谷地内で弥生時代終末から古墳時代初頭の遺物が、越谷市大成町地内で古墳時代中期から後期の遺物がそれぞれ表面採集されているとの報告がされている。これらの成果を評価すれば、当該時期の遺跡が存在する可能性は十分にあり、見田方遺跡以前の遺跡の年代がいつ頃まで遡れるのかについては、今後検討の余地は十分にあるといえる。

見田方遺跡以降の古代についてみれば、遺跡としては今回報告する大道遺跡以外に市域には７遺跡が存在している（第１表）。ただし、大道遺跡以外は発掘調査例が無く、その様相は未だ判然としていない。

遺跡以外に目を向けると、大道遺跡より北西に直線距離で1.2km、元荒川を挟んだ対岸には野島山浄山寺が立地している。浄山寺は寺伝によると、下野国都賀郡の豪族壬生氏の出であるとされる慈覚大師円仁が貞観２年（860）に開基したとされている。円仁は最澄に師事し、武蔵・上野両国での布教に功労があったとされ、関東には円仁が開山・再興したと伝わる寺が多数存在している。

従来、浄山寺の本尊「木造地蔵菩薩立像」は、年２回の開帳日以外は秘仏とされ、詳しい調査を受けてこなかったが、平成23年の東日本大震災で両足が破損したため、像の解体修理を行ったところ、平安時代初期にあたる９世紀に作られた、関東でも屈指の古さである非常に古い像であること、慶長５年（1600）に彩色補修をされたことなどが判明し、平成27年３月には埼玉県指定文化財となった。仏像の年代が寺伝の開基年代及び大道遺跡における平安時代の主体的な時期とも符合するため、周辺の歴史を考える上で示唆に富む発見であるといえる。

中世になると、市域の遺跡は３遺跡に減少する。ただし、市域に約130基存在している板碑の分布等から河川の自然堤防上に集落が展開していた状況が推測され、実際には未発見の遺跡が多数存在するものと考えられる。大道遺跡の周辺にも、元荒川の川底から引き揚げられたといわれる市指定文化財の貞治６年（1367）七字題目板碑が存在している。

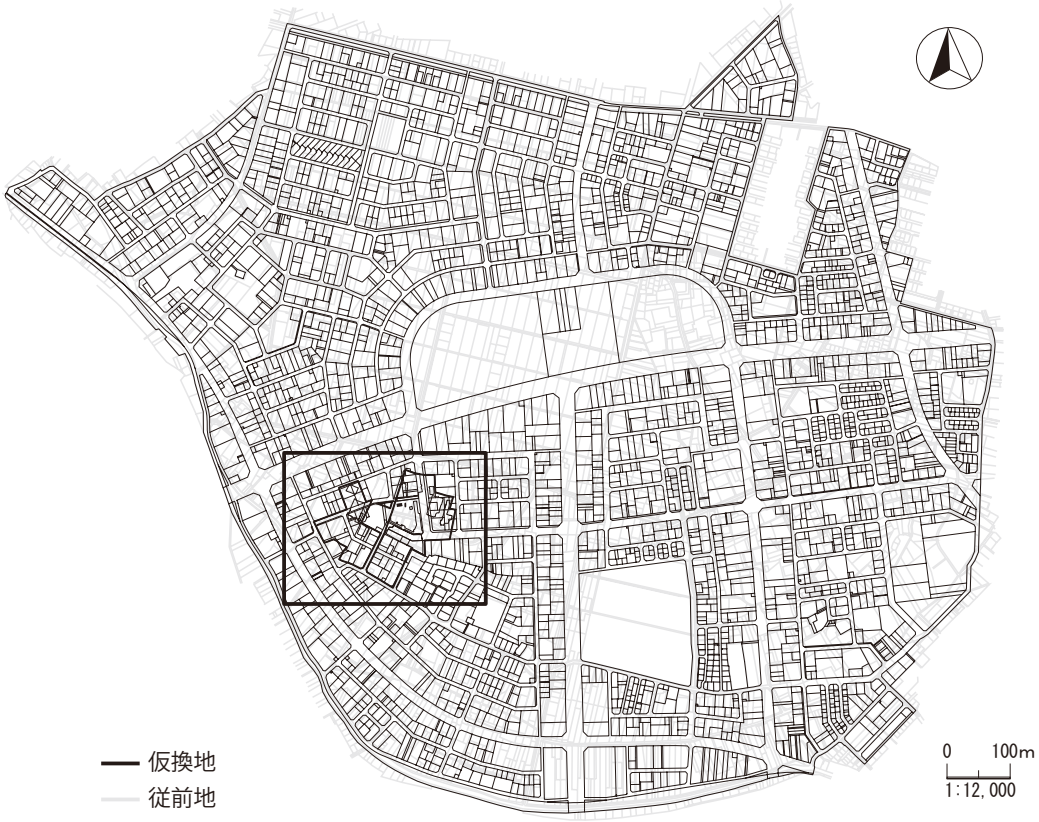
江戸時代において大道地域は大道村とよばれ、江戸時代を通じおおむね岩槻藩領であった。岩槻藩は天正18年（1590）に高力河内守清長が岩槻城に封ぜられてから、青山、阿部、板倉、戸田、松平、小笠原、永井、大岡と領主の交代がはげしい藩であった。しかも、所領高の異なった藩主の交代や、あるいは藩主の禄高加増などがあり、それにともなって領地村々の組替もはげしい変動をみせていた。越谷地域の岩槻藩領では、寛永２年（1625）岩槻城主阿部備中守正次の禄高加増に伴い、恩間村・大竹村・大道村・三野宮村の各村が岩槻藩領に組入れられた。それ以降、岩槻藩領の領域に変更はあるものの、大道村は廃藩置県まで岩槻藩領であった。

『新編武蔵風土記稿』によれば大道村の家数は78であり、大道遺跡の範囲中心に所在する香取神社を「村の鎮守ナリ歸命院ノ持」、歸命院を「三之宮村一乗院門徒ニテ本尊不動」としている。なお、歸命院は現存していないが、一乗院は大道遺跡より北西に直線距離で約0.5kｍに所在している。

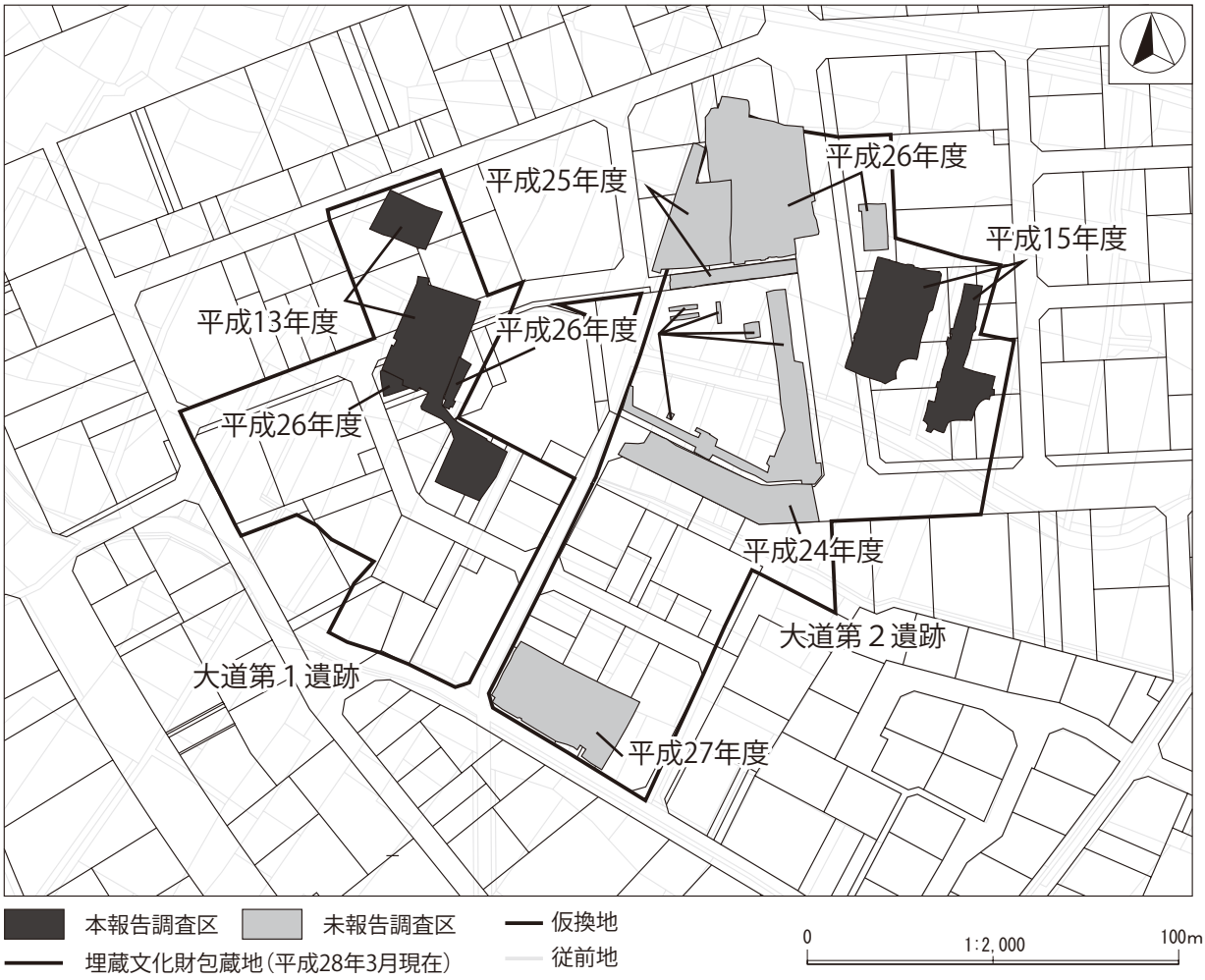
第４図　越谷市の地形

第１表　市内遺跡一覧

番号	県遺跡番号	遺跡名	時期
1	78-011	大道第１遺跡	平安、近世
2	78-012	大道第２遺跡	平安、近世
3	78-001	見田方遺跡	古墳
4	78-002	№２遺跡	奈良、平安
5	78-003	一番遺跡	室町、戦国
6	78-004	大相模次郎能高館跡	不明
7	78-005	会田出羽屋敷	近世
8	78-007	清浄院開山塚	鎌倉
9	78-008	越ヶ谷御殿跡	中世、近世
10	78-009	№９遺跡	奈良、平安
11	78-010	蒲生の一里塚	近世
12	78-013	№13遺跡	奈良、平安
13	78-014	№14遺跡	奈良、平安
14	78-015	№15遺跡	奈良、平安
15	78-016	№16遺跡	奈良、平安、近世
16	78-017	海道西遺跡	奈良、平安、近世



第５図　大道遺跡位置図

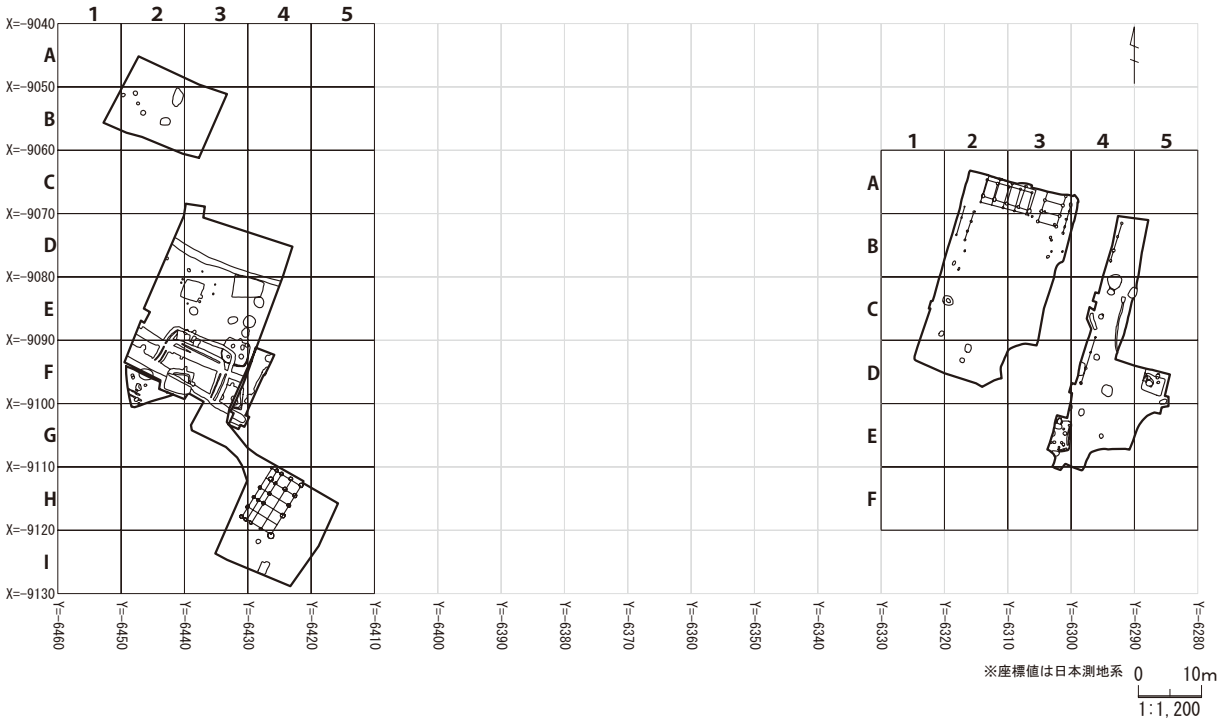


第６図　調査地点位置図

Ⅲ　遺跡の概要

大道遺跡では、平安時代および近世の遺構・遺物が検出されている。遺構では、平安時代に属する竪穴住居、土器焼成坑、土坑、溝などがあるほか、時期を確定しえないが溝、掘立柱建物跡、柱列跡などが検出されている。遺物では、平安時代の土器、土製品、鉄製品などのほか、江戸時代の古銭が出土している。

平安時代の遺構配置は、大道第１遺跡（平成13年度・平成26年度調査地点）では竪穴住居跡が調査区中央に集中し、やや離れて北側に土師器焼成坑が集中する。また、時期を確定しえないが南側には掘立柱建物跡が配置される。大道第２遺跡（平成15年度調査地点）では竪穴住居が調査区南東にやや離れて散在し、住居からやや北側に、土師器焼成坑や土坑が互いに距離をおいて散在する。時期を確定しえないが掘立柱建物跡、柱穴列は調査区北側に密集し、ほぼ同一の地点で重なるものもみられる。



第７図　グリッド配置図

Ⅳ　遺構と遺物

１．大道第１遺跡（平成13年度・平成26年度調査地点）

（１）遺構

（ｉ）住居跡

平成13年度の調査では、平安時代の住居跡を６軒検出した。いずれもＥ－３グリッドを中心に集中して分布する。カマドを検出したのは５軒、そのうち３軒は北カマド、１軒は東カマド、１軒は北・東カマドであり、北・東それぞれすべて、カマドの軸方向はほぼ一致している。

また、平成26年度調査において隣接する範囲２地点を調査し、第３号住居跡の一部等を検出したため、併せて本節に記載する。

第１号住居跡（ＳＩ１、第９・10図）

Ｆ－２・３グリッドに位置する。ＳＤ１が住居の中央付近を横断し、床面の一部まで掘削が及んでいる。平面形態は方形に近いが東西に長い長方形を呈し、各辺とも丸みを帯びている。カマドを通る軸を主軸とすると、主軸方位は北カマドがＮ－14.5°－Ｅ、東カマドがＮ－97.5°－Ｅである。規模は長軸4.32ｍ、短軸3.75ｍ、深さは最高0.42ｍで、床面は南側がやや低くなっている。

北カマドは北壁の中央からやや東寄りに設けられ、規模は全長0.95ｍ、幅0.7ｍである。燃焼部が壁の外側に突出している。煙道は検出されていない。火床部は深さ0.12ｍほど掘り込まれており、覆土には焼土、炭化物が多量に含まれるが、火床面はあまり被熱していない。火床部の覆土からは土錘が２点出土している（第28図30、31）。

東カマドは東壁のほぼ中央に設けられ、規模は全長0.94ｍ、残存幅0.4ｍである。北カマドと同様に、燃焼部は壁の外側に突出している。煙道は検出されていない。火床部は深さ0.1ｍほど掘り込まれており、覆土には焼土が多量、炭化物が少量含まれ、火床面は被熱していた。火床部および天井部の崩落土からは甕が１点出土している（第27図13）。また、北カマドの中央からはほぼ完形の土製支脚が、底面を火床面に接し、住居の外方向に傾いた状態で出土した（第28図24）。

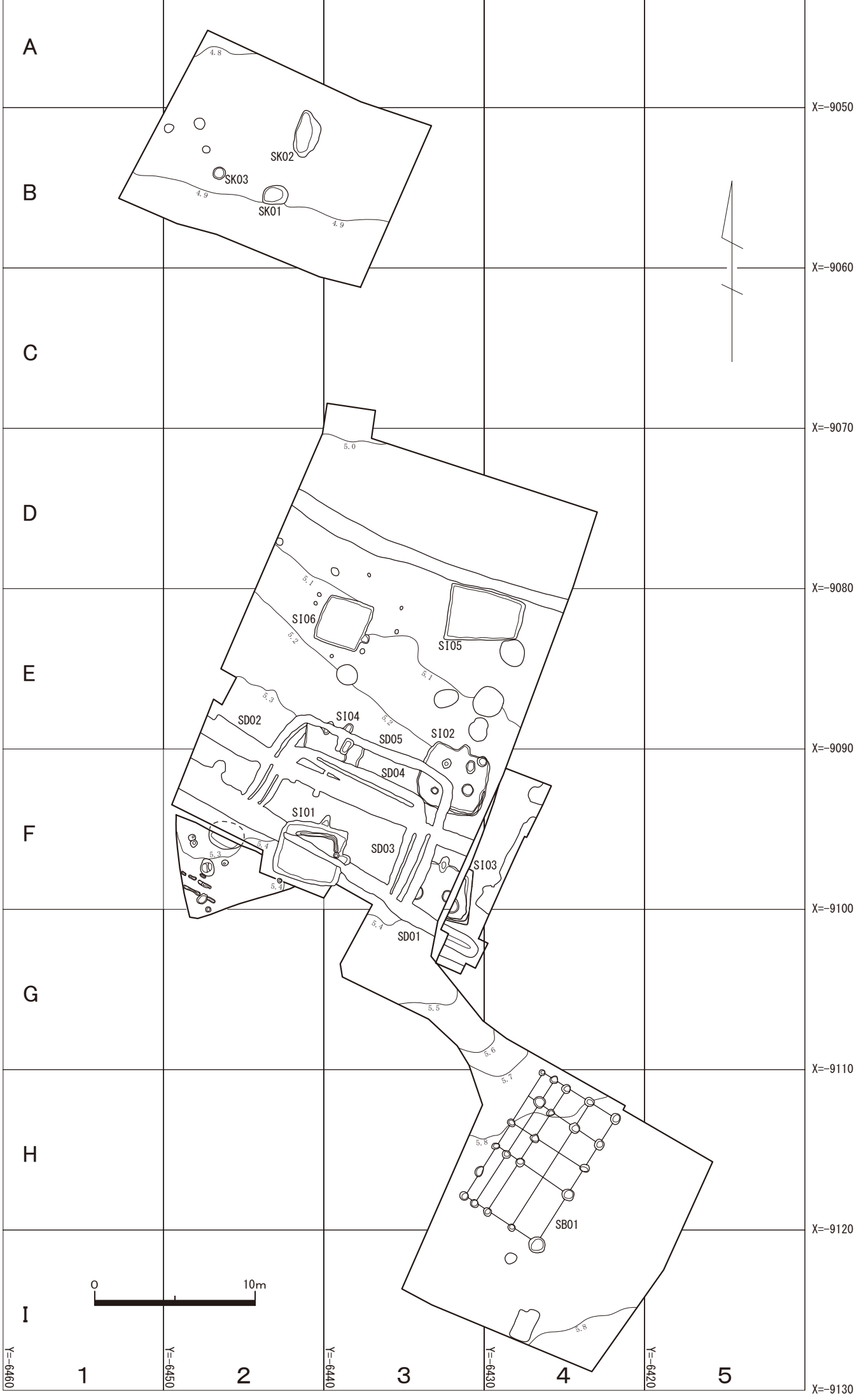
なお、覆土の観察からは２基のカマドの先後関係は判断できなかった。

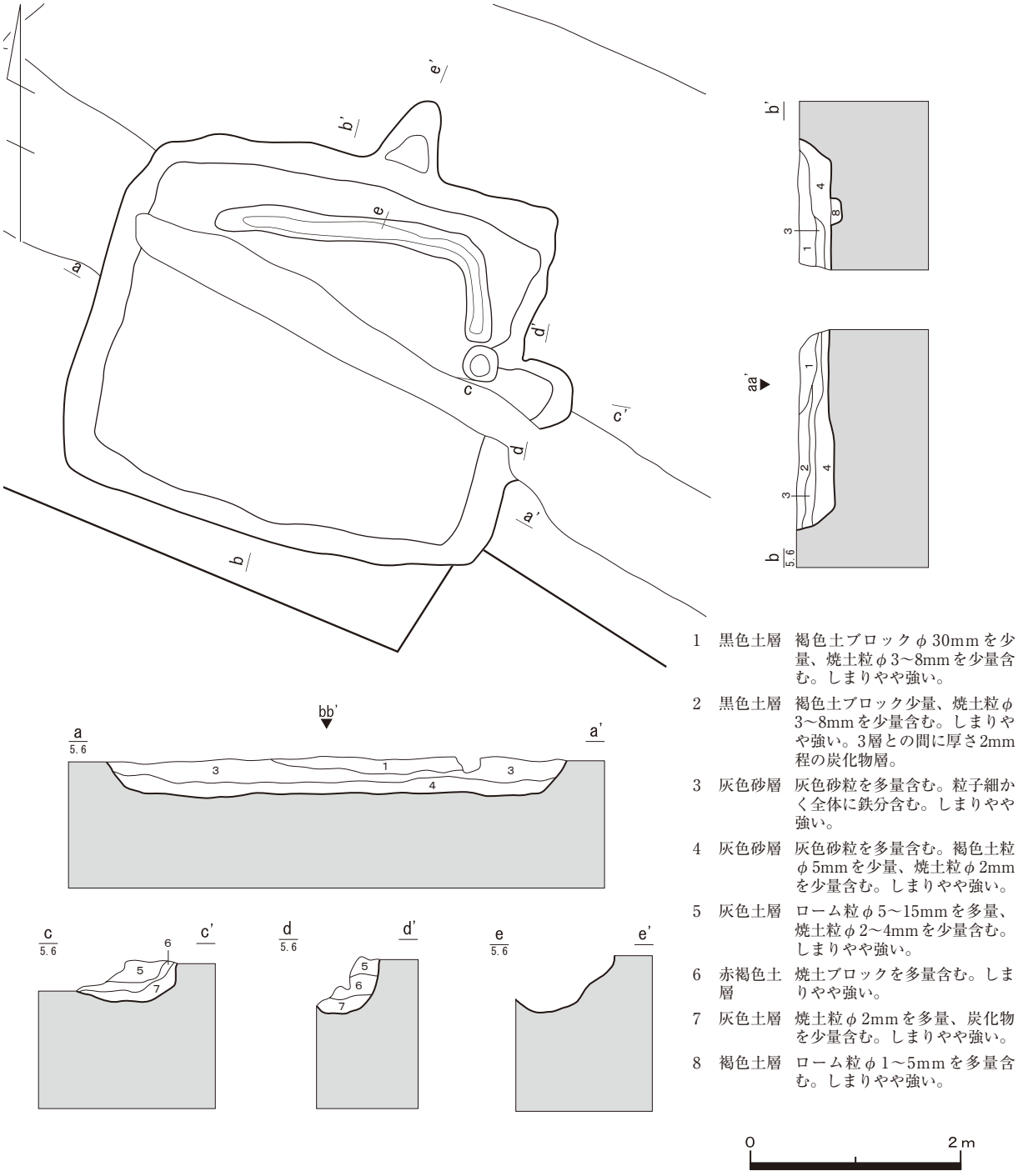
床面からは壁周溝、ピット１基が検出された。壁周溝は北壁から東壁中央にかけて巡り、幅0.19～0.29ｍ、深さは最高0.1ｍである。ピットは壁周溝の端部に接しつつ、東カマドの袖に当たる位置に配置されているが、遺物は出土していない。

第２号住居跡（ＳＩ２、第11・12図）

Ｅ－３、Ｆ－３・４グリッドに位置する。南西の一部はＳＤ５による削平を受けている。平面形態はやや歪んだ方形で、各辺とも丸みを帯びている。主軸方位はＮ－17°－Ｅで、北カマドである。規模は長軸4.41ｍ、短軸4.11ｍ、深さは最高0.28ｍで、床面は南西側がやや低くなっている。

カマドは北壁のほぼ中央に設けられているが、火床部を残して削平されている。規模は全長0.83ｍ、幅0.75ｍである。燃焼部が壁の外側に突出している。煙道は検出されていない。火床部の覆土からは焼

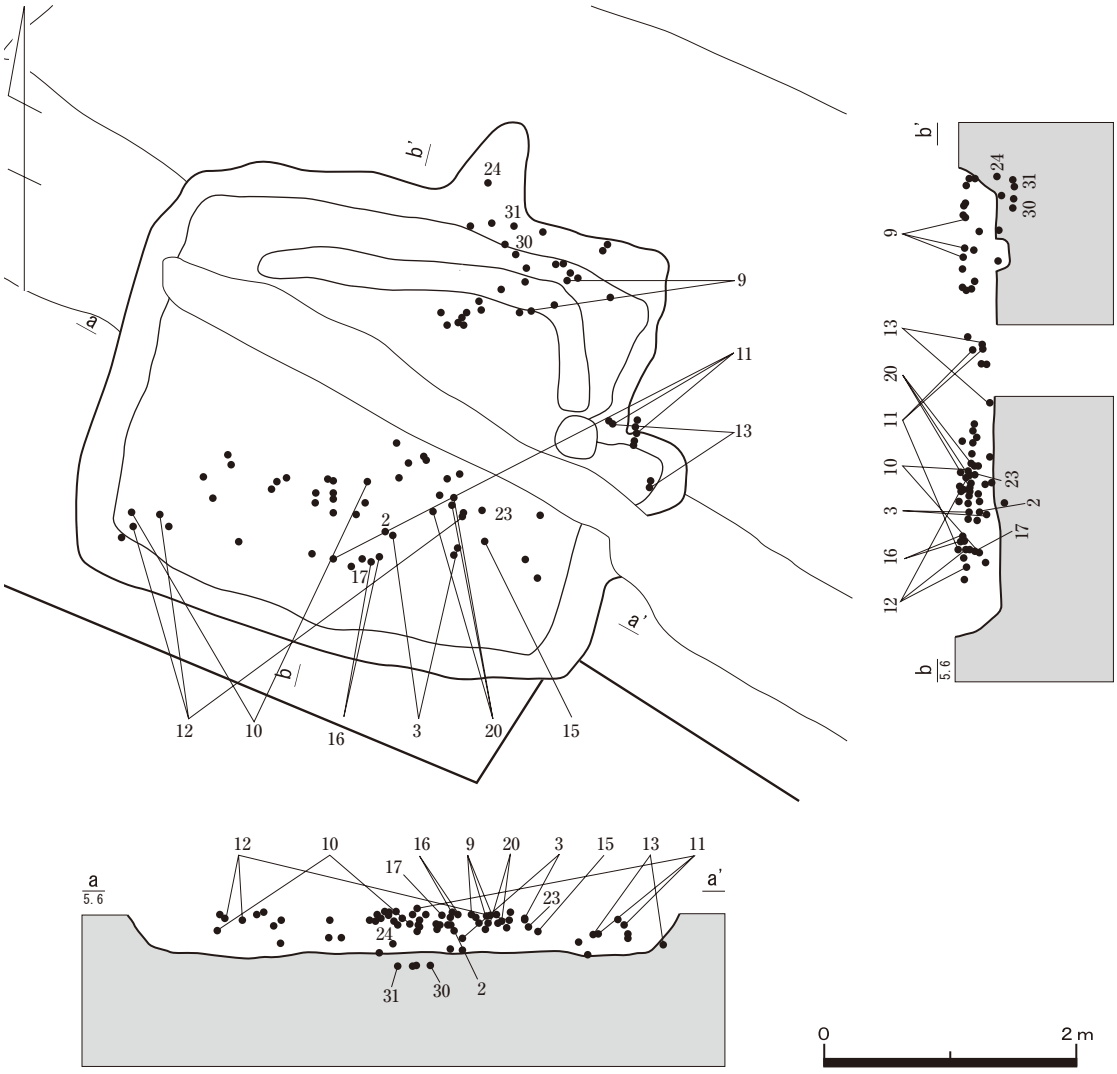

A
B
C
D
E
F
G
H
I
SK02
SK03
SK01
SI06
SI05
SD02
SI04
SD05
SI02
SD04
SI01
SD03
SI03
SD01
SB01
4.8
4.9
4.9
5.0
5.1
5.2
5.1
5.3
5.2
5.3
5.4
5.3
5.4
5.4
5.5
5.6
5.7
5.8
5.8
0
10m
X=-9050
X=-9060
X=-9070
X=-9080
X=-9090
X=-9100
X=-9110
X=-9120
X=-9130
Y=-6460
Y=-6450
Y=-6440
Y=-6430
Y=-6420
1
2
3
4
5



第９図　ＳＩ１　遺構実測図（S＝1/60）

土、炭化物が観察されたが、火床面はあまり被熱していない。明確に検出できなかったものの、カマドが削平された範囲には遺構が存在した可能性があり、カマドを中心として住居跡内外に遺物が多く散布していた。

床面からは壁周溝、ピット５基（Ｐ１～５）が検出された。壁周溝は東壁中央から南壁中央にかけて巡り、幅0.19～0.45ｍ、深さは最高0.13ｍである。やや歪んだ配置になるが、ピットのうちＰ１～４は



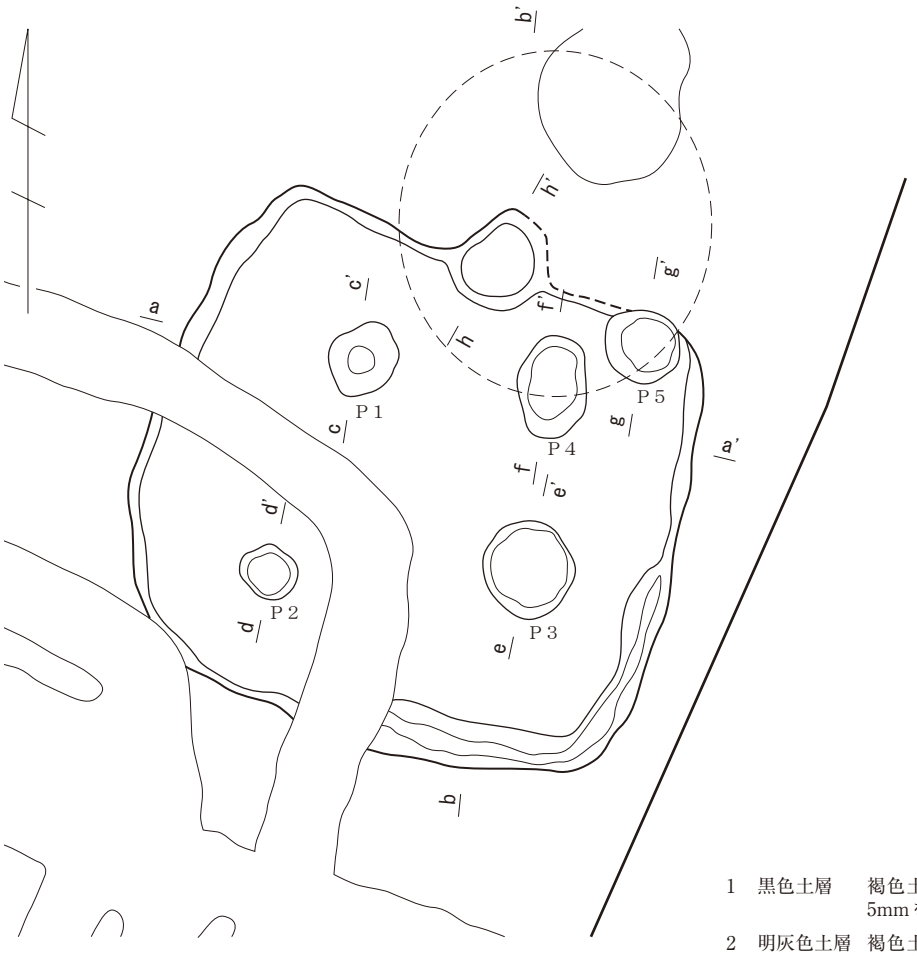
第10図　ＳＩ１　遺物・個体分布図（S＝1/60）

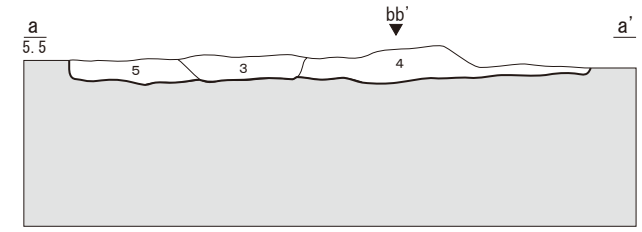
主柱穴と考えられ、深さはＰ１が0.21ｍ、Ｐ２が0.22ｍ、Ｐ３が0.21ｍ、Ｐ４が0.2ｍである。Ｐ５は北東の角に配置され、貯蔵穴と考えられる。深さは0.11ｍである。いずれのピットも、焼土、炭化物を覆土に多く含んでいる。

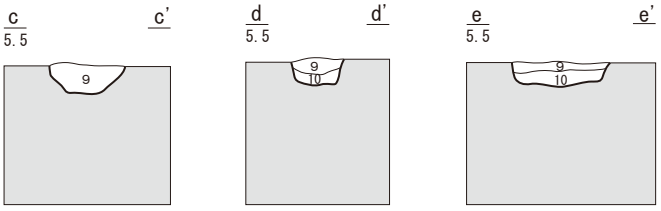
第３号住居跡（ＳＩ３、第13・14図）

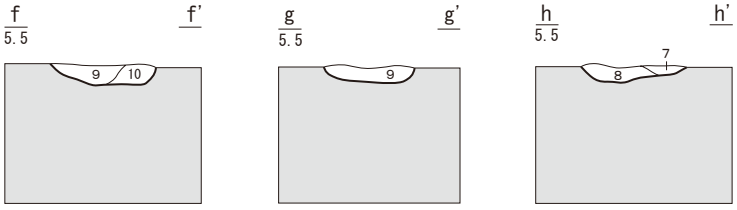
Ｆ－３、Ｇ－３グリッドに位置する。住居の西側・南側を溝により削平されているが、平面形態は東西に長軸をもつ長方形と推定される。北カマドで、主軸方位はＮ－19°－Ｅ前後と考えられ、東西の残存幅は3.58ｍ、南北の残存幅は3.42ｍ、深さは最高0.23ｍである。

カマドは北壁に設けられ、規模は全長1.05ｍ、幅0.6ｍ、深さ0.11ｍである。燃焼部が壁の外側に突出している。煙道は検出されていない。火床部の覆土からは焼土、炭化物が観察され、火床面は被熱した様子がみられた。









1　黒色土層　褐色土粒φ5mmを多量、炭化粒φ5mmを少量含む。しまりやや強い。

2　明灰色土層　褐色土粒を多量、炭化粒φ5mmを少量含む。しまりやや強い。

3　明褐色土層　褐色土粒を多量、炭化粒φ5mmを少量、白色粒φ1mmを少量含む。しまりやや強い。

4　灰色土層　炭化粒φ5mmを少量、白色粒φ1mmを少量含む。鉄分多く含みしまりやや強い。

5　明褐色土層　褐色土粒を多量、焼土粒を多量、炭化粒φ5mmを少量、白色粒1mmを少量含む。しまりやや強い。

6　褐色土層　褐色土粒を中量含む。しまりやや強い。

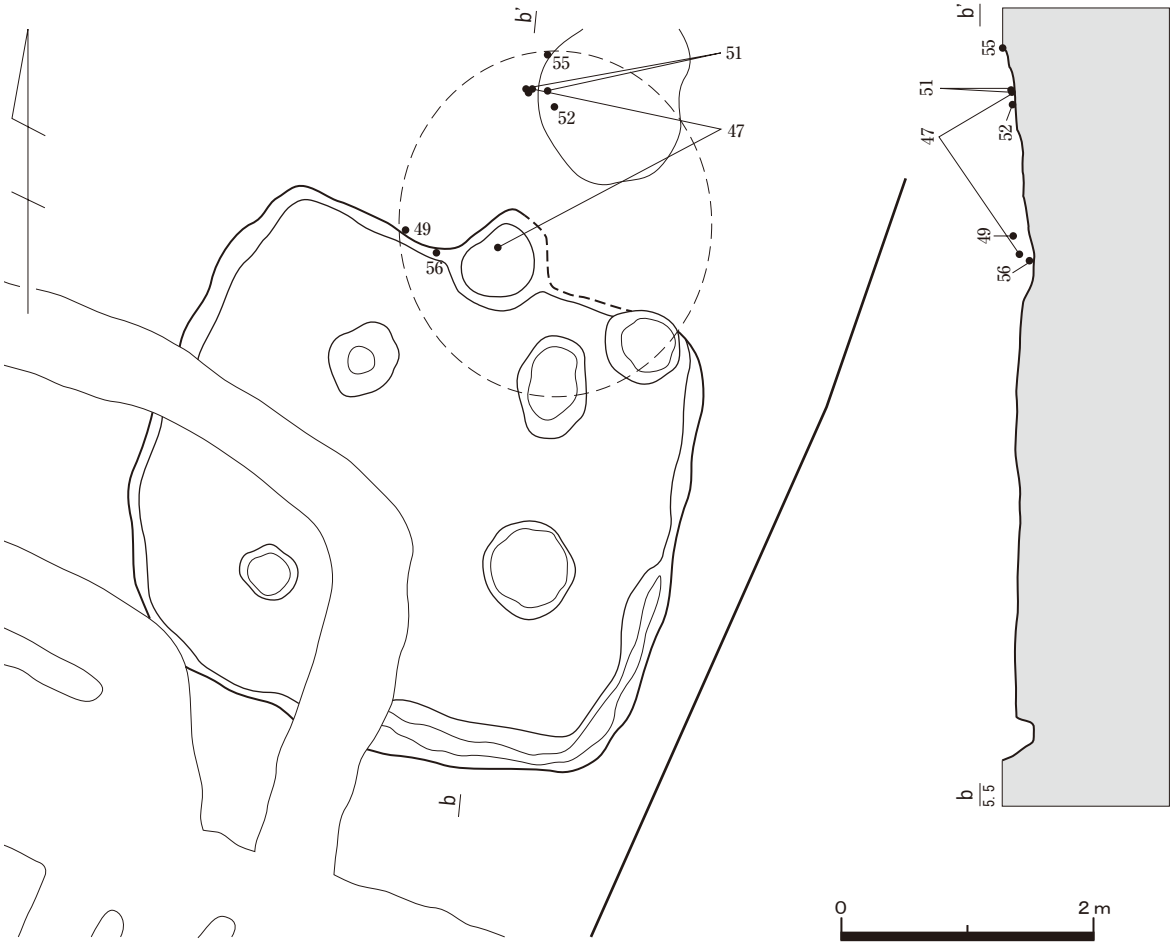
7　灰色土層　焼土粒を中量含む。しまりやや強い。

8　赤褐色土層　炭化粒を多量、焼土粒と褐色土ブロックを多量含む。しまりやや強い。

9　灰色土層　焼土ブロックφ10mmを多量、炭化ブロックφ10～30mmを多量含む。しまりやや強い。

10　褐色土層　褐色土粒を多量含む。しまりやや強い。

第11図　ＳＩ２　遺構実測図（S＝1/60）



第12図　ＳＩ２　遺物・個体分布図（S＝1/60）

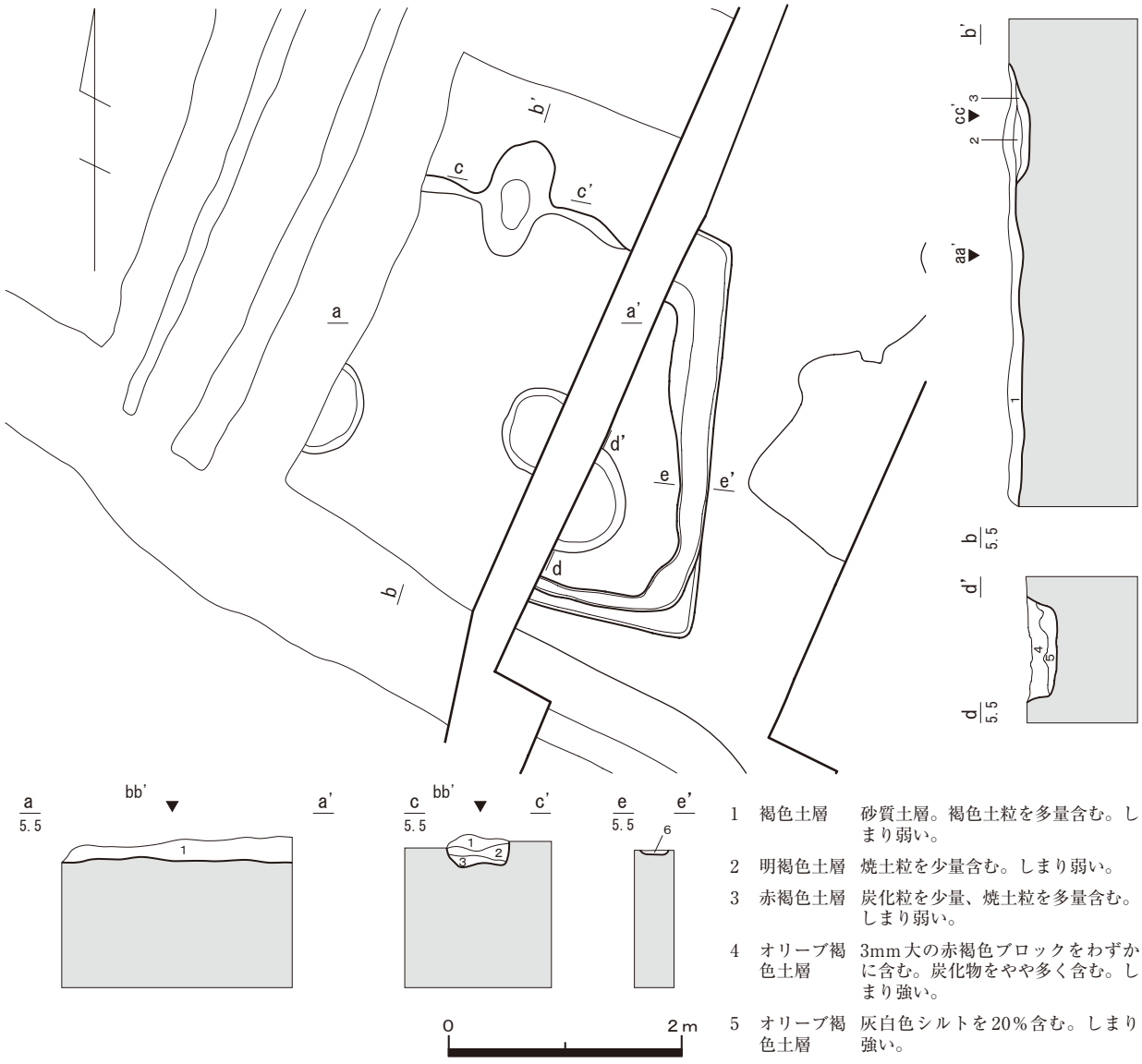
床面からはピットが３基（Ｐ１～３）検出されたほか、東壁から南壁にかけて壁周溝が検出され、このうち南壁周溝は住居壁面から離れている。

第４号住居跡（ＳＩ４、第15・16図）

Ｅ－２・３、Ｆ－２・３グリッドに位置する。住居の南半分および北壁を溝により削平されているため、平面形態は不明。北カマドで、主軸方位はＮ－25°－Ｅ前後と考えられ、東西の残存幅は3.84ｍ、南北の残存幅は1.38ｍである。深さは最高0.19ｍである。

カマドは壁の外側に突出している範囲が削平を免れている。煙道は検出されていない。火床部は床面とほぼ同じ高さであることから、床面と連続していたと考えられる。火床部には焼土、炭化物の堆積が認められるが、火床面はあまり被熱していない。

床面からは隅丸長方形を呈するピット１基（Ｐ１）が検出されている。規模は長軸1.04ｍ、短軸0.6ｍ、深さ0.19ｍである。



第13図　ＳＩ３　遺構実測図（S＝1/60）

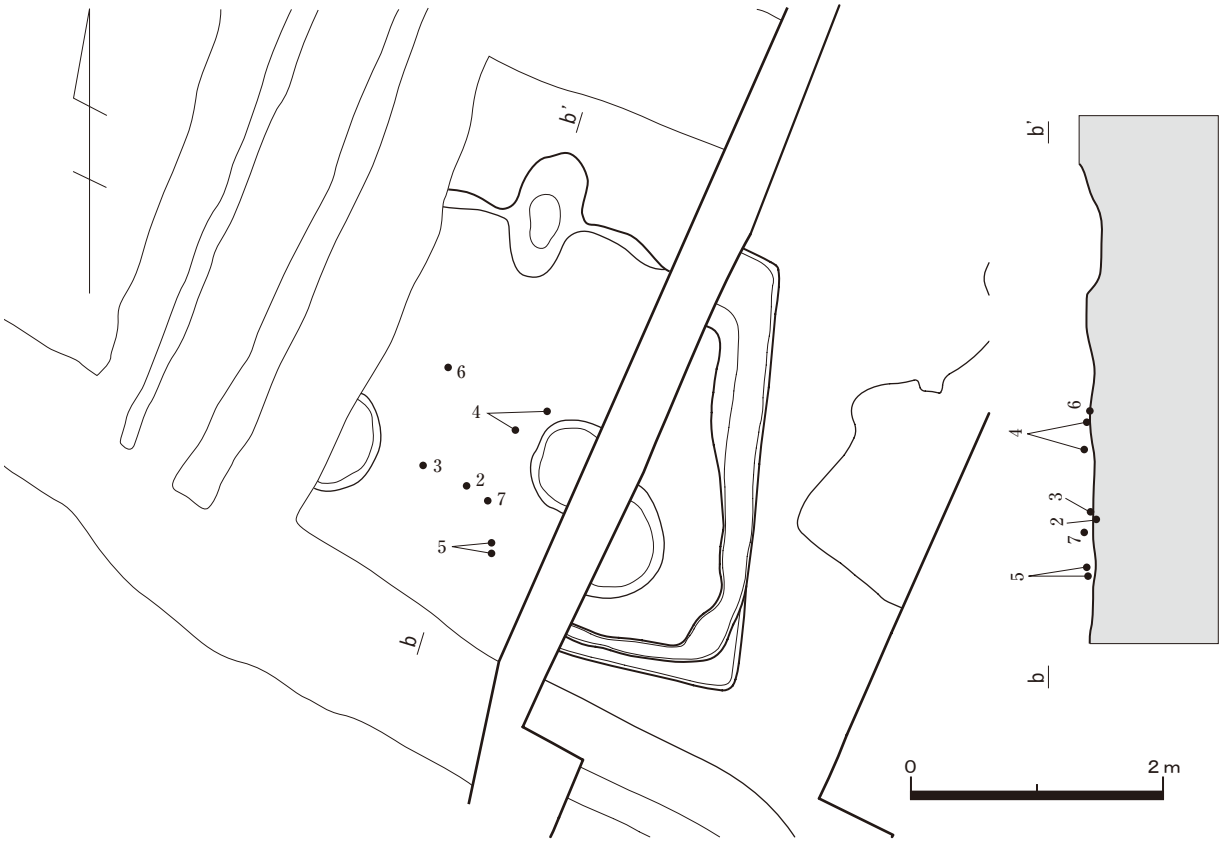
第５号住居跡（ＳＩ５、第17・18図）

Ｄ－３、Ｅ－３・４グリッドに位置する。平面形態は台形状を呈し、各辺とも直線的で、東壁が短辺、西壁が長辺となる。規模は長軸4.8ｍ、短軸2.31ｍ、深さは最高0.13ｍで、中央部が高くなっている。カマドが検出されていないため、長軸を主軸方位とすると、Ｎ－105°－Ｅである。

カマドや柱穴等の内部施設は検出されておらず、ほぼ全ての遺物が床面直上から出土したほか、面的に広がる炭化物の堆積が床面の２箇所に認められた。

第６号住居跡（ＳＩ６、第19・20図）

Ｅ－２・３グリッドに位置する。平面形態はやや歪んだ方形を呈し、西壁が丸みをもつほかは、各辺とも直線的である。東カマドで、主軸方位はＮ－108.5°－Ｅである。規模は長軸3.12ｍ、短軸3.09ｍ、



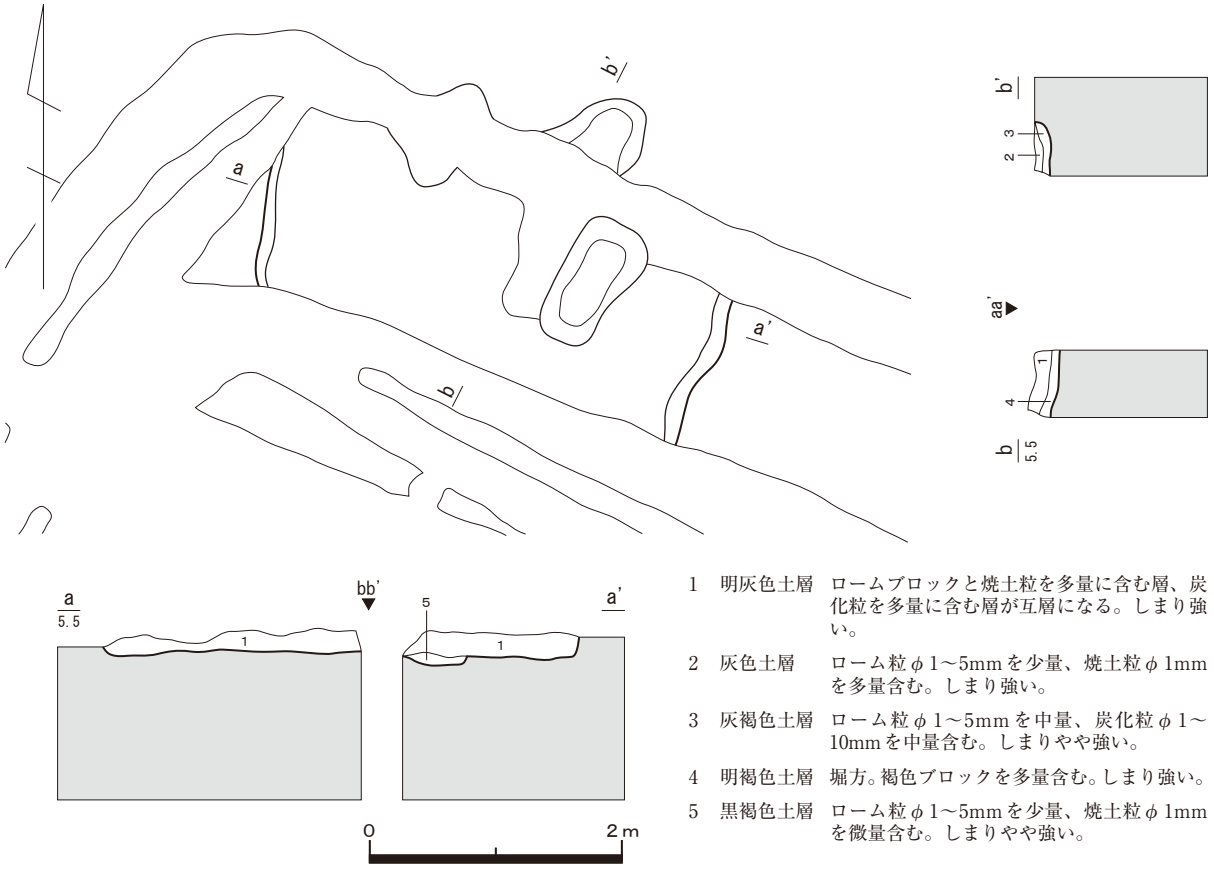
第14図　ＳＩ３　遺物・個体分布図（S＝1/60）

深さは最高0.25ｍである。

カマドは東壁の中央から南寄りに設けられ、規模は全長0.5ｍ、幅0.57ｍである。燃焼部は壁の外側に突出している。煙道は検出されていない。火床部は平坦で、床面とほぼ連続している。火床部の覆土には焼土、炭化物を多量に含み、火床面は被熱していた。

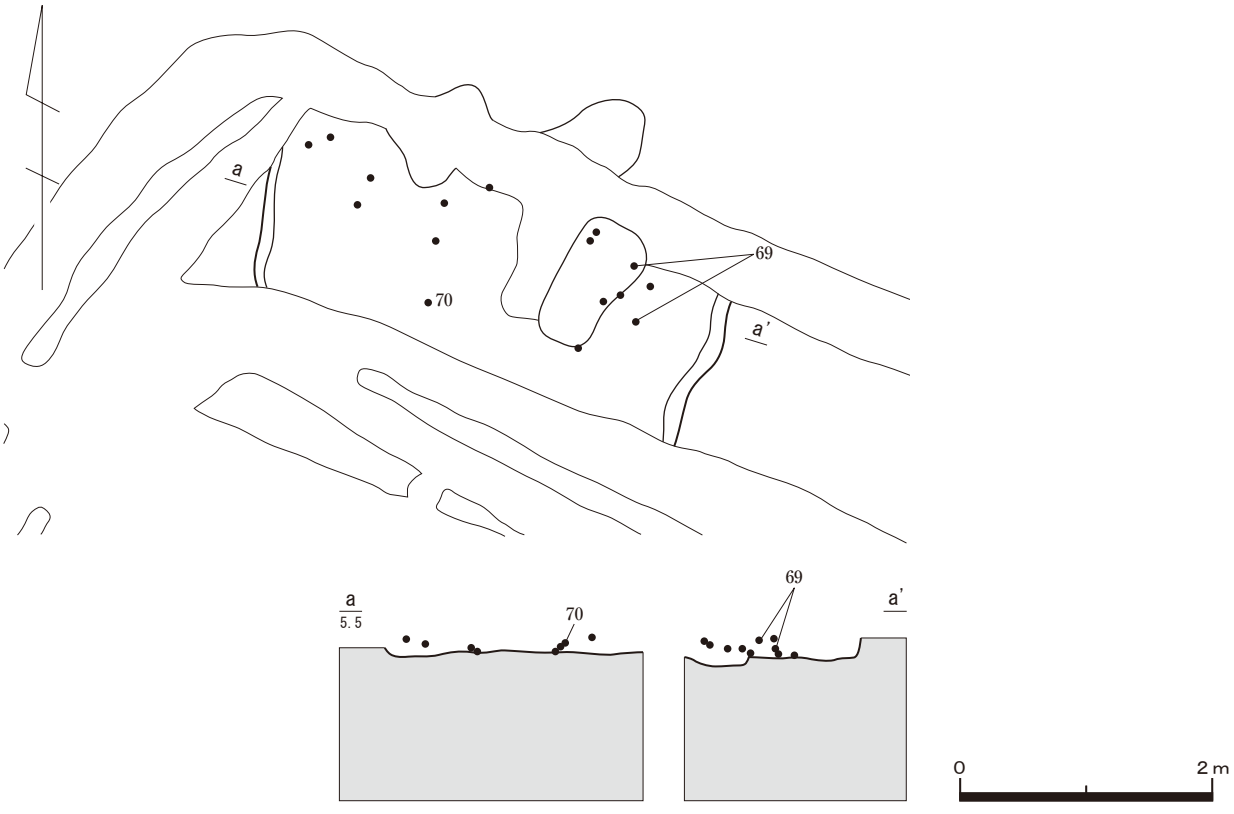
遺物は住居の南側を中心に、大半が床面の直上から出土し、とりわけ南東部に土器が集中する。さらに、カマドでは土製支脚が破損面を下に向けて直立し、その上には倒立した高台付坏の底部が重なって出土した。支脚の正面には坏が正位で置かれるほか、倒立した坏がカマドの壁に沿って複数並べられた状態で出土した。

このほか、住居周囲にピットが８基検出されており、間隔は0.5～3.0ｍ程度と一定ではないものの、住居を囲うように配置されている。何らかの外部施設や上屋を構築する柱穴であった可能性はあるが、各ピットの規模・深さ等は記録が無く不明である。

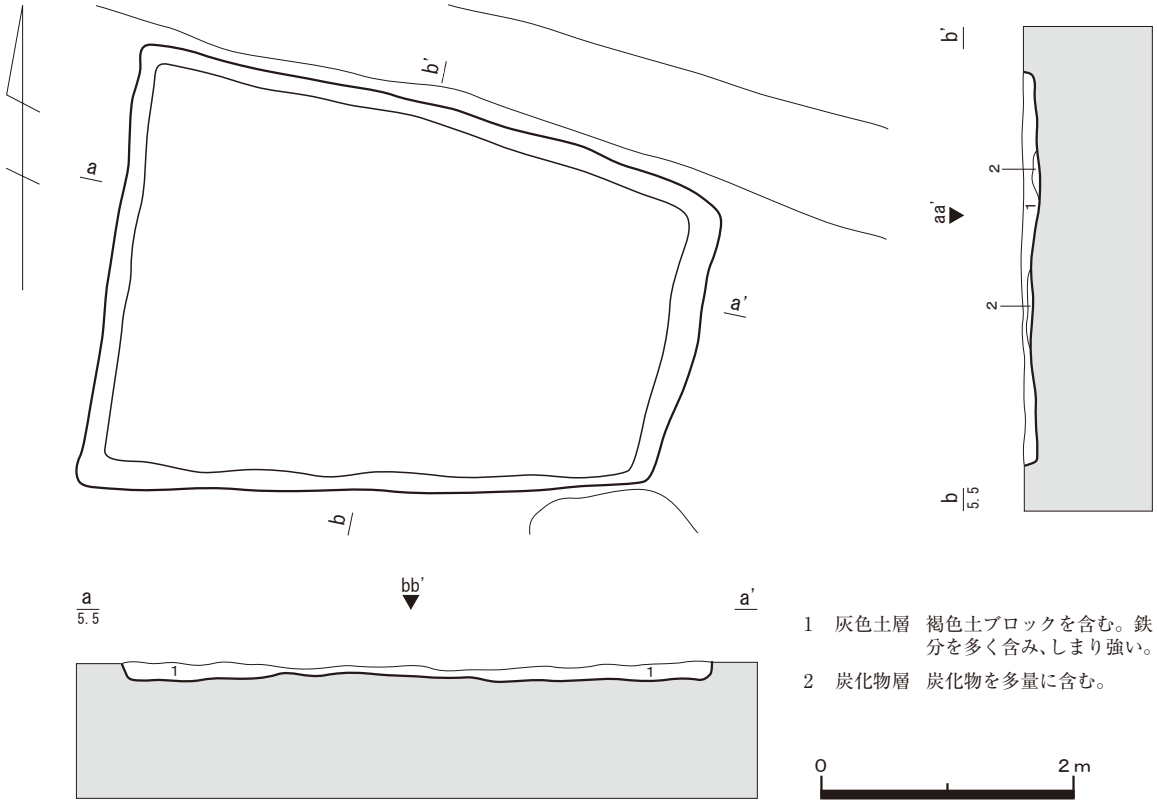


1　明灰色土層　ロームブロックと焼土粒を多量に含む層、炭化粒を多量に含む層が互層になる。しまり強い。
2　灰色土層　ローム粒φ1～5mmを少量、焼土粒φ1mmを多量含む。しまり強い。
3　灰褐色土層　ローム粒φ1～5mmを中量、炭化粒φ1～10mmを中量含む。しまりやや強い。
4　明褐色土層　堀方。褐色ブロックを多量含む。しまり強い。
5　黒褐色土層　ローム粒φ1～5mmを少量、焼土粒φ1mmを微量含む。しまりやや強い。

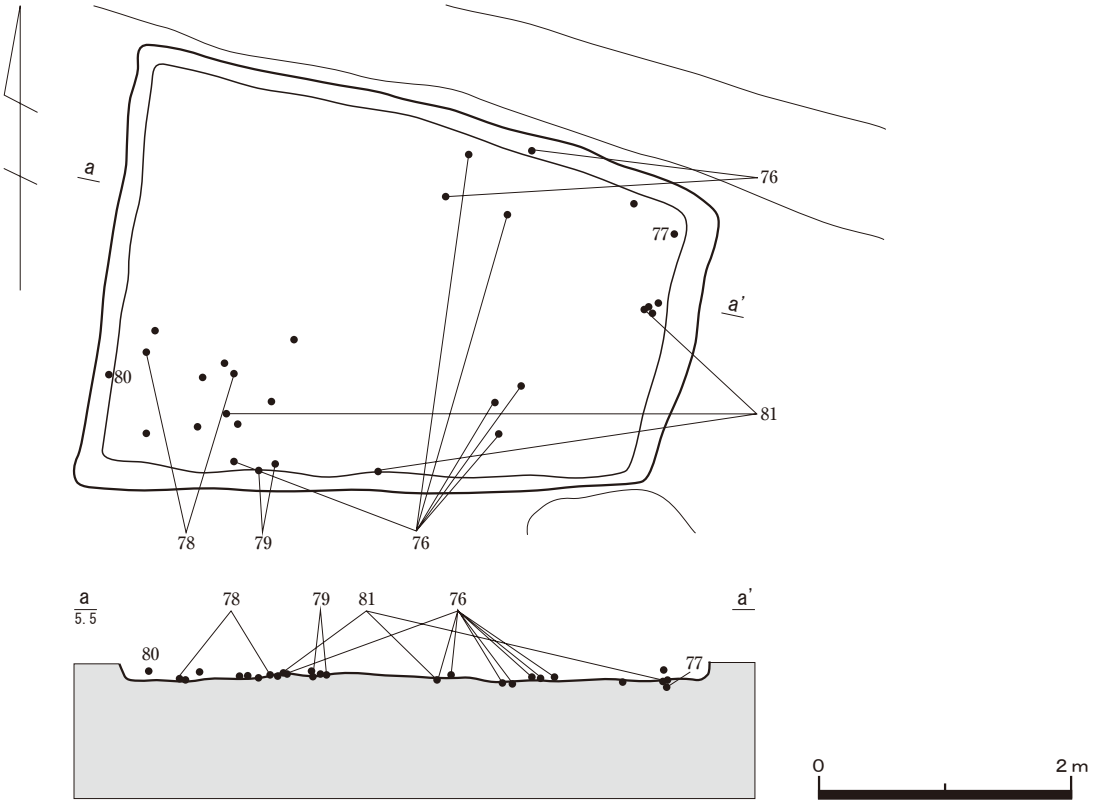
第15図　ＳＩ４　遺構実測図（S＝1/60）



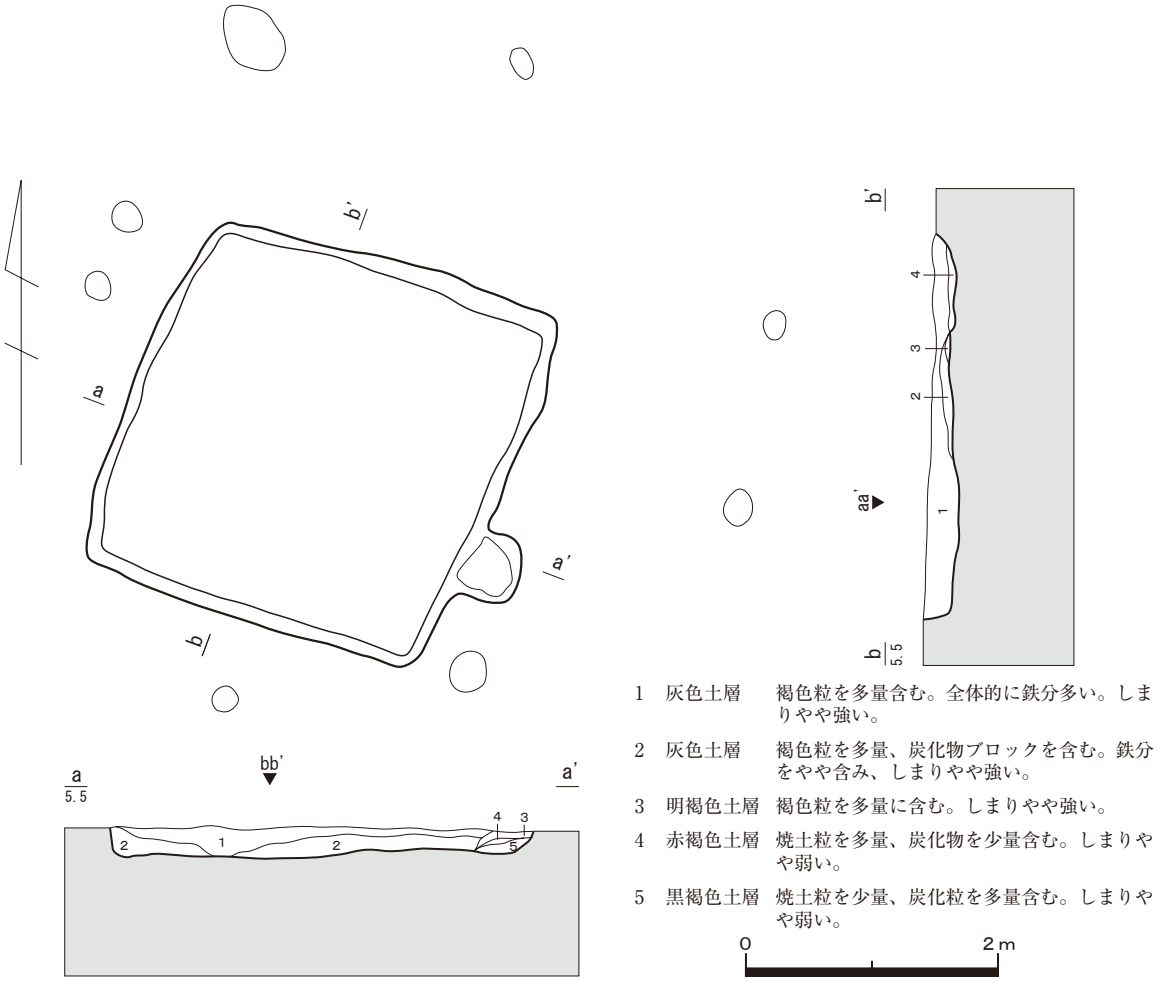
第16図　ＳＩ４　遺物・個体分布図（S＝1/60）



第17図　ＳＩ５　遺構実測図（S＝1/60）



第18図　ＳＩ５　遺物・個体分布図（S＝1/60）



第19図　ＳＩ６　遺構実測図（S＝1/60）

（ii）土坑（土師器焼成坑）

土坑は調査区北側のＢ－２グリッドで３基検出した。基本的な平面形は楕円形または円形であり、いずれの土坑も覆土に焼土、炭化物を多く含んでいる。基底面が被熱しているのに対し、壁面が被熱していない点、平面形態が円形・楕円形を基調とする点から、土師器焼成坑Ｂ類（望月1997）に該当すると考えられる。

第１号土坑（ＳＫ１、第21・22図）

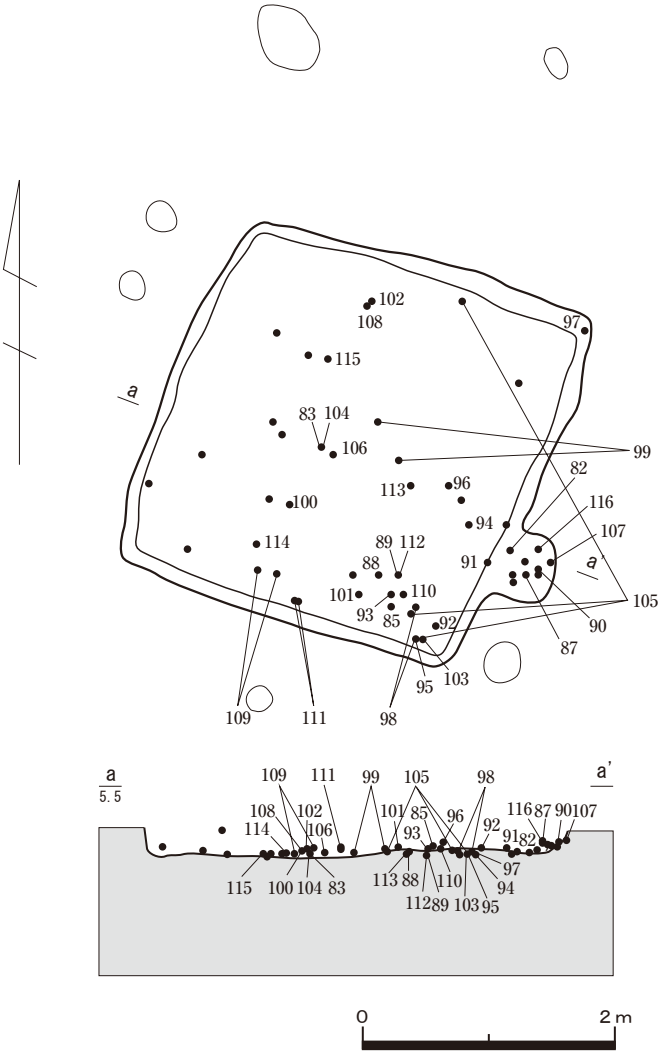
調査区の北側、Ｂ－２グリッドに位置する。平面形態は楕円形に近い不整形を呈し、東西方向に長軸をもつ。規模は長軸1.57ｍ、短軸1.02ｍ、深さは最高0.28ｍである。壁の立ち上がりが東西で異なり、東側は基底部からなだらかに、西側はほぼ垂直に立ち上がる。覆土には多量の焼土、炭化物を含み、壁面には被熱痕が認められないものの、基底面は著しく被熱していた。遺物は土師器坏・高台付坏で、覆土中からの出土が多いが、残存の良好なものや内面黒色処理の土器が多く、土師器焼成坑と考えられる。

第２号土坑（ＳＫ２、第23・24　図）

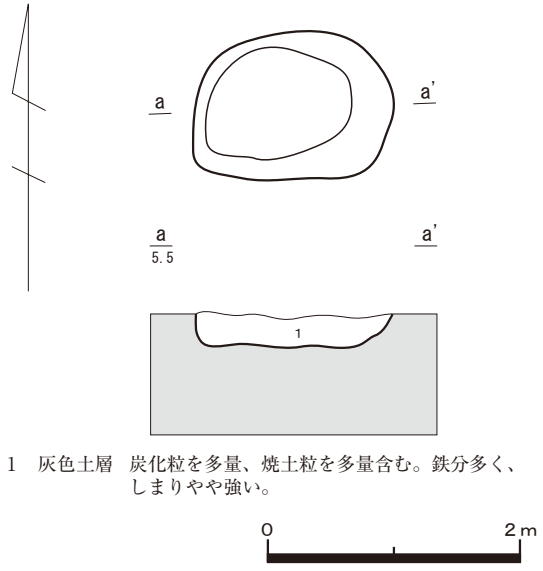
調査区の北側、Ｂ－２グリッドに位置する。平面形態は楕円形に近い不整形を呈し、南北方向に長軸をもつ。規模は長軸2.94ｍ、短軸1.57ｍ、深さは最高0.17ｍである。

第１号土坑と同様、壁の立ち上がりが南北で異なり、南側は基底部からややなだらかに、北側は直線的に立ち上がる。覆土には多量の焼土、炭化物を含み、壁面には被熱痕が認められないものの、基底面は著しく被熱していたことから、土師器焼成坑と考えられる。

遺物はほぼ全て基底面から出土しており、土師器のほかに鉄製品が１点出土している。

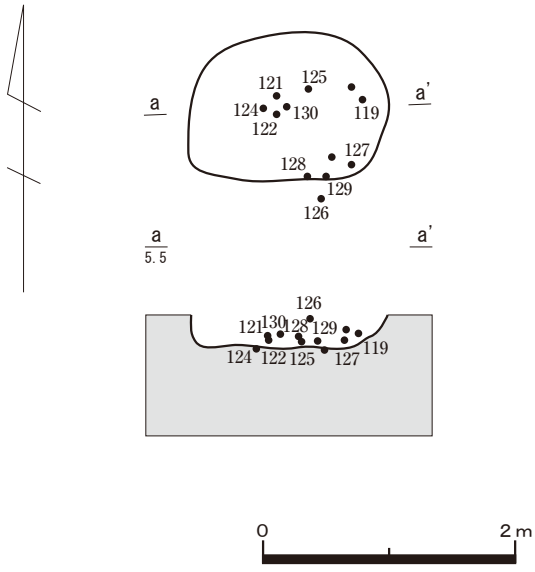


第20図　ＳＩ６　遺物・個体分布図（S＝1/60）

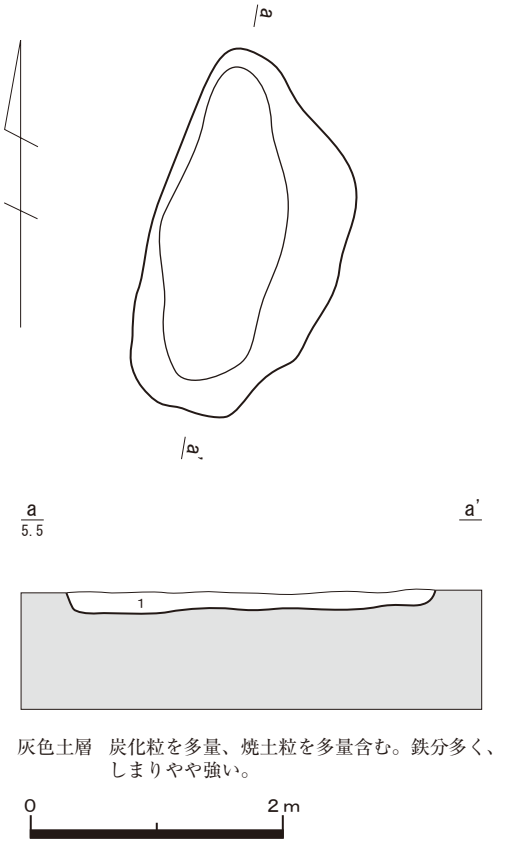


1　灰色土層　炭化粒を多量、焼土粒を多量含む。鉄分多く、しまりやや強い。

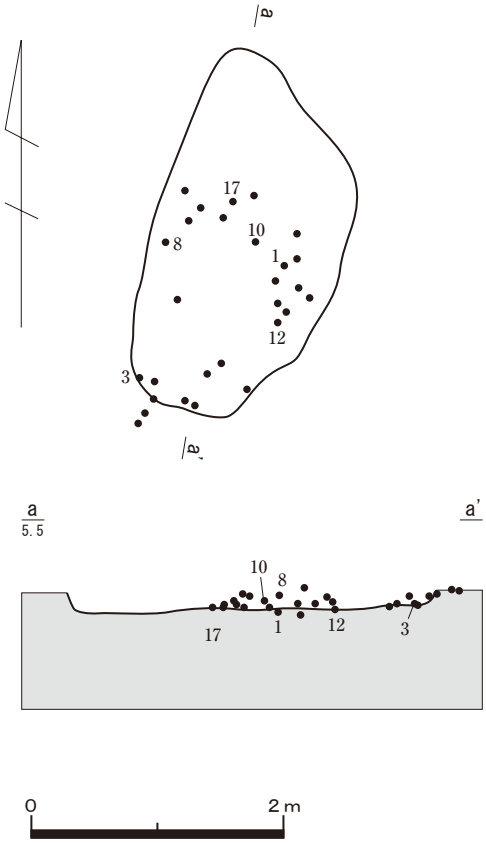
第21図　ＳＫ１　遺構実測図（S＝1/60）



第22図　ＳＫ１　遺物・個体分布図（S＝1/60）



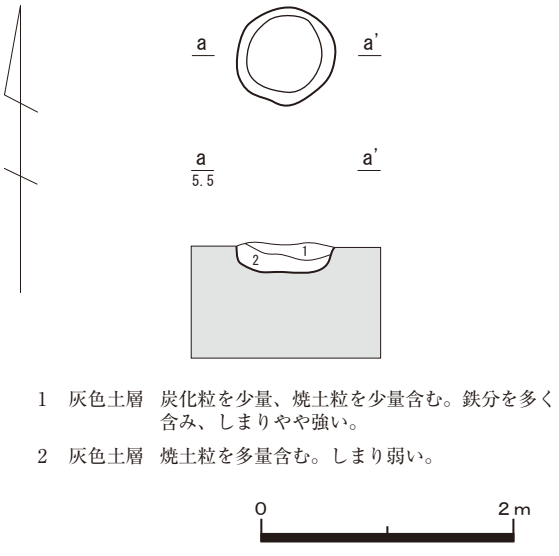
第23図　ＳＫ２　遺構実測図（S＝1/60）



第24図　ＳＫ２　遺物・個体分布図（S＝1/60）

第３号土坑（ＳＫ３、第25図）

調査区の北側、Ｂ－２グリッドに位置する。平面形態はほぼ円形を呈する。規模は直径0.79ｍ、深さは最高0.24ｍである。覆土には多量の焼土、炭化物を含み、壁面には被熱痕が認められないものの、基底面は著しく被熱していたことから、土師器焼成坑と考えられる。遺物の出土位置は記録していないが、完形の土師器坏が２点出土している。なお、遺物出土状況の写真では、坏がもう１点確認できるが、実物の所在を確認できなかった。



第25図　ＳＫ３　遺構実測図（S＝1/60）

（ⅲ）掘立柱建物跡

第１号掘立柱建物跡（ＳＢ１、第26図）

調査区南東側、Ｈ－３・４、Ｉ－４グリッドに位置し、規模は桁行５間×梁行３間である。桁行の総長は9.24ｍ、各柱間は北から1.85ｍ、1.83ｍ、1.83ｍ、1.78ｍ、1.93ｍ。梁行の総長は5.43ｍ、各柱間は西から1.70ｍ、1.78ｍ、1.93ｍである。

また、西の平側から１間目のほぼ中間には、間仕切りと考えられるピットが検出され、北妻およびそこから１間目、３間目、５間目に、計４箇所が配置されている。各ピットは円形もしくは楕円形で、規模は直径0.36～1.03ｍ、深さ0.07～0.28ｍである。

時期の明確な遺構との重複がないが、ピットからは土師器小破片、および近世以降の陶磁器小破片が出土した。帰属時期については確定しがたいが、主軸は北カマドある竪穴住居跡に近い方位を示しており、竪穴住居跡と同時期の可能性もある。

（ⅳ）溝（第８図）

住居跡を削平するかたちで、５条の溝が検出されている。土層断面の記録が無く、溝の深さや遺構間の切り合い関係は不明だが、並行する２条の溝が東西に走り、コの字形の溝３条が多重にめぐる。いずれの溝からも土師器の小破片が多く出土しているが､住居跡を削平した際に混入した可能性も考えられ､帰属時期は明確にしがたい。

第１号溝（ＳＤ１）

Ｆ－２・３、Ｇ－３グリッドに位置する。最大幅は2.0ｍ。第１号住居跡を削平している。

第２号溝（ＳＤ２）

Ｅ－２、Ｆ－２・３グリッドに位置する。最大幅は1.6ｍ。第４号住居跡の南端を削平していると考えられる。

第３号溝（ＳＤ３）

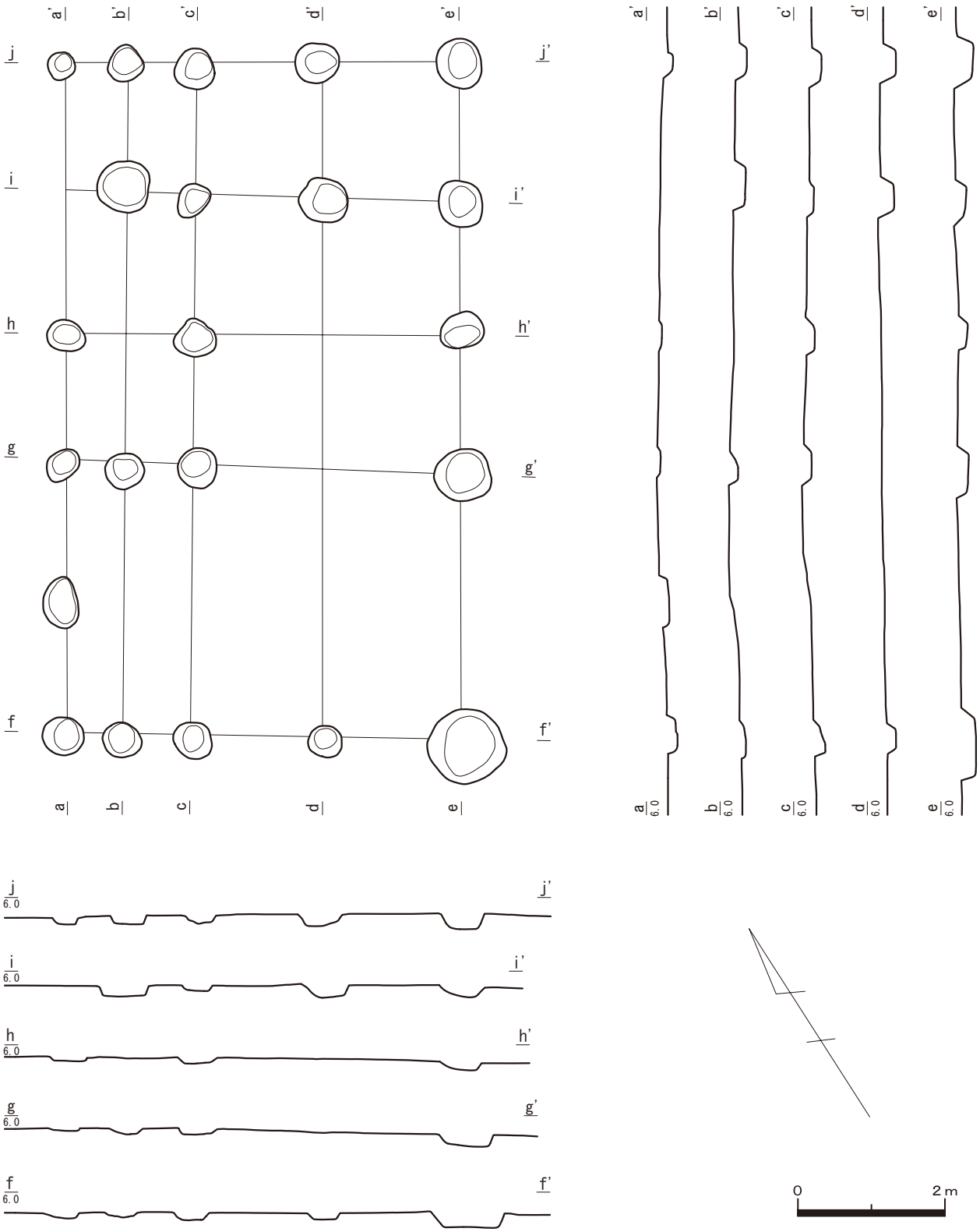
Ｆ－２・３グリッドに位置する。最大幅は0.6ｍ。第３号住居跡の西側、第４号住居跡の南側を削平していると考えられる。

第４号溝（ＳＤ４）

Ｅ－２、Ｆ－２・３グリッドに位置する。最大幅は0.7ｍ。第３号住居跡の西側、第４号住居跡の南側を削平していると考えられる。

第５号溝（ＳＤ５）

Ｅ－２・３、Ｆ－２・３グリッドに位置する。最大幅は0.7ｍ。第２号住居跡の一部、第３号住居跡の西側、第４号住居跡の北側を削平している。



第26図　ＳＢ１　遺構実測図・エレベーション図

第２表　住居跡一覧表（大道第１遺跡）

遺構名	時期	グリッド	長軸（m）	短軸（m）	深さ（m）	カマド	主軸方位
ＳＩ１	平安	Ｆ－２・３	4.32	3.75	0.42	（１）北壁中央東寄り （２）東壁中央	（１）Ｎ－14.5°－Ｅ （２）Ｎ－97.5°－Ｅ
ＳＩ２	平安	Ｅ－３、Ｆ－３・４	4.41	4.11	0.28	北壁中央	Ｎ－17°－Ｅ
ＳＩ３	平安	Ｆ・Ｇ－３	(3.58)	(3.42)	0.23	北壁１基	Ｎ－19°－Ｅ
ＳＩ４	平安	Ｅ・Ｆ－２・３	(3.84)	(1.38)	0.19	北壁１基	Ｎ－25°－Ｅ前後
ＳＩ５	平安	Ｄ－３、Ｅ－３・４	4.80	2.31	0.13	－	Ｎ－105°－Ｅ
ＳＩ６	平安	Ｅ－２・３	3.12	3.09	0.25	東壁中央南寄り	Ｎ－108.5°－Ｅ

第３表　土坑一覧表（大道第１遺跡）

遺構名	時期	グリッド	長軸	短軸	深さ	平面形	遺物	備考
ＳＫ１	平安	Ｂ－２	1.57	1.02	0.28	不整楕円形	土師器坏・高台付坏	土師器焼成坑
ＳＫ２	平安	Ｂ－２	2.94	1.57	0.17	不整楕円形	土師器坏・高台付坏・甕、鉄製刀子	土師器焼成坑
ＳＫ３	平安	Ｂ－２	0.79	0.79	0.24	円形	土師器坏	土師器焼成坑

第４表　掘立柱建物跡ピット一覧表（大道第１遺跡）

遺構名	グリッド	長径(m)	短径(m)	深さ(m)
ＳＢ1-Ｐ1	Ｈ－４	0.36	0.36	0.19
ＳＢ1-Ｐ2	Ｈ－４	0.5	0.49	0.13
ＳＢ1-Ｐ3	Ｈ－４	0.54	0.54	0.14
ＳＢ1-Ｐ4	Ｈ－４	0.59	0.54	0.20
ＳＢ1-Ｐ5	Ｈ－４	0.68	0.61	0.23
ＳＢ1-Ｐ6	Ｈ－４	0.74	0.69	0.15
ＳＢ1-Ｐ7	Ｈ－４	0.45	0.42	0.07
ＳＢ1-Ｐ8	Ｈ－４	0.65	0.60	0.18
ＳＢ1-Ｐ9	Ｈ－４	0.62	0.60	0.16
ＳＢ1-Ｐ10	Ｈ－４	0.52	0.42	0.24
ＳＢ1-Ｐ11	Ｈ－４	0.57	0.52	0.12

番号	グリッド	長径(m)	短径(m)	深さ(m)
ＳＢ1-Ｐ12	Ｈ－４	0.59	0.51	0.15
ＳＢ1-Ｐ13	Ｈ－４	0.44	0.44	0.17
ＳＢ1-Ｐ14	Ｈ－４	0.52	0.46	0.12
ＳＢ1-Ｐ15	Ｈ－４	0.54	0.52	0.12
ＳＢ1-Ｐ16	Ｈ－４	0.74	0.70	0.21
ＳＢ1-Ｐ17	Ｈ－４	0.66	0.46	0.11
ＳＢ1-Ｐ18	Ｈ－３	0.55	0.51	0.21
ＳＢ1-Ｐ19	Ｈ－３・４	0.54	0.47	0.15
ＳＢ1-Ｐ20	Ｈ－４	0.53	0.46	0.14
ＳＢ1-Ｐ21	Ｈ・Ｉ－４	0.45	0.41	0.11
ＳＢ1-Ｐ22	Ｉ－４	1.03	0.98	0.28

（2）遺物

（ｉ）住居跡

第１号住居跡（ＳＩ１・第27～29図）

土師器20点、須恵器３点、土製品16点、鉄製品２点、石製品１点を復元・図化した。１～８はロクロ土師器坏。９～18、21は土師器甕で、断面コの字状の口縁をもつ武蔵型甕。いずれも胴下半部を欠損する。19は土師器台付甕の台部。20は土師器鉢。21・22は須恵器坏で、21は南比企産、22は常総産であろう。23は須恵器の把手破片で、湖西産と考えられる。24は完形品の土製支脚。全体が被熱しており、基底部側は特に著しい。25は土製品の破片で、磨耗が著しいが、形状が柱状に近く被熱が顕著で支脚の破片と考えられる。棒状の芯材に粘土を巻き付けて成形している。26は鉄製刀子だが、通常なら鎬となる側に刃を作り出し、さらに研ぎが茎部まで及んでいる。27は鉄釘、28は軽石。29～44は土錘で直径は1.2～2.0cm、長さは3.3～7.2cm、いずれも直径と長さの比率が１：２を超える細身の紡錘形である。また、掲載資料のほか、カマドの構築部材と思われる焼成粘土塊が出土した。

第２号住居跡（ＳＩ２・第30～31図）

土師器９点、土製品１点、鉄製品３点、石製品１点を復元・図化した。45～47はロクロ土師器高台付坏、48～52はロクロ土師器坏、53は土師器甕である。45・47は内面ミガキ・黒色処理であろうが磨耗著しい。53は武蔵型甕。54は羽口破片、55～57は鉄滓、58は砥石である。また、掲載資料のほか、羽口破片、須恵器坏・甕・長頸瓶、平瓦が出土しているが、いずれも小破片である。

第３号住居跡（ＳＩ３・第32図）

土師器７点、須恵器１点、石製品１点を復元・図化した。59は土師器鉢と考えられ、口縁が内傾し体部が張る器形をもつ。60～63は土師器甕で、60・62は口縁が強く屈折し外傾する。61・63は武蔵型甕でコの字状の屈曲は弱い。64・66は台付甕の台部。65は猿投産の須恵器で瓶と考えられる。67は軽石である。

第４号住居跡（ＳＩ４・第33図）

土師器１点、石製品４点を復元・図化した。住居の大半を溝に切られているためか遺物量は少ない。68はロクロ土師器坏で、内面の一部に焼成後の研磨痕がある。
69は砥石で、表面には微細な擦痕のほか、幅１mm程度の鋭利な擦り切り痕が多数みられる。70～72は軽石。また、掲載資料のほか、土師器甕、須恵器坏・甕・壺が出土しているが、いずれも小破片である。

第５号住居跡（ＳＩ５・第34図）

土師器７点、須恵器１点を復元・図化した。73・75～79はロクロ土師器坏、74はロクロ土師器高台付坏である。80は須恵器坏で、湖西産と考えられ、自然釉が内外面に付着している。また、掲載資料のほか、土師器甕が出土したが、小破片である。

第６号住居跡（ＳＩ６・第35～36図）

本遺跡において最も多量の遺物が出土し、そのうち土師器34点、土製品１点、石製品１点を復元・図化した。81～105はロクロ土師器坏、106～114はロクロ土師器高台付坏。81・82のみ底面の切離しが糸ではなく、ヘラによる痕跡を残す。81は付着物に遮られ不明瞭だが内面黒色処理を施すようである。88はロクロ成形後の指頭圧痕が体部外面にあり、90・91・110は外面の数箇所に工具痕を残す。92は内面に輪積痕を残す。115は土製支脚で、基底部側50%程度が残存し、全体が被熱している。116は軽石である。また、掲載資料のほか、土師器甕、須恵器甕の小破片数点が出土している。

（ii）土坑（土師器焼成坑）

第１号土坑（ＳＫ１・第37～38　図）

土師器13点を復元・図化した。117・118・121～123・125はロクロ土師器高台付坏、126～129はロクロ土師器坏、119・120は土師器坏である。119～125は内面にミガキ・黒色処理を施し、外面の色調は褐灰色・黒褐色を呈する。120・122はヘラケズリ、121はヘラナデを、ロクロ成形後に体部下半へ施す。

第２号土坑（ＳＫ２・第39～40図）

土師器16点、鉄製品１点を復元・図化した。130～132・134～137はロクロ土師器高台付坏、133・140～144はロクロ土師器坏、138・139は土師器坏、145は土師器甕である。133～139は内面にミガキ・黒色処理を、144は内面にナデ・黒色処理を施し、いずれも外面の色調は褐灰色・黒褐色を呈する。146は鉄製刀子。

第３号土坑（ＳＫ３・第41図）

土師器２点を復元・図化した。147・148はロクロ土師器坏である。いずれも完形品だが、器高は2.7ｃｍで、他の遺構出土の同器種と比較すると小型品である。

（iii）溝

第１号溝（ＳＤ１・第42図）

土師器３点、石製品２点、土製品１点を復元・図化した。149はロクロ土師器坏、150はロクロ土師器高台付坏、151は土師器台付甕の台部である。152・153は軽石、154は土錘である。いずれも第１号住居を削平した際に混入した可能性がある。また、掲載資料のほか、土師器・須恵器が出土しているが、いずれも小破片である。

第５号溝（ＳＤ５・第43図）

須恵器１点を復元・図化した。155は須恵器坏で、常総産と考えられる。また、掲載資料のほか、土師器・須恵器が出土しているが、いずれも小破片である。

第５表　住居跡出土土器観察表（大道第１遺跡）

遺構名	番号	種別	器種	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	胎土	色調	調整・施文（外面）	調整・施文（内面）	調整・施文（底面）	備　考
SI1	1	ロクロ土師器	坏	12.4	7.1	4.1	ＡＥＩ	にぶい橙色	回転ナデ	回転ナデ後ナナメ指ナデ	回転糸切り後、一部ヘラケズリ	
SI1	2	ロクロ土師器	坏	12.1	7.0	4.0	ＡＢＥ少Ｉ	にぶい橙色	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り後無調整	
SI1	3	ロクロ土師器	坏	12.4	7.9	3.6	ＡＢＣ少	にぶい橙色	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り後外周ヘラケズリ	
SI1	4	ロクロ土師器	坏	13.6	7.0	3.4	ＡＣ少	にぶい橙色	回転ナデ、底部付近ヘラケズリ	回転ナデ	底部一方向ヘラケズリ	
SI1	5	ロクロ土師器	坏	14.0	(7.3)	4.9	ＡＢ	橙色	回転ヘラケズリ	回転ナデ	底面残存部ヘラケズリ	
SI1	6	ロクロ土師器	坏	12.3	4.9	4.0	ＡＣ	にぶい橙色	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り後無調整	完形
SI1	7	ロクロ土師器	坏	14.0	6.5	5.4	ＡＢ少ＣＨ少Ｉ	にぶい橙色	ナデ	ナデ	回転糸切り後、回転ナデで高台貼り付け	ほぼ完形
SI1	8	ロクロ土師器	坏	9.9	5.8	2.7	ＢＥ少	橙色	回転ナデ後に指ナデ	回転ナデ	回転糸切り後無調整	完形
SI1	9	土師器	甕	19.8	－	(18.4)	Ａ少Ｂ	明赤褐色	口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ	板ナデ後に指ナデ	－	武蔵型甕
SI1	10	土師器	甕	20.3	－	(16.1)	ＡＣＦ	にぶい橙色	口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ	ヘラナデ	－	武蔵型甕
SI1	11	土師器	甕	20.4	－	(15.6)	ＡＣ	にぶい橙色	口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ	ヘラナデ	－	武蔵型甕
SI1	12	土師器	甕	21.0	－	(7.3)	ＡＢＣ	橙色	口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ	ナデ	－	武蔵型甕
SI1	13	土師器	甕	19.4	－	(7.4)	ＡＣＦ	橙色	口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ	ヘラナデ	－	武蔵型甕
SI1	14	土師器	甕	19.6	－	(6.6)	ＡＣＦ	にぶい橙色	口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ	ナデ	－	武蔵型甕
SI1	15	土師器	甕	19.1	－	(7.7)	ＡＣＥＩ	にぶい橙色	口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ	ナデ	－	武蔵型甕
SI1	16	土師器	甕	19.7	－	(7.4)	ＡＢ少ＥＩ	橙色	口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ	ヘラナデ	－	武蔵型甕、外面スス付着
SI1	17	土師器	甕	18.3	－	(5.7)	ＡＢ少Ｅ	にぶい橙色	口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ	ナデ	－	武蔵型甕
SI1	18	土師器	甕	20.2	－	(4.9)	ＡＣ	にぶい橙色	口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ	ナデ	－	武蔵型甕
SI1	19	土師器	台付甕	－	10.0	(4.0)	ＡＢＦＩ	橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	－	台部のみ残存
SI1	20	土師器	鉢	21.6	－	(11.4)	ＡＢ少ＥＩ	にぶい橙色	口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ	ナデ	－	
SI1	21	須恵器	坏	12.3	6.0	3.8	ＡＣＨＩ多ＪＫ	青灰色	回転ナデ後に指ナデ	回転ナデ	回転糸切り後無調整	南比企窯産
SI1	22	須恵器	坏	14.0	－	(5.5)	ＡＣＩ多ＪＫ	灰黄色	回転ナデ、指頭圧痕あり	回転ナデ	－	常総産（Ａ）か
SI1	23	須恵器	瓶？	－	－	(5.3)	Ａ微	灰オリーブ色	自然釉付着	ナデ	－	胎土緻密、東海（湖西）産
SI2	45	ロクロ土師器	高台付坏	12.4	5.2	4.8	ＡＣＥ微ＦＩ	浅黄橙色	回転ナデ	剥離多。ミガキ・黒色処理？	底部切離し後ナデ、高台貼付	
SI2	46	土師器	高台付坏	13.9	6.5	5.2	ＡＣＥ少ＦＩ	橙色	ナデ	ナデ	磨耗のため不明	ほぼ完形
SI2	47	ロクロ土師器	高台付坏	16.2	7.2	6.7	Ａ多ＥＩＪ	にぶい黄橙色	ナデ	磨耗、ミガキ、黒色処理？	回転糸切り後高台貼り付け	
SI2	48	ロクロ土師器	坏	9.9	5.4	3.0	ＡＣ	橙色	回転糸切り後無調整		回転糸切り後無調整	完形
SI2	49	ロクロ土師器	坏	10.1	5.6	3.0	ＡＣＥ少	橙色	ナデ	ナデ	回転糸切り痕あり、摩滅で不明瞭	完形

遺構名	番号	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土	色調	調整・施文(外面)	調整・施文(内面)	調整・施文(底面)	備　考
SI2	50	ロクロ土師器	坏	9.6	5.2	3.2	ＡＥ	橙色	ナデ	ナデ	回転糸切り痕あり、摩滅で不明瞭	
SI2	51	ロクロ土師器	坏	10.0	5.1	3.1	ＡＣＥ少	にぶい橙色	ナデ	ナデ	回転糸切り後無調整	
SI2	52	ロクロ土師器	坏	9.8	5.3	3.2	ＡＢ少	にぶい橙色	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り痕あり	
SI2	53	土師器	甕	11.5	－	(9.5)	ＡＣＥＩ	にぶい赤褐色	口頸部ヨコナデ、胴部上段斜位ケズリ、胴部中段縦ケズリ	口頸部回転ナデ、胴部ナデ	－	武蔵型甕
SI3	59	土師器	鉢？	12.2	－	(10.0)	ＡＢＣＤ多	にぶい橙色	口縁部ヨコナデ、体部磨耗（ケズリ？）	口縁部ヨコナデ､体部ナデ･ヘラナデ	－	
SI3	60	土師器	甕	17.0	－	(5.7)	ＡＥ多Ｉ	明褐色	口縁部ヨコナデ、胴部ケズリ	口縁部斜位ヘラナデ後ヨコナデ、胴部ヨコナデ	－	
SI3	61	土師器	甕	19.2	－	(4.9)	ＡＢＣＥＦ	明褐色	口縁部ヨコナデ、頸部横位ケズリ後ヨコナデ、屈曲部に指頭圧痕あり	横位ケズリ後ヨコナデ	－	武蔵型甕
SI3	62	土師器	小型甕	9.0	－	(5.4)	ＡＣＥ少Ｉ	にぶい橙色	口縁部ヨコナデ、胴部磨耗（縦位ケズリ？）	口縁部横位ハケ目後ヨコナデ、胴部横位ハケ目	－	
SI3	63	土師器	小型甕	12.4	－	(8.4)	ＡＣＦ少Ｉ	橙色	口縁部ヨコナデ、指頭圧痕あり、胴部上段横位ケズリ、胴部下段斜位・横位ケズリ	口縁部ヨコナデ（輪積痕残す）、胴部ナデ、ヘラ状工具当たり痕多数あり	－	武蔵型甕
SI3	64	土師器	台付甕	－	9.3	(2.1)	ＡＢＥ少Ｉ	明赤褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	－	
SI3	65	須恵器	瓶？	－	9.0	(6.8)	Ａ少	暗オリーブ灰色	回転ナデ、自然釉付着	回転ナデ、自然釉付着	高台貼付後回転ナデ	猿投窯産、胎土緻密
SI3 (H26)	66	土師器	台付甕	－	7.6	2.9	ＡＢＣＥ	にぶい褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	－	
SI4	68	ロクロ土師器	坏	14.4	6.2	5.6	ＡＢＦＩ	にぶい橙色	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り後無調整	内面の一部を二次的に研磨？
SI5	73	ロクロ土師器	坏	10.8	5.3	4.0	ＡＣＥＩ	にぶい橙色	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り後無調整	
SI5	74	ロクロ土師器	高台付坏	13.2	6.5	5.3	ＡＩＪ	橙色	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り後高台貼り付け	
SI5	75	ロクロ土師器	坏	12.4	5.7	5.1	Ａ	にぶい橙色	口縁部ヨコナデ、体部磨耗	磨耗のため不明	回転糸切り痕あり	
SI5	76	ロクロ土師器	坏	9.5	5.4	2.6	ＡＢＦ微	褐灰色	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り後無調整	完形
SI5	77	ロクロ土師器	坏	10.3	5.3	2.8	ＡＢＦ少	橙色	回転ナデ	ナデ、磨耗のため不明瞭	回転糸切り後無調整	
SI5	78	ロクロ土師器	坏	9.9	5.6	2.5	ＡＢ少ＦＩ	褐灰色	回転ナデ	ナデ、ミガキ痕跡あるが磨耗し不明瞭	回転糸切り後無調整	
SI5	79	ロクロ土師器	坏	10.12	6.0	2.1	ＡＢＦ少	にぶい橙色	回転ナデ	磨耗のため不明瞭(ナデ？)	回転糸切り後無調整	
SI5	80	須恵器	坏	15.6	－	(4.6)	ＡＩ少	灰白色	回転ナデ、自然釉付着	回転ナデ、自然釉付着	－	東海（湖西）産、胎土緻密焼成堅緻
SI6	81	土師器	坏	10.1	5.9	4.0	Ａ多ＥＦＩ	にぶい黄褐色	回転ナデ	回転ナデ、黒色処理か（鉄分付着のため不明瞭）	ヘラ切り後ナデ	完形
SI6	82	土師器	坏	10.1	5.7	3.9	Ａ多ＦＩ多	褐灰色	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り	
SI6	83	ロクロ土師器	坏	11.3	5.0	3.9	ＡＢＣＥＩ	にぶい黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り後無調整	完形
SI6	84	ロクロ土師器	坏	11.4	4.9	4.1	ＡＢＥＦＩ	にぶい橙色	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り後無調整	
SI6	85	ロクロ土師器	坏	10.3	4.8	3.7	ＡＢＣＥＦ	にぶい黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り後無調整	
SI6	86	ロクロ土師器	坏	11.1	5.6	4.3	ＡＣＥＦＩ	にぶい橙色	回転ナデ	鉄分付着のため不明	回転糸切り後無調整	完形

遺構名	番号	種別	器種	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	胎土	色調	調整・施文（外面）	調整・施文（内面）	調整・施文（底面）	備　考
SI6	87	ロクロ土師器	坏	10.8	5.2	3.6	ＡＦＩ	にぶい黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り後無調整	完形
SI6	88	ロクロ土師器	坏	10.4	4.6	3.6	ＡＢＣＦ少Ｈ	にぶい橙色	回転ナデ、体下部ナデ、一部指頭圧痕	回転ナデ	回転糸切り後無調整	
SI6	89	ロクロ土師器	坏	11.1	5.9	3.9	ＡＦＩ	浅黄橙色	回転ナデ、体下部ナデ	回転ナデ、鉄分付着のため不明瞭	回転糸切り後無調整	完形
SI6	90	ロクロ土師器	坏	11.3	5.7	4.2	ＡＢＥＩ多	にぶい橙色	回転ナデ、口縁下に工具痕あり	回転ナデ	回転糸切り後無調整	
SI6	91	ロクロ土師器	坏	10.8	5.2	4.0	Ａ多ＣＦＨＩ	にぶい橙色	回転ナデ、数箇所に工具痕あり	回転ナデ	回転糸切り後無調整	ほぼ完形
SI6	92	ロクロ土師器	坏	11.3	5.1	3.9	ＡＢＥＩ	にぶい橙色	回転ナデ	回転ナデ、輪積痕あり	回転糸切り後無調整、底部糸の入れ直しがみられる	
SI6	93	ロクロ土師器	坏	12.0	5.4	4.0	ＡＣＦＨＩ	橙色	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り後無調整	
SI6	94	ロクロ土師器	坏	11.4	5.5	4.0	ＡＣＩ	にぶい橙色	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り後無調整	
SI6	95	ロクロ土師器	坏	11.8	5.1	4.4	ＡＢＥＦ	褐灰色	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り後無調整	
SI6	96	ロクロ土師器	坏	11.2	5.8	4.0	ＡＣＦＩＪ	橙色	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り後無調整	
SI6	97	ロクロ土師器	坏	11.0	5.3	3.9	ＡＣＩＪ	にぶい橙色	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り後無調整	
SI6	98	ロクロ土師器	坏	10.8	4.9	4.0	ＥＨＩ多	にぶい橙色	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り後無調整、糸の入れ直し痕跡あり	
SI6	99	ロクロ土師器	坏	11.0	5.5	4.3	ＡＥＦＧＨＩ多	にぶい橙色	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り後無調整、工具痕？あり	
SI6	100	ロクロ土師器	坏	11.0	5.0	3.3	ＡＢＥＦＩＫ	橙色	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り後無調整	ほぼ完形
SI6	101	ロクロ土師器	坏	11.0	4.7	3.6	ＡＢＦＩ	にぶい橙色	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り後無調整	
SI6	102	ロクロ土師器	坏	11.8	5.1	3.8	ＡＩ	橙色	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り後無調整	
SI6	103	ロクロ土師器	坏	11.2	4.9	3.6	Ａ多ＦＩ	褐灰色	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り後無調整	
SI6	104	ロクロ土師器	坏	11.4	4.9	3.5	ＡＢＣＦ少Ｈ	にぶい橙色	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り後無調整	
SI6	105	ロクロ土師器	坏	10.8	5.0	3.4	ＡＢＥ微ＦＩ多	にぶい橙色	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り後無調整	
SI6	106	ロクロ土師器	高台付坏？	11.4	－	(2.8)	ＡＣＦＩ	橙色	回転ナデ、体下部の一部ナデ	回転ナデ	回転糸切り後外周ナデ	高台部欠損しているが、高台付坏と思われる
SI6	107	ロクロ土師器	高台付坏	13.8	－	(4.6)	ＣＥＦ	橙色	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り後外周ナデ	ほぼ完形
SI6	108	ロクロ土師器	高台付坏	13.3	7.1	4.7	ＡＢＣＥＦＩ	橙色	回転ナデ	回転ナデ	高台貼付後ナデ	
SI6	109	ロクロ土師器	高台付坏	13.8	7.7	5.8	Ａ多ＣＥＦ	橙色	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り後高台貼り付け、一部に一方向へのナデ	
SI6	110	ロクロ土師器	高台付坏	15.1	7.8	6.0	Ａ多Ｆ多Ｉ多	にぶい橙色	回転ナデ、一部に工具痕あり	回転ナデ	高台貼付後ナデ	焼成良好、ほぼ完形
SI6	111	ロクロ土師器	高台付坏	15.0	7.0	5.4	ＡＢＦＩ	にぶい橙色	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り後高台貼り付け	
SI6	112	ロクロ土師器	高台付坏	13.8	6.5	5.7	ＡＣＦＩ	黄橙色	回転ナデ、体下部ヘラナデ	回転ナデ	回転糸切り後高台貼り付け	
SI6	113	ロクロ土師器	高台付坏	13.8	7.4	5.2	ＡＦＩＫ	にぶい橙色	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り後高台貼り付け	完形
SI6	114	ロクロ土師器	高台付坏	13.5	6.6	5.2	ＡＢＥ少Ｉ	にぶい橙色	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り後高台貼り付け	

第６表　住居跡出土土製品・鉄製品・石製品観察表（大道第１遺跡）

遺構名	番号	種別	器種	高さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（ｇ）	備考
SI1	24	土製品	支脚	18.7	7.7	(6.9)	900.0	ほぼ完形、被熱痕あり
SI1	25	土製品	支脚？	(3.4)	(3.7)	(2.5)	17.8	著しく磨耗、被熱痕あり
SI1	26	鉄製品	刀子	(9.3)	(1.7)	(0.4)	49.7	
SI1	27	鉄製品	刀子	(3.3)	(0.8)	0.5	3.9	
SI1	28	石製品	砥石	(1.5)	(2.0)	(1.7)	2.2	
SI1	29	土製品	土錘	7.2	2.1	1.9	24.8	完形
SI1	30	土製品	土錘	6.0	1.9	1.7	16.8	完形
SI1	31	土製品	土錘	5.8	1.7	1.7	15.1	完形
SI1	32	土製品	土錘	5.6	2.0	1.8	17.6	完形
SI1	33	土製品	土錘	(6.0)	2.0	1.7	17.2	
SI1	34	土製品	土錘	(4.8)	1.9	1.8	13.8	
SI1	35	土製品	土錘	(4.9)	1.7	1.9	12.5	
SI1	36	土製品	土錘	4.2	1.7	1.4	7.9	
SI1	37	土製品	土錘	(4.2)	1.7	1.5	8.0	
SI1	38	土製品	土錘	(4.8)	1.8	(1.8)	6.6	
SI1	39	土製品	土錘	(5.2)	1.1	1.2	5.2	完形
SI1	40	土製品	土錘	3.3	1.2	1.2	3.9	完形
SI1	41	土製品	土錘	(3.7)	1.2	1.2	4.2	
SI1	42	土製品	土錘	(3.7)	1.7	(1.7)	5.2	
SI1	43	土製品	土錘	(3.0)	1.2	1.2	3.7	
SI1	44	土製品	土錘	(2.6)	1.3	1.3	4.2	
SI2	54	土製品	羽口	(5.0)	(5.1)	(3.4)	60.5	
SI2	55	鉄製品	鉄滓	6.3	8.4	2.1	166.6	
SI2	56	鉄製品	鉄滓	6.5	8.6	2.1	139.6	
SI2	57	鉄製品	鉄滓	4.2	2.5	0.9	11.6	
SI2	58	石製品	砥石	4.5	3.4	1.4	29.8	
SI3	67	石製品	軽石	5.1	4.4	2.9	28.3	
SI4	69	石製品	砥石	7.8	3.6	4.4	120.9	1mm幅の鋭利な擦り切り痕多数あり
SI4	70	石製品	軽石	4.2	3.0	1.9	10.3	
SI4	71	石製品	軽石	4.4	2.2	2.1	7.5	
SI4	72	石製品	軽石	2.7	(2.8)	(1.8)	6.0	
SI6	115	土製品	支脚	(9.9)	5.0	4.9	327.4	被熱痕あり
SI6	116	石製品	軽石	1.8	2.3	1.3	2.3	

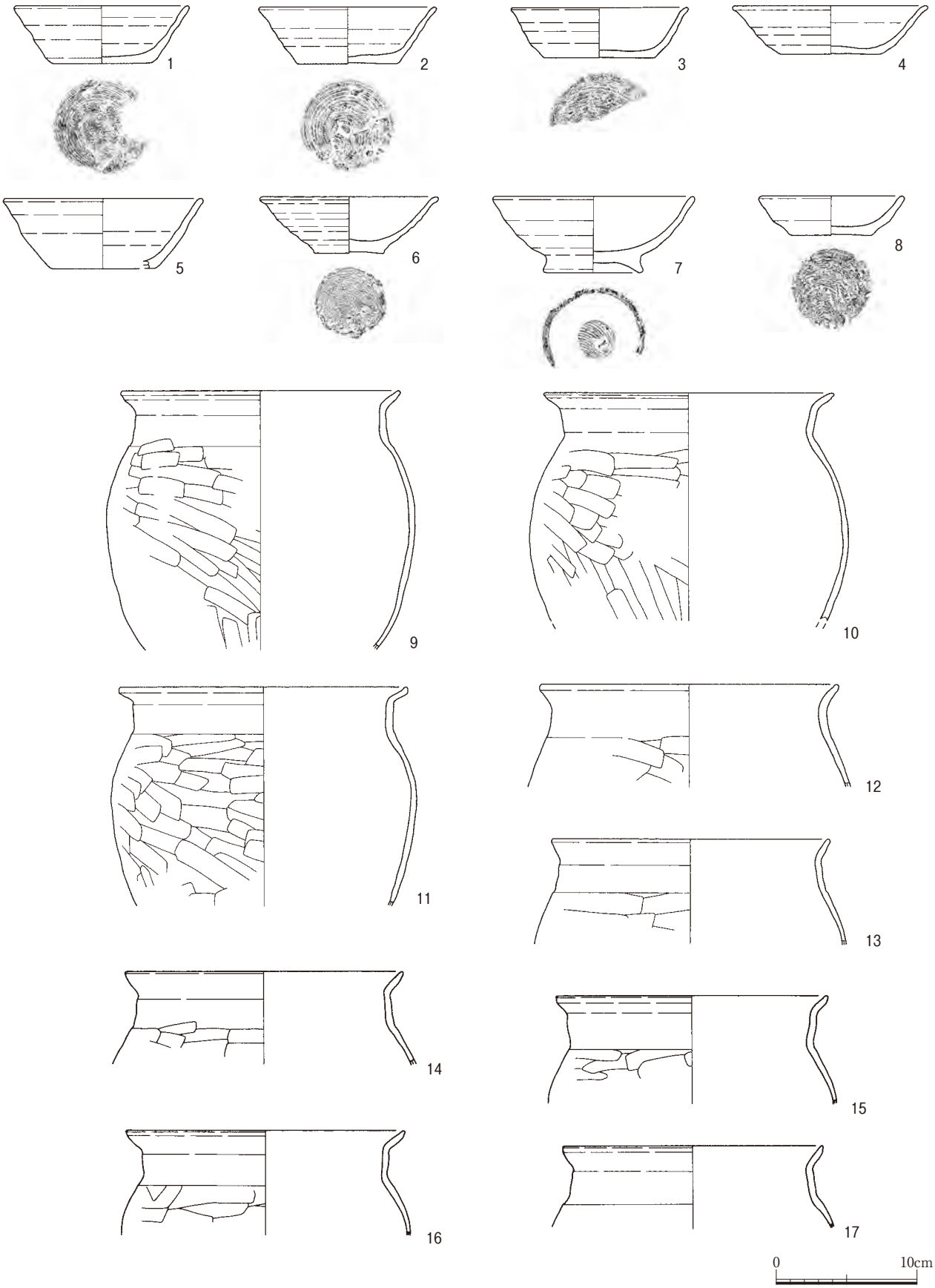
第７表　土坑出土土器観察表（大道第１遺跡）

遺構名	番号	種別	器種	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	胎土	色調	調整・施文（外面）	調整・施文（内面）	調整・施文（底面）	備　考
SK1	117	ロクロ土師器	高台付坏？	15.3	－	（4.7）	ＡＣＦＩ多	にぶい黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	底部切離し後ナデ	高台の貼付痕跡あり
SK1	118	ロクロ土師器	高台付坏	14.9	7.1	6.0	ＡＢＣＩ	橙色	回転ナデ	回転ナデ	高台貼付後ナデ	ほぼ完形
SK1	119	土師器	坏	15.1	4.1	5.9	ＡＢ	褐灰色にぶい橙色	口縁部ヨコナデ、体部磨耗のため不明瞭（ヘラナデか）	ミガキ、黒色処理	－	
SK1	120	土師器	坏	14.3	4.8	4.4	ＡＦ	褐灰色	口縁部ヨコナデ、体下部ヘラケズリ	ミガキ、黒色処理、鉄分付着のため不明瞭	ヘラケズリ	
SK1	121	ロクロ土師器	高台付坏	16.6	7.0	7.1	Ａ多ＣＥＦ	黒褐色にぶい橙色	回転ナデ、体下部ヘラナデ	ミガキ、黒色処理	底部切離し後高台貼付	
SK1	122	ロクロ土師器	高台付坏	13.4	7.5	6.2	ＡＣＩ	灰色にぶい橙色	回転ナデ、体下部ヘラケズリ	ミガキ、黒色処理？	底部切離し後高台貼付	
SK1	123	ロクロ土師器	高台付坏	11.0	5.9	4.9	ＡＣＦＩＪ	黒褐色にぶい黄橙色	回転ナデ	ミガキ、黒色処理	回転糸切り後高台貼付	
SK1	124	ロクロ土師器	坏	13.6	－	（4.0）	ＡＣＥＦ	褐灰色にぶい黄橙色	口縁部ヨコナデ、体部磨耗（ヘラケズリ？）	ミガキ、黒色処理	磨耗のため不明（ヘラケズリ？）	
SK1	125	ロクロ土師器	高台付坏	10.0	－	（4.2）	ＡＣＥＦＩ	黒褐色にぶい黄橙色	回転ナデ	ミガキ？、黒色処理	高台貼付後ナデ	
SK1	126	ロクロ土師器	坏	12.0	5.7	3.9	ＡＣＥＦＩ	にぶい橙色	回転ナデ、一部ナデ	回転ナデ	回転糸切り後無調整	完形
SK1	127	ロクロ土師器	坏	11.8	6.2	4.1	ＡＣＦＩ	にぶい橙色	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り後無調整	
SK1	128	ロクロ土師器	坏	11.8	5.4	3.3	ＡＣＥ少ＦＩ	にぶい橙色	回転ナデ	回転ナデ、底部ナデ	回転糸切り後無調整	
SK1	129	ロクロ土師器	坏	11.8	5.4	3.6	ＡＣＦＩ	灰褐色にぶい橙色	回転ナデ	鉄分付着のため不明（回転ナデ？）	回転糸切り後無調整	
SK2	130	ロクロ土師器	高台付坏	15.0	7.1	5.7	ＡＥＦＩ	明黄褐色	回転ナデ、磨耗のため不明瞭	回転ナデ、磨耗のため不明瞭	回転糸切り後高台貼付	
SK2	131	ロクロ土師器	高台付坏	14.0	7.8	5.7	ＡＢＣＥ	にぶい橙色	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り後高台貼付	
SK2	132	ロクロ土師器	高台付坏	15.2	－	（4.8）	ＡＥＩ	にぶい橙色	回転ナデ	回転ナデ	底部切離し後高台貼付（糸切り？）	
SK2	133	ロクロ土師器	碗	14.2	6.0	4.7	Ａ多Ｅ多Ｉ少	黒褐色にぶい橙色	回転ナデ、体部に指頭圧痕あり	ミガキ、黒色処理	回転糸切り後無調整	
SK2	134	ロクロ土師器	高台付坏	14.2	6.6	6.0	ＡＥＩ少	褐灰色黒褐色	回転ナデ	ミガキ、黒色処理	回転糸切り後高台貼付	
SK2	135	ロクロ土師器	高台付坏	15.0	6.8	6.1	ＡＥＦＩ	褐灰色にぶい褐色	回転ナデ、ナデ	ミガキ、黒色処理	底部切離し後高台貼付	ほぼ完形、器面の磨耗が顕著
SK2	136	ロクロ土師器	高台付坏	14.4	6.1	5.8	ＡＣＥＦＩ	黒褐色にぶい橙色	回転ナデ	ミガキ、黒色処理	底部切離し後高台貼付	
SK2	137	ロクロ土師器	高台付坏	14.7	6.7	4.8	ＡＣＥＦＩ	黒褐色にぶい橙色	回転ナデ	ミガキ、黒色処理	底部切離し後高台貼付、アバタ状剥離あり	
SK2	138	土師器	高台付坏	11.6	－	（4.3）	ＡＣＥＦＩ	黄灰色	ヨコナデ、口縁の一部にミガキ	ミガキ、黒色処理	ナデ？	ほぼ完形、高台欠損
SK2	139	土師器	高台付坏	11.5	－	（4.1）	ＡＣＥＦＩ	灰黄褐色黒褐色	ヨコナデ	ミガキ、黒色処理	高台貼付後ナデ	

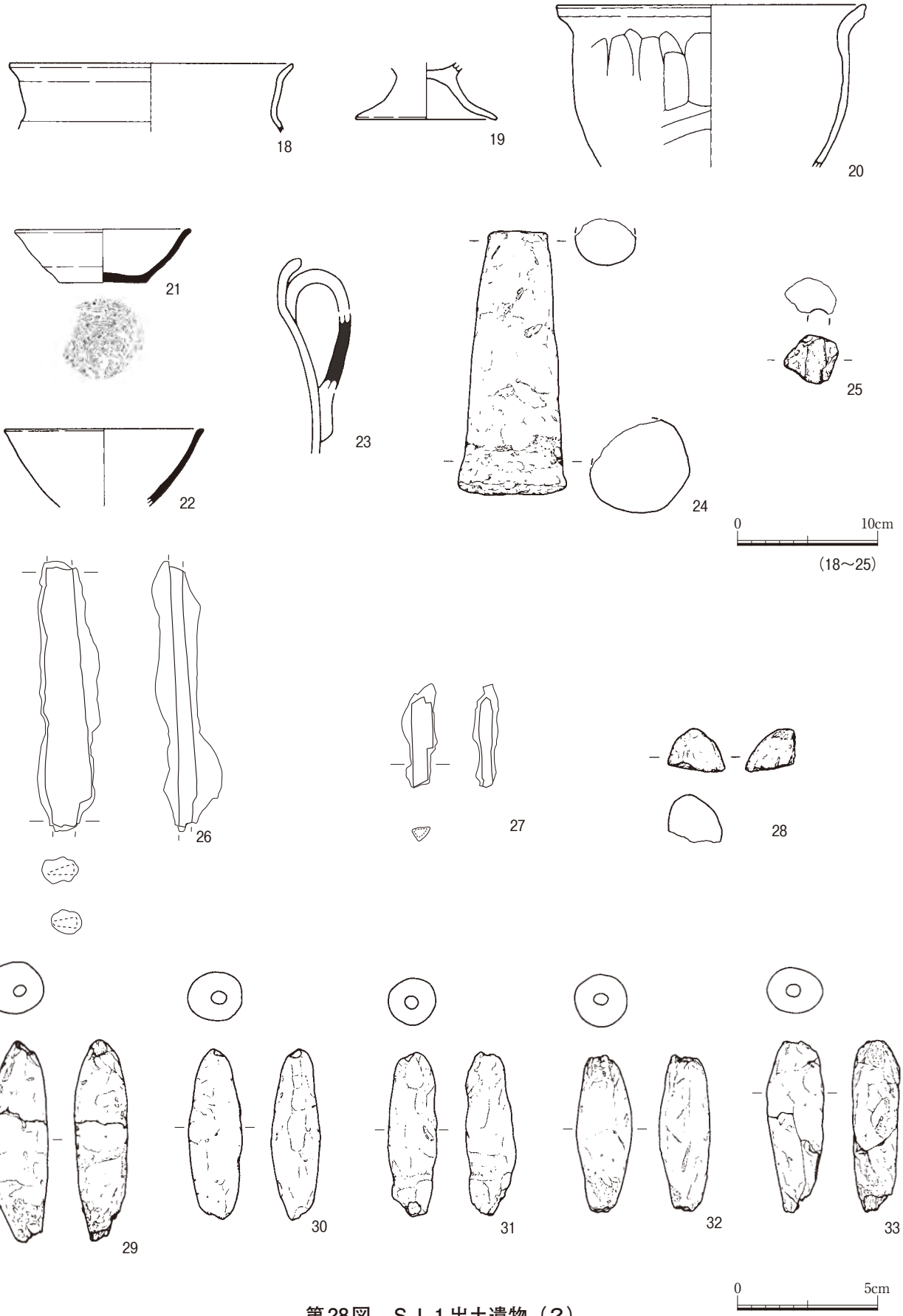
遺構名	番号	種別	器種	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	胎土	色調	調整・施文（外面）	調整・施文（内面）	調整・施文（底面）	備　考
SK2	140	ロクロ土師器	坏	11.4	5.5	3.1	ＡＦＩ	にぶい橙色	回転ナデ、輪積痕あり	回転ナデ、底部に一方向のナデ	回転糸切り後無調整	完形
SK2	141	ロクロ土師器	坏	10.8	5.7	3.5	ＡＢＦ	にぶい橙色	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り後無調整	
SK2	142	ロクロ土師器	坏	11.0	5.1	3.4	ＡＣＦ少	にぶい橙色	鉄分付着のため不明瞭（回転ナデ？）	回転ナデ	回転糸切り後無調整	
SK2	143	ロクロ土師器	坏	10.7	5.3	3.2	ＡＢＣＦＩ	にぶい橙色	回転ナデ、一部ナデ	鉄分付着のため不明瞭（回転ナデ？）	回転糸切り後無調整	
SK2	144	ロクロ土師器	坏	10.4	4.6	3.0	ＡＦＩ	黒褐色にぶい橙色	回転ナデ、一部ナデ	ナデ、黒色処理	回転糸切り後ナデ	
SK2	145	土師器	甕	23.2	－	（7.3）	ＡＣＥＦ	にぶい橙色	口縁部ヨコナデ、胴部横位ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ、胴部鉄分付着のため不明	－	
SK3	147	ロクロ土師器	坏	10.7	5.3	2.7	ＡＣＦＩ	にぶい橙色	回転ナデ	回転ナデ、ナデ	回転糸切り後無調整	完形
SK3	148	ロクロ土師器	坏	10.8	5.4	2.7	ＡＥ少ＦＩ	にぶい橙色	回転ナデ	回転ナデ、ナデ	回転糸切り後無調整	完形

第８表　土坑出土鉄製品観察表（大道第１遺跡）

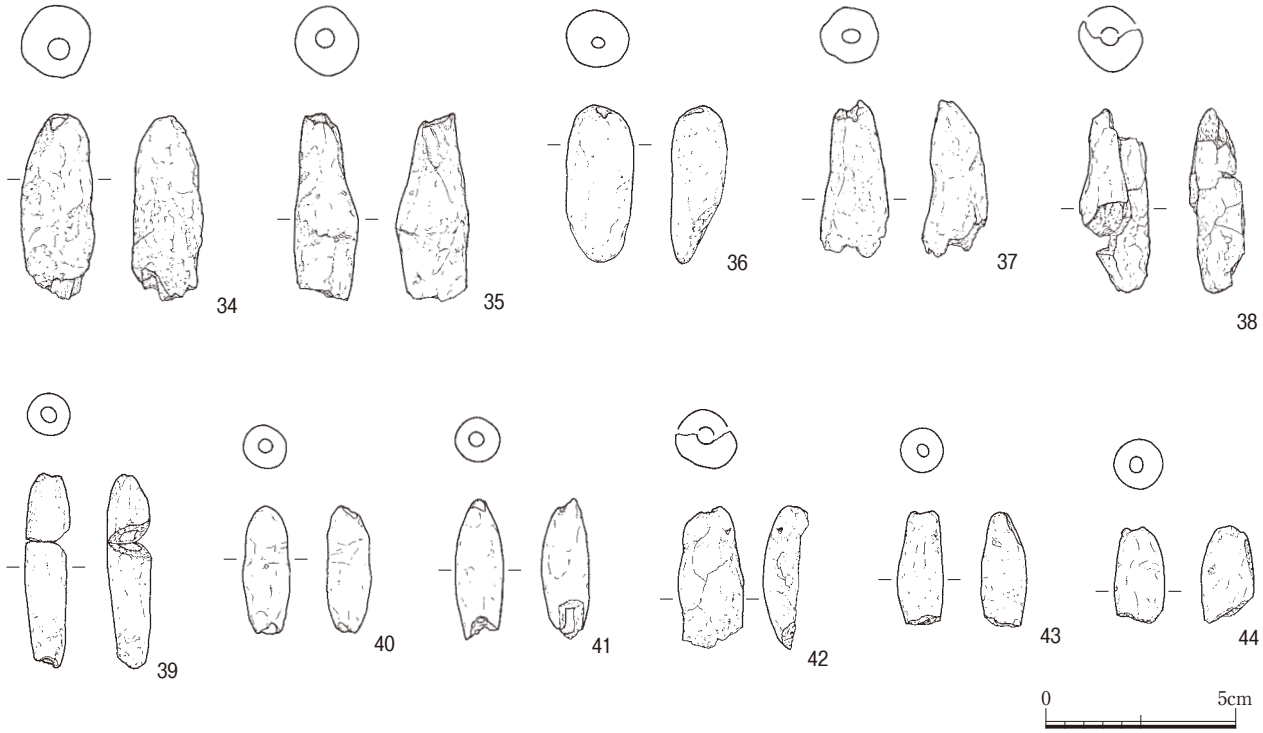
遺構名	番号	種別	器種	高さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（ｇ）	備考
SK2	146	鉄製品	刀子	（15.8）	（1.7）	（0.4）	52.9	



第27図　ＳＩ１出土遺物（１）

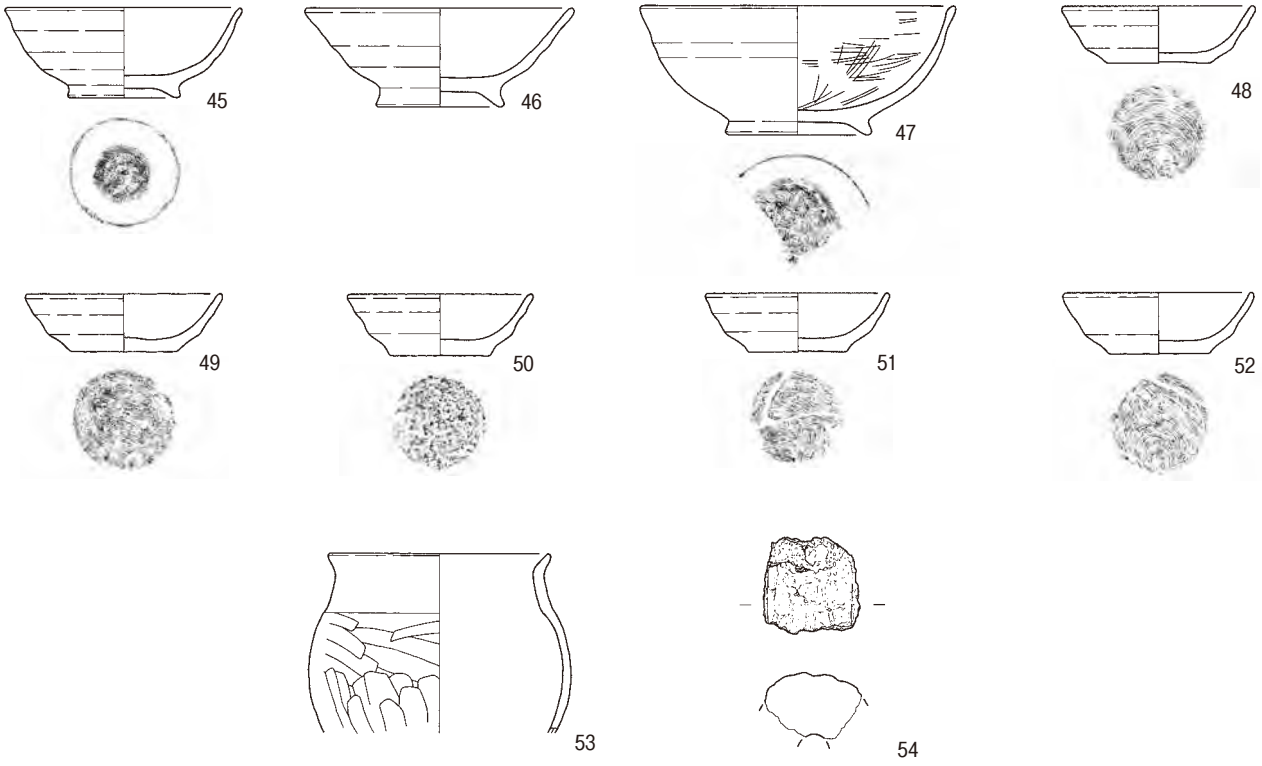


第28図　ＳＩ１出土遺物（２）



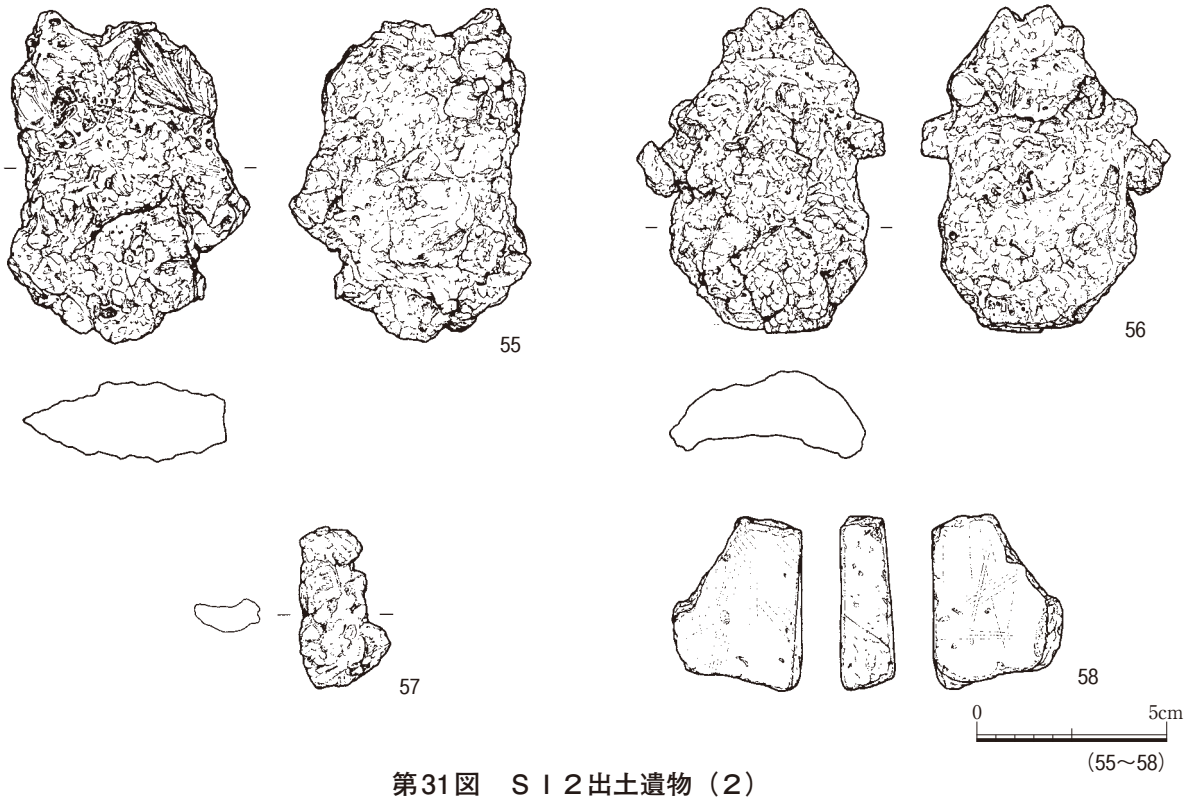
第29図　ＳＩ１出土遺物（３）

（34～44）

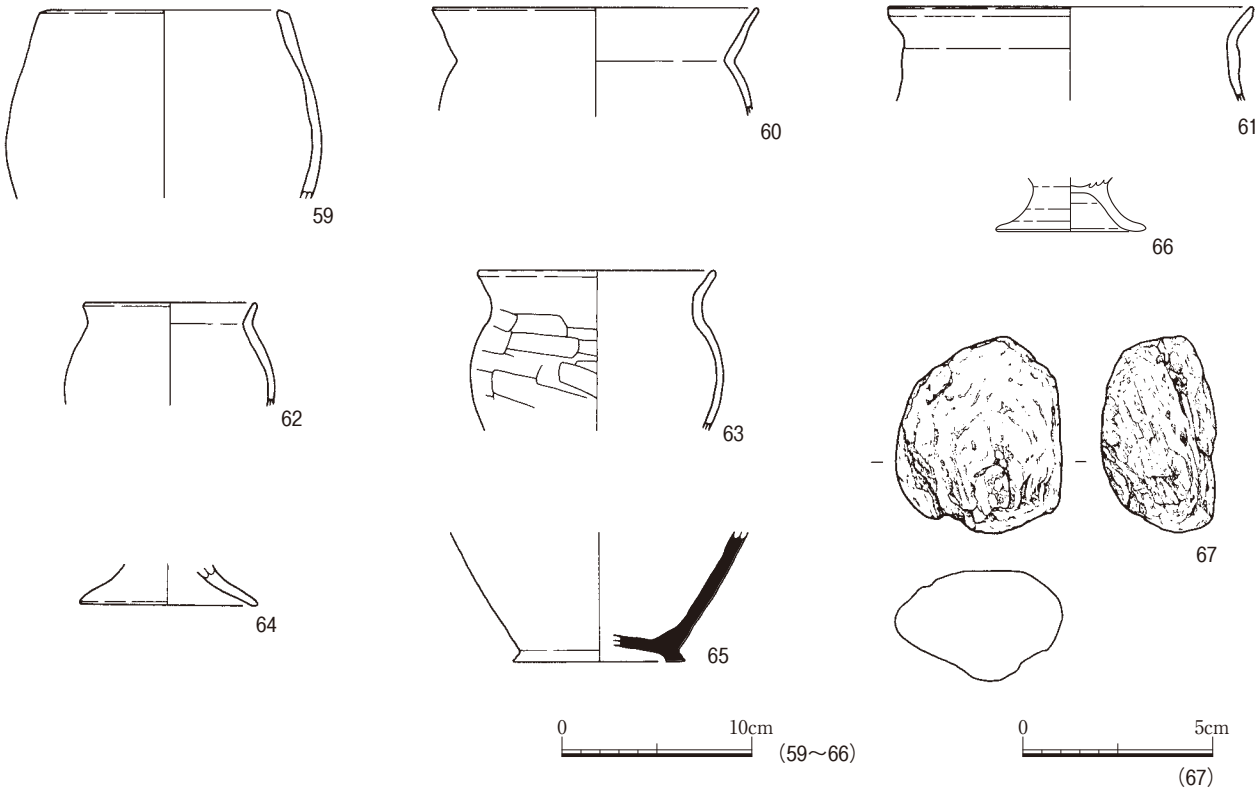


第30図　ＳＩ２出土遺物（１）

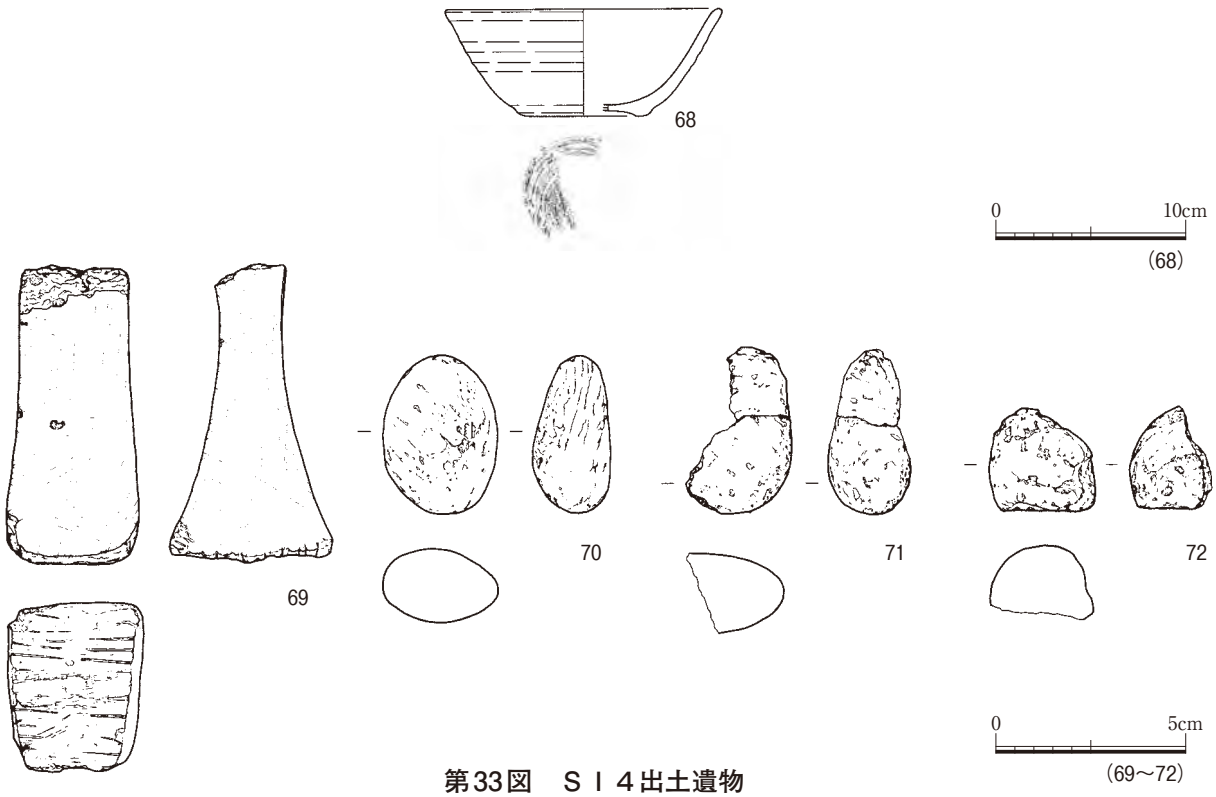
（45～54）



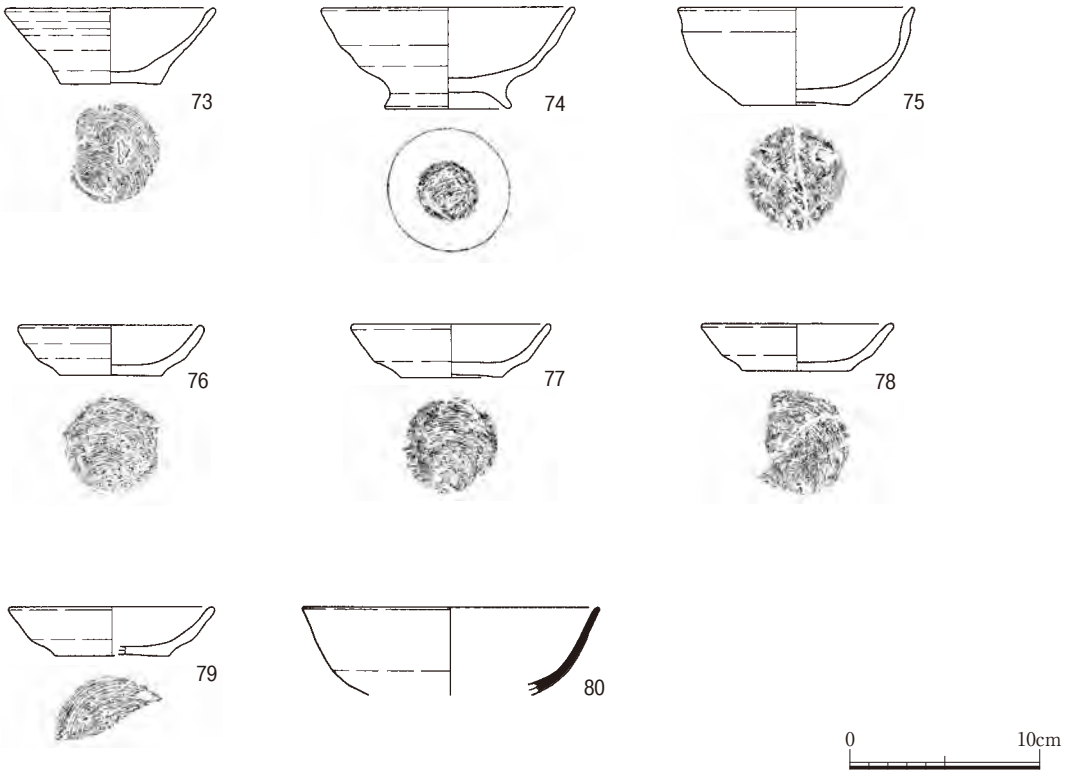
第31図　ＳＩ２出土遺物（２）



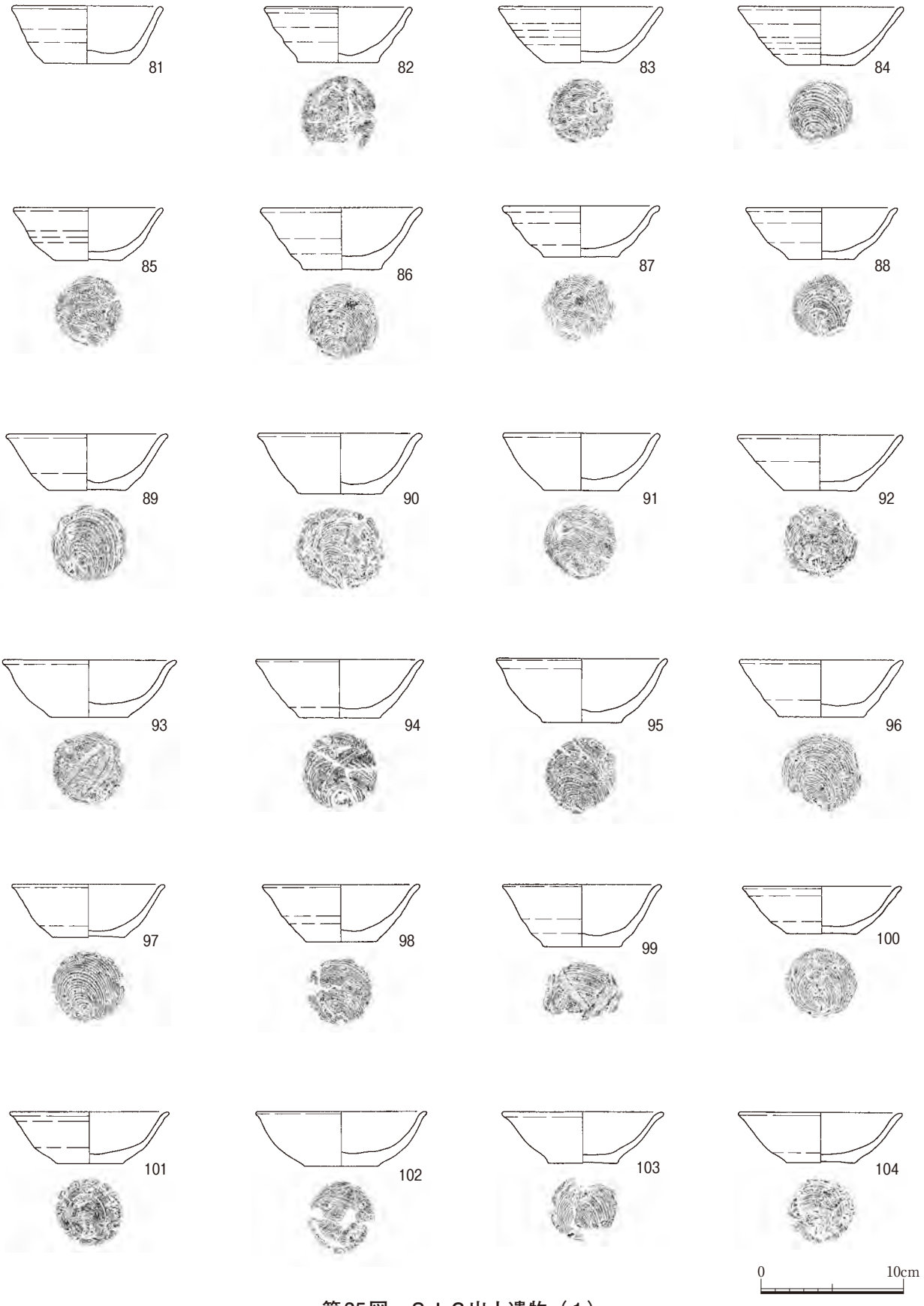
第32図　ＳＩ３出土遺物



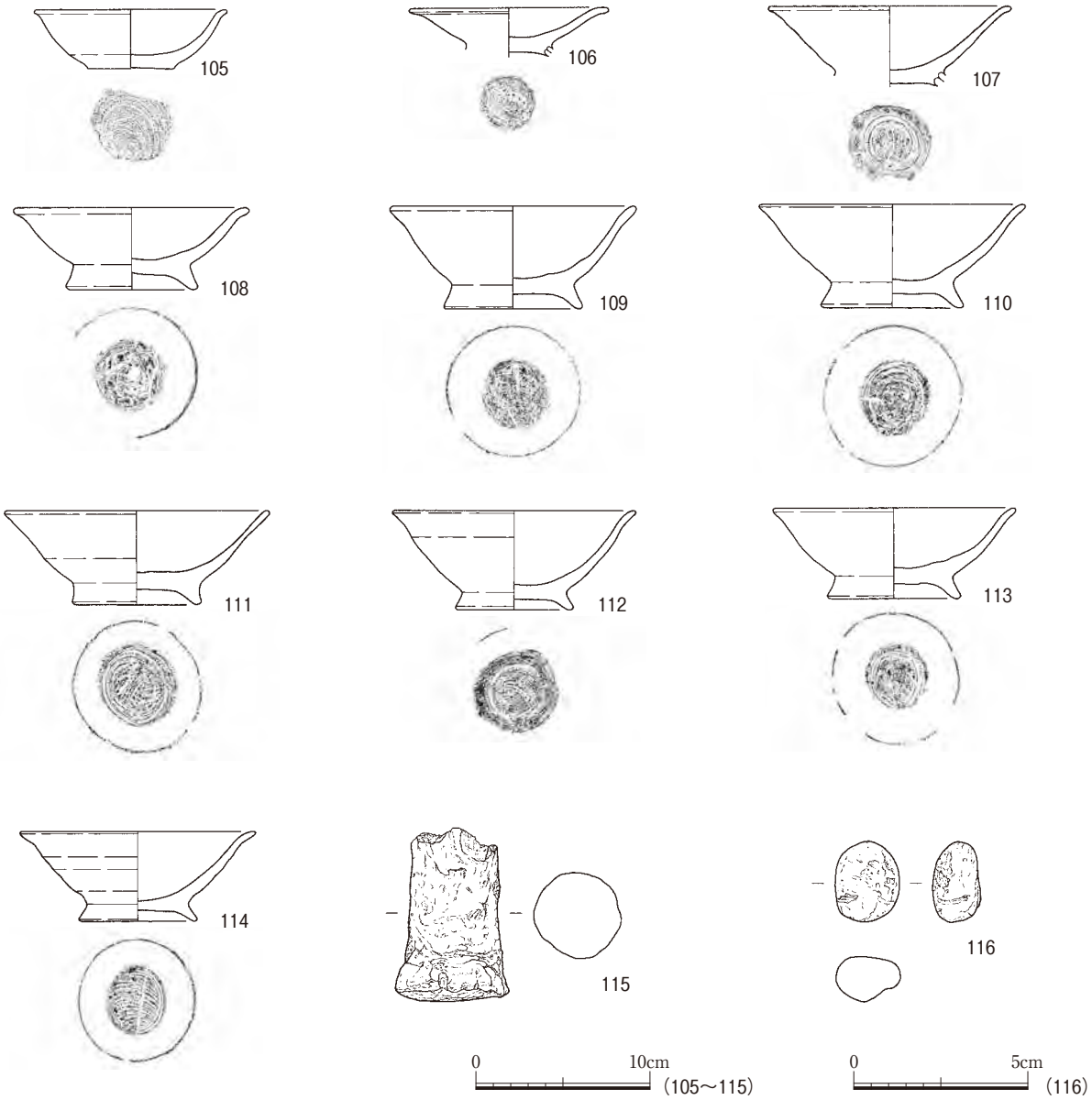
第33図　ＳＩ４出土遺物



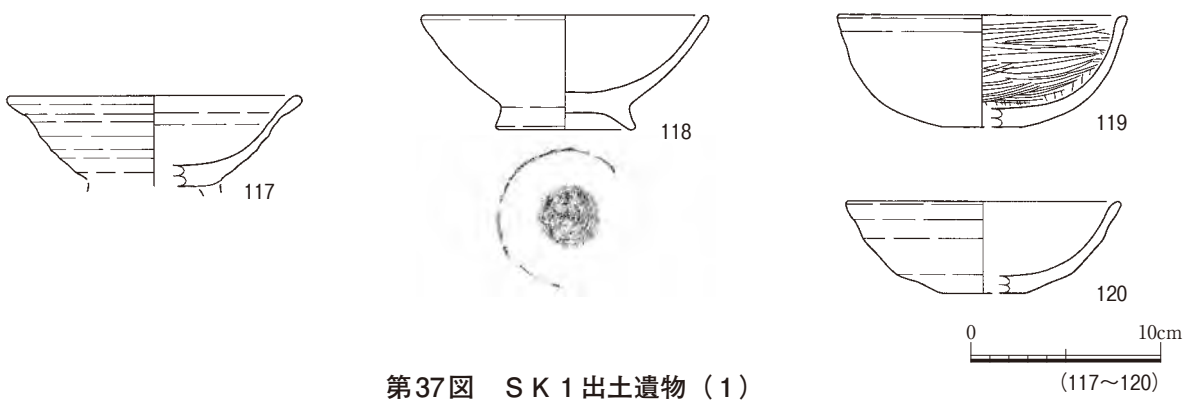
第34図　ＳＩ５出土遺物



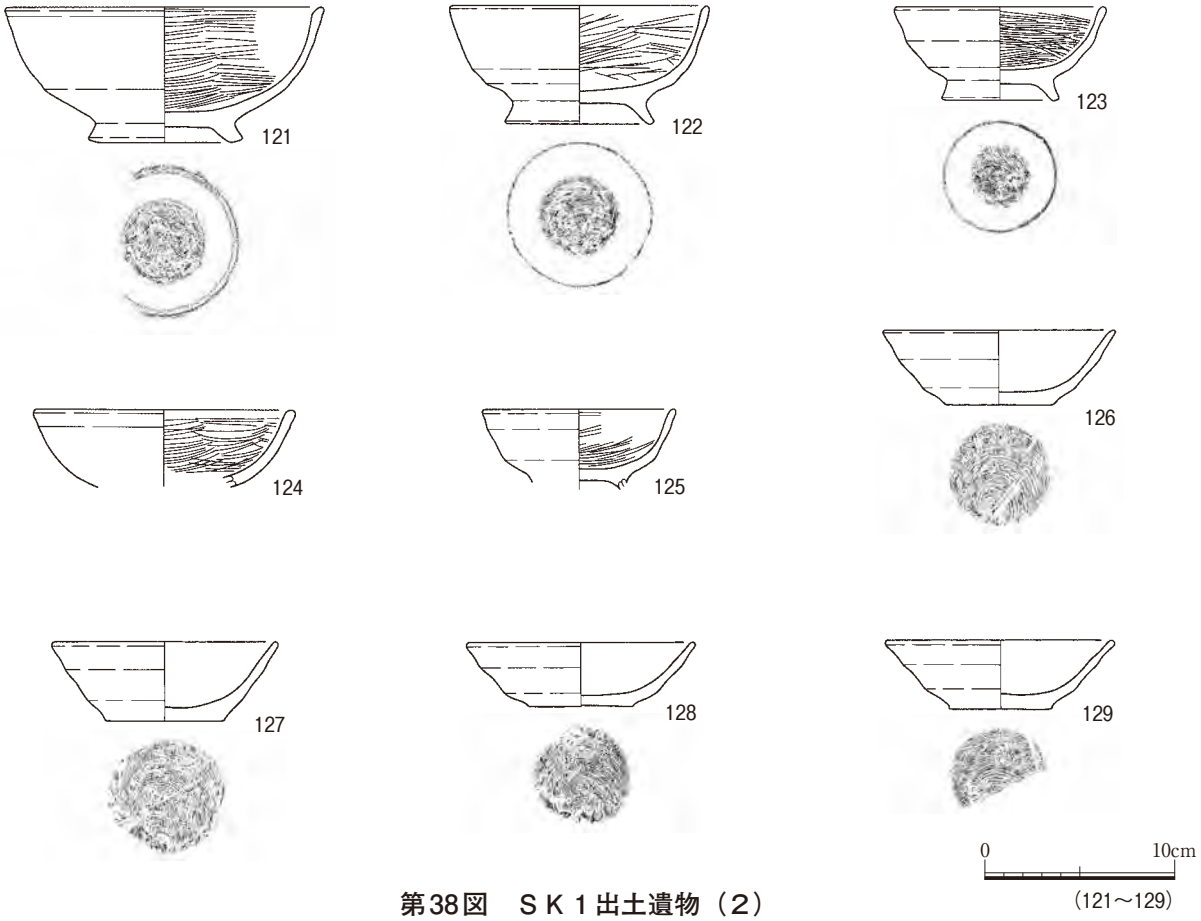
第35図　ＳＩ６出土遺物（１）



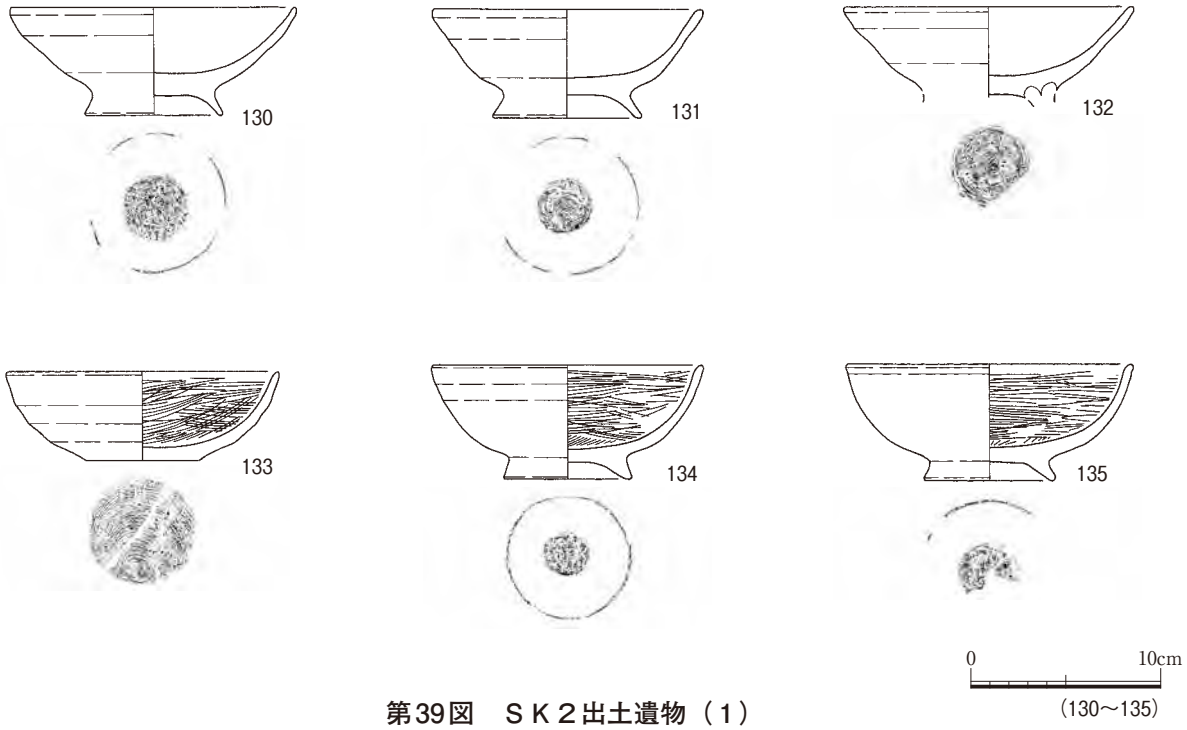
第36図　ＳＩ６出土遺物（２）



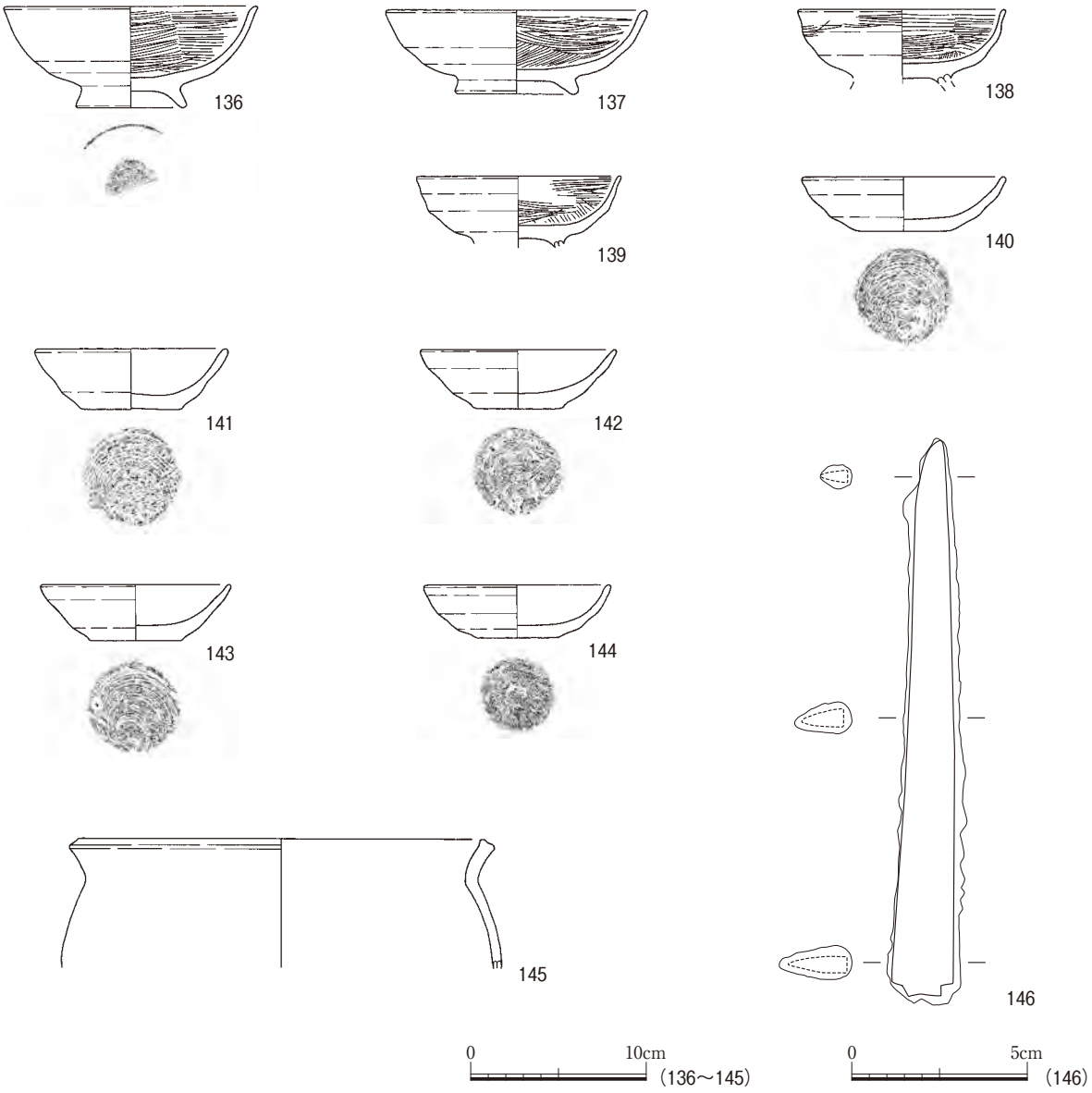
第37図　ＳＫ１出土遺物（１）



第38図　ＳＫ１出土遺物（２）

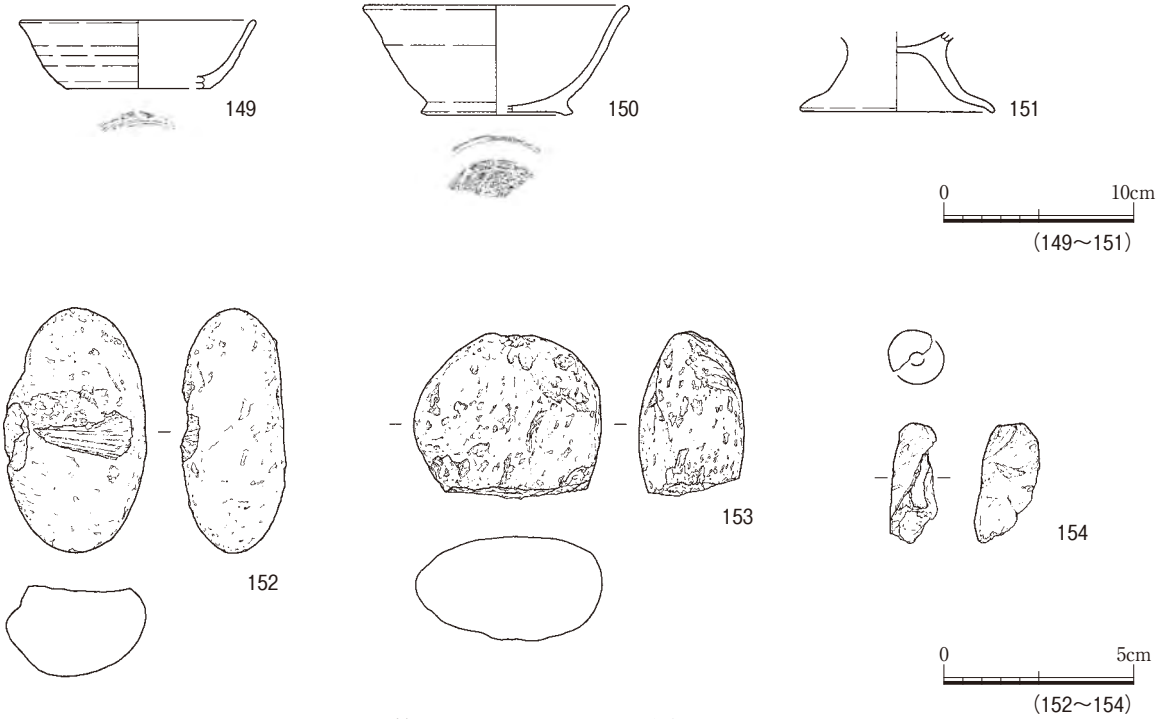


第39図　ＳＫ２出土遺物（１）



第40図　ＳＫ２出土遺物（２）

第41図　ＳＫ３出土遺物



第42図　ＳＤ１出土遺物

第43図　ＳＤ５出土遺物

２．大道第２遺跡（平成15年度調査地点）

（１）遺構

（ｉ）住居跡

平成15年度の調査では、平安時代の住居跡を２軒検出した。調査区の南東部に距離をおいて散在し、いずれも北カマドだが、主軸方位はやや異なる。

第１号住居跡（ＳＩ１、第44・45図）

Ｄ－５グリッドに位置する。ＳＫ５が住居の北西側に重複しているが、床面までは削平されていない。平面形態は方形に近い隅丸長方形を呈し、北壁のカマド部のみ若干くびれている。主軸方位はＮ－17°－Ｅである。規模は長軸3.32ｍ、短軸2.80ｍ、深さは最高0.25ｍである。

北カマドは北壁の中央から東寄りに設けられ、規模は全長0.86ｍ、幅0.71ｍである。燃焼部が壁の外側に突出している。煙道は検出されていない。火床部は深さ0.15ｍほど掘り込まれており、天井部の崩落土と考えられる焼土層の下には、炭化物と硬化した褐色土の堆積が認められた。

床面からはピットが３基検出されているが、配置・規模ともに規則性がなく、柱穴とは想定しがたい。

遺物は住居全体から散在して出土したが、大半は覆土中からの出土であり、床面からの出土は少ない。なお、Ｐ１周辺の出土遺物数点が、西側遺構外からの出土遺物と接合しており、住居跡の西側上部は面的に削平を受けていた可能性が高い。

第２号住居跡（ＳＩ２、第46・47図）

Ｅ－３グリッドに位置する。南壁の一部がＳＫ17に削平されるほか、西側のほとんどが調査区外にあたるため、形態・規模の詳細は不明である。平面形態は方形または長方形で主軸方位はＮ－７°－Ｅ、南北4.82ｍ、東西は残存3.37ｍ、深さ最高0.35ｍである。北カマドの規模は全長1.14ｍ、幅0.75ｍで、燃焼部が壁の外側に突出している。煙道は検出されていない。火床部は床面から0.12ｍほど掘り込まれている。覆土下層では、カマド以外の床面にも、焼土の面的な広がりが認められた。住居の床面からはピットを９基、東壁・南壁の一部で壁周溝を検出した。遺物は住居全体に散在して出土しているが、その多くは覆土中からの出土である。

（ⅱ）掘立柱建物跡

検出されたピットのうち、規則的かつ長方形に配置されるものについては掘立柱建物跡として抽出した。平成15年度調査では、３基を検出した。いずれも調査区北側に位置する。

第１号掘立柱建物跡（ＳＢ１、第48図）

調査区北側、Ａ－３、Ｂ－３グリッドに位置する。北側は調査区境界と重なるため、さらに調査区外へ続く可能性はあるが、桁行３間×梁行１間を検出している。主軸方位はＮ－18°－Ｅ。桁行の総長は5.0ｍ、各柱間は北から1.49ｍ、1.75ｍ、1.77ｍである。梁行の総長は2.97ｍである。時期の明確な遺物の出土や遺構との重複はなく、帰属時期は不明である。

第２号掘立柱建物跡（ＳＢ２、第49図）

調査区北西部、Ａ－２・３、Ｂ－３グリッドに位置し、規模は桁行４間×梁行１間である。主軸方位はＮ－15°－Ｅ。桁行の総長は7.50ｍ、各柱間は西から1.83ｍ、1.87ｍ、1.83ｍ、1.92ｍ。梁行の総長は3.47ｍである。南側の柱穴間が一部で撹乱を受けているが、各柱穴の配置からみて、ここにも柱穴があったと推定される。

Ｐ５・９からは土師器・須恵器小破片が出土し、平安時代に帰属する可能性がある。また、第３号掘立柱建物跡と同程度の規模で、かつ柱穴の位置や主軸方位がほぼ一致することから、両遺構には何らかの関連性があった可能性がある。

第３号掘立柱建物跡（ＳＢ３、第50図）

調査区北西部、Ａ－２・３、Ｂ－３グリッドに位置し、規模は桁行４間×梁行１間である。主軸方位はＮ－17°－Ｅ。桁行の総長は7.78ｍ、各柱間は西から1.88ｍ、2.08ｍ、1.98ｍ、1.82ｍ。梁行の総長は3.35ｍである。北平側の柱列配置はやや蛇行する。なお、北東部角の柱穴間については検出できなかった。Ｐ３からは寛永通宝（古寛永）が１点出土しているが、Ｐ５・６・８と複数のピットから土師器破片が出土し、平安または江戸時代に帰属する可能性がある。

（ⅲ）柱列跡

検出されたピットのうち、直線的に配置され、間隔に一定の規則性が認められるものを柱列跡として抽出した。

いずれも調査区外との境界に近接しており、柵列であるのか、掘立柱建物跡の側面部であるのかは判断できない。第５号柱列跡が調査区中央部に位置するほかは、全て調査区北側に位置する。

第１号柱列跡（ＳＡ１、第51図）

調査区北東部、Ｂ－４グリッドに位置する。ピット４基が直線状に並び、主軸方位はＮ－17°－Ｅである。各ピットの間隔は北から2.18ｍ、2.27ｍ、1.70ｍである。時期の明確な遺物の出土や遺構との重複はなく、帰属時期は不明である。

第２号柱列跡（ＳＡ２、第52図）

調査区北中央部、Ａ－３・４、Ｂ－３グリッドに位置する。ピット５基が直線状に並び、主軸方位はＮ－16°－Ｅである。各ピットの間隔は北から0.96ｍ、1.40ｍ、1.20ｍ、1.04ｍである。Ｐ３から鉄釘、Ｐ４から土師器の高台付坏が出土したほか、Ｐ３を除く各ピットで土師器小破片が出土した。第１号柱列跡とは主軸方位が概ね一致しており、第２号柱列跡の２間が第１号柱列跡の１間にほぼ対応することから、両者は同一建物の柱跡であった可能性がある。

第３号柱列跡（ＳＡ３、第53図）

調査区北西部、Ａ－２、Ｂ－２グリッドに位置する。ピット４基が直線状に並び、主軸方位はＮ－18°－Ｅである。各ピットの間隔は北から1.58ｍ、1.63ｍ、1.48ｍである。時期の明確な遺物の出土や

遺構との重複はなく、帰属時期は不明である。

第４号柱列跡（ＳＡ４、第54図）

調査区北西部、Ａ－２、Ｂ－２グリッドに位置する。ピット３基が直線状に並び、主軸方位はＮ－16°－Ｅである。各ピットの間隔は不規則だが、北から1.81ｍ、2.82ｍである。時期の明確な遺物の出土や遺構との重複はなく、帰属時期は不明である。

第５号柱列跡（ＳＡ５、第55図）

調査区中央部、Ｃ－４、Ｄ－４グリッドに位置する。ピット４基が直線状に並び、主軸方位はＮ－17°－Ｅである。各ピットの間隔は北から2.50ｍ、2.63ｍ、2.46ｍである。Ｐ３・４から土師器小破片が出土し、平安時代に帰属する可能性がある。

（ⅳ）土坑

調査区内から17基の土坑を検出し、多くは調査区東側に分布する傾向にある。土師器焼成坑と考えられる土坑と、それ以外の土坑があり、それぞれ別項目にて記載する。

（１）土師器焼成坑（第57図）

第１号土坑（ＳＫ１）

Ｃ－１・２グリッドに位置する。平面形態は楕円形に近い不整形を呈し、南北方向に長軸をもつ。規模は長軸1.8ｍ、短軸1.48ｍ、深さは最高0.58ｍである。土坑の中央部は一段低く掘り込まれており、その上面には焼土が堆積する。壁面には被熱の痕跡は特に認められなかった。

第４号土坑（ＳＫ４）

Ｂ・Ｃ－４グリッドに位置する。平面形態は土坑２基がつながったような不整形を呈し、南北方向に長軸をもつ。規模は長軸3.37ｍ、短軸2.2ｍ、深さは最高0.37ｍである。覆土には炭化物を多量に含み、床面中央部には焼土が面的に広がる。壁面には被熱の痕跡は特に認められなかった。

（２）土坑（第46、47、57～59図）

第２号土坑（ＳＫ２）

Ｃ－４・５グリッドに位置する。平面形は隅丸長方形を呈し、掘り込みは浅い。時期の明確な遺物の出土や遺構との重複はなく、帰属時期は不明である。

第３号土坑（ＳＫ３）

Ｃ－４グリッドに位置する。平面形は隅丸長方形あるいは短い溝状を呈し、掘り込みは浅い。時期の明確な遺物の出土や遺構との重複はなく、帰属時期は不明である。

第５号土坑（ＳＫ５）

Ｄ－５グリッドに位置し、平面形は楕円形を呈する。第1号住居跡の上から掘り込まれているため、平安時代以降に帰属する。ロクロ土師器坏や土師器甕の小破片が出土しているが、第１号住居削平時の混入という可能性もある。

第６号土坑（ＳＫ６）

Ｄ－４グリッドに位置する。平面形は長方形を呈する。鉄釘が1点出土しているほか、ロクロ土師器坏、須恵器の小破片が出土しており、平安時代に帰属すると考えられる。

第７号土坑（ＳＫ７）

Ｄ－４グリッドに位置する。平面形は不整形に近い楕円形を呈する。ロクロ土師器坏・高台付坏を数点のほか、緑釉陶器１点、鉄釘１点を出土し、平安時代に帰属すると考えられる。

第８号土坑（ＳＫ８）

Ｄ－３、Ｅ－３・４グリッドに位置する。平面形は楕円形を呈すると考えられる。コの字状口縁を呈する武蔵型甕や、ロクロ土師器坏の小破片が出土していることから、平安時代に帰属すると考えられる。

第９号土坑（ＳＫ９）

Ｃ－４グリッドに位置し、平面形は不整形に近い円形を呈する。掘り込みは浅い。時期の明確な遺物の出土や遺構との重複はなく、帰属時期は不明である。

第10号土坑（ＳＫ10）

Ｄ・Ｅ―５グリッドに位置する。平面形は不整楕円形を呈し、東西で基底部からの立ち上がりが異なる。詳細な時期は判断できないが、須恵器破片１点のほか、羽口・鉄滓各１点が出土している。

第11号土坑（ＳＫ11）

Ｄ－４グリッドに位置し、平面形は不整形に近い円形を呈する。時期の明確な遺物の出土や遺構との重複はなく、帰属時期は不明である。

第12号土坑（ＳＫ12）

Ｅ－４グリッドに位置し、平面形は不整形に近い円形を呈する。時期の明確な遺物の出土や遺構との重複はなく、帰属時期は不明である。

第13号土坑（ＳＫ13）

Ｅ－４グリッドに位置し、平面形は楕円形を呈する。ロクロ土師器坏や土師器甕の小破片が出土しており、平安時代に帰属すると考えられる。

第14号土坑（ＳＫ14）

Ｃ－４グリッドに位置する。平面形は砲弾型に近い不整楕円形を呈する。第1号溝に重複するが、時期の明確な遺物の出土はない。帰属時期は不明だが、位置を考慮すると第1号溝跡の先端部である可能性がある。

第15号土坑（ＳＫ15）

Ｃ－１グリッドに位置する。平面形は楕円形を呈する。土師器坏が1点出土している。

第16号土坑（ＳＫ16）

Ｄ－２グリッドに位置する。平面形は隅丸長方形を呈する。時期の明確な遺物の出土や遺構との重複はなく、帰属時期は不明である。

第17号土坑（ＳＫ17）

Ｅ－３グリッドに位置する。平面形は不整楕円形を呈し、第２号住居跡の上から掘り込まれているため、平安時代以降に帰属する。鉄製大型刀子１点が出土している。

（v）溝（第56図）

第１号溝（ＳＤ１）

Ｃ・Ｄ－４グリッドに位置する。最大幅0.3ｍ、深さは最高で0.06ｍである。南側は調査区外に延びているが、ほぼ直角に折れ曲がる、あるいは途切れるものと考えられる。

（vi）ピット（第60図）

列状の配置が認められたものを除いて、調査区全体からピットを11基検出した。Ｂ－３グリッドに集中して分布するほか、調査区西側に散在する。平面形は円形もしくは楕円形で、直径0.3m前後のものが多い。出土遺物は第13表のとおりであり、一部のピットは平安時代に帰属すると考えられる。

第９表　住居跡一覧表（大道第２遺跡）

遺構名	時期	グリッド	長軸（m）	短軸（m）	深さ（m）	カマド	主軸方位
ＳＩ１	平安	Ｄ－５	3.32	2.80	0.25	北壁中央東寄り	Ｎ－17°－Ｅ
ＳＩ２	平安	Ｅ－３	4.82	（3.37）	0.35	北壁中央	Ｎ－７°－Ｅ

第10表　土坑一覧表（大道第２遺跡）

遺構名	時期	グリッド	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	平面形	遺　物	備　考
ＳＫ１	平安	Ｃ－１・２	1.76	1.48	0.59	楕円形	土師器坏・高台付坏、須恵器甕	土師器焼成坑
ＳＫ２	不明	Ｃ－４・５	1.74	1.18	0.08	隅丸長方形		
ＳＫ３	不明	Ｃ－４	2.58	0.46	0.10	隅丸長方形		
ＳＫ４	平安	Ｂ・Ｃ－４	3.37	2.23	0.38	不整形	土師器坏・高台付坏・甕、須恵器高台付坏・甕	土師器焼成坑
ＳＫ５	不明	Ｄ－５	1.21	(0.69)	0.15	楕円形？		ＳＩ１を切る
ＳＫ６	不明	Ｄ－４	2.21	(0.89)	0.23	長方形？		
ＳＫ７	平安	Ｄ－４	1.88	1.72	0.36	不整楕円形	土師器坏・高台付坏、陶器坏	
ＳＫ８	不明	Ｄ－３、Ｅ－３・４	1.16	(0.40)	0.52	楕円形？		
ＳＫ９	不明	Ｃ－４	0.82	0.71	0.08	不整円形		
ＳＫ10	平安	Ｄ・Ｅ－５	1.20	0.71	0.27	不整楕円形	須恵器甕	
ＳＫ11	不明	Ｄ－４	0.91	0.87	0.15	不整円形		
ＳＫ12	不明	Ｅ－４	0.70	0.61	0.12	不整円形		
ＳＫ13	不明	Ｅ－４	1.11	0.84	0.17	楕円形		
ＳＫ14	不明	Ｃ－４	0.95	0.57	0.16	不整楕円形		
ＳＫ15	平安	Ｃ－１	0.90	0.70	0.26	楕円形	土師器坏	
ＳＫ16	不明	Ｄ－２	1.24	0.97	0.26	隅丸長方形		
ＳＫ17	不明	Ｅ－３	1.22	0.57	0.14	不整楕円形		ＳＩ２を切る

第11表　掘立柱建物跡ピット一覧表（大道第２遺跡）

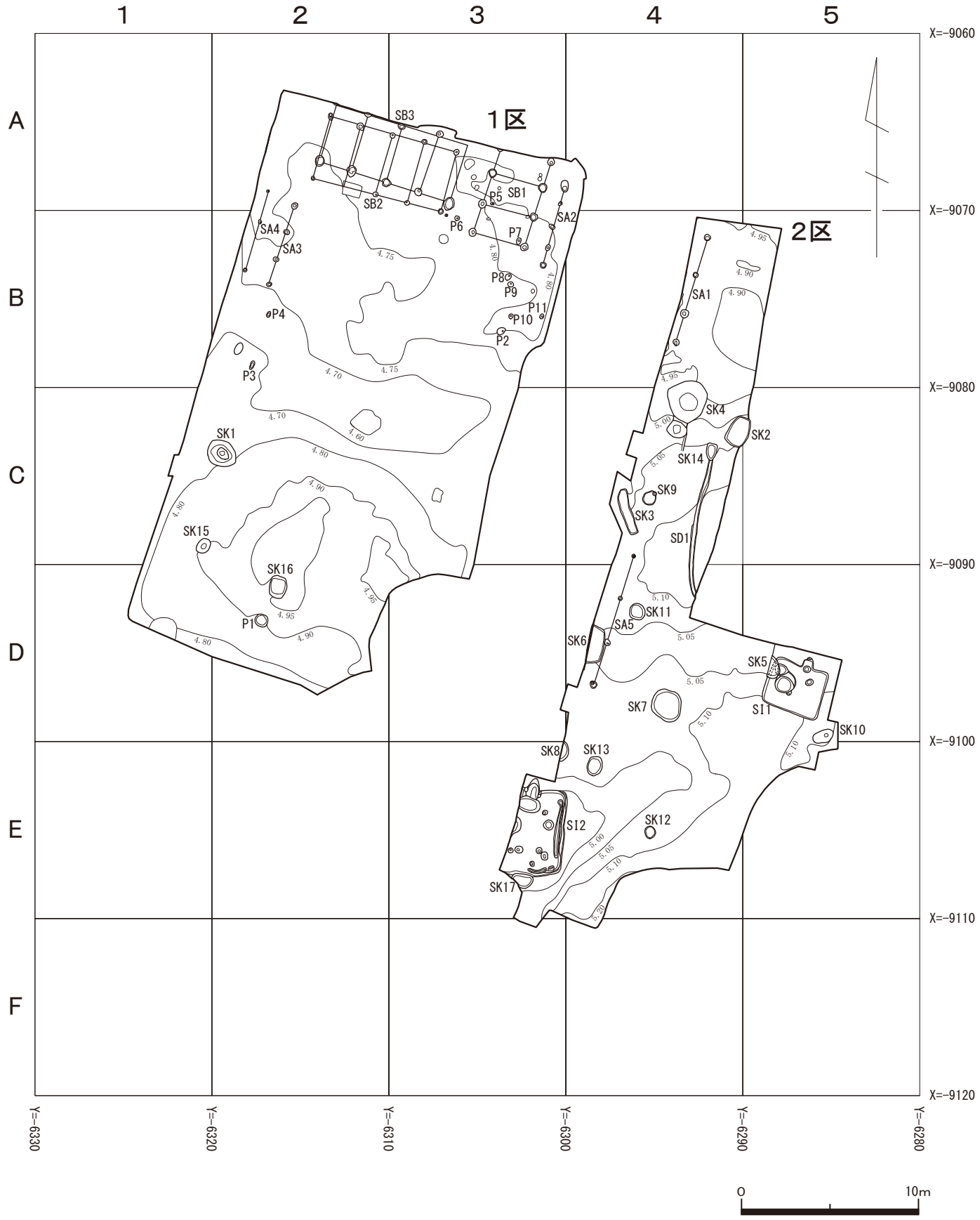
遺構名	グリッド	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	備　　考
ＳＢ１－Ｐ１	Ａ－３	0.35	(0.15)	0.08	
ＳＢ１－Ｐ２	Ａ－３	0.45	0.45	0.24	
ＳＢ１－Ｐ３	Ａ－３	0.50	0.43	0.23	
ＳＢ１－Ｐ４	Ｂ－３	0.48	0.43	0.38	
ＳＢ１－Ｐ５	Ａ－３	0.43	0.38	0.14	
ＳＢ１－Ｐ６	Ａ－３	0.48	0.45	0.24	
ＳＢ１－Ｐ７	Ｂ－３	0.42	0.41	0.28	
ＳＢ１－Ｐ８	Ｂ－３	0.42	0.42	0.34	
ＳＢ２－Ｐ１	Ａ－２	0.36	0.21	0.06	
ＳＢ２－Ｐ２	Ａ－２	0.39	0.37	0.24	
ＳＢ２－Ｐ３	Ａ－３	0.30	0.26	0.13	
ＳＢ２－Ｐ４	Ａ－３	0.30	0.27	0.12	
ＳＢ２－Ｐ５	Ａ－３	0.35	0.30	0.10	土師器・須恵器小破片が出土
ＳＢ２－Ｐ６	Ｂ－２	0.24	0.21	0.25	
ＳＢ２－Ｐ７	Ｂ－２	0.27	0.26	0.14	
ＳＢ２－Ｐ８	Ｂ－３	0.27	0.25	0.15	
ＳＢ２－Ｐ９	Ｂ・Ｃ－３	0.32	0.30	0.16	土師器小破片が出土
ＳＢ３－Ｐ１	Ａ－２	0.38	(0.18)	?	
ＳＢ３－Ｐ２	Ａ－２	0.41	(0.24)	?	
ＳＢ３－Ｐ３	Ｂ－２	0.40	0.33	?	
ＳＢ３－Ｐ４	Ｂ－２	0.41	0.37	?	
ＳＢ３－Ｐ５	Ａ－２	0.61	0.46	0.13	土師器小破片が出土
ＳＢ３－Ｐ６	Ａ－２	0.65	0.49	0.16	土師器小破片が出土
ＳＢ３－Ｐ７	Ａ・Ｂ－２	0.48	0.47	0.22	
ＳＢ３－Ｐ８	Ｂ－２	0.41	0.40	0.21	磁器小破片が出土
ＳＢ３－Ｐ９	Ｂ－２	0.69	0.56	0.31	

第12表　柱列跡ピット一覧表（大道第２遺跡）

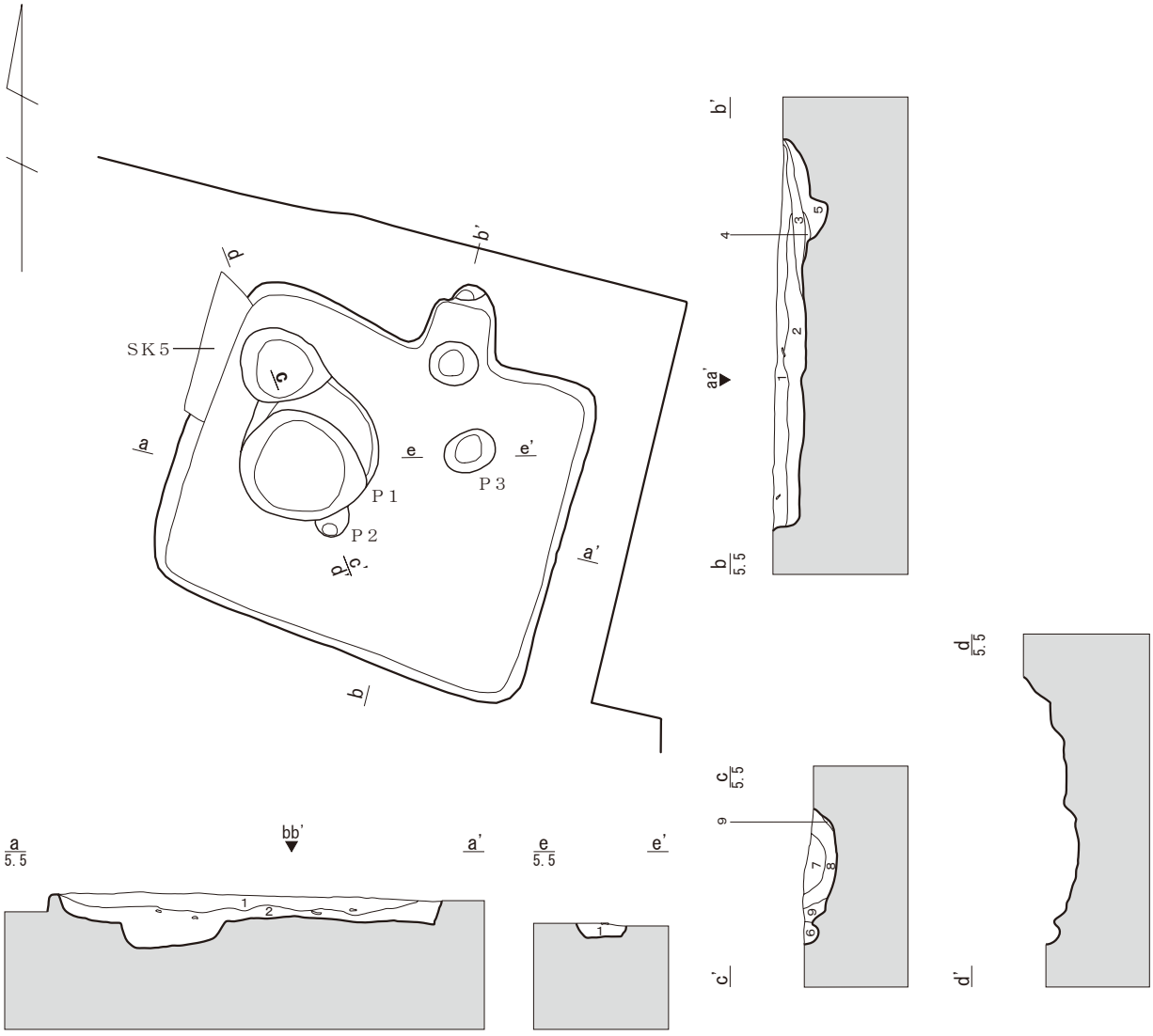
遺構名	グリッド	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	備　　考
ＳＡ１－Ｐ１	Ｂ－４	0.35	0.33	0.26	
ＳＡ１－Ｐ２	Ｂ－４	0.29	0.25	0.12	
ＳＡ１－Ｐ３	Ｂ－４	0.45	0.43	0.20	
ＳＡ１－Ｐ４	Ｂ－４	0.35	0.33	0.15	
ＳＡ２－Ｐ１	Ａ－３・４	0.59	0.41	0.23	土師器小破片が出土
ＳＡ２－Ｐ２	Ａ－３	0.22	0.21	0.14	土師器小破片が出土
ＳＡ２－Ｐ３	Ｂ－３	0.35	0.26	0.30	
ＳＡ２－Ｐ４	Ｂ－３	0.30	0.25	0.30	土師器小破片が出土
ＳＡ２－Ｐ５	Ｂ－３	0.34	0.33	0.37	土師器小破片が出土
ＳＡ３－Ｐ１	Ａ－２	0.34	0.31	0.17	
ＳＡ３－Ｐ２	Ｂ－２	0.34	0.27	0.20	
ＳＡ３－Ｐ３	Ｂ－２	0.31	0.31	0.14	
ＳＡ３－Ｐ４	Ｂ－２	0.29	0.26	0.10	
ＳＡ４－Ｐ１	Ａ－２	0.15	0.15	0.05	
ＳＡ４－Ｐ２	Ｂ－２	0.21	0.16	0.08	
ＳＡ４－Ｐ３	Ｂ－２	0.22	0.20	0.10	
ＳＡ５－Ｐ１	Ｃ－４	0.20	0.20	0.17	
ＳＡ５－Ｐ２	Ｄ－４	0.24	0.24	0.10	
ＳＡ５－Ｐ３	Ｄ－４	0.35	0.32	0.17	土師器小破片が出土
ＳＡ５－Ｐ４	Ｄ－４	0.40	0.39	0.23	土師器小破片が出土

第13表　ピット一覧表（大道第２遺跡）

遺構名	グリッド	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	備　　考
Ｐ１	Ｄ－２	0.73	0.70	0.43	土師器小破片が出土
Ｐ２	Ｂ－３	0.46	0.39	0.10	
Ｐ３	Ｂ－２	0.52	0.21	0.27	土師器小破片が出土
Ｐ４	Ｂ－２	0.35	0.20	0.41	
Ｐ５	Ａ－３	0.19	0.13	0.17	
Ｐ６	Ｂ－３	0.27	0.26	0.17	
Ｐ７	Ｂ－３	0.38	0.24	0.20	
Ｐ８	Ｂ－３	0.36	0.33	0.13	土師器小破片（坏底部）が出土
Ｐ９	Ｂ－３	0.31	0.29	0.10	土師器小破片が出土
Ｐ10	Ｂ－３	0.28	0.24	0.12	土師器小破片（坏・甕）が出土
Ｐ11	Ｂ－３	0.28	0.21	0.10	



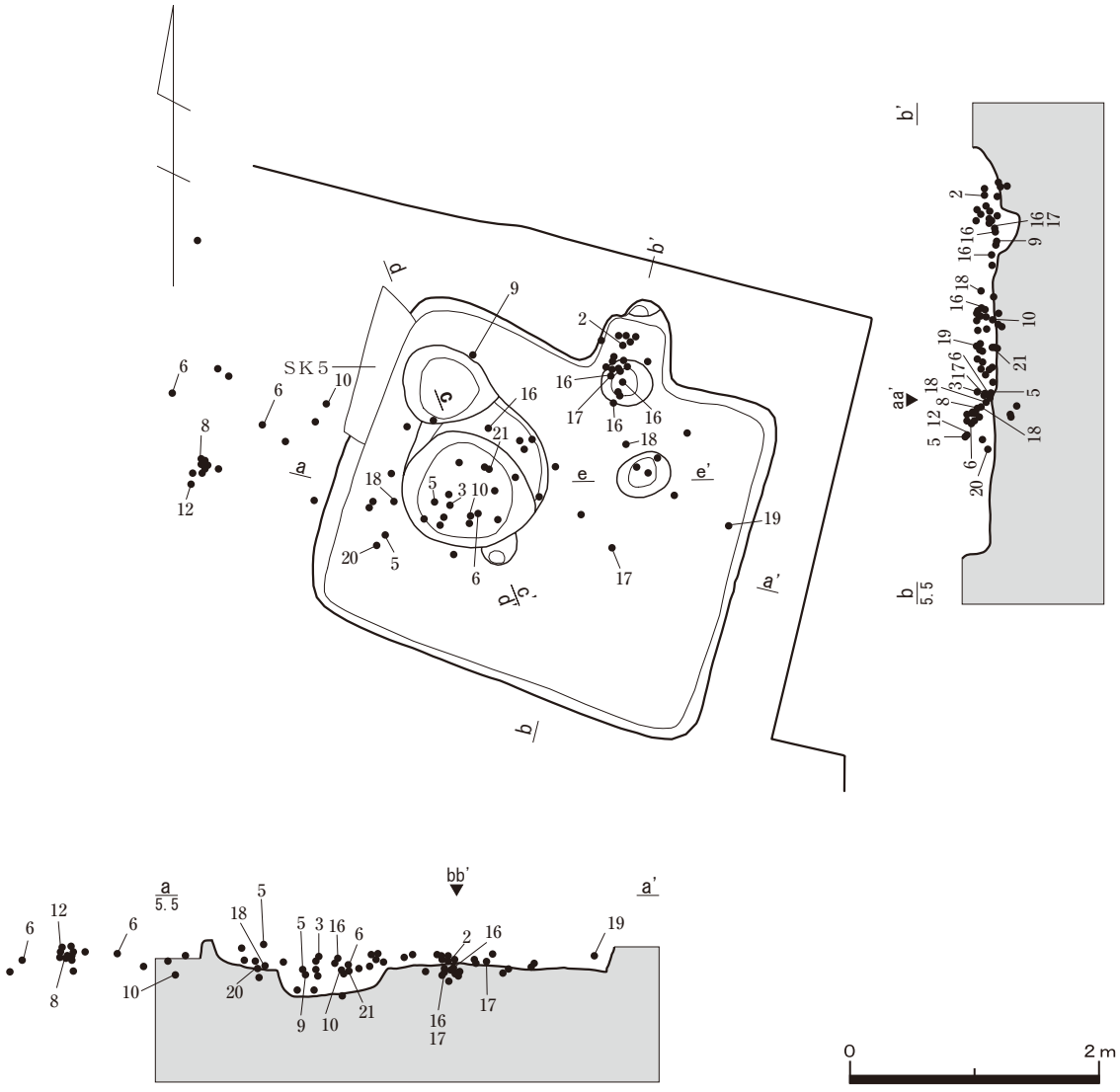
第44図　大道第２遺跡　調査区全体図



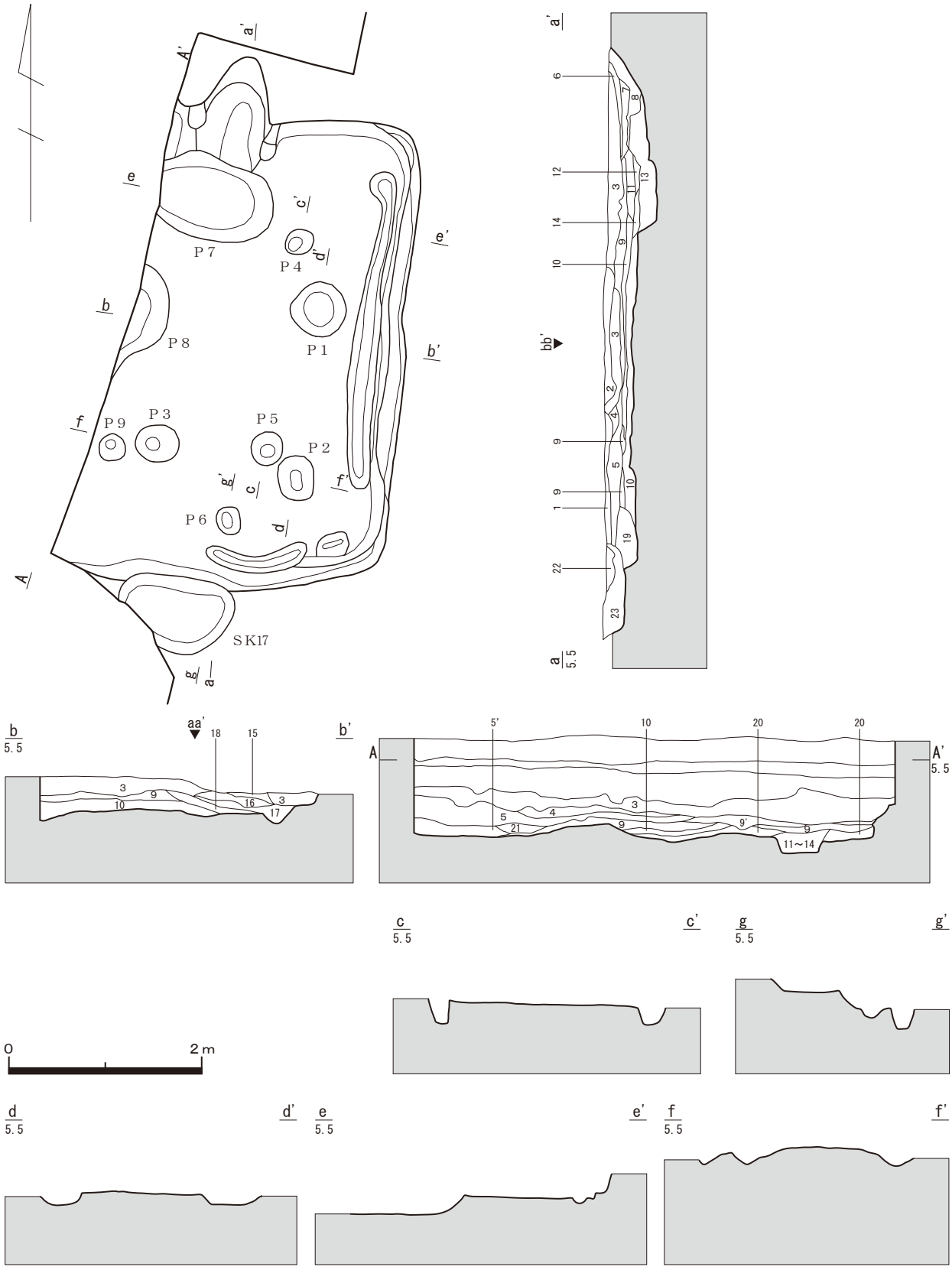
1　灰色土　　鉄分・φ1～2mm白色粒子を多量に含み、φ3～5ｍｍ焼土粒子・φ10ｍｍ炭化物を少量含む　しまり強い、粘性あり
2　灰色土　　1層よりも鉄分・焼土粒子・白色粒子が少なく、西側下層に灰・焼土を部分的に含む　しまり弱い、粘性あり
3　焼土　　焼土層　しまり弱い、粘性あり
4　明褐色土　火床面と思われるが明瞭な焼土面はなく、若干硬化している　しまり強い、粘性あり
5　暗褐色土　炭・灰層　しまり弱い、粘性あり
6　灰色土　　鉄分を全体に含み、φ1～3mm焼土粒子を微量含む　しまりあり、粘性あり
7　明灰色土　鉄分を全体に含み、φ1～2mm白色粒子を少量含む　しまりあり、粘性あり
8　明灰色土　1層よりも炭化物・焼土粒子を多く含む　しまりあり、粘性あり
9　明灰色土　1・2層よりも鉄分が多い　しまりあり、粘性あり

0　2m

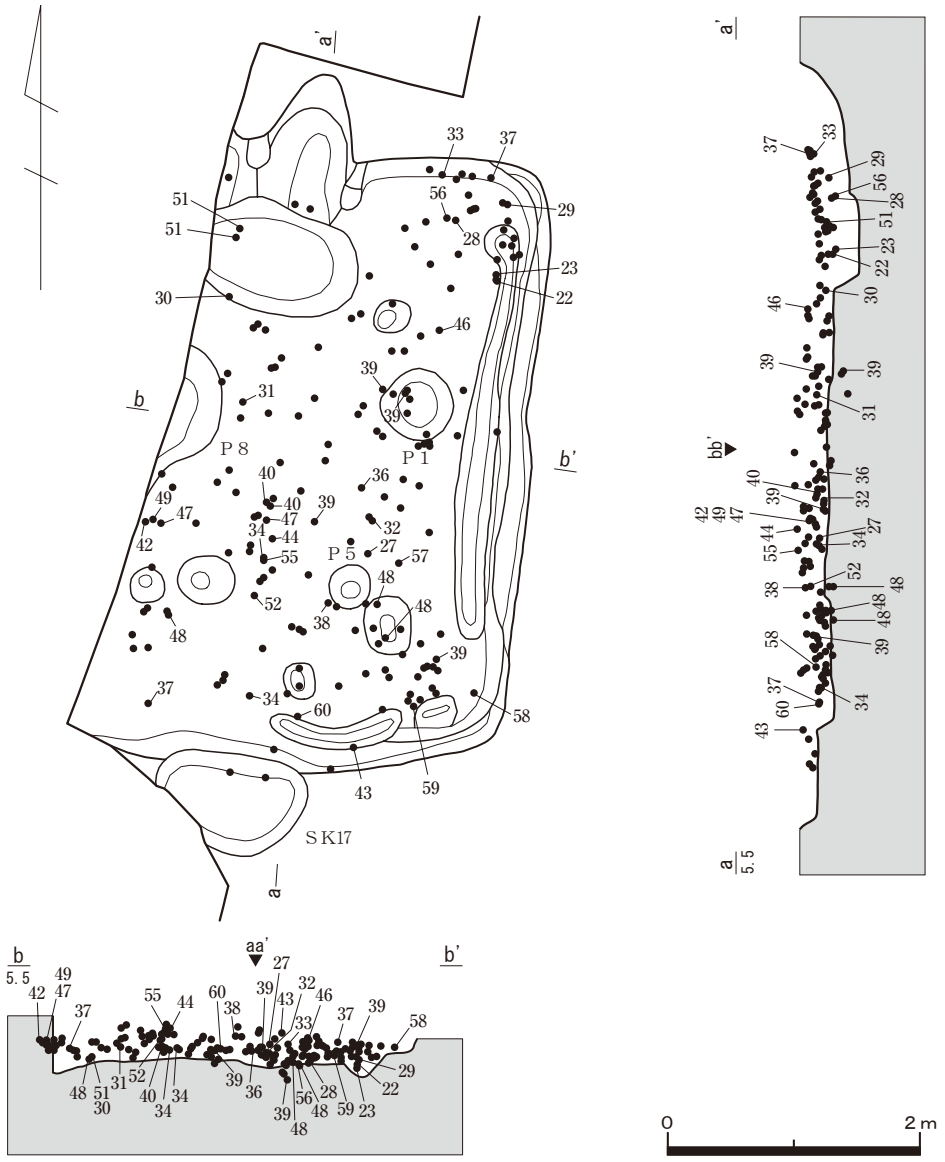
第45図　ＳＩ１　遺構実測図（S＝1/60）



第46図　ＳＩ１　遺物・個体分布図（S＝1/60）

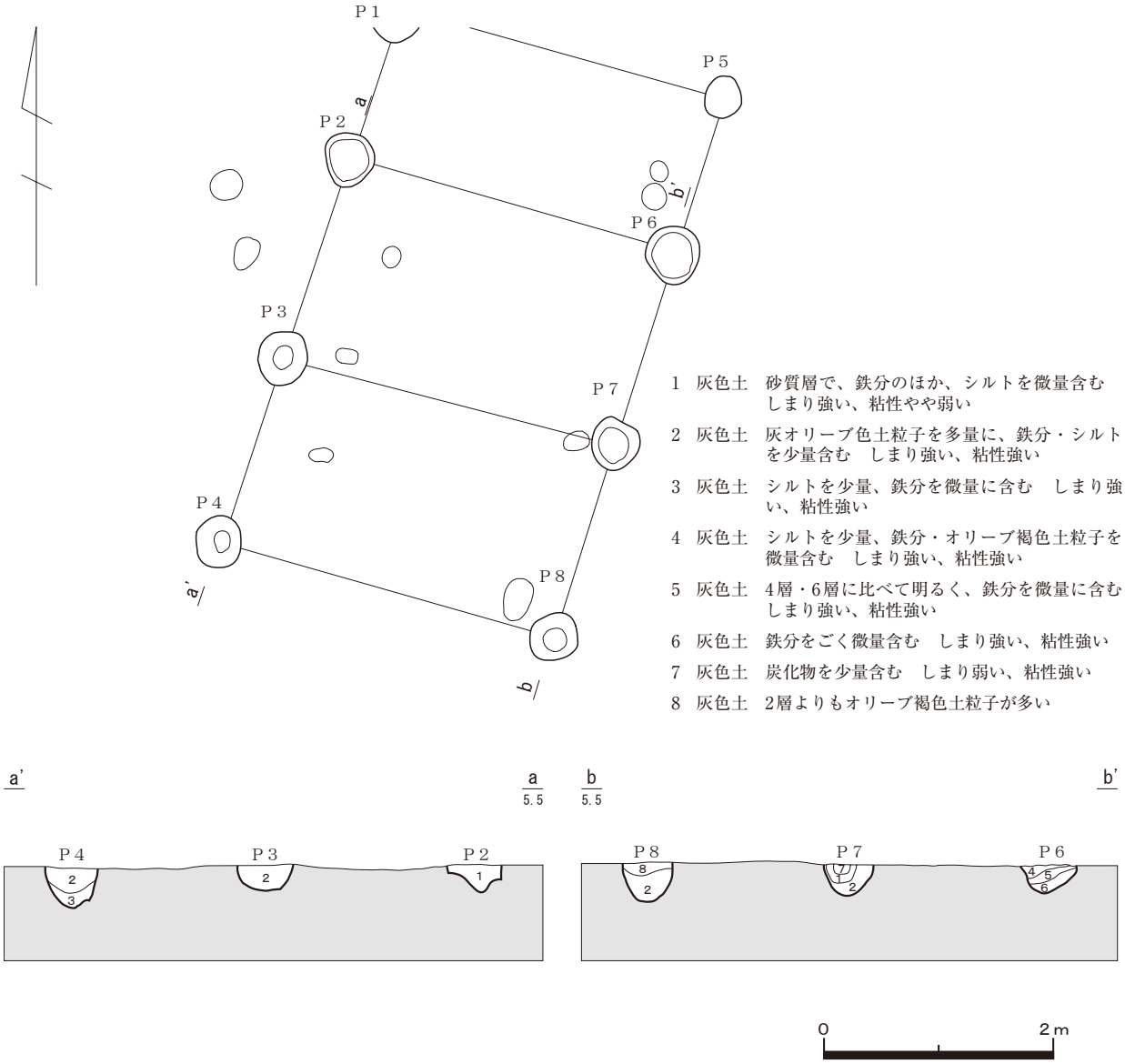


第47図　ＳＩ２・ＳＫ17　遺構実測図（S＝1/60）

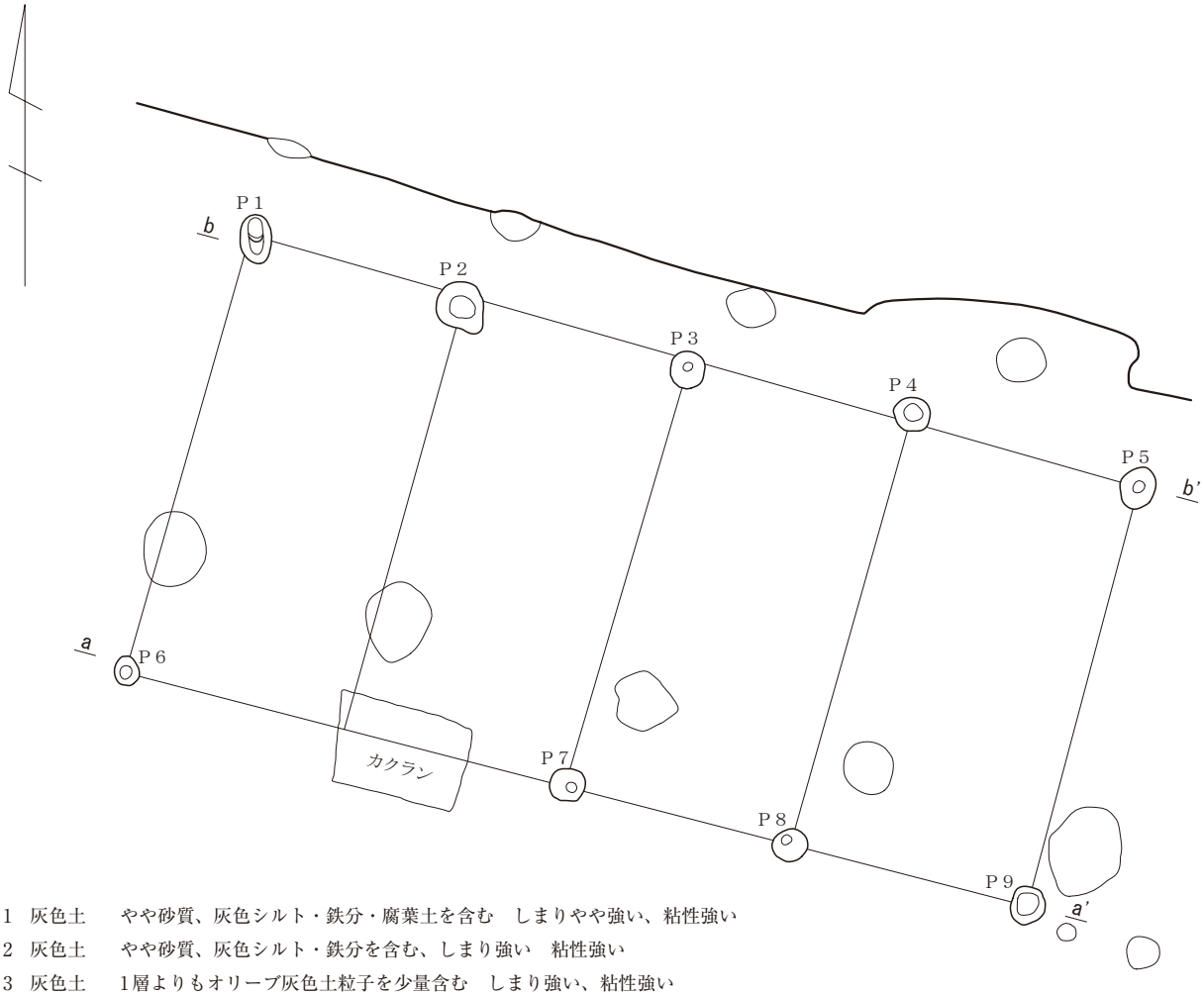


1　明褐色土　灰色シルトを全体に含み、φ1～2mm白色粒子・φ3ｍｍ褐色土粒子（地山ブロック）を多量に含む　しまりあり、粘性あり
2　赤色土　　全体にφ5mm～30mm焼土ブロックを含み、灰色シルト・灰を多量に含む　しまりあり、粘性あり
3　暗灰色土　灰色シルト・鉄分を全体に多く含み、φ1～2mm白色粒子を多量、φ3mm焼土粒子を少量含む　しまりあり、粘性あり
4　暗灰色土　φ2mm焼土粒子、φ5mm炭化物・焼土粒子を少量含む　しまりあり、粘性あり
5　暗灰色土　φ1～2mm白色粒子・鉄分を多量に含み、φ3mm焼土粒子・φ4mm炭化物を少量含む　しまりあり、粘性あり
6　暗灰色土　焼土ブロックを全体に多量に含み、炭・灰を中心とする　しまり弱い、粘性弱い
7　暗褐色土　灰色シルトを少量含み、炭・焼土が互層となる　しまりあり、粘性弱い
8　暗褐色土　7層よりも焼土ブロック多く含む　しまりあり、粘性弱い
9　明灰色土　φ5mm焼土ブロックを多量に含み、炭・焼土が互層となる　しまりあり、粘性弱い
10　明灰色土　9層よりも明灰色の砂層で、φ5mm焼土ブロックを多量に含む　しまりあり、粘性弱い
11　炭層　　焼土ブロックを多量に含む　しまりあり、粘性弱い
12　炭層　　焼土ブロック・砂層を多量に含む　しまりあり、粘性弱い
13　炭層　　焼土ブロック・砂層・炭化物を多量に含む　しまりあり、粘性弱い
14　炭層　　13層よりも褐色土粒子を多く含む　しまりあり、粘性弱い
15　暗灰色土　鉄分を多量、φ2mm焼土粒子を少量含む　しまりあり、粘性弱い
16　暗灰色土　15層よりも焼土粒子・炭化物を多く含む　しまりあり、粘性弱い
17　暗灰色土　16層よりも明褐色粒子を多く含む　しまりあり、粘性弱い
18　明褐色土　灰色シルト層を全体に含み、褐色粒子・焼土粒子を多量に含む　しまりあり、粘性弱い
19　暗灰色土　5層よりも炭化物が少量となる　しまりあり、粘性弱い
20　明灰色土　全体に灰色シルト、下層に地山ブロックを多く含み、鉄分を多量に含む　しまりあり、粘性あり
21　明灰色土　地山ブロック、焼土粒子・炭を含む　しまりあり、粘性あり
22　明褐色土　φ3mm地山ブロックを全体に多く含み、φ1～2mm白色粒子を多量に含む　しまりあり、粘性あり
23　暗灰色土　φ5mm焼土粒子を全体に多く含み、φ1～2mm白色粒子を多量、φ1～3mm炭化物粒子を少量含む　しまりあり、粘性あり

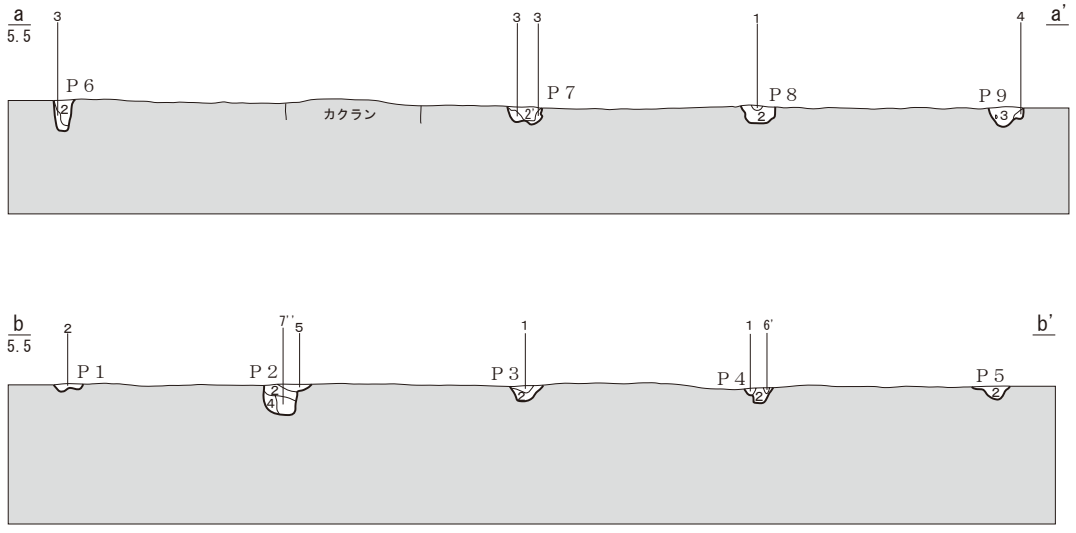
第48図　ＳＩ２・ＳＫ17　遺物・個体分布図（S＝1/60）



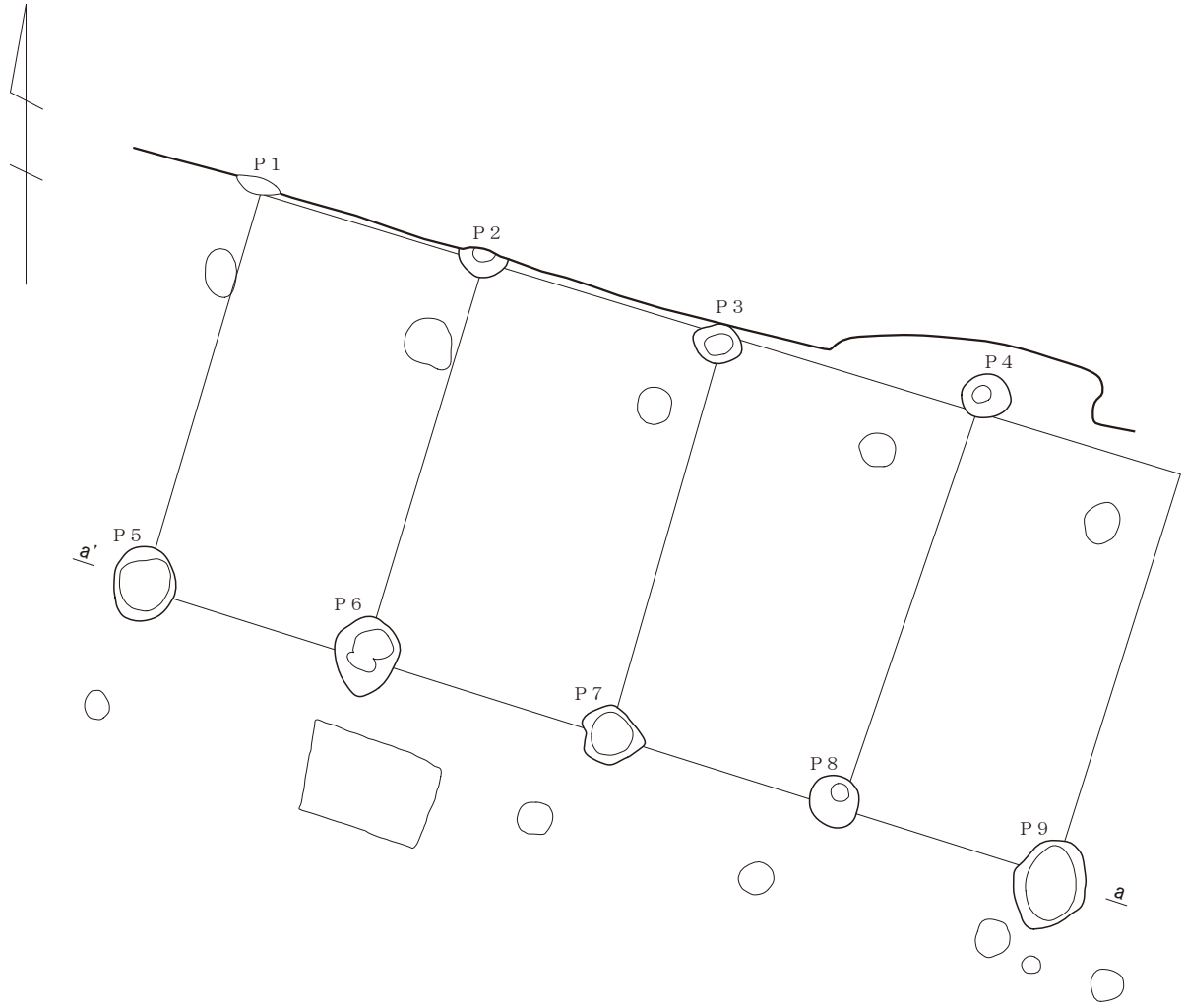
第49図　ＳＢ１　遺構実測図（S＝1/60）

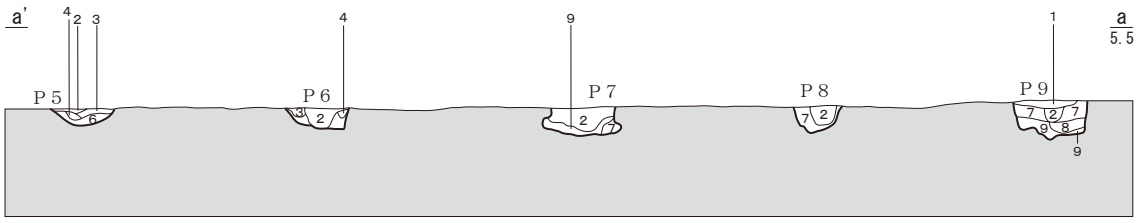


1　灰色土　　やや砂質、灰色シルト・鉄分・腐葉土を含む　しまりやや強い、粘性強い
2　灰色土　　やや砂質、灰色シルト・鉄分を含む、しまり強い　粘性強い
3　灰色土　　1層よりもオリーブ灰色土粒子を少量含む　しまり強い、粘性強い
4　灰白色土　やや砂質、灰色シルトを全体に含み、鉄分を多量に含む　しまり強い、粘性強い
5　灰色土　　鉄分・腐葉土を少量含む　しまり強い、粘性強い
6　灰色土　　腐葉土を多量、鉄分を少量含む　しまりやや強い、粘性強い
7　灰色土　　やや砂質、灰色シルトのほか、鉄分を微量含む　しまり強い、粘性強い



第50図　ＳＢ２　遺構実測図（S＝1/60）

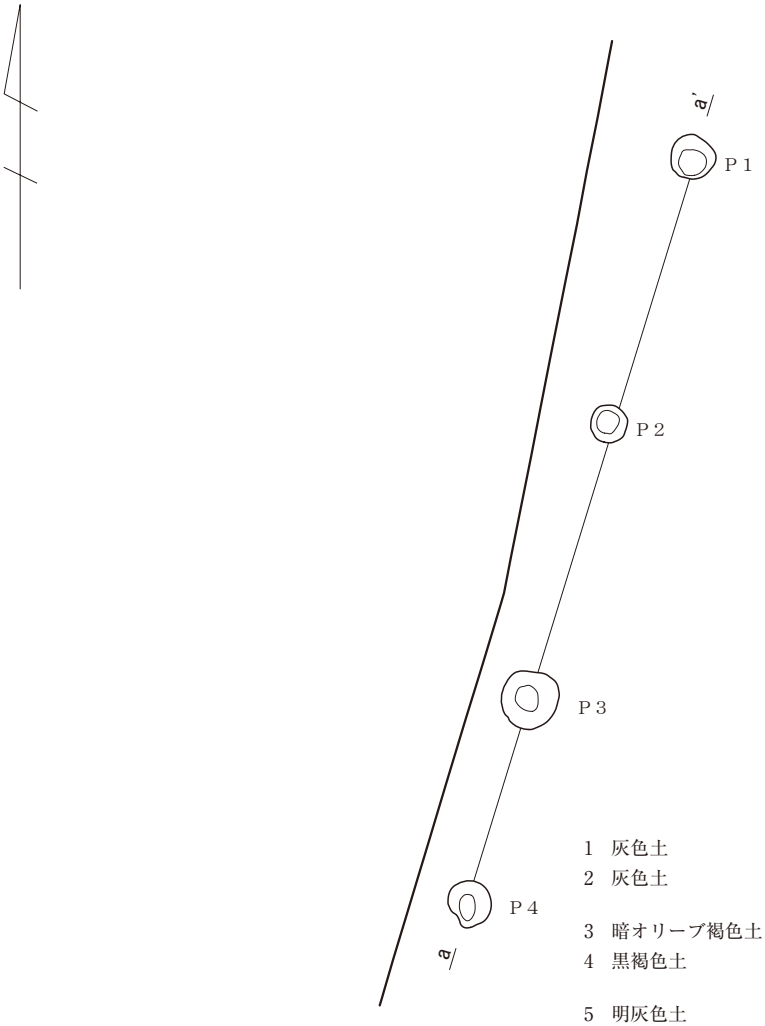




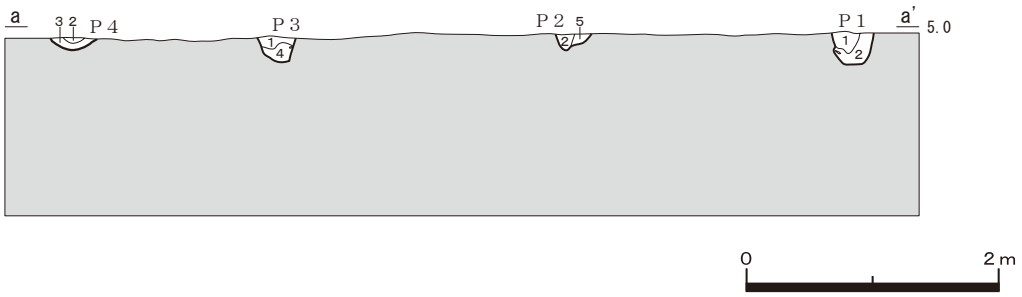
1　灰色土　　やや砂質でシルトを全体に含み、鉄分・腐葉土を含む　しまり強い、粘性強い
2　灰色土　　1層よりも、しまりやや弱い
3　灰色土　　やや砂質でシルトを全体に含み、鉄分をやや多量に含む　しまり強い、粘性強い
4　灰色土　　2層よりもφ10～20ｍｍオリーブ灰色土粒子を少量含む　しまり弱い、粘性強い
5　オリーブ黒色土　鉄分を含む　しまり非常に強い、粘性強い
6　灰白色土　　やや砂質、シルトを全体に含み、鉄分を多量に含む　しまり強い、粘性強い
7　灰色土　　オリーブ灰色砂質土を多量、鉄分を少量含む
8　灰色土　　3層よりも鉄分が少ない
9　灰色土　　8層よりも鉄分が少ない

0　2m

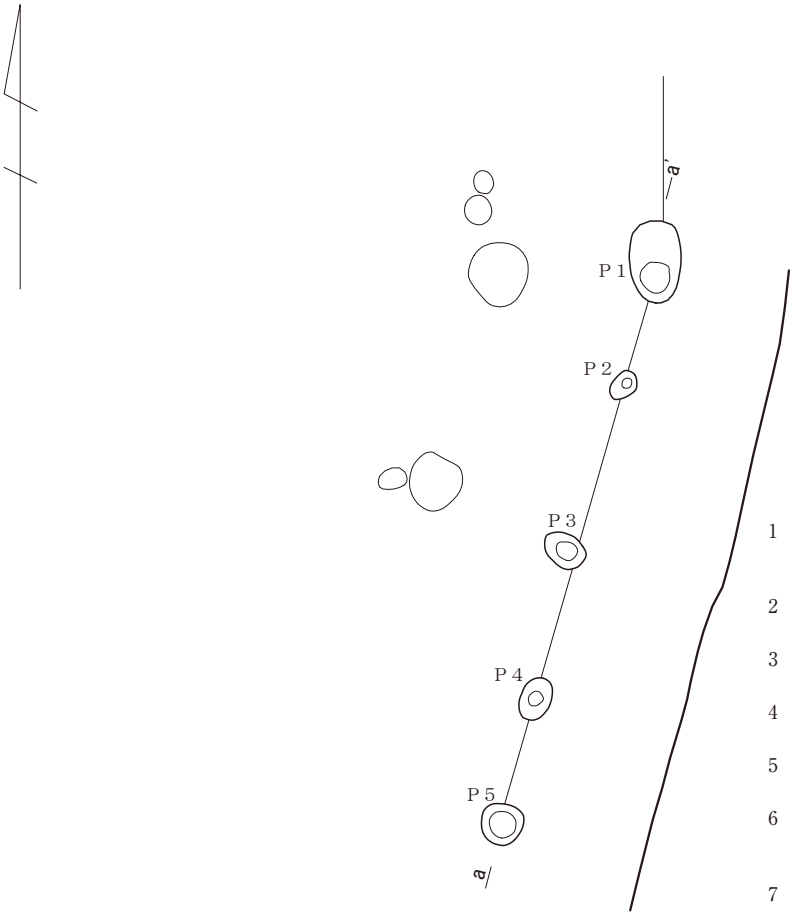
第51図　ＳＢ３　遺構実測図（S＝1/60）



1	灰色土	鉄分を含む　しまり強い、粘性やや強い
2	灰色土	鉄分を微量、炭化物をごく微量含む　しまり強い、粘性弱い
3	暗オリーブ褐色土	砂質層で、鉄分を含む　しまり強い　粘性やや弱い
4	黒褐色土	鉄分を多量、炭化物をごく微量含む　しまり非常に強い、粘性強い
5	明灰色土	鉄分を微量、炭化物をごく微量含む　しまり強い、粘性弱い



第52図　ＳＡ１　遺構実測図（S＝1/60）



1　灰オリーブ色土　鉄分を少量、炭化物、焼土粒子を微量含む　しまり強い、粘性強い

2　灰オリーブ色土　鉄分を少量含む　しまり強い、粘性強い

3　灰オリーブ色土　鉄分を少量、炭化物をごく微量含む　しまり強い、粘性強い

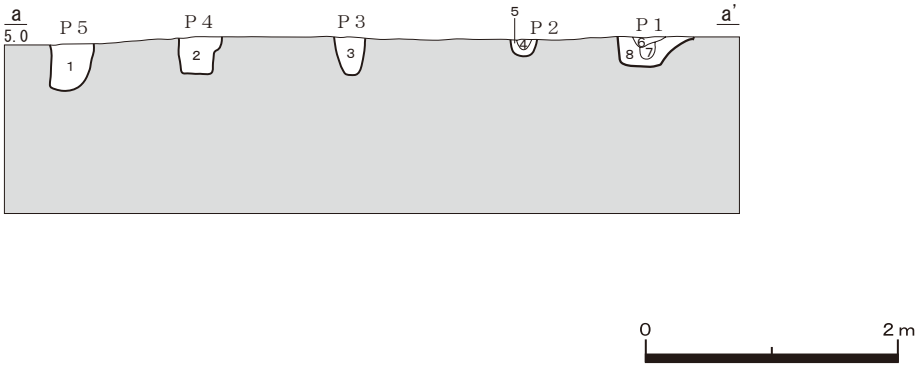
4　灰オリーブ色土　鉄分を多く含む　しまり強い、粘性強い

5　灰オリーブ色土　4層より暗い色調、鉄分を少量、炭化物・焼土粒子を微量含む

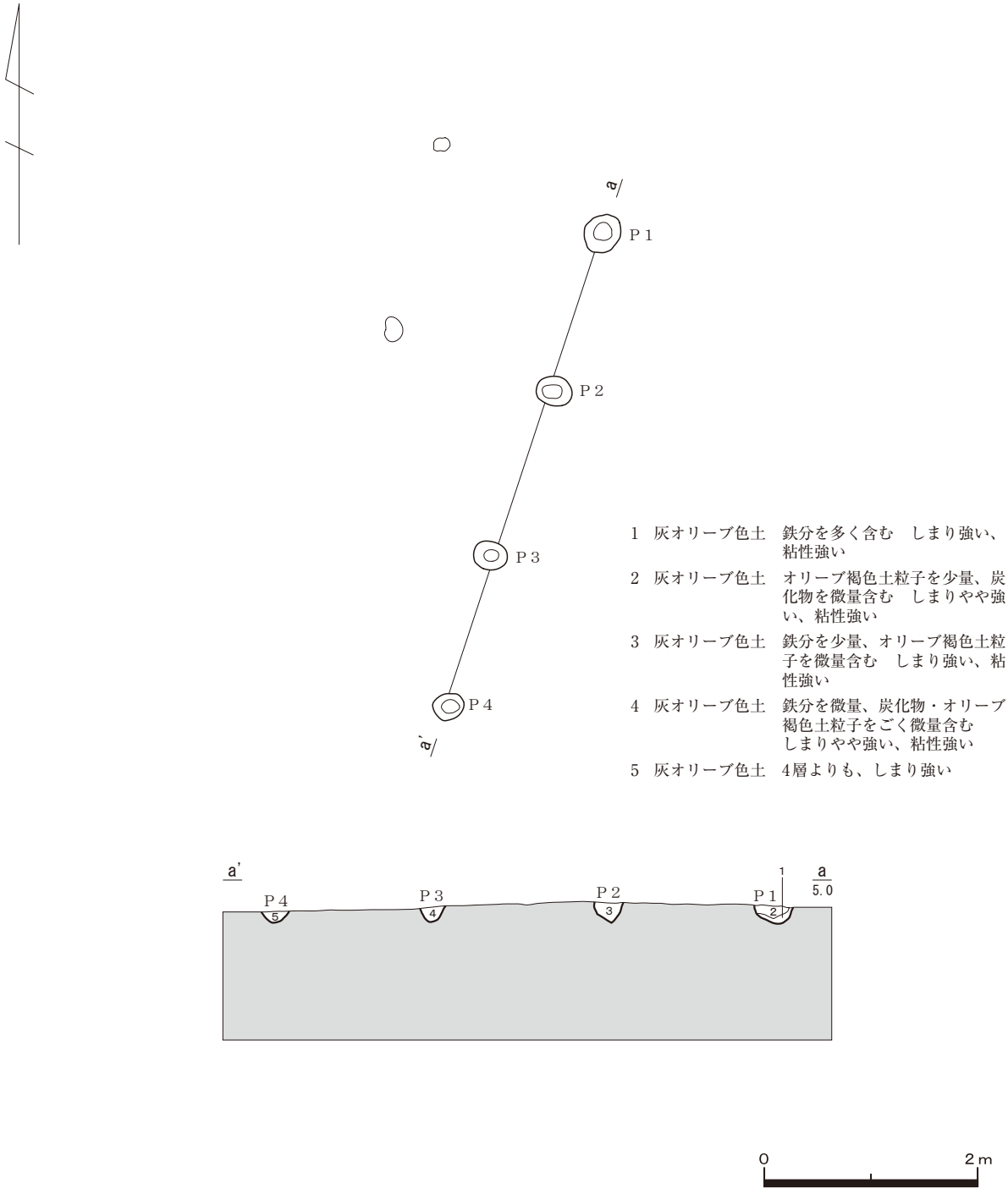
6　灰オリーブ色土　オリーブ褐色土粒子を多量、鉄分を微量に含む　しまり強い、粘性強い

7　灰オリーブ色土　鉄分を多量に含む　しまり強い、粘性強い

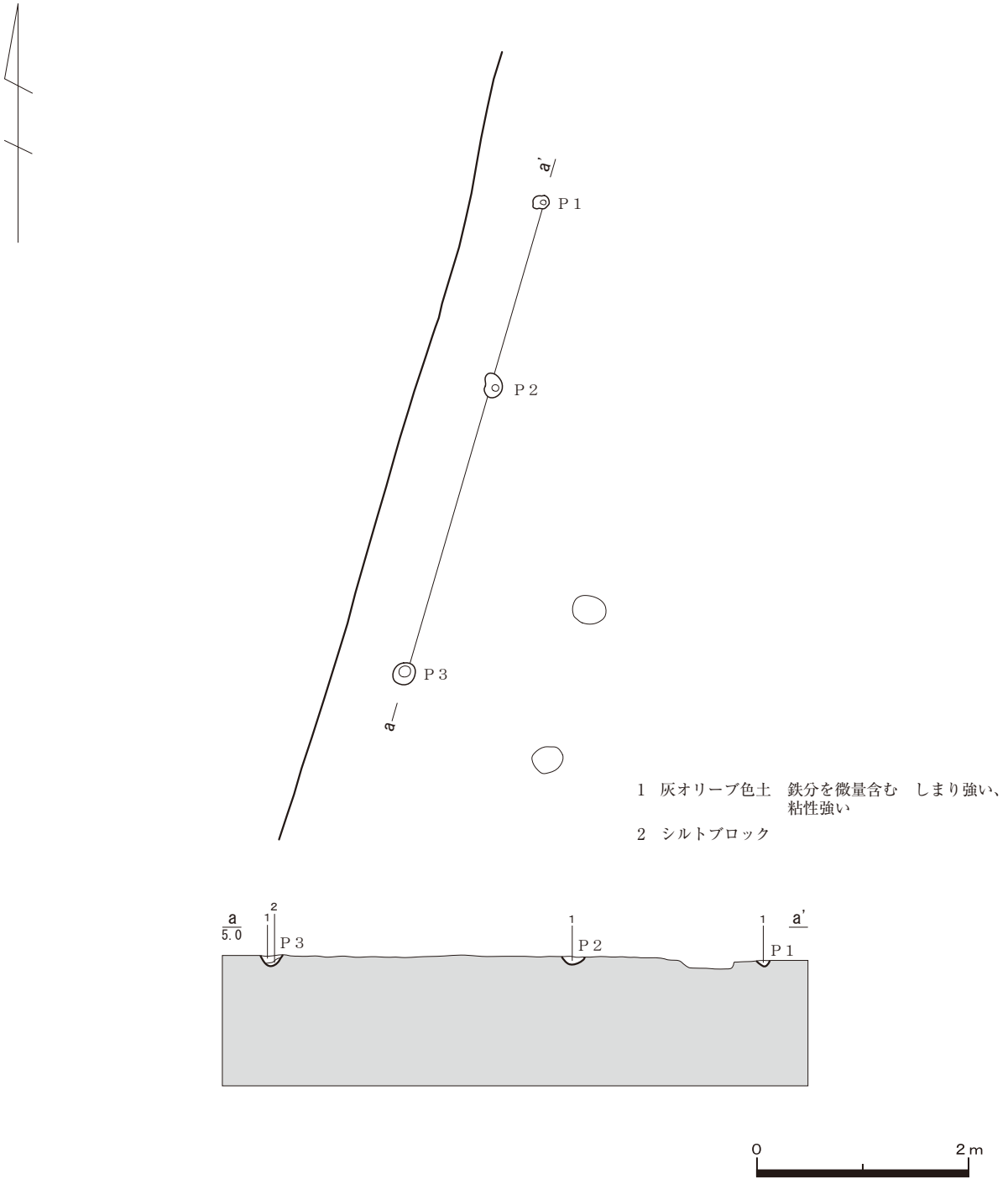
8　灰オリーブ色土　シルトを多量、鉄分を微量含むしまり強い、粘性強い



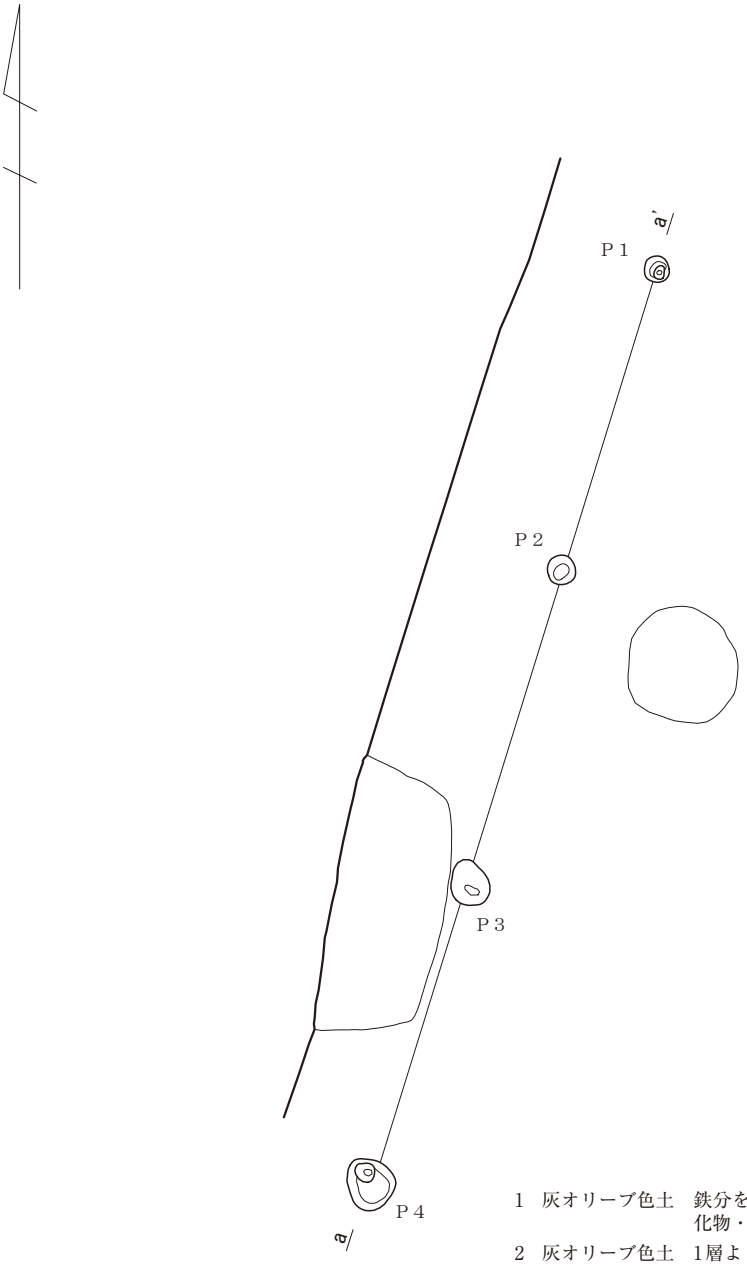
第53図　ＳＡ２　遺構実測図（S＝1/60）



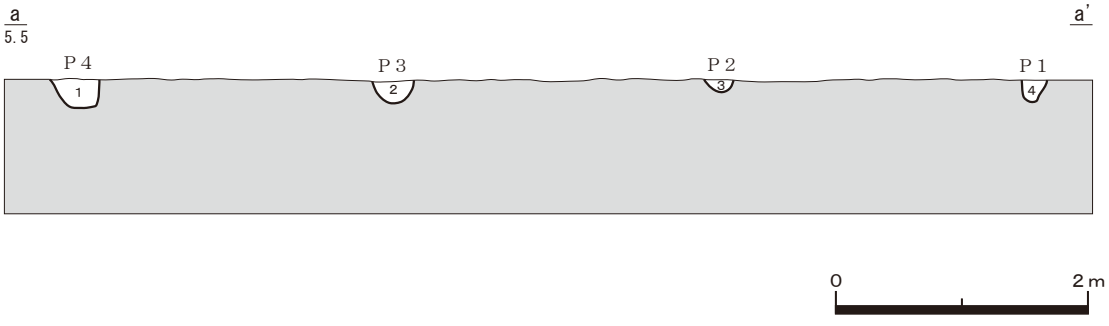
第54図　ＳＡ３　遺構実測図（S＝1/60）



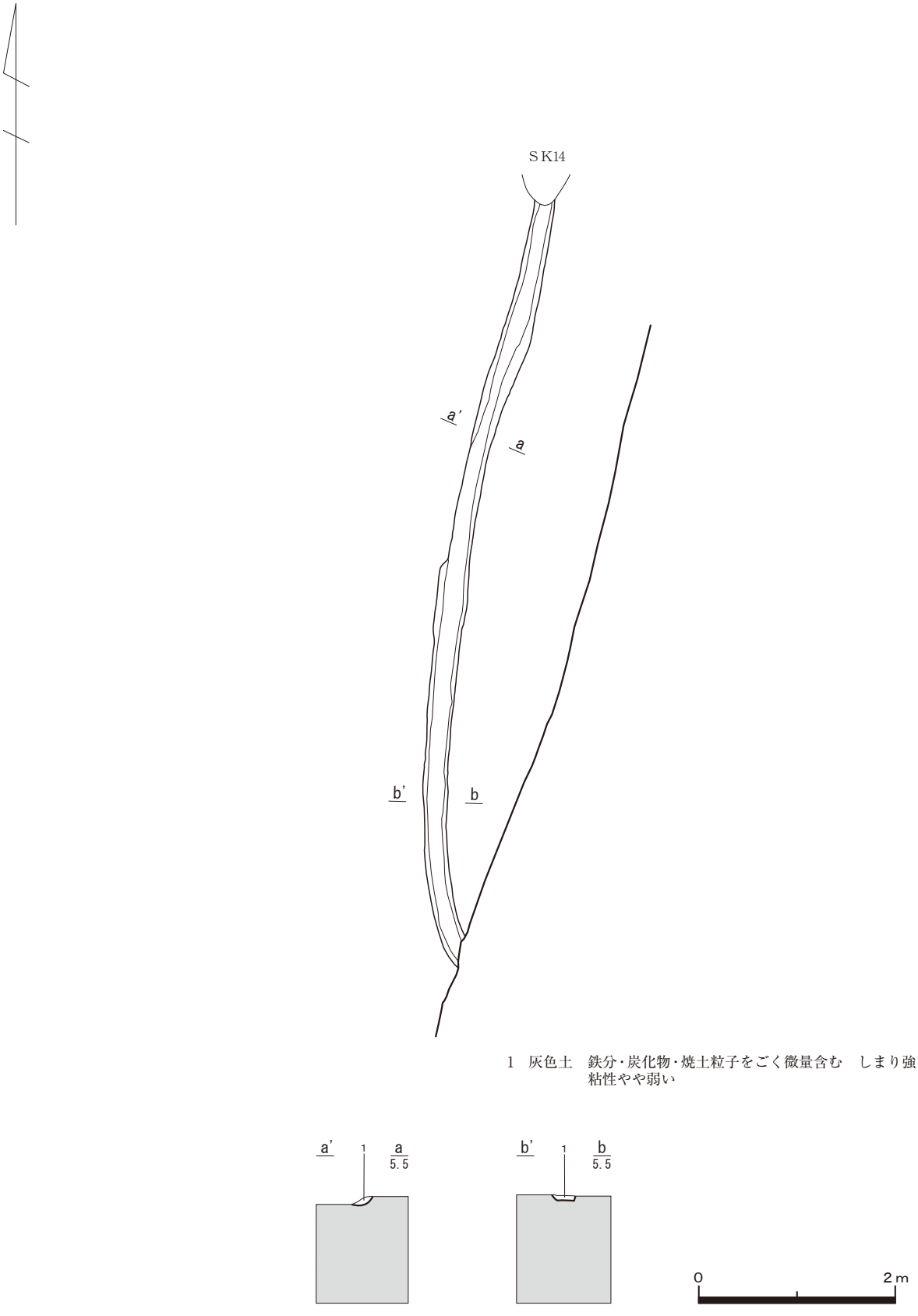
第55図　ＳＡ４　遺構実測図（S＝1/60）



1　灰オリーブ色土　鉄分をやや多量、φ5～20mmシルトブロックを少量、炭化物・焼土粒子を微量含む　しまり強い、粘性強い
2　灰オリーブ色土　1層よりも焼土粒子をやや多く含む
3　灰オリーブ色土　1・2層に似るが焼土を含まない
4　灰オリーブ色土　鉄分･焼土粒子･φ5mm炭化物を微量に含む　しまり強い、粘性強い

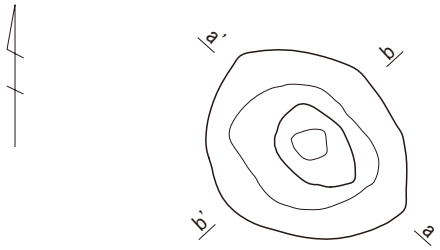


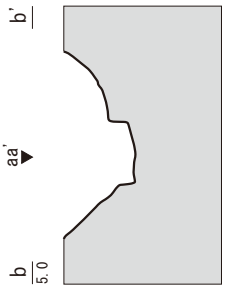
第56図　ＳＡ５　遺構実測図（S＝1/60）

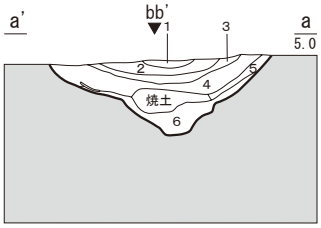


第57図　ＳＤ１　遺構実測図（S＝1/60）

ＳＫ１

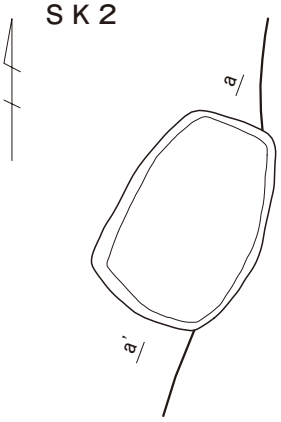




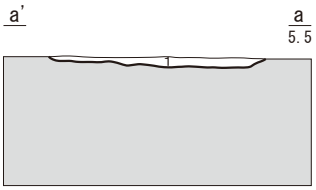


1　灰色土　　鉄分を多量に含む　しまりあり、粘性やや強い
2　灰色土　　鉄分を多量に含む　しまりあり、粘性強い
3　炭層　　炭化物・灰色土粒子を含む　しまりあり、粘性あり
4　灰色土　　鉄分を多量に含み、5層との境界が焼土化　しまりあり、粘性強い
5　炭層　　炭化物のほか、部分的に地山ブロックを含む　しまりあり、粘性あり
6　明褐色土　地山ブロックを含む　しまりあり、粘性あり

ＳＫ２



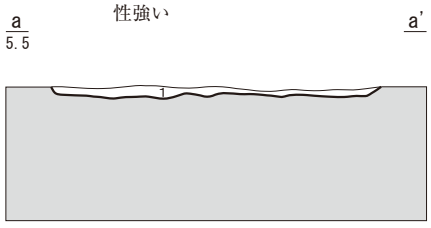
1　灰色土　　φ2mm鉄分を多量、φ2mm炭化物を少量含む　しまり強い、粘性強い



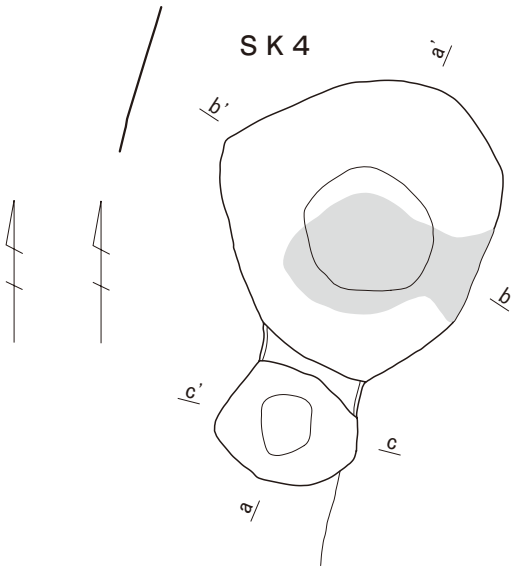
0　2m

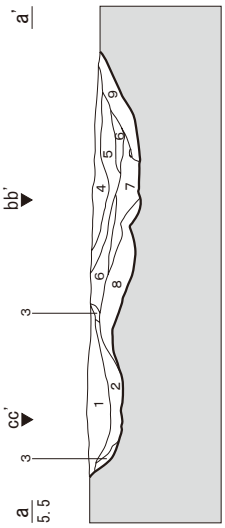
ＳＫ３

1　灰色土　　灰色土粒子・φ2mm鉄分を多量、炭化物を微量含む　しまり強い、粘性強い

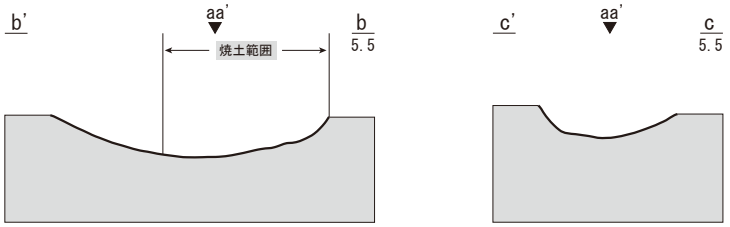


ＳＫ４



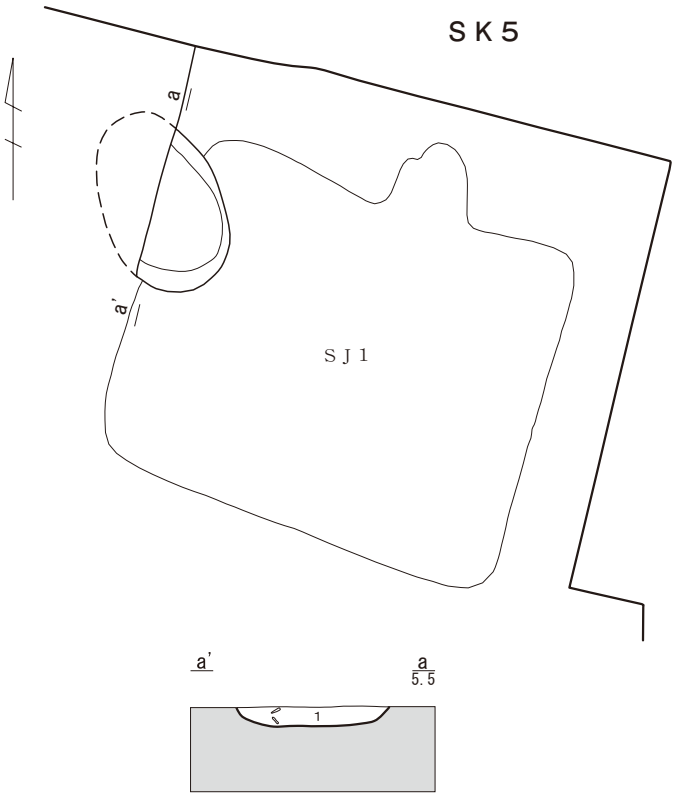


1　灰色土　　φ1mm白色粒子・φ2～3mm鉄分を多量、φ2～3mm炭化物・φ4mm焼土粒子を少量含む　しまりあり、粘性あり
2　炭層　　薄茶色の灰を多量、φ3mm焼土粒子を少量含む　しまりあり、粘性あり
3　灰色土　　1層よりも地山ブロックを多く含む　しまり弱い、粘性あり
4　暗灰色土　　白色粒子を多量、φ2～5mm炭化物・φ2～4mm焼土粒子を少量、部分的に灰を含む　しまりあり、粘性あり
5　炭層　　薄茶色の灰を多量、φ3mm焼土粒子を少量含む　しまり弱い、粘性あり
6　炭層　　5層よりも灰を多く含む　しまり弱い、粘性あり
7　炭層　　炭化物を多量に含み、薄茶色の灰・炭が互層となる　しまり弱い、粘性あり
8　暗褐色土　　地山ブロック・φ1～2mm白色粒子を多量、φ2mm焼土粒子を少量含む　しまりあり、粘性あり
9　炭層　　φ2～5mm焼土粒子を含む　しまりあり、粘性あり



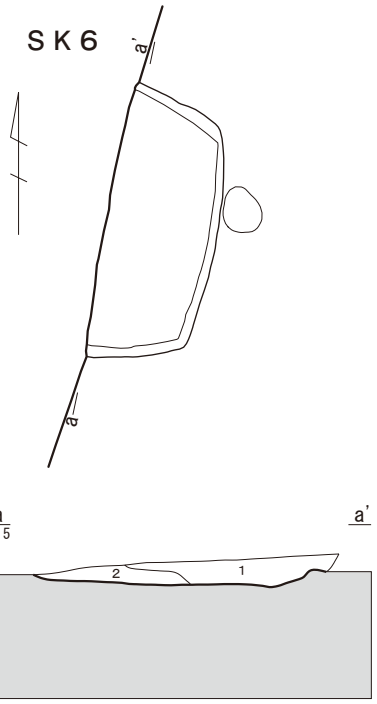
第58図　ＳＫ１～ＳＫ４　遺構実測図（S＝1/60）

ＳＫ５



1　灰色土　φ2mm鉄分を多量、暗褐色度粒子をやや多量、φ1～2mm炭化物を少量含む　しまり強い、粘性強い

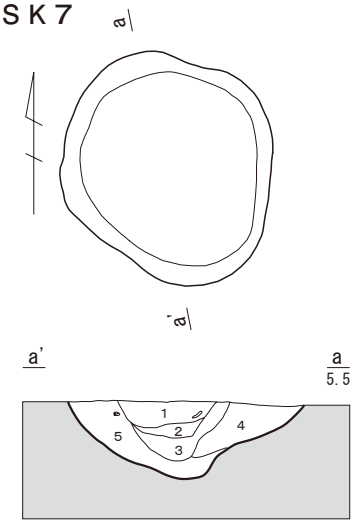
ＳＫ６



1　灰色土　φ1～5mm炭化物をやや多量、φ1～2mm鉄分を少量、褐色土粒子を微量含む　しまり強い、粘性やや弱い

2　灰色土　1層よりも明るい色調で、鉄分を多量、φ1～2mm炭化物を微量に含む　しまり強い、粘性やや強い

ＳＫ７



1　灰色土　φ5mm鉄分・φ2mm白色粒子を多量、φ2mm焼土粒子を少量含む　しまりあり、粘性あり

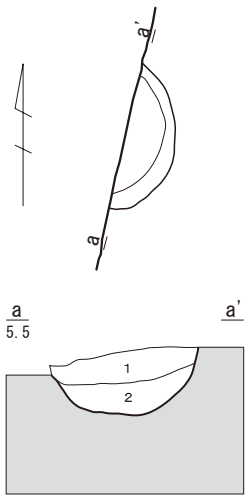
2　黒色土　φ2mm焼土粒子・φ2mm薄茶色の灰粒子を少量含む　しまりあり、粘性あり

3　灰色土　1層に似るがφ5mm炭化物を微量含む　しまりあり、粘性あり

4　灰色土　鉄分を全体に多く含む　しまりあり、粘性あり

5　灰色土　1層に似るがφ5mm炭化物を少量含む　しまりあり、粘性あり

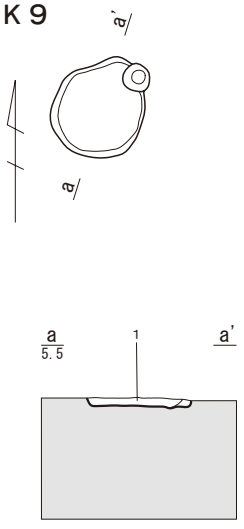
ＳＫ８



1　暗オリーブ色土　鉄分を少量、灰白色土粒子・炭化物を微量含む　しまり強い、粘性やや弱い

2　灰色土　鉄分やや多量、灰白色土粒子・炭化物を微量に含む　しまり強い、粘性強い

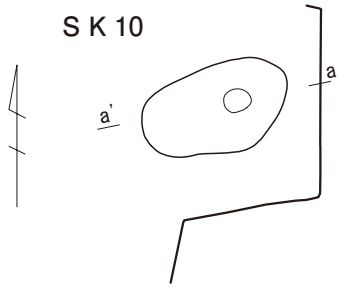
ＳＫ９



1　灰色土　鉄分やや多量、灰白色土・炭化物を微量含む　しまり強い、粘性やや弱い

第59図　ＳＫ５～ＳＫ９　遺構実測図（S＝1/60）

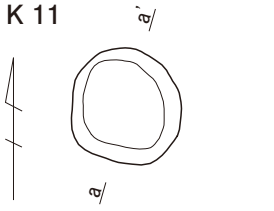
ＳＫ10



1　灰色土　φ10mm炭化物やや多量、鉄分を少量、焼土粒子を微量含む　しまり強い、粘性やや弱い

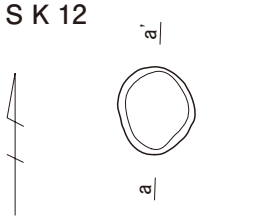
2　灰色土　鉄分やや多量、炭化物を微量含む　しまり強い、粘性やや弱い

ＳＫ11



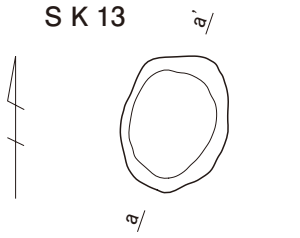
1　灰色土　鉄分やや多量、灰白色土粒子・炭化物を微量含む　しまり強い、粘性やや弱い

ＳＫ12



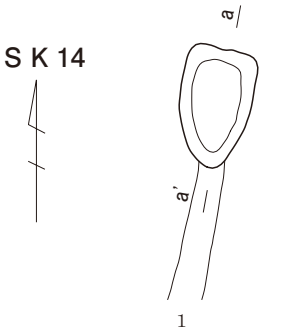
1　灰色土　鉄分やや多量、灰白色土粒子・炭化物・焼土粒子を微量含む　しまり強い、粘性やや弱い

ＳＫ13



1　灰色土　φ2mm鉄分を全体に含む　しまりあり、粘性あり

ＳＫ14

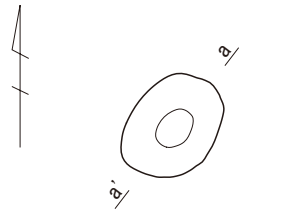


1　灰色土　鉄分・炭化物を微量含む　しまり強い、粘性強い

2　炭層　灰白色土粒子・φ5mm炭化物・焼土粒子を微量含む　しまりやや強い、粘性強い

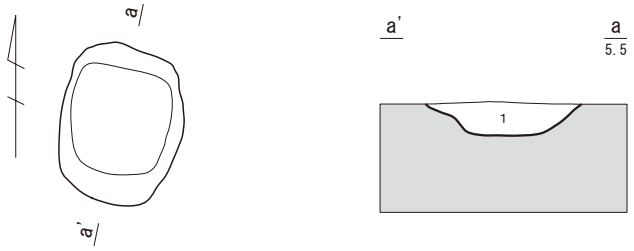
3　褐色土　灰白色土粒子・炭化物を少量、鉄分・焼土粒子を微量含む　しまり強い、粘性強い

ＳＫ15



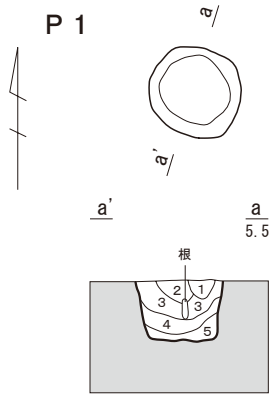
1　灰層　鉄分をやや多量、白色土粒子・炭化物を微量含む　しまり強い、粘性やや弱い

ＳＫ16

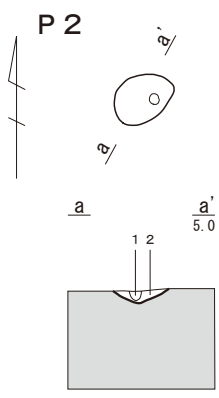


1　灰層　鉄分を多量、焼土粒子を微量含む　しまり強い、粘性やや強い

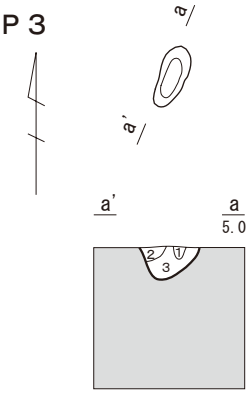
第60図　ＳＫ10～ＳＫ16　遺構実測図（S＝1/60）



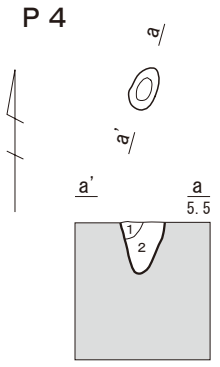
1　灰オリーブ色土　鉄分・φ5～20mmシルトブロックを少量含む　しまり強い、粘性やや強い
2　オリーブ黒色土　鉄分・φ5～20mmシルトブロックを微量含む　しまり強い、粘性強い
3　オリーブ黒色土　φ5～20mmシルトブロック少量、鉄分を微量含む　しまり強い、粘性強い
4　オリーブ黒色土　φ5～20mmシルトブロック少量、鉄分を微量含む　しまり強い、粘性強い
5　灰オリーブ色土　鉄分・φ5～20mmシルトブロックを少量含む　しまり強い、粘性強い



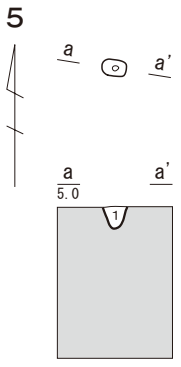
1　炭層　シルトやや多量、鉄分・焼土粒子を微量含む　しまり強い、粘性やや弱い
2　灰色土　鉄分・φ10～20mmシルトブロック少量、炭化物を微量含む



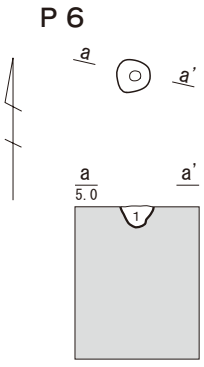
1　酸化鉄層　白色土粒子を微量含む　しまり非常に強い、粘性弱い
2　暗オリーブ褐色土　灰色土粒子を少量、鉄分・炭化物・焼土粒子を微量含む　しまり強い、粘性強い
3　暗オリーブ褐色土　鉄分を多量、炭化物を微量含む　しまり強い、粘性強い



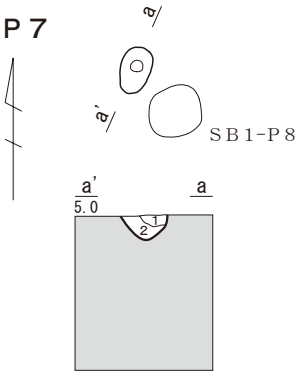
1　暗オリーブ褐色土　鉄分・灰色土粒子・炭化物・焼土粒子を微量含む　しまりやや弱い、粘性強い
2　灰色土　多量の炭化物・焼土粒子が斑状に混じる　しまりやや弱い、粘性強い



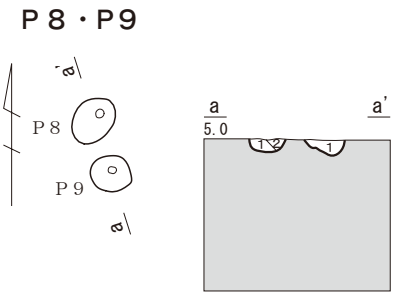
1　灰オリーブ色土　鉄分・φ5mmシルトブロック少量含む　しまり強い、粘性強い



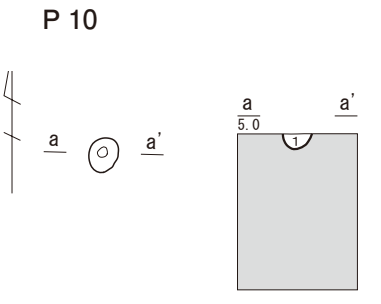
1　灰オリーブ色土　鉄分・φ5mmシルトブロック少量含む　しまり強い、粘性強い



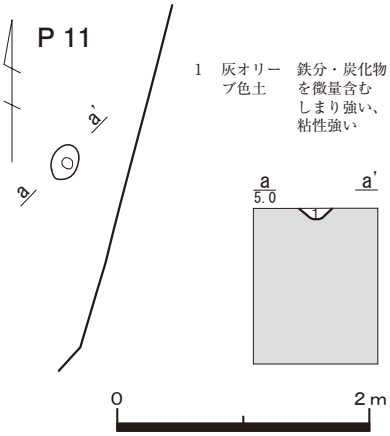
1　灰オリーブ色土　鉄分・φ5～20mmシルトブロック少量含む　しまり強い、粘性強い
2　酸化鉄層　白色土粒子・炭化物を微量含む　しまり非常に強い、粘性弱い



1　灰オリーブ色土　鉄分・φ5～20ｍｍシルトブロック少量含む　しまり強い、粘性強い
2　灰オリーブ色土　鉄分・炭化物を微量含む　しまり強い、粘性強い



1　灰オリーブ色土　鉄分・炭化物を微量含む　しまり強い、粘性強い



1　灰オリーブ色土　鉄分・炭化物を微量含む　しまり強い、粘性強い

第61図　P１～P１１　遺構実測図（S＝1/60）

（2）遺物

（ⅰ）住居跡

第１号住居跡（第62～63図）

土師器14点、須恵器４点、鉄製品３点を復元・図化した。１～４、７～９はロクロ土師器坏、５～６はロクロ土師器高台付坏である。10は屈曲のゆるい「コ」の字状口縁を呈する武蔵型甕。11・12は土師器甕底部、13は土師器台付甕である。14は横位のカキ目痕を外面に残し、形態から土師器瓶と思われる。15～18は須恵器甕で、15・18は常総産、16・17は新治産と考えられる。19～21は鉄釘。また、掲載資料のほか、須恵器坏・大甕が出土しているが、いずれも小破片である。

第２号住居跡（第64～66図）

土師器20点、須恵器11点、灰釉陶器２点、鉄製品５点を復元・図化した。22～34はロクロ土師器坏で、25は焼成後の研磨痕を内面に残し、28は底部全面にヘラケズリを施す。35は土師器甕で、口縁部を強くヨコナデし、くの字状に屈曲する。36は「コ」の字状口縁を呈する武蔵型甕。37～38は小型の土師器甕で、口頸部の内外面に明瞭な輪積痕を残す。39～41は土師器甕底部、42は土師器台付甕の台部。43～45は須恵器坏で、43～44は常総産、45は南比企産と考えられる。46は須恵器高台付坏で、新治産と考えられ、焼成後の研磨痕が内面にみられる。47～53は須恵器甕で、47・50・52は常総産、48～49、51は南比企産、53は下総産と考えられる。このうち48・51は破断面などに二次的研磨痕がみられ、転用品と考えられる。54・55は灰釉陶器坏である。56～57は鉄釘、58～59は鉄製くさび、60は鉄製刀子。また、掲載資料のほか、須恵器坏・大甕が出土しているが、いずれも小破片である。

（ⅱ）土坑

第１号土坑（第67図）

土師器11点、須恵器１点、鉄製品１点を復元・図化した。61～64はロクロ土師器坏で、64は内面黒色処理を施す。65～71はロクロ土師器高台付坏で、67～69は内面黒色処理を施す。72は須恵器甕。73は鉄釘。

第４号土坑（第67～68図）

土師器21点、須恵器７点、鉄製品２点を復元・図化した。74～78、80～84はロクロ土師器坏で、77は内面に焼成後研磨痕を残す。79、85～87、89、91～93はロクロ土師器高台付坏。79は内面に黒色処理および斜格子状の暗文を施す。85、87～89、92は内面黒色処理。88、90は土師器高台付坏で、どちらも内面黒色処理。94は土師器甕で、口縁部がゆるい「く」の字状を呈するため、台付甕であろう。95～96は須恵器高台付坏で、どちらも東海産と考えられる。97～99は須恵器甕。100～101は同一個体の須恵器で、瓶あるいは甕であろう。どちらも破断面に二次的な研磨痕があり、転用品とみられる。102は鉄滓、103は鉄製刀子。また、掲載資料のほかに、鉄滓が２点出土している。

第６号土坑（第68図）

鉄釘１点（104）が出土した。

第７号土坑（第69図）

土師器５点、緑釉陶器１点、鉄製品１点を復元・図化した。

105～108はロクロ土師器坏で、107は内面に二次的な研磨痕がみられる。109はロクロ土師器高台付坏。110は緑釉陶器坏。111は鉄針。掲載資料のほか、復元に至らないが土師器甕胴部の小破片が出土した。

第10号土坑（第69図）

須恵器１点、土製品１点、鉄製品１点を復元・図化した。112は須恵器甕。113は鉄滓。114は羽口破片。掲載資料のほか、復元・図化に至らないが「コ」の字状口縁の武蔵型甕の小破片が出土した。

第15号土坑（第69図）

ロクロ土師器坏１点（115）が出土した。

第17号土坑（第69図）

鉄製大型刀子１点（116）を復元・図化した。このほかロクロ土師器坏、土師器甕が出土しているが、いずれも小破片である。

（ⅳ）柱列跡

第２号柱列跡（第69図）

土師器１点、鉄製品１点を復元・図化した。117はＰ４出土のロクロ土師器高台付坏、118はＰ３出土の鉄釘である。

（ⅲ）掘立柱建物跡

第３号掘立柱建物跡（第69図）

古銭１点を図化した。119はＰ３から出土した寛永通宝（古寛永）である。

（ⅴ）溝

第１号溝（第69図）

ロクロ土師器高台付坏１点（120）を復元・図化した。このほか、須恵器瓶、大甕が出土したが、いずれも小破片である。

（ⅵ）遺構外（第69図）

平瓦１点（121）が２区から出土している。

第14表　住居跡出土土器観察表（大道第２遺跡）

遺構名	番号	種別	器種	口径	底径	器高	胎土	色調	調整・施文（外面）	調整・施文（内面）	調整・施文（底面）	備　考
SI1	1	ロクロ土師器	坏	14.0	6.8	3.8	ＡＩ	橙色	回転ナデ	回転ナデ	磨耗のため不明（回転糸切り後無調整？）	
SI1	2	ロクロ土師器	坏	13.6	5.8	3.9	ＡＣＥ	にぶい橙色	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り後無調整	
SI1	3	ロクロ土師器	坏	13.2	6.2	4.2	ＡＢＣＩ	にぶい橙色	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り後無調整	
SI1	4	ロクロ土師器	坏	13.0	6.8	4.3	ＡＣＥＦ	橙色	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り後無調整	
SI1	5	ロクロ土師器	高台付坏	11.0	6.4	4.6	ＡＣＥ	にぶい橙色	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り後無調整	
SI1	6	ロクロ土師器	高台付坏	13.4	6.4	5.8	ＡＢＣＤＨＩ	にぶい橙色	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り後高台貼り付け	内面アバタ状剥離（赤焼き須恵）、末野窯産
SI1	7	ロクロ土師器	坏	－	6.8	(1.3)	ＡＣＥ	にぶい橙色	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り後外周ヘラケズリ	
SI1	8	ロクロ土師器	坏	－	7.0	(2.3)	ＡＥ少Ｉ多	にぶい赤褐色	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り後無調整	アバタ状剥離
SI1	9	ロクロ土師器	坏	－	7.6	(1.9)	ＡＦＩ	にぶい黄橙色	回転ナデ、体下部ナデ	回転ナデ	回転糸切り後無調整	
SI1	10	土師器	甕	20.4	－	(6.3)	ＡＥ	橙色	口縁部ヨコナデ、頸部回転ナデ、胴部ヘラケズリ	ヨコナデ後ヘラナデ	－	武蔵型甕
SI1	11	土師器	台付甕	－	－	(4.9)	ＡＢＥＩ	橙色	縦・斜位ヘラケズリ、底部付近ヨコナデ	ナデ	－	
SI1	12	土師器	甕	－	(4.0)	(7.8)	ＡＢＣＥ	浅黄橙色	縦位・斜位ヘラケズリ	ナデ、一部ヘラナデ	ヘラケズリ	武蔵型甕
SI1	13	土師器	台付甕	－	－	(2.5)	ＡＦＩ	にぶい赤褐色	斜位ヘラケズリ	ナデ、一部ヘラナデ	－	
SI1	14	土師器	瓶？	－	－	(4.0)	ＡＣＥ少ＨＩ	にぶい橙色	横位カキ目痕	ナデ	－	
SI1	15	須恵器	甕	－	－	(9.2)	Ａ少Ｊ	黄灰色	平行タタキ目、一部格子状タタキ目	無文当て具痕、ナデ	－	常総B2？
SI1	16	須恵器	甕	－	－	(5.6)	ＡＥ多Ｉ	にぶい黄褐色	平行タタキ目、一部ナデ	ナデ、指頭圧痕あり	－	赤焼き須恵、新治窯産
SI1	17	須恵器	甕	－	－	(14.0)	ＡＥ少Ｉ	灰黄褐色	胴部縦位・平行タタキ目、胴下部横位ヘラケズリ	ナデ、指頭圧痕あり	－	赤焼き須恵、新治窯産
SI1	18	須恵器	甕	－	17.0	(11.2)	ＡＥＩＫ	黒褐色	ヘラナデ、自然釉付着	ナデ・ヘラナデ（輪積み痕残す）、自然釉付着	－	焼成堅緻、常総Ａ
SI2	22	ロクロ土師器	坏	15.2	9.8	(4.1)	ＡＢＣＥＦ	にぶい橙色	回転ナデ	回転ナデ	－	外面に鉄分付着あり
SI2	23	ロクロ土師器	坏	15.0	－	(3.8)	ＡＢＣＥ	にぶい橙色	回転ナデ	回転ナデ	－	
SI2	24	ロクロ土師器	坏	18.4	(9.6)	(6.3)	ＡＥＩＪ微	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ後、一部ヘラミガキ	－	
SI2	25	ロクロ土師器	坏	－	5.0	(0.8)	ＡＩ	にぶい橙色	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り後無調整	内面を二次的研磨
SI2	26	ロクロ土師器	坏	－	6.6	(1.4)	ＡＥ少Ｉ	橙色	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り後無調整	
SI2	27	ロクロ土師器	坏	－	7.4	(1.9)	ＡＣＥＩ	にぶい黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り後無調整	
SI2	28	ロクロ土師器	坏	－	6.4	(2.0)	Ａ	にぶい橙色	回転ナデ、底部付近ヘラケズリ	回転ナデ	全面ヘラケズリ	焼成良好、胎土緻密
SI2	29	ロクロ土師器	坏	－	(6.0)	(2.3)	Ａ少Ｃ少	にぶい黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り後無調整	焼成良好、胎土緻密
SI2	30	ロクロ土師器	坏	－	7.0	(3.0)	ＡＢＣＥＦ	にぶい橙色	ヨコナデ、底部付近ヘラケズリ	回転ナデ、ナデ	回転糸切り後、一方向にヘラナデ	内面を二次的研磨
SI2	31	ロクロ土師器	坏	－	7.6	(1.5)	ＡＥＩＪ	にぶい黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り後無調整	内面に一部ス ス付着
SI2	32	ロクロ土師器	坏	－	7.4	(2.3)	ＡＢＥＪ	にぶい黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り後無調整	体下部に粘土屑の付着あり

遺構名	番号	種別	器種	口径	底径	器高	胎土	色調	調整・施文（外面）	調整・施文（内面）	調整・施文（底面）	備　考
SI2	33	ロクロ土師器	坏	－	6.4	(1.8)	ＡＢＣＥＦ	にぶい橙色	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り後外周ヘラケズリ	
SI2	34	ロクロ土師器	坏	－	8.4	(2.6)	ＡＢＥＩ	灰白色	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り後無調整	
SI2	35	土師器	甕	(20.0)	－	9.3	ＡＢＣＥ	にぶい褐色	口縁部ヨコナデ、胴部横位ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ、ナデ	－	
SI2	36	土師器	甕	22.0	－	(5.6)	ＡＥＦ微Ｉ	橙色	口縁部ヨコナデ､頸部ナデ､胴部横位ヘラケズリ	ヨコナデ	－	武蔵型甕
SI2	37	土師器	小型甕	13.0	－	(4.2)	ＡＣＥＦＩ	にぶい橙色	口縁部・頸部ヨコナデ、胴部横位ヘラケズリ	ヨコナデ	－	小型甕（台付？）
SI2	38	土師器	小型甕	14.2	－	(7.7)	ＡＣＥＩ多	明赤褐色	口縁部・頸部ヨコナデ（輪積み痕残す）、胴部横位ヘラケズリ	ヨコナデ（輪積み痕残す）	－	小型甕（台付？）
SI2	39	土師器	甕	－	4.4	(3.5)	ＡＥＦＩ	にぶい橙色	斜位・縦位ヘラケズリ	斜位・横位ヘラナデ、ナデ	一方向にヘラケズリ	
SI2	40	土師器	甕	－	4.0	(4.0)	ＡＥＩＪ	にぶい橙色	斜・縦位ヘラケズリ	斜位・横位ヘラナデ、ナデ	一方向にヘラケズリ	
SI2	41	土師器	甕	－	－	(6.1)	ＡＣ	にぶい褐色	ヘラケズリ	ナデ	ヘラケズリ	
SI2	42	土師器	台付甕	－	8.8	(2.2)	ＡＣＥＩ	橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	－	
SI2	43	須恵器	坏	14.0	－	(3.8)	ＡＣ	灰白色	回転ナデ、一部ヨコナデ	回転ナデ	－	胎土緻密、常総B1？
SI2	44	須恵器	坏	14.6	－	(5.0)	ＡＩ多Ｊ	灰色	回転ナデ	回転ナデ	－	常総産
SI2	45	須恵器	坏	－	(6.0)	(3.2)	ＡＣＩＫ	灰色	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り後無調整	南比企窯産
SI2	46	須恵器	高台付坏	－	7.4	(2.5)	ＡＣＥＩＪ	黄灰色	回転ナデ、体下部ナデ	回転ナデ	回転糸切り後、高台貼り付け	胎土やや粗、新治窯産、内面に焼成後の研磨痕あり
SI2	47	須恵器	甕	－	－	(9.4)	Ａ多ＣＩ多	灰白色	回転ナデ、自然釉付着	回転ナデ、ナデ、自然釉付着	－	常総産か
SI2	48	須恵器	甕	－	－	(6.0)	ＡＣ多ＦＫ少	灰色	ヨコナデ、自然釉付着	ヨコナデ、ナデ、釉付着	－	破断面､内面･破断の一部に研磨痕あり、南比企窯産
SI2	49	須恵器	甕	－	－	(6.8)	ＨＩＪＫ	灰白色	回転ナデ、櫛描波状文、一部に釉の剥離痕あり	回転ナデ、ヘラナデ、自然釉付着	－	南比企窯産
SI2	50	須恵器	甕	－	－	(10.8)	Ａ多Ｉ多Ｊ	灰色	平行タタキ目	ナデ、一部当て具痕	－	常総産
SI2	51	須恵器	甕	－	－	(6.5)	ＡＫ	灰色	平行タタキ目、自然釉付着	ヨコナデ、ナデ	－	肩部破片を転用（破断面、外面を二次的研磨）、南比企窯産
SI2	52	須恵器	甕	－	15.4	(3.3)	ＡＩ	灰色	ナデ、横位ヘラナデ	横位ヘラナデ、ナデ、釉付着	ヘラナデ、ナデ	常総産か
SI2	53	須恵器	甕	29.0	－	(1.1)	Ａ多Ｉ	灰色	回転ナデ	回転ナデ	－	焼成軟らかめ、下総産か
SI2	54	陶器（灰釉）	坏	－	－	(3.7)	ＡＣ	灰白色	回転ナデ	回転ナデ、施釉	－	
SI2	55	陶器（灰釉）	坏	－	－	(2.5)	Ａ少Ｃ	灰白色	回転ナデ、一部釉付着	回転ナデ、施釉	－	

第15表　住居跡出土鉄製品観察表（大道第２遺跡）

遺構名	番号	種別	器種	高さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	備考
SI1	19	鉄製品	釘	（10.5）	（0.7）	（0.3）	26.5	
SI1	20	鉄製品	釘	9.2	（0.8）	（0.6）	21.5	
SI1	21	鉄製品	釘	（12.0）	（0.9）	（0.6）	30.2	
SI2	56	鉄製品	釘	（10.6）	（0.7）	（0.6）	14.4	
SI2	57	鉄製品	釘	（6.6）	（0.4）	（0.4）	18.4	
SI2	58	鉄製品	くさび	（7.6）	（2.2）	（0.4）	26.0	
SI2	59	鉄製品	くさび	（6.7）	1.9	1.1	16.3	
SI2	60	鉄製品	刀子	17.8	（3.8）	（0.6）	118.0	

第16表　柱列跡・土坑出土土器観察表（大道第２遺跡）

遺構名	番号	種別	器種	口径	底径	器高	胎土	色調	調整・施文（外面）	調整・施文（内面）	調整・施文（底面）	備　考
SK1	61	ロクロ土師器	坏	15.6	－	（4.0）	ＡＣＩ	橙色	回転ナデ	回転ナデ	－	
SK1	62	ロクロ土師器	坏	14.8	－	（4.0）	ＡＧＨＩＪ	にぶい橙色	回転ナデ	回転ナデ	－	
SK1	63	ロクロ土師器	坏	16.6	（8.6）	（3.7）	ＡＥＦ	にぶい橙色	回転ナデ	回転ナデ	－	
SK1	64	ロクロ土師器	坏	13.0	－	（2.5）	Ａ多ＥＩＪ	灰白色	回転ナデ	回転ナデ、黒色処理	－	
SK1	65	ロクロ土師器	高台付坏	－	6.4	（2.2）	ＡＣＦ微ＨＩ	にぶい橙色	回転ナデ	ナデ	回転糸切り後高台貼付	
SK1	66	ロクロ土師器	高台付坏	－	7.2	（1.9）	ＡＣＩ	にぶい橙色	回転ナデ	ナデ	回転糸切り後、高台貼り付け	
SK1	67	ロクロ土師器	高台付坏	－	5.4	（1.6）	ＡＣＥＩＫ	淡橙色	回転ナデ	ナデ、黒色処理	底部切離し後高台貼付	
SK1	68	ロクロ土師器	高台付坏	－	7.0	（2.5）	ＡＩＪ	淡橙色	回転ナデ（輪積み痕残す）	ナデ、黒色処理	回転糸切り後高台貼付	
SK1	69	ロクロ土師器	高台付坏	－	5.6	（2.2）	ＡＥＦＩ	にぶい橙色	回転ナデ	ヘラミガキ、ナデ、黒色処理？	回転糸切り後、高台貼り付け	
SK1	70	ロクロ土師器	高台付坏	－	7.0	（3.5）	ＡＨＩＪ	にぶい橙色	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り後高台貼付	底部回転糸切り後に高台のための粘土板を貼付した痕跡あり
SK1	71	ロクロ土師器	高台付坏	－	7.4	（3.4）	ＡＢＣＥＦＩ	にぶい橙色	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り後高台貼付	
SK1	72	須恵器	甕	－	－	（8.2）	Ａ少Ｊ少	灰色	平行タタキ目	ナデ	－	胎土緻密
SK4	74	ロクロ土師器	坏	12.0	5.4	3.8	ＡＢＩ	にぶい橙色	回転ナデ、ナデ、体下部ヘラナデ	回転ナデ、ナデ	回転糸切り後無調整	
SK4	75	ロクロ土師器	坏	12.6	－	（3.3）	Ａ Ｂ少ＣＦＩ	にぶい橙色	回転ナデ	回転ナデ	－	
SK4	76	ロクロ土師器	坏	14.6	－	（3.8）	ＡＢＣＥ	にぶい橙色	回転ナデ、ナデ	回転ナデ、ナデ	－	
SK4	77	ロクロ土師器	坏	－	－	（4.2）	ＡＣＥ	にぶい橙色	回転ナデ	回転ナデ、口縁部ミガキ	－	内面を二次的に研磨
SK4	78	ロクロ土師器	坏	16.8	－	（3.8）	ＡＣＦＨＩ	にぶい橙色	回転ナデ、ナデ	回転ナデ、ナデ	－	
SK4	79	ロクロ土師器	高台付坏	13.6	7.0	5.1	ＡＣＦ微Ｉ	にぶい褐色	回転ナデ	回転ナデ、黒色処理、底部に斜格子状暗文あり	回転糸切り後、高台貼り付け	
SK4	80	ロクロ土師器	坏	－	5.6	（0.7）	ＡＢＥＦ	にぶい褐色	ナデ	ナデ	回転糸切り後無調整	
SK4	81	ロクロ土師器	坏	－	5.2	（1.0）	ＡＢＣＥ少Ｉ	にぶい橙色	ナデ	ナデ	回転糸切り後無調整	
SK4	82	ロクロ土師器	坏	－	5.4	（0.6）	ＡＣＩ	褐灰色	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り後無調整	
SK4	83	ロクロ土師器	坏	－	5.6	（2.1）	ＡＦＩＫ	橙色	回転ナデ、ナデ	回転ナデ、ナデ	回転糸切り後無調整	

遺構名	番号	種別	器種	口径	底径	器高	胎土	色調	調整・施文（外面）	調整・施文（内面）	調整・施文（底面）	備　考
SK4	84	ロクロ土師器	坏	－	6.4	(1.3)	ＡＥＦＩ	にぶい橙色	回転ナデ、ナデ	回転ナデ、ナデ	回転糸切り後無調整	三和窯産？焼成良好、ロクロ目顕著。赤焼き須恵か？
SK4	85	ロクロ土師器	高台付坏	－	5.8	(1.3)	ＡＥＩＪ	にぶい橙色	ヨコナデ	ミガキ、黒色処理	回転糸切り後高台貼付	
SK4	86	ロクロ土師器	高台付坏	－	5.6	(2.1)	ＡＣＥＦＩＫ少	黄灰色	回転ナデ	ナデ	回転糸切り後高台貼付	
SK4	87	ロクロ土師器	高台付坏	－	5.8	(1.5)	ＡＥＩ	灰色	ヨコナデ	ナデ、黒色処理	回転糸切り後高台貼付	
SK4	88	土師器	高台付坏	－	5.2	(1.8)	ＡＥＩ	灰黄色	ヨコナデ	ナデ、黒色処理	底部切離し後高台貼付	
SK4	89	ロクロ土師器	高台付坏	－	6.8	(1.6)	ＡＥ	にぶい黄橙色	回転ナデ	ヘラナデ、黒色処理？	回転糸切り後高台貼付	
SK4	90	土師器	高台付坏	－	7.4	(1.9)	ＡＣＥＩ	橙色	ヨコナデ	ミガキ、黒色処理	ヨコナデ	
SK4	91	ロクロ土師器	高台付坏	－	6.8	(2.9)	ＡＣＥＦ	淡橙色	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切りf後高台貼付	
SK4	92	ロクロ土師器	高台付坏	－	7.0	(2.0)	ＡＥＩＫ	にぶい橙色	回転ナデ	ナデ、黒色処理	底部ヘラナデ後高台貼付	
SK4	93	ロクロ土師器	高台付坏	－	－	(2.2)	ＡＢＣＥ微	橙色	回転ナデ	回転ナデ	底部切離し後高台貼付	
SK4	94	土師器	甕	18.2	－	(7.7)	ＡＣＥＩ	にぶい赤褐色	口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ	ナデ	－	
SK4	95	須恵器	高台付坏	－	6.0	(2.0)	Ａ少Ｆ微	灰黄色	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ、ナデ	胎土緻密、東海産、剥離のため不明瞭だが釉の付着あり
SK4	96	須恵器（灰釉）	高台付坏	－	－	(1.9)	Ａ少	灰白色	回転ナデ	回転ナデ、灰釉付着	回転糸切り後、高台貼り付け	東海産、内面に重ね焼きの痕跡あり
SK4	97	須恵器	甕	－	－	(4.2)	ＡＥ少Ｉ多Ｊ	灰色	平行タタキ目	ナデ	－	No.98と同一個体か
SK4	98	須恵器	甕	－	－	(4.5)	ＡＥ少Ｉ多Ｊ	灰色	平行タタキ目	ナデ	－	No.97と同一個体か
SK4	99	須恵器	甕	－	－	(5.6)	Ａ少Ｅ微Ｉ多Ｊ少	灰色	平行タタキ目	ナデ	－	
SK4	100	須恵器	瓶または甕	－	－		Ａ少ＣＩ	灰白色	回転ナデ、一部ヘラナデ、釉付着	ナデ	－	破断面の一部（二面）に研磨痕あり、No.101と同一個体
SK4	101	須恵器	瓶または甕	－	－	(6.1)	Ａ少ＣＩ	灰白色	ヘラナデ	ナデ	－	破断面の一部（三面）に研磨痕あり、No.100と同一個体
SK7	105	ロクロ土師器	坏	18.0	－	(4.3)	ＡＣＥ少	にぶい橙色	回転ナデ	回転ナデ	－	
SK7	106	ロクロ土師器	坏	13.6	－	(4.7)	ＡＣ	浅黄橙色	回転ナデ、一部ヨコナデ	回転ナデ、ヨコナデ	－	
SK7	107	ロクロ土師器	坏	－	5.0	(0.9)	Ａ	にぶい橙色	ナデ	回転ナデ	回転糸切り後無調整	内面を二次的研磨
SK7	108	ロクロ土師器	坏	－	6.6	(0.3)	ＡＢＥＦ	明赤褐色	－	ナデ	回転糸切り後、外周ヘラケズリ	
SK7	109	ロクロ土師器	高台付坏	－	7.2	(1.8)	ＡＣＥ少	橙色	回転ナデ	ナデ	底部貼付後回転ナデ	
SK7	110	陶器（緑釉）	坏	－	－	(1.7)	Ａ少	オリーブ灰色	回転ナデ、緑釉	回転ナデ、緑釉	－	
SK10	112	須恵器	甕	－	－	(5.0)	ＡＩＫ	暗灰色	ヨコナデ＋櫛描波状文2段	ヨコナデ、自然釉付着	－	
SK15	115	ロクロ土師器	坏	－	－	(2.0)	ＡＢ	にぶい橙色	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り後無調整	胎土緻密
SA2-P4	117	ロクロ土師器	高台付坏	－	8.0	(3.7)	ＡＣ	灰白色	高台貼付後回転ナデ	ミガキ、黒色処理	回転ナデ	

第17表　土坑出土鉄製品観察表（大道第２遺跡）

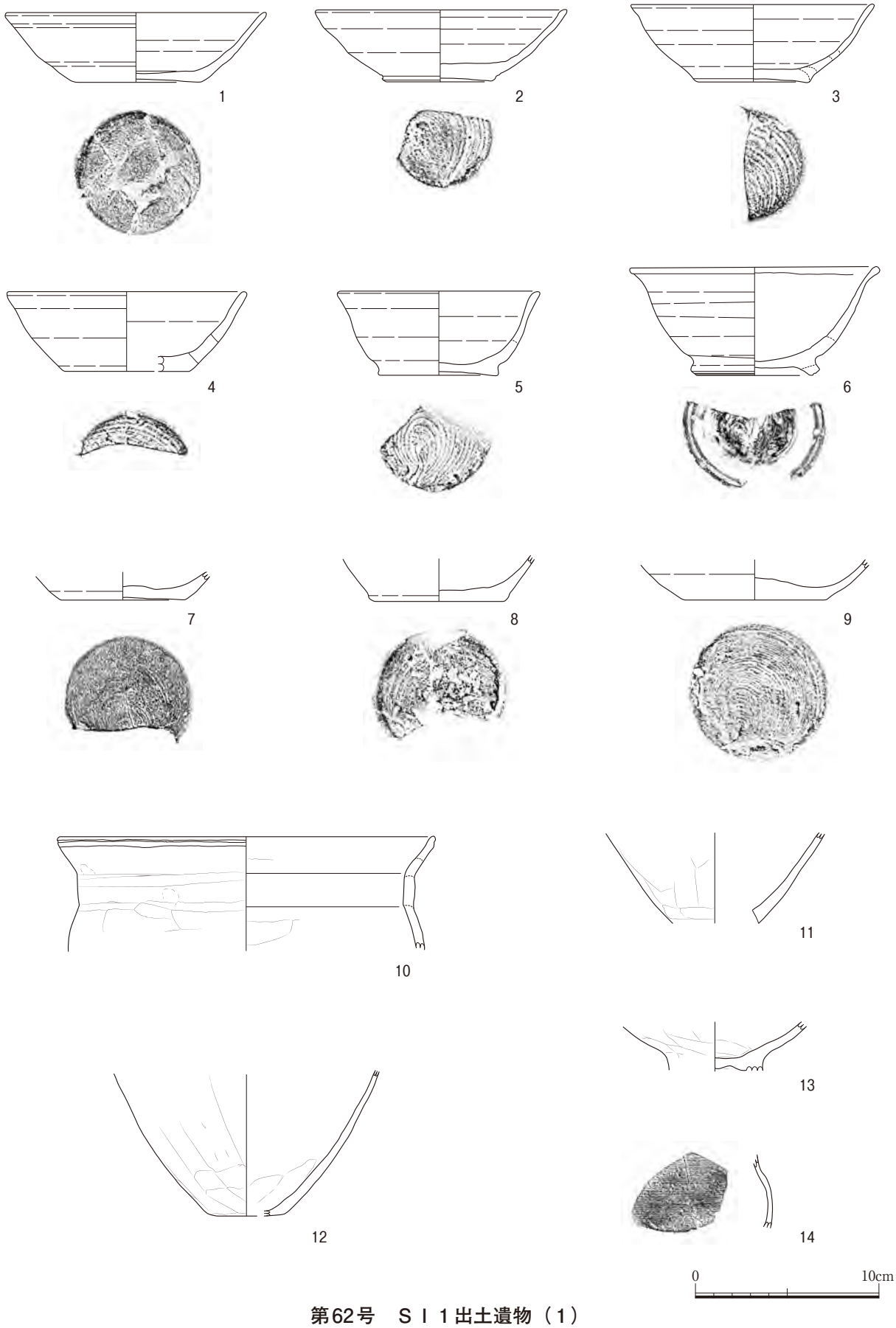
遺構名	番号	種別	器種	高さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	備考
SK1	73	鉄製品	釘	（3.0）	（1.1）	（0.7）	10.3	
SK4	102	鉄製品	鉄滓	4.8	3.4	1.3	31.5	
SK4	103	鉄製品	刀子	（6.9）	（1.3）	（0.4）	12.7	
SK6	104	鉄製品	釘	（4.8）	（0.5）	（0.4）	7.5	
SK7	111	鉄製品	針	（3.4）	（0.3）	（0.1）	1.4	
SK10	113	鉄製品	鉄滓	6.9	8.5	4.6	260.6	焼土中から出土
SK10	114	土製品	羽口	4.6	6.4	3.0	110.3	被熱痕あり、焼土中から出土
SK17	116	鉄製品	大型刀子	（20.5）	4.0	0.5	75.1	

第18表　掘立柱建物跡・柱列跡出土金属製品観察表（大道第２遺跡）

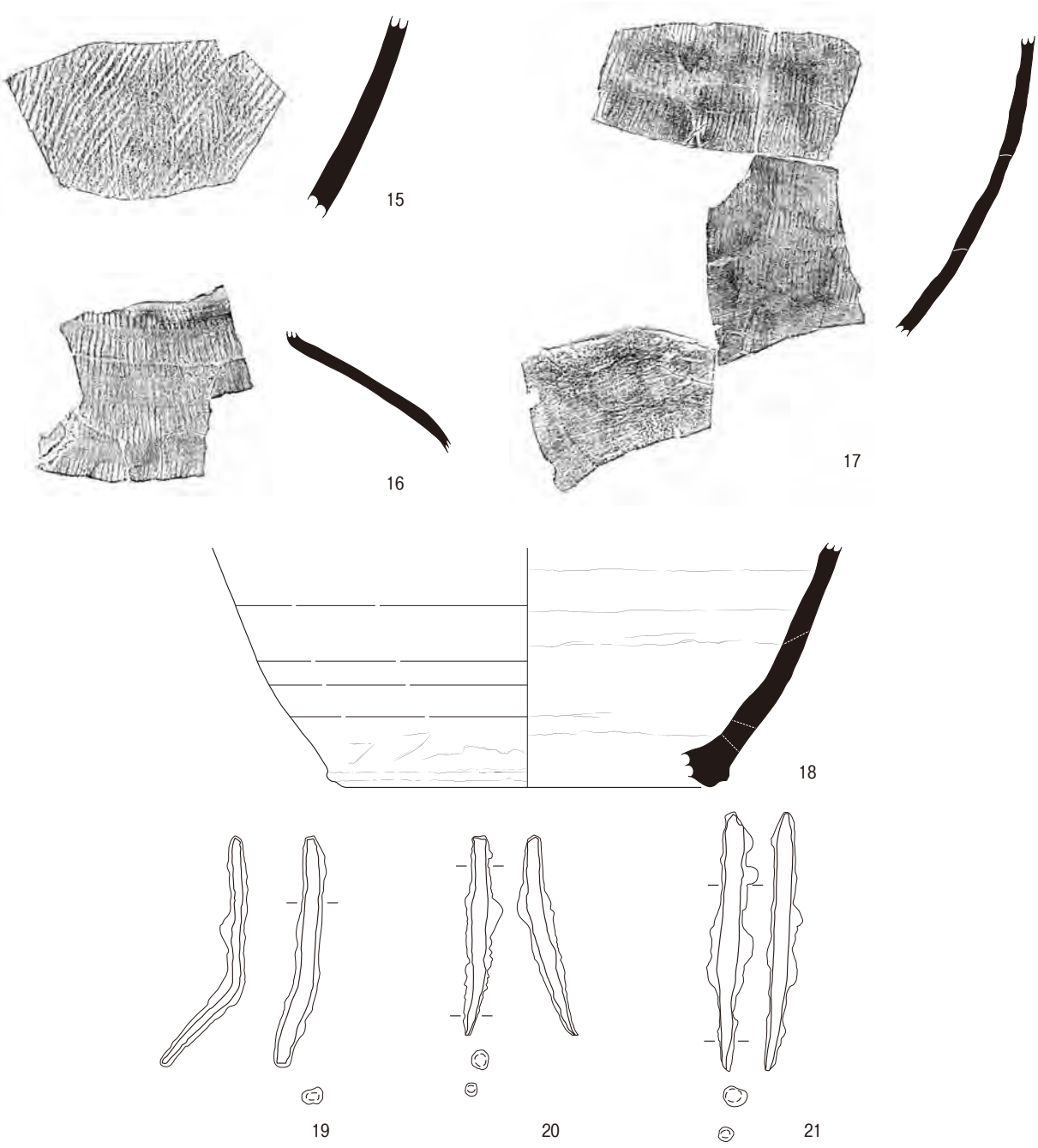
遺構名	番号	種別	器種	高さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	備考
SA2-P3	118	鉄製品	釘	3.5	1.1	0.5	7.9	
SB3-P3	119	古銭	－	－	－	－	3.0	寛永通宝（古寛永）

第19表　ピット・溝・遺構外出土土器観察表（大道第２遺跡）

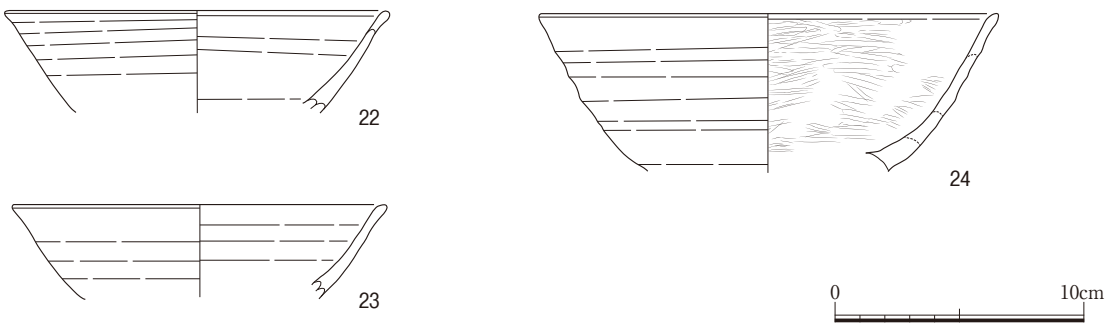
遺構名	番号	種別	器種	口径	底径	器高	胎土	色調	調整・施文（外面）	調整・施文（内面）	調整・施文（底面）	備　考
SD1	120	ロクロ土師器	高台付坏	－	6.8	（1.4）	ＡＢ微ＣＤ少Ｆ微	灰白色	高台貼付後回転ナデ、ナデ	ミガキ、黒色処理	回転ナデ、ナデ	
遺構外	121	瓦	平瓦	－	－	－	A	灰白色	凸面縄目タタキ	凹面布目圧痕	－	



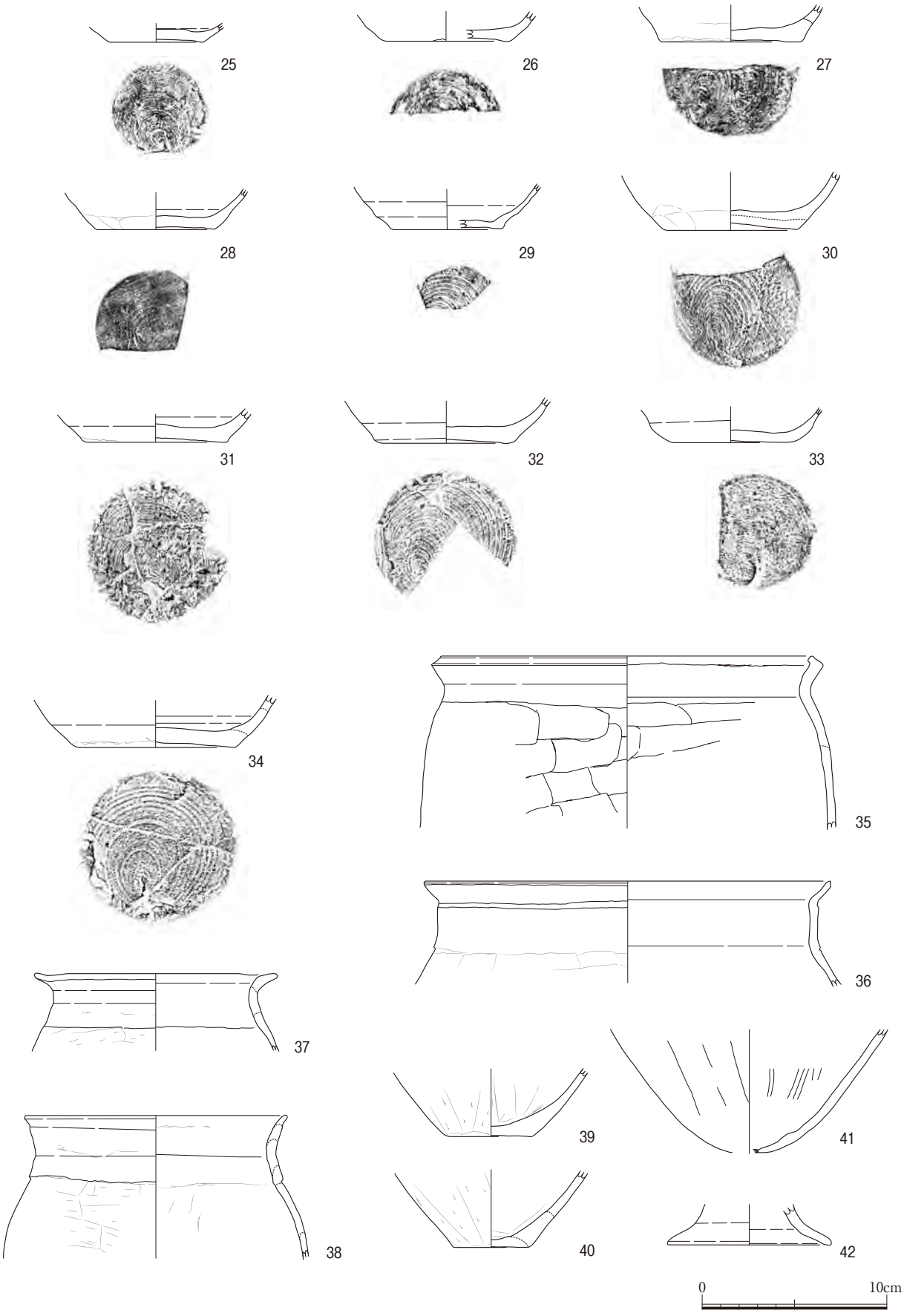
第62号　ＳＩ１出土遺物（１）



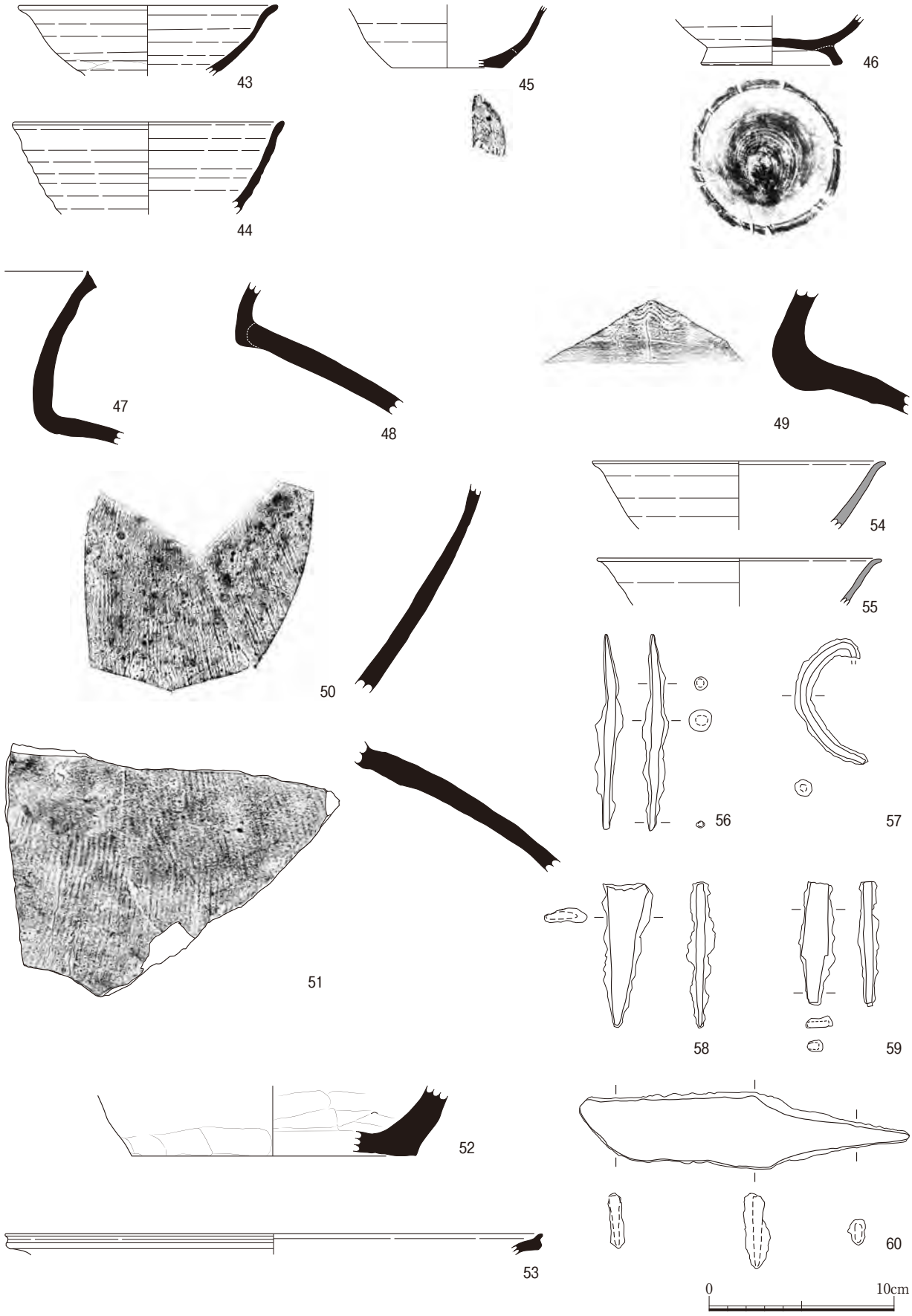
第63図　ＳＩ１出土遺物（２）



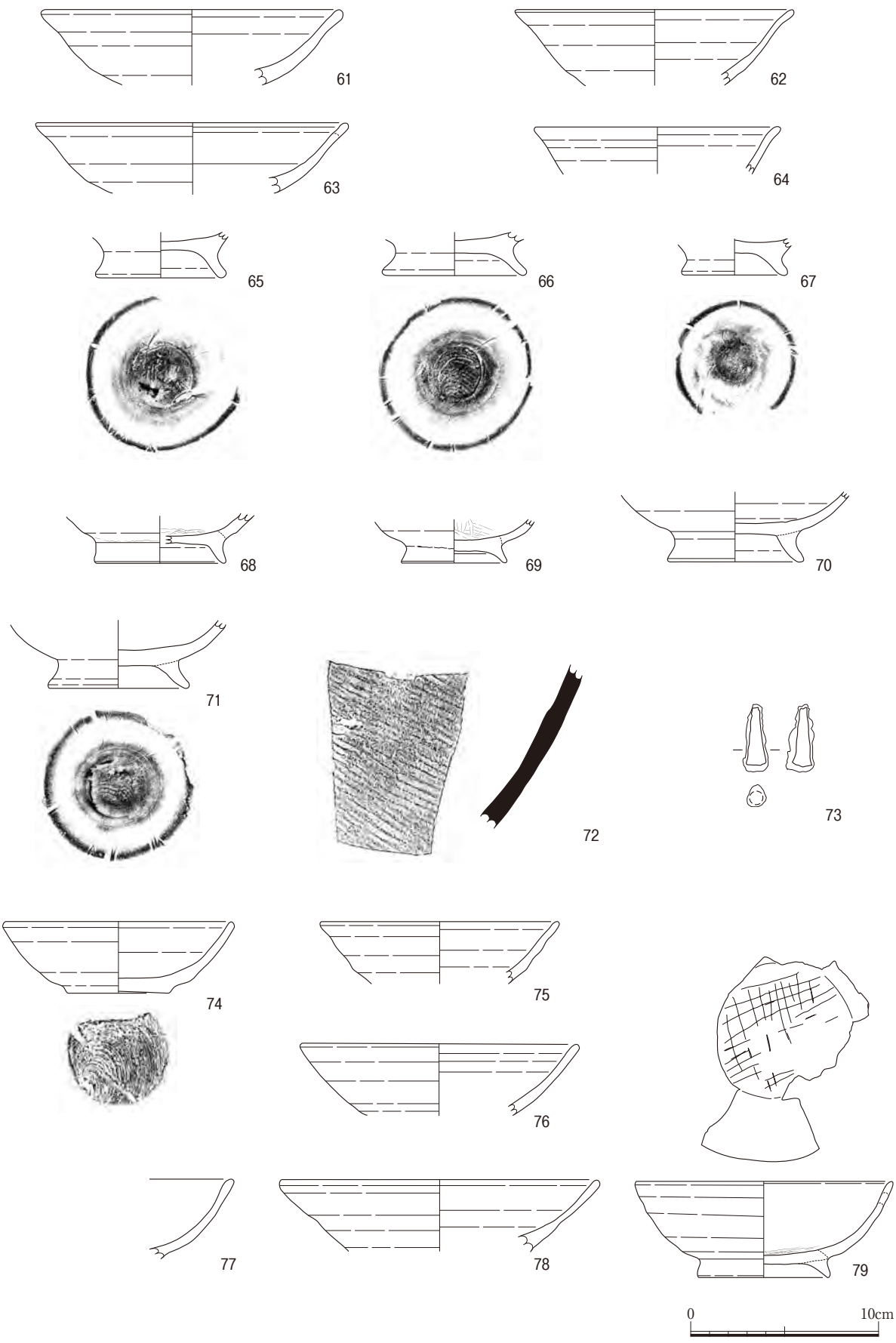
第64図　ＳＩ２出土遺物（１）



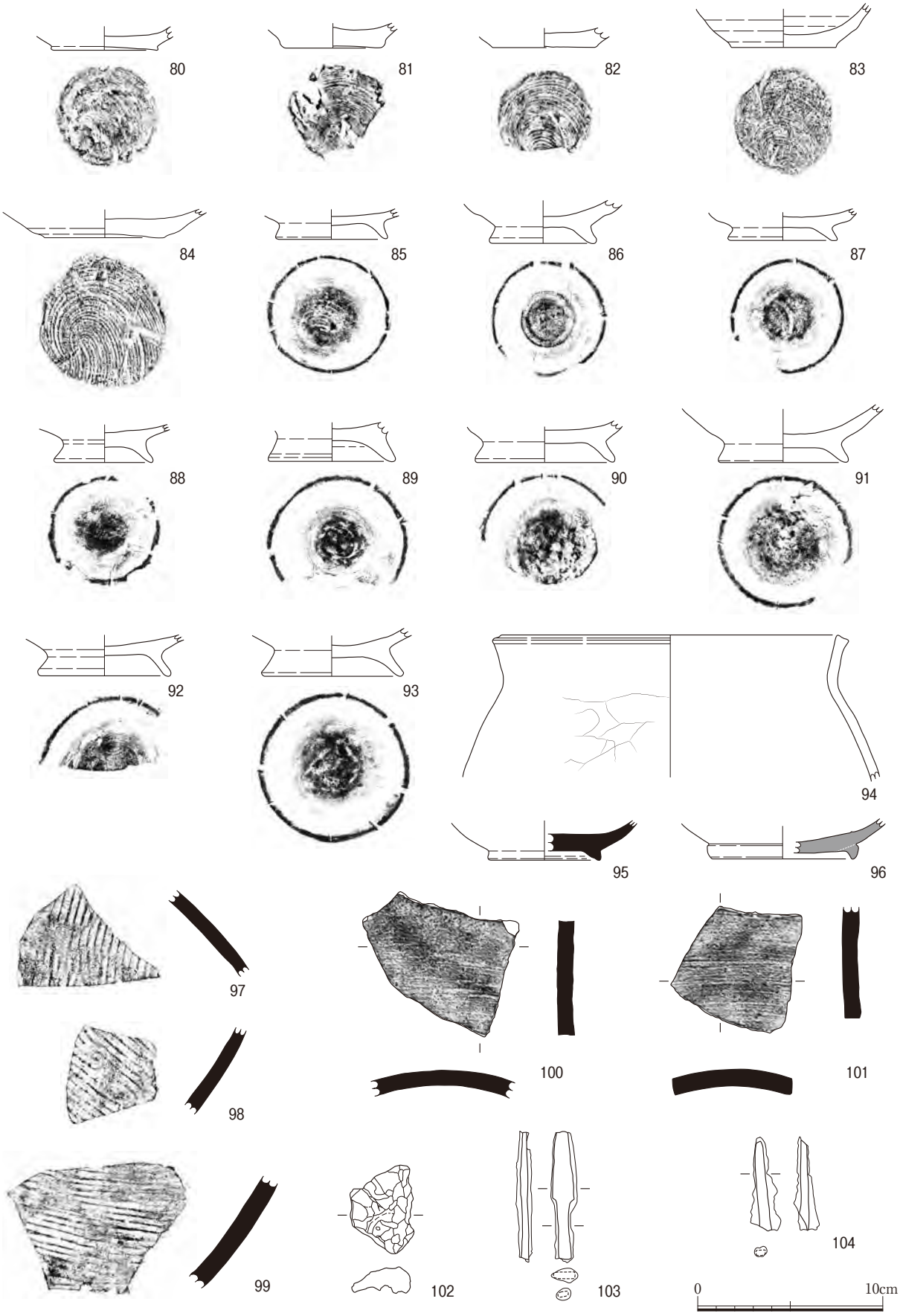
第65図　ＳＩ２出土遺物（２）



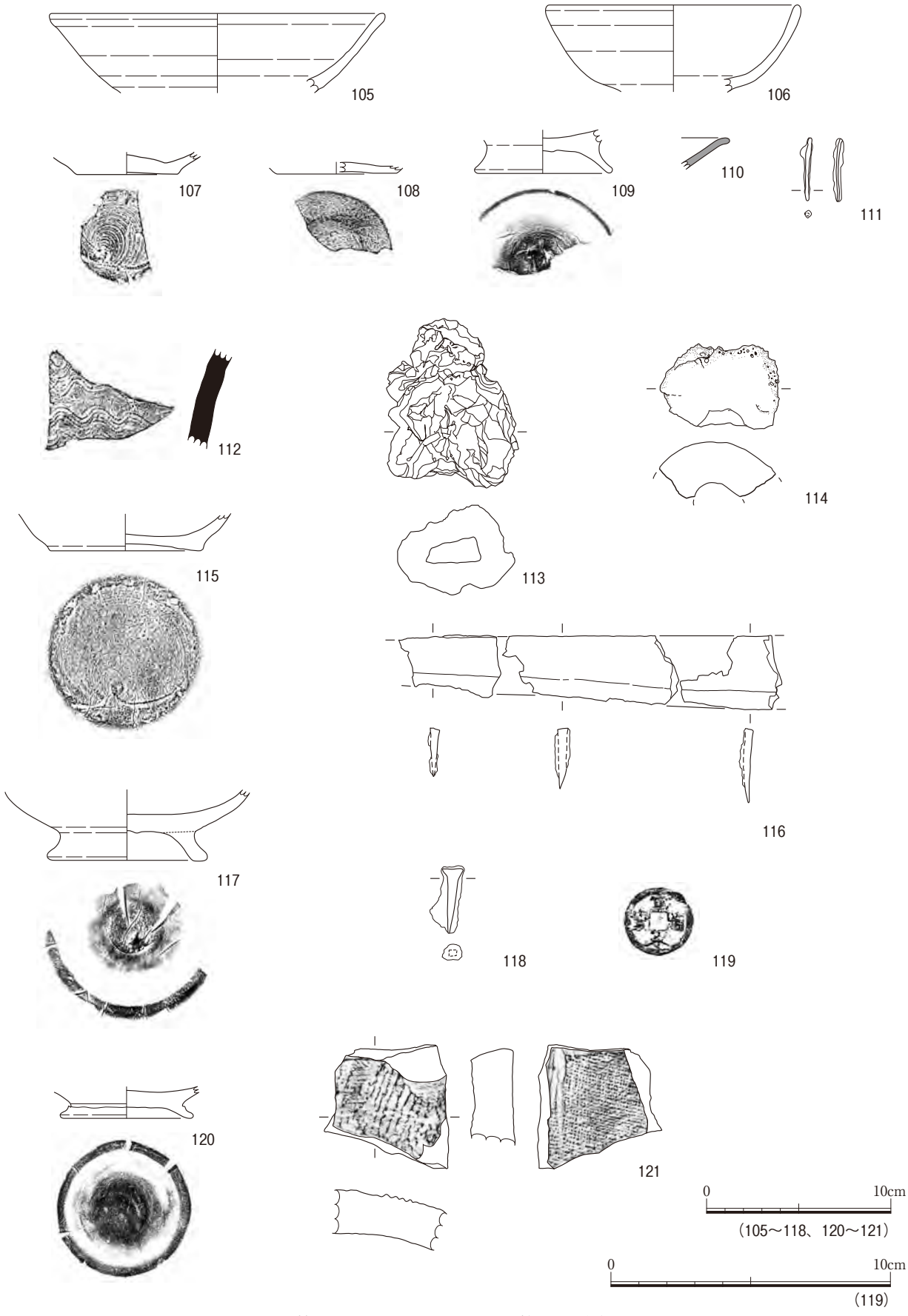
第66図　ＳＩ２出土遺物（３）



第67図　ＳＫ１・ＳＫ４出土遺物



第68図　ＳＫ４・ＳＫ６出土遺物



第69図　ＳＫ・Ｐ・ＳＤ等出土遺物

Ⅴ　大道第２遺跡の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

大道第２遺跡は、元荒川左岸の自然堤防北縁の標高約５ｍに位置する。調査では、平安時代の竪穴式住居跡、土坑のほか、時代不明の掘立柱建物跡、柱列跡、溝などが確認されている。これらの土坑のうち２基は、土師器焼成坑と推定されている。

そこで、土師器焼成坑の内、１基（SK1）について使用過程や様態を検証するために堆積微細構造軟Ｘ線分析を、年代観に関する情報を得るために放射性炭素年代測定とテフラ分析を、土坑の埋積過程を検討するために珪藻分析を、平安時代の周辺植生や植物利用を検討するために花粉分析・植物珪酸体分析・微細物分析を実施する。また、遺跡の地形や立地環境についての情報を得るために珪藻分析を、周辺のイネ科植物相を検証するために植物珪酸体分析を実施する。

Ⅰ．分析方法

１．堆積微細構造軟Ｘ線分析

屋外において採取した試料を厚さ１cm程度の板状に整形し、軟Ｘ線投影装置を用いて撮影を行う。

２．放射性炭素年代測定

測定は株式会社加速器分析研究所の協力を得て、AMS法により行った。なお、放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma）に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.0（Copyright 1986 - 2005 M Stuiver and PJ Reimer）を用い、北半球の大気圏における暦年校正曲線を用いる条件を与えて計算させている。

３．テフラ分析

試料約20ｇを蒸発皿に取り、水を加え泥水にした状態で超音波洗浄装置により粒子を分散し、上澄みを流し去る。この操作を繰り返すことにより得られた砂分を乾燥させた後、実体顕微鏡下にて観察する。観察は、テフラの本質物質であるスコリア、火山ガラス、軽石を対象とし、その特徴や含有量の多少を定性的に調べる。

なお、火山ガラスについては、緩い曲率を持った薄手平板状および継ぎ目のある平板状のものをバブル型とし、スポンジ状に発泡したものおよび発泡が引き伸ばされて繊維束状のものを軽石型、破砕片状のものを中間型とする。

４．珪藻分析

試料を湿重で７ｇ前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法の順に物理･化学処理を施して、

珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入して、永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い、メカニカルステージでカバーガラスの任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体以上同定・計数する（化石の少ない試料はこの限りではない）。種の同定は、原口ほか（1998）、Krammer（1992）、Krammer & Lange－Bertalot（1986，1988，1991a，1991b）、Witkowski et al.（2000）などを参照する。

同定結果は、海水生種、海～汽水生種、汽水生種、淡水～汽水生種、淡水生種の順に並べ、その中の各種類をアルファベット順に並べた一覧表で示す。なお、淡水生種はさらに細かく生態区分し、塩分・水素イオン濃度（pH）・流水に対する適応能についても示す。また、環境指標種についてはその内容を示す。そして、産出個体数100個体以上の試料については、産出率２％ないし３％以上の主要な種類について、主要珪藻化石群集の層位分布図を作成する。また、産出化石が現地性か異地性かを判断する目安として、完形殻の出現率を求める。堆積環境の解析は、海水～汽水生種については小杉（1988）、淡水生種については安藤（1990）、陸生珪藻については伊藤・堀内（1991）、汚濁耐性についてはAsai & Watanabe（1995）の環境指標種を参考とする。

５．花粉分析

試料を湿重で約10ｇ秤量し、水酸化カリウム処理、篩別、重液分離（臭化亜鉛，比重2.3）、フッ化水素酸処理、アセトリシス処理（無水酢酸９に濃硫酸１を混和した溶液）の順に物理・化学的な処理を施して花粉・胞子化石を分離・濃集する。処理後の残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製した後、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数を行う。結果は同定・計数結果の一覧表として表示する。なお、図表中で複雑の種類をハイフン（－）で結んだものは種類間の区別が困難なものを示す。

６．植物珪酸体分析

湿重５ｇ前後の試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム，比重2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。検鏡しやすい濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。

400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、近藤・佐瀬（1986）の分類に基づいて同定・計数する。

結果は、検出された種類とその個数の一覧表で示す。また、検出された植物珪酸体の出現傾向から古植生について検討するために、植物珪酸体群集の層位分布図を作成した。各種類の出現率は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の珪酸体毎に、それぞれの総数を基数とする百分率で求めた。

７．微細物分析

土壌試料は500ccを水に一晩液浸し、0.5mm目の篩を通して水洗する。試料を４mm，２mm，１mm，

0.5mm目の篩を用いて粒径別にシャーレに移した後、双眼実体顕微鏡下で観察し、果実、種子や同定可能な葉などの大型植物遺体を抽出する。種実の形態的特徴を所有の現生標本および原色日本植物種子写真図鑑（石川，1994）、日本植物種子図鑑（中山ほか，2000）等と比較して種類を同定し、個数を数える。なお、分析後の大型植物遺体は、種類毎にビンに入れ、70%程度のエタノール溶液による液浸保存処理を施す。

Ⅱ．土師器焼成坑の検証

１．試料

堆積微細構造軟Ｘ線分析は、現地においてSK1覆土を柱状試料として２点採取し、この２試料を上部と下部に分けて、厚さ約１cmの平板状に整形した試料４点（試料番号１－４）について行う。

放射性炭素年代測定は、SK1で炭化物が集中する５層から出土した炭化材１点である。またテフラ分析は、SK1覆土の上部と下部から採取した２点（試料番号１，２）である。

２．結果

（１）堆積微細構造軟Ｘ線分析

撮影結果は、図版１に示す。

（２）放射性炭素年代測定

測定結果を表１に、暦年較正結果を表２に示す。年代測定の結果は、測定年代が1120 ± 30BP、補正年代が1130 ± 30BPの測定値が得られる。

表１．放射性炭素年代測定

遺構	層位	試料質	補正年代 BP	$\delta^{13}C$ (‰)	測定年代 BP
SK1	5	炭化材	1130±30	-24.11±0.76	1120±30

1)年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。
2)BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
3)付記した誤差は、測定誤差σ（測定値の68%が入る範囲）を年代値に換算した値。

表２．暦年較正結果

遺構	層位	補正年代 (BP)	暦年較正年代(cal)		相対比
SK1	5	1131±33	cal AD 886 - cal AD 906	cal BP 1,064 - 1,044	0.227
			cal AD 991 - cal AD 971	cal BP 959 - 979	0.773

1)計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.0(Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer)を使用
2)計算には表に示した丸める前の値を使用している。
3)付記した誤差は、測定誤差σ（測定値の68%が入る範囲）を年代値に換算した値。

（3）テフラ分析

２試料とも白色を呈し、発泡不良な軽石が極めて微量認められる。検出された軽石の中には、角閃石の斑晶を包有する。この軽石は、その特徴から６世紀中葉に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳伊香保テフラ（Hr－FP：町田・新井，1992）に由来すると考えられる。

３．考察

遺構覆土には、Hr－FPが僅かに混在することが認められた。このことから、遺構覆土には、６世紀中葉以降の堆積物が流れ込んでいるとみられる。また、放射性炭素年代測定結果では、1130BPの年代値が得られている。遺構底部から採取した炭化材であることから、当時の年代を反映している可能性が高い。よって、本遺構は、９世紀頃に機能していたと思われる。また、堆積物は、一部植物根による生物擾乱を受けているが、団粒構造が認められる。

Ⅳ．土師器焼成坑における植物利用と古環境の検証

１．試料

SK1の覆土は、１～６層、及び焼土層に分層されている。柱状に採取した試料の中から、焼土層を除く各層１点、計６点（上位より試料番号１～６とする）を抽出した。この内、６点全点について植物珪酸体分析を、また試料番号２，４，６の３点について珪藻分析および花粉分析を行う。また、各層について微細物分析を実施する。

２．結果

（1）珪藻分析

結果を表３、図１に示す。全体的に保存状態が悪いが、３試料を併せて11属28分類群の珪藻化石が検出される。以下に珪藻化石群集の特徴を述べる。

試料番号６では、珪藻化石の産出個数が少ない。陸生珪藻などが僅かに検出される程度である。一方、試料番号４および試料番号２は、珪藻化石が検出される。その群集組成は、類似しており、陸生珪藻が優占する。主な産出種は、陸生珪藻Ａ群のHantzschia amphioxys、Navicula mutica が20－30％前後と多産し、未区分陸生珪藻のCaloneis angustivalva、陸生珪藻Ａ群のNavicula contenta、Pinnularia borealisを伴う。

（2）花粉分析

結果を表４に示す。花粉化石は、ほとんど検出されない。検出される種類は、木本花粉４種類（マツ属、スギ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属）、草本花粉４種類（イネ科、アカザ科、ヨモギ属、キク亜科）、シダ類胞子の合計９種類である。これら僅かに検出される花粉化石、シダ類胞子は、保存状態が極めて悪く、外膜が溶けて薄くなっていたり、壊れている。

表３．SK1の珪藻分析結果

種　　類	生態性			環境			
	塩分	pH	流水	指標種	2	4	6
Nitzschia inconspicua Grunow	Ogh-Meh	al-il	ind		–	–	1
Achnanthes lanceolata (Breb.)Grunow	Ogh-ind	ind	r-ph	K,T	1	–	–
Amphora montana Krasske	Ogh-ind	ind	ind	RA,U	4	1	–
Caloneis angustivalva Petit	Ogh-unk	unk	unk	RI	19	15	–
Caloneis largerstedtii (Lagerst.)Cholnoky	Ogh-ind	al-il	ind	S	1	–	–
Gomphonema angustatum (Kuetz.)Rabenhorst	Ogh-ind	al-il	ind	U	–	2	–
Gomphonema parvulum Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	U	1	3	–
Hantzschia amphioxys (Ehr.)Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA,U	23	34	9
Navicula contenta Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA,T	8	5	1
Navicula contenta fo. biceps (Arnott)Hustedt	Ogh-ind	al-il	ind	RA,T	3	1	1
Navicula elginensis (Greg.)Ralfs	Ogh-ind	al-il	ind	O,U	4	1	–
Navicula mutica Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	RA,S	32	21	4
Navicula mutica var. ventricosa (Kuetz.)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	RI	1	–	–
Navicula paramutica Bock	Ogh-ind	ind	ind	RB	5	–	–
Navicula tantula Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	RI,U	4	1	–
Neidium alpinum Hustedt	Ogh-unk	unk	ind	RA	3	–	–
Neidium septentrionale Cleve-Euler	Ogh-hob	ac-il	ind		1	–	–
Nitzschia amphibia Grunow	Ogh-ind	al-bi	ind	U	1	1	–
Nitzschia palustris Hustedt	Ogh-ind	ind	unk		1	1	–
Pinnularia borealis Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	RA	5	7	–
Pinnularia obscura Krasske	Ogh-ind	ind	ind	RA	3	–	–
Pinnularia schoenfelderi Krammer	Ogh-ind	ind	ind	RI	1	1	–
Pinnularia subcapitata Gregory	Ogh-ind	ac-il	ind	RB,S	1	–	–
Pinnularia subcapitata var. paucistriata (Grun.)Cleve	Ogh-ind	ac-il	l-ph	O,U,RB	1	–	–
Pinnularia substomatophora Hustedt	Ogh-hob	ac-il	l-ph		–	4	–
Pinnularia spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	–	–
Stauroneis obtusa Lagerstedt	Ogh-ind	ind	ind	RB	2	–	–
Stauroneis tenera Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	RB	1	3	1
海水生種					0	0	0
海水～汽水生種					0	0	0
汽水生種					0	0	0
淡水～汽水生種					0	1	0
淡水生種					127	100	17
珪藻化石総数					127	101	17

凡例

H.R.：塩分濃度に対する適応性
- Euh-Meh：海水生種－汽水生種
- Ogh-Meh：淡水－汽水生種
- Ogh-hil：貧塩好塩性種
- Ogh-ind：貧塩不定性種
- Ogh-hob：貧塩嫌塩性種
- Ogh-unk：貧塩不明種

pH：水素イオン濃度に対する適応性
- al-bi：真アルカリ性種
- al-il：好アルカリ性種
- ind：pH 不定性種
- ac-il：好酸性種
- ac-bi：真酸性種
- unk：pH 不明種

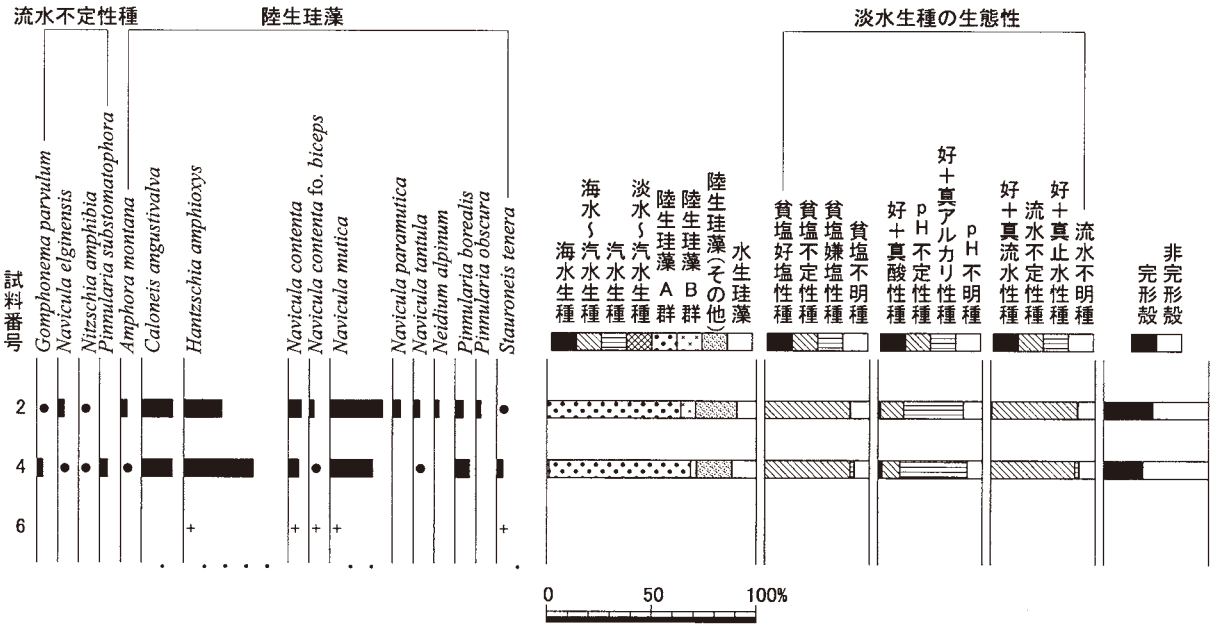
C.R.：流水に対する適応性
- l-bi：真止水性種
- l-ph：好止水性種
- ind：流水不定性種
- r-ph：好流水性種
- r-bi：真流水性種
- unk：流水不明種

環境指標種群

K:中～下流性河川指標種，O:沼沢湿地付着生種（以上は安藤，1990）

S:好汚濁性種，U:広域適応性種，T:好清水性種（以上はAsai and Watanabe，1995）

R:陸生珪藻（RA:A群，RB:B群，RI:未区分、伊藤・堀内，1991）



海水－汽水－淡水生種産出率・各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で算出した。なお、●は 2%未満、＋は 100 個体未満の試料について検出した種類を示す。

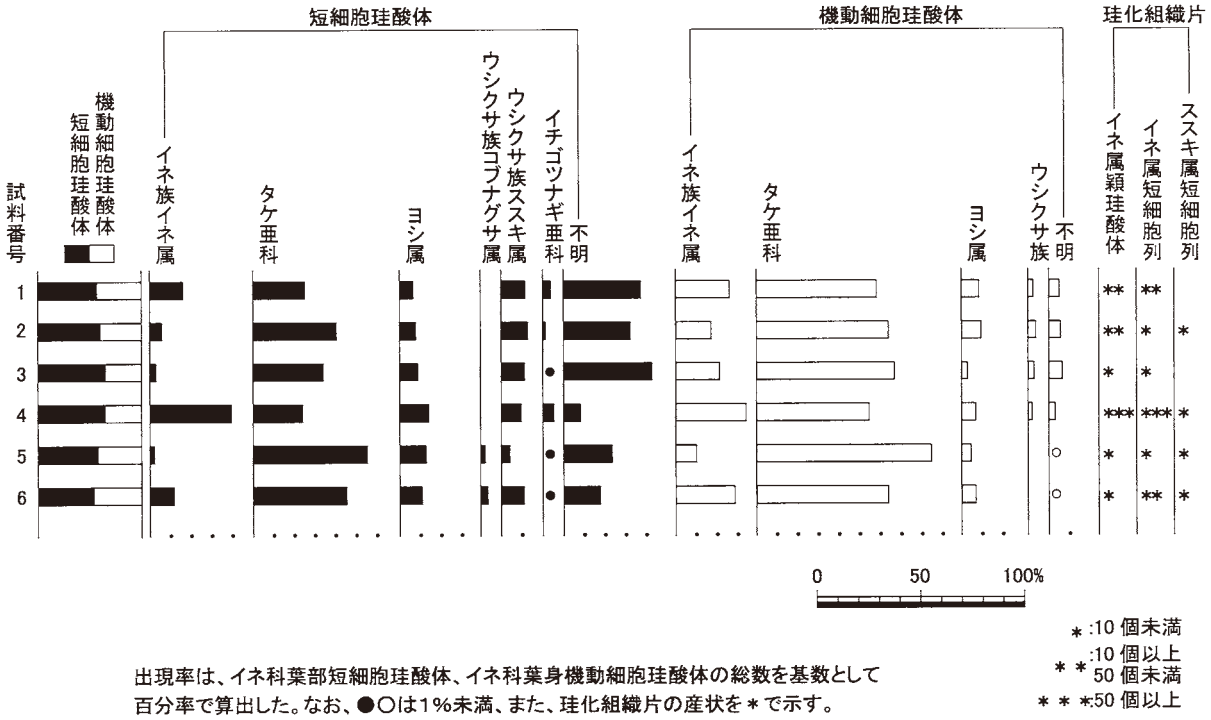
図１．SK1の主要珪藻化石群集

表４．SK1の花粉分析結果

種　類 / 試料番号	2	4	6
木本花粉			
マツ属	1	1	－
スギ属	－	1	1
コナラ属コナラ亜属	1	－	－
コナラ属アカガシ亜属	－	－	1
草本花粉			
イネ科	1	1	－
アカザ科	1	－	－
ヨモギ属	3	7	－
キク亜科	－	－	1
不明花粉	－	3	－
シダ類胞子			
他のシダ類胞子	13	1	2
合　計			
木本花粉	2	2	2
草本花粉	5	8	1
不明花粉	0	3	0
シダ類胞子	13	1	2
総計（不明を除く）	20	11	5

表５．SK1の植物珪酸体分析結果

種　類 / 試料番号	1	2	3	4	5	6
イネ科葉部短細胞珪酸体						
イネ族イネ属	25	9	6	74	3	17
タケ亜科	39	63	67	45	83	67
ヨシ属	10	12	17	26	19	16
ウシクサ族コブナグサ属	−	−	−	−	3	5
ウシクサ族ススキ属	18	20	22	18	6	16
イチゴツナギ亜科	6	2	1	10	1	1
不明キビ型	28	28	31	7	27	16
不明ヒゲシバ型	16	11	20	1	4	5
不明ダンチク型	14	11	33	7	4	5
イネ科葉身機動細胞珪酸体						
イネ族イネ属	31	18	23	35	11	37
タケ亜科	69	67	72	56	93	83
ヨシ属	10	10	3	7	5	9
ウシクサ族	3	4	3	2	−	−
不明	6	6	7	3	1	1
合　計						
イネ科葉部短細胞珪酸体	156	156	197	188	150	148
イネ科葉身機動細胞珪酸体	119	105	108	103	110	130
総　計	275	261	305	291	260	278
珪化組織片						
イネ属穎珪酸体	11	13	8	51	2	4
イネ属短細胞列	14	5	4	59	3	12
ススキ属短細胞列	−	2	−	2	1	3



出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数を基数として百分率で算出した。なお、●○は1%未満、また、珪化組織片の産状を＊で示す。

図２．SK1の植物珪酸体群集と組織片の産状

（3）植物珪酸体分析

結果を表５、図２に示す。単細胞珪酸体、機動細胞珪酸体とも良好に検出される。植物珪酸体群集は、概してタケ亜科が多産し、次いでイネ属が多い傾向にある。ただし、試料番号４ではイネ属が多産する。この他に、ヨシ属、ススキ属、コブナグサ属、イチゴツナギ亜科などが産出する。また、稲籾に形成される穎珪酸体、イネ属短細胞列、ススキ属短細胞列などの組織片も認められる。

表６．SK1の微細物分析結果

試料名 / 分析量			1	2	3	4	5	6
イネ	胚乳	炭化	−	−	−	−	−	23
	穎		1	−	−	−	2	11
		炭化	−	−	−	−	1	79
エノコログサ属	果実		−	−	−	−	−	3
イネ科	果実		−	−	−	−	3	58
カヤツリグサ科	果実		−	−	−	−	5	500
タデ属	果実		−	−	−	−	−	55
ナデシコ科	種子		−	−	−	−	−	98
アブラナ科	種子		−	−	−	−	2	35
メナモミ属	果実		−	−	−	−	1	1
不明種実			−	−	−	−	1	9

（4）微細物分析

結果を表６に示す。草本8分類群（イネ、エノコログサ属、イネ科、カヤツリグサ科、タデ属、ナデシコ科、アブラナ科、メナモミ属）が確認される。以下に、本分析にて同定された種実遺体の形態的特徴などを記す。

＜草本＞

・イネ（*Oryza sativa* L.） イネ科イネ属

胚乳と穎（果）の破片が検出された。長楕円形でやや偏平。長さ５～７mm、幅３mm、厚さ1.5mm程度。胚乳は炭化しており黒色を呈す。一端に胚が脱落した凹部があり、表面はやや平滑で、２～３本の縦溝がみられる。表面に穎の破片が付着している個体がみられた。穎は淡褐色、炭化個体は黒色。基部に円柱状の特徴的な果実序柄がある。穎は薄く、表面には顆粒状突起が規則的に縦列する。

・エノコログサ属（*Setaria*） イネ科

果実が検出された。淡～黄褐色、狭卵形～半偏球形でやや偏平。長さ2.5mm、径1.5mm程度。穎は薄く柔らかく、表面には微細な網目模様が縦列する。

・イネ科（Gramineae）

果実が検出された。形態上差異のある複数の種を一括した。淡褐色、半挟卵体でやや偏平。長さ３～５mm、径1.5～2mm程度。穎は薄く柔らかくて弾力がある。表面には微細な網目模様が縦列する。分析中に発芽した個体がみられた。

・カヤツリグサ科（Cyperaceae）

果実が検出された。ホタルイ属以外の形態上差異のある複数の種を一括した。淡～茶褐色。三稜またはレンズ状倒卵体。径1.8mm程度。頂部の柱頭部分がわずかに伸びる。表面には微細な網目模様がありざらつく。スゲ属（Carex）と思われる個体を含む。

・タデ属（*Polygonum*） タデ科

果実が検出された。形態上差異のある複数の種を一括した。灰褐色、三稜状広卵体で長さ５～６mm、径2.5mm程度。果皮は薄く柔らかく、表面は微細な網目模様が発達しざらつく個体も見られる。

先端はわずかに尖り、３花柱は欠損する。

・ナデシコ科（Caryophyllaceae）

種子が検出された。茶褐色、腎状円形でやや偏平。径1.3mm程度。基部は凹み、臍がある。種皮は薄く柔らかい。種皮表面には、臍を取り囲むように瘤状突起が同心円状に配列する。

・アブラナ科（Cruciferae）

種子が検出された。赤褐色、楕円形で偏平。長さ1mm、幅0.7mm程度。基部は切形で、両面の同一側には臍点から頂部へ伸びる１個の浅い溝がある。種子表面には微細な網目模様がある。

・メナモミ属（*Siegesbeckia*） キク科

果実が検出された。黒色、狭三角状菱形体で腹面方向へ湾曲する。長さ2.5mm、径1.5mm程度。頂部には円形の臍がある。表面には浅い縦溝と微細な網目がある。網目の境壁は短く突出し、全体に微細な突起がある。

３．考察

（１）遺構の埋積過程

珪藻化石は、試料番号６で検出されないが、試料番号２，４で検出される。試料番号２，４の珪藻化石群集は、類似しており、陸生珪藻が大半を示す。このことから、遺構覆土は、周辺の乾いた土壌が流れ込んで埋積したと考えられる。

（２）遺跡周辺の古環境

花粉化石がほとんど検出されないことから、ここでは、植物珪酸体と種実遺体の産状から検討を行う。植物珪酸体をみるとタケ亜科が多産する。これらは、本集水域の自然堤防上に生育していたものと思われる。一方、種実遺体では、草本類のエノコログサ属、イネ科、カヤツリグサ科、タデ属、ナデシコ科、アブラナ科、メナモミ属などが検出されている。これらは、開けた人里付近に生育する、いわゆる人里植物と呼ばれる種類を含む分類群である。よって、これらの種類は、遺構周辺に生育しており、遺構が埋積する過程において流入したと思われる。

（３）植物利用

遺構覆土からは、イネ属やススキ属の珪化組織片が検出される。これらの種類が燃料材として用いられていたことが推定される。また、炭化米や炭化した稲籾片などが検出されている。これらは、残渣等が廃棄されたものの可能性がある。

Ⅴ．基本層序の調査

１．試料

基本層序は、大きく１層から３層に分層されており、１－１層、１－２層、１－３層、１－４層、２－１層、２－２層、３－１層、３－２層に細分されている。１層が耕作土であり、２層が平安時代の遺物包含層、３層が地山にあたる。

試料採取地点では、この内１－１層、１－２層、２層、３－１層、３－２層が確認され、各層より層位試料を採取した（写真１，図４）。この内、１－１層、２層、３－１層について、珪藻分析と植物珪酸体分析を実施する。

２．結果

（１）珪藻分析

結果を表７、図３に示す。珪藻化石群集は、各試料で異なる。３－１層は、珪藻化石の検出個数が少なく、僅かに検出される珪藻化石も保存状態が悪い。

２層では、淡水－汽水性種の*Rhopalodia gibberula*、流水不定性種の*Diploneis parma*、未区分陸生珪藻の*Diploneis yatukaensis*、陸生珪藻Ａ群の*Hantzschia amphioxys*が多産する。

１－１層では、止水性種の*Aulacoseira ambigua*が多産し、流水不定性種の*Amphora affinis*、*Gomphonema parvulum*、*Pinnularia viridis*、止水生種の*Aulacoseira laevissima*を伴う。

（２）植物珪酸体分析

結果を表８、図５に示す。植物珪酸体群集は、各試料で異なる。３－１層では、タケ亜科、ヨシ属、ススキ属が僅かに検出される程度である。

２層では、タケ亜科、ヨシ属が高率に出現し、イネ属、コブナグサ属、ススキ属、イチゴツナギ亜科を僅かに伴う。

１－１層では、引き続きタケ亜科が多く産出するが、ヨシ属が減少し、イネ属が多産する。また、イネ属の穎珪酸体、短細胞列、機動細胞列が認められる。

３．考察

３－１層では、珪藻化石、植物珪酸体ともほとんど産出しない。これは、砂分の多い堆積物であることを考慮すると、堆積速度が速く、堆積物中に珪藻化石や植物珪酸体がほとんど取り込まれなかった、あるいは堆積後に流失したことが考えられる。いずれにしても、この時期、周辺は、氾濫などの河川の影響を強く受ける状態であったと思われる。

２層で産出する珪藻化石をみると、淡水－汽水性種が多く見られ、沼沢湿地付着性種群、止水性種、陸生珪藻などが産出する。このことから、当時、周辺は、富栄養な湿地となっていたが、次第に陸化して表層が乾くようになったと思われる。このような環境の中、湿潤な場所にヨシ属やコブナグサ属、また乾いた場所にタケ亜科やススキ属などが生育していたとみられる。なお、本層準では、イネ属が産出する。ただし、出現率が低率であること、および上位層でイネ属が高率に産出することを考えると、ここでのイネ属は上位からの落ち込みとみられる。

１－１層になると、イネ属が高率に産出し、稲籾に形成される穎珪酸体や細胞列などの組織片が検出される。これは、周辺で稲作が行われていたことを反映している結果と言える。

表７－１．基本層序の珪藻分析結果（１）

種　　類	生態性			環境			
	塩分	pH	流水	指標種	1-1	2	3-1
Bacillaria paradoxa Gmelin	Ogh-Meh	al-bi	l-ph	U	1	–	–
Rhopalodia gibberula (Ehr.)O.Muller	Ogh-Meh	al-il	ind		6	11	1
Achnanthes exigua Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	S	1	–	–
Achnanthes lanceolata (Breb.)Grunow	Ogh-ind	ind	r-ph	K,T	2	–	–
Amphora affinis Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	U	10	2	–
Aulacoseira ambigua (Grun.)Simonsen	Ogh-ind	al-il	l-bi	N,U	50	–	–
Aulacoseira islandica (O.Mull.)Simonsen	Ogh-ind	al-il	l-ph	U	6	–	–
Aulacoseira laevissima (Grun.)Krammer	Ogh-hob	ac-il	l-ph		12	–	–
Caloneis leptosoma Krammer & Lange-Bertalot	Ogh-ind	ind	l-ph	RB	–	1	–
Caloneis silicula (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind		1	–	–
Caloneis silicula var. minuta (Grun.)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind		1	–	–
Cymbella cistula (Ehr.)Kirchner	Ogh-ind	al-il	l-ph	O,T	1	–	–
Cymbella heteropleura var. minor Cleve	Ogh-hob	ac-il	l-ph		2	–	–
Cymbella naviculiformis Auerswald	Ogh-ind	ind	ind	O	4	–	–
Cymbella silesiaca Bleisch	Ogh-ind	ind	ind	T	2	1	–
Cymbella tumida (Breb. ex Kuetz.)V.Heurck	Ogh-ind	al-il	ind	T	2	–	–
Cymbella spp.	Ogh-unk	unk	unk		–	1	2
Diploneis ovalis (Hilse)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	T	3	4	–
Diploneis parma Cleve	Ogh-ind	ind	ind		4	10	–
Diploneis yatukaensis Horikawa et Okuno	Ogh-ind	ind	l-ph	RI	–	17	–
Diploneis spp.	Ogh-unk	unk	unk		–	6	1
Eunotia bilunaris (Ehr.)Mills	Ogh-hob	ac-il	ind		1	–	–
Eunotia flexuosa (Breb.)Kuetzing	Ogh-hob	ac-il	l-ph	O	2	–	–
Eunotia implicata Noepel & Lange-Bertalot	Ogh-hob	ac-il	ind	O	1	–	–
Eunotia monodon var. tropica Hustedt	Ogh-hob	ac-il	l-ph	O	1	–	–
Eunotia pectinalis var. minor (Kuetz.)Rabenhorst	Ogh-hob	ac-il	ind	O,T	3	1	–
Eunotia pectinalis var. undulata (Ralfs)Rabenhorst	Ogh-hob	ac-il	ind	O	3	3	–
Eunotia praerupta var. bidens Grunow	Ogh-hob	ac-il	l-ph	RB,O	1	1	–
Fragilaria construens (Ehr.)Grunow	Ogh-ind	al-il	l-ph	U	1	–	–
Fragilaria construens fo. venter (Ehr.)Hustedt	Ogh-ind	al-il	l-ph	S	3	–	–
Gomphonema angustatum (Kuetz.)Rabenhorst	Ogh-ind	al-il	ind	U	1	–	–
Gomphonema gracile Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-ph	O,U	3	–	–
Gomphonema parvulum Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	U	7	1	–
Gomphonema pseudosphaerophorum H.Kobayasi	Ogh-ind	al-il	l-ph	T	1	–	–
Gyrosigma exilis (Grun.)Reimer	Ogh-ind	al-il	ind		1	1	–
Hantzschia amphioxys (Ehr.)Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA,U	–	10	–
Navicula ariiensis Okuno	Ogh-unk	unk	unk		1	–	–
Navicula elginensis var. neglecta (Krass.)Patrick	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	1	–	–
Navicula mutica Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	RA,S	–	2	–
Navicula placenta Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	ind	RI	1	–	–
Navicula placenta fo. obtusa Meister	Ogh-ind	al-il	ind		2	–	–
Navicula viridula (Kuetz.)Kuetzing	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,U	6	–	–
Navicula viridula var. rostellata (Kuetz.)Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,U	3	–	–
Neidium affine (Ehr.)Cleve	Ogh-hob	ind	l-bi		1	–	–
Neidium ampliatum (Ehr.)Krammer	Ogh-ind	ind	l-ph		1	2	–
Neidium dubium (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	ind	ind		1	–	–
Nitzschia amphibia Grunow	Ogh-ind	al-bi	ind	U	1	–	–
Nitzschia debilis (Arnott)Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RB,U	1	–	–
Pinnularia acrosphaeria W.Smith	Ogh-ind	al-il	l-ph	O	6	1	–
Pinnularia appendiculata (Ag.)Cleve	Ogh-hob	ind	ind	RB	1	–	–

表７－２．基本層序の珪藻分析結果（２）

種　　類	生態性			環境			
	塩分	pH	流水	指標種	1-1	2	3-1
Pinnularia borealis Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	RA		1	
Pinnularia brauniana (Grun.)Mills	Ogh-hob	ac-bi	l-ph		1	–	–
Pinnularia brevicostata Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind		5	1	–
Pinnularia divergens var. decrescens (Grun.)Krammer	Ogh-hob	ac-il	ind		2	–	–
Pinnularia gibba Ehrenberg	Ogh-ind	ac-il	ind	O,U	4	1	–
Pinnularia graciloides Hustedt	Ogh-hob	ac-il	ind		1	–	–
Pinnularia imperatrix Mills	Ogh-hob	ac-il	l-ph		–	–	1
Pinnularia mesolepta (Ehr.)W.Smith	Ogh-ind	ind	ind	S	1	–	–
Pinnularia neomajor Krammer	Ogh-ind	ac-il	l-bi	T	2	–	–
Pinnularia nodosa Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-ph	O	1	–	–
Pinnularia obscura Krasske	Ogh-ind	ind	ind	RA	–	1	–
Pinnularia ornata H.Kobayasi	Ogh-hob	ac-il	l-ph		1	–	–
Pinnularia pseudogibba Krammer	Ogh-hob	ac-il	ind		1	–	–
Pinnularia rupestris Hantzsch	Ogh-hob	ac-il	ind		2	–	–
Pinnularia schroederii (Hust.)Krammer	Ogh-ind	ind	ind	RI	–	4	–
Pinnularia subnodosa Hustedt	Ogh-hob	ac-il	l-ph		2	1	–
Pinnularia substomatophora Hustedt	Ogh-hob	ac-il	l-ph		1	–	–
Pinnularia sudetica (Hilse)M.Peragallo	Ogh-hob	ac-il	l-ph		–	1	–
Pinnularia ueno Skvortzow	Ogh-hob	ac-il	l-ph		2	–	–
Pinnularia viridis (Nitz.)Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	O	7	1	1
Pinnularia spp.	Ogh-unk	unk	unk		–	7	5
Rhopalodia gibba (Ehr.)O.Muller	Ogh-ind	al-il	ind		1	1	–
Sellaphora americana (Ehr.)Mann	Ogh-ind	al-il	l-ph		2	–	–
Sellaphora laevissima (Kuetz.)Mann	Ogh-ind	ind	ind		2	–	–
Sellaphora pupula (Kuetz.)Mereschkowsky	Ogh-ind	ind	ind	U	4	–	–
Stauroneis acuta W.Smith	Ogh-ind	al-il	l-ph		1	–	–
Stauroneis anceps Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	T	–	1	–
Stauroneis japonica H.Kobayasi	Ogh-ind	ind	ind	T	1	–	–
Stauroneis phoenicenteron (Nitz.)Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph	O	1	2	–
Stauroneis phoenicenteron fo. hattorii Tsumura	Ogh-ind	ind	ind	O	1	1	–
Stauroneis spp.	Ogh-unk	unk	unk		–	1	4
Surirella elegans Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-bi		1	–	–
Surirella tenera Gregory	Ogh-hob	ind	l-bi		1	1	–
海水生種					0	0	0
海水～汽水生種					0	0	0
汽水生種					0	0	0
淡水～汽水生種					7	11	1
淡水生種					204	89	14
珪藻化石総数					211	100	15

凡例

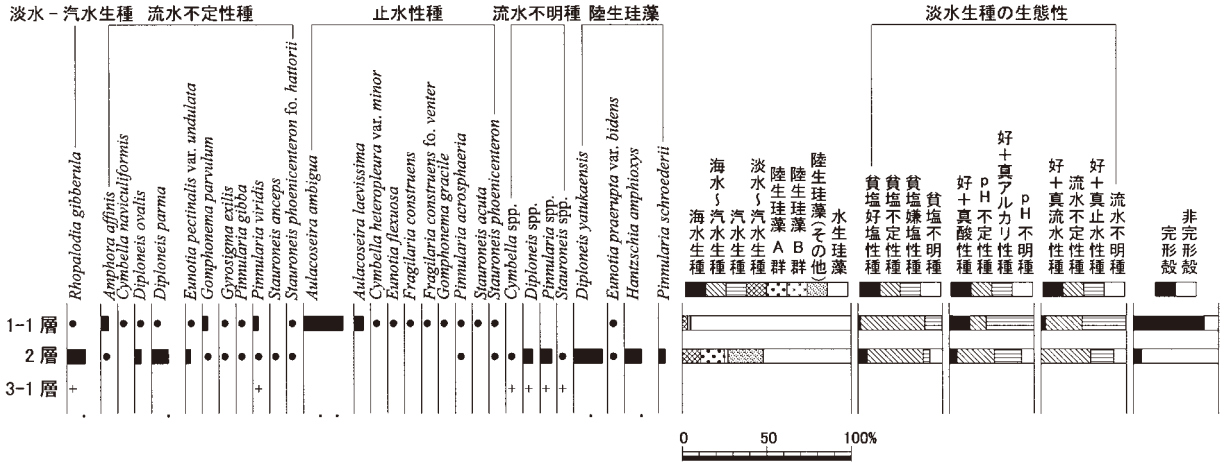
H.R.：塩分濃度に対する適応性
Euh　：海水生種
Meh　：汽水生種
Ogh-Meh　：淡水－汽水生種
Ogh-hil　：貧塩好塩性種
Ogh-ind　：貧塩不定性種
Ogh-hob　：貧塩嫌塩性種
Ogh-unk　：貧塩不明種

pH：水素イオン濃度に対する適応性
al-bi　：真アルカリ性種
al-il　：好アルカリ性種
ind　：pH不定性種
ac-il　：好酸性種
ac-bi　：真酸性種
unk　：pH不明種

C.R.：流水に対する適応性
l-bi　：真止水性種
l-ph　：好止水性種
ind　：流水不定性種
r-ph　：好流水性種
r-bi　：真流水性種
unk　：流水不明種

環境指標種群

K:中～下流性河川指標種，N:湖沼沼沢湿地指標種，O:沼沢湿地付着生種（以上は安藤，1990）
S:好汚濁性種，U:広域適応性種，T:好清水性種（以上はAsai and Watanabe，1995）
R:陸生珪藻（RA:A群，RB:B群，RI:未区分、伊藤・堀内，1991）



海水－汽水－淡水生種産出率・各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で算出した。なお、●は3%未満、＋は 100 個体未満の試料について検出した種類を示す。

図３．基本層序の主要珪藻化石群集

表８．基本層序の植物珪酸体分析結果

種類 ＼ 試料番号	1-1	2	3-1
イネ科葉部短細胞珪酸体			
イネ族イネ属	18	3	－
タケ亜科	55	45	19
ヨシ属	4	26	1
ウシクサ族コブナグサ属	1	7	－
ウシクサ族ススキ属	8	13	1
イチゴツナギ亜科	2	2	－
不明キビ型	10	27	1
不明ヒゲシバ型	10	7	－
不明ダンチク型	12	7	－
イネ科葉身機動細胞珪酸体			
イネ族イネ属	65	19	－
タケ亜科	64	104	27
ヨシ属	10	30	3
ウシクサ族	1	2	－
不明	5	4	－
合　計			
イネ科葉部短細胞珪酸体	120	137	22
イネ科葉身機動細胞珪酸体	145	159	30
総　計	265	296	52
珪化組織片			
イネ属穎珪酸体	8	－	－
イネ属短細胞列	5	－	－
イネ属機動細胞列	2	－	－

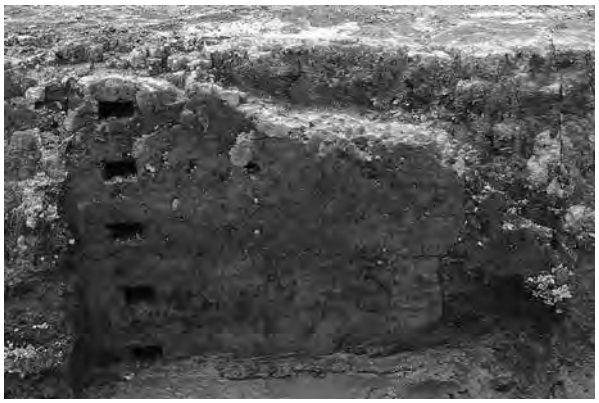


写真１　基本層序サンプリング状況

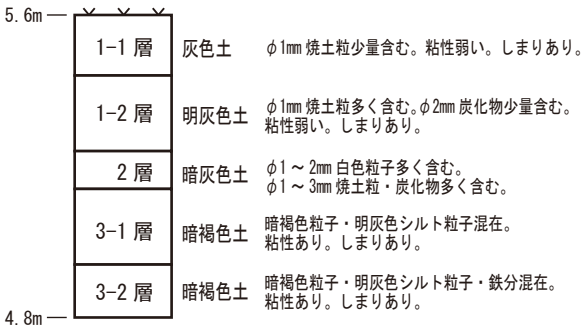
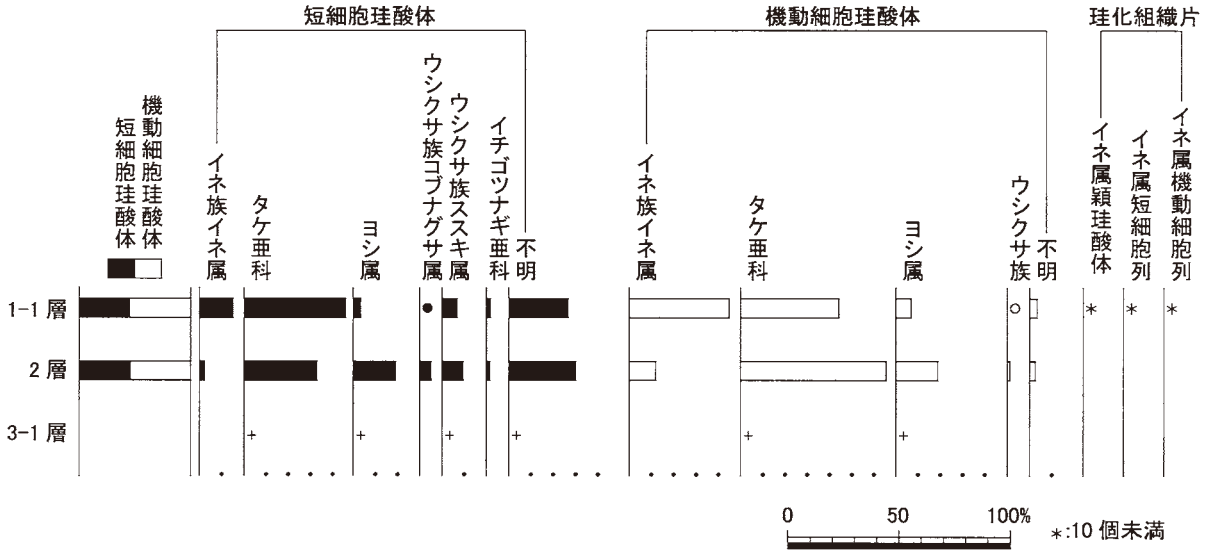


図４．基本層序



出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数を基数として百分率で算出した。
なお、●○は1%未満、＋は 100 個未満の試料で検出された種類を示す。また、珪化組織片の産状を＊で示す。

図５．基本層序の植物珪酸体群集と組織片の産状

引用文献

安藤　一男，1990，淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用．東北地理，42,73－88.

Asai,K. & Watanabe,T.，1995，Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution（2）Saprophilous and saproxenous taxa. Diatom，10，35－47.

原口　和夫・三友　清史・小林　弘，1998，埼玉の藻類　珪藻類．埼玉県植物誌，埼玉県教育委員会，527－600.

石川　茂雄，1994，原色日本植物種子写真図鑑．石川茂雄図鑑刊行委員会，328p.

伊藤　良永・堀内　誠示，1991，陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用．珪藻学会誌，6，23－45.

小杉　正人，1988，珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用．第四紀研究，27，1－20.

Krammer, K.，1992，PINNULARIA. eine Monographie der europaischen Taxa. BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA BAND26. J.CRAMER，353p.

Krammer, K. & Lange－Bertalot, H.，1986，Bacillariophyceae.1. Teil: Naviculaceae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/1.Gustav Fischer Verlag，876p.

Krammer, K. & Lange－Bertalot, H.，1988，Bacillariophyceae.2. Teil: Epithemiaceae, Bacillariaceae, Surirellaceae. In : Suesswasserflora von Mitteleuropa. Band2/2. Gustav Fischer Verlag，536p.

Krammer, K. & Lange－Bertalot,H.，1991a，Bacillariophyceae.3. Teil: Centrales, Fragilariaceae, Eunotiaceae. In : Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/3.Gustav Fischer Verlag，230p.

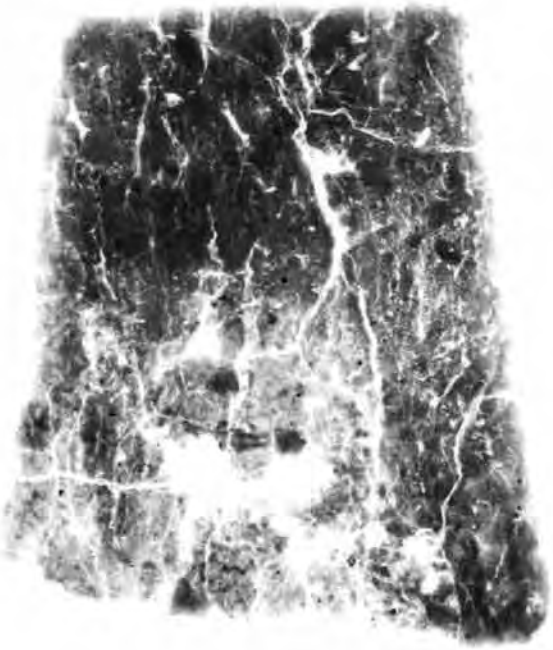
Krammer, K. & Lange－Bertalot, H.，1991b，Bacillariophyceae.4. Teil : Achnanthaceae,Kritsche Ergaenzungen zu Navicula（Lineolatae）und Gomphonema. In : Suesswasserflora von Mitteleuropa. Band2/4. Gustav Fischer Verlag，248p.

町田　洋・新井房夫，1992，火山灰アトラス．東京大学出版会，276p.

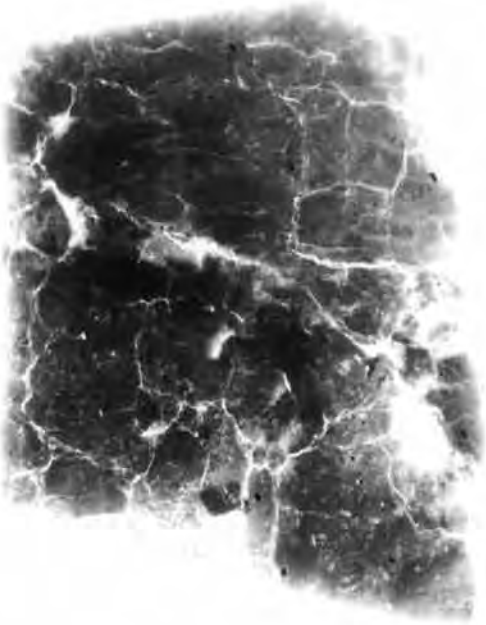
中山　至大・井之口　希秀・南谷　忠志，2000，日本植物種子図鑑.東北大学出版会，642p.

Witkowski,A.,& Lange－Bertalot,H.&Metzeltin,D.，2000，Iconographia Diatomologica 7. Diatom flora of Marine coast I.A.R.G.Gantner Verlag K.G.，881p.

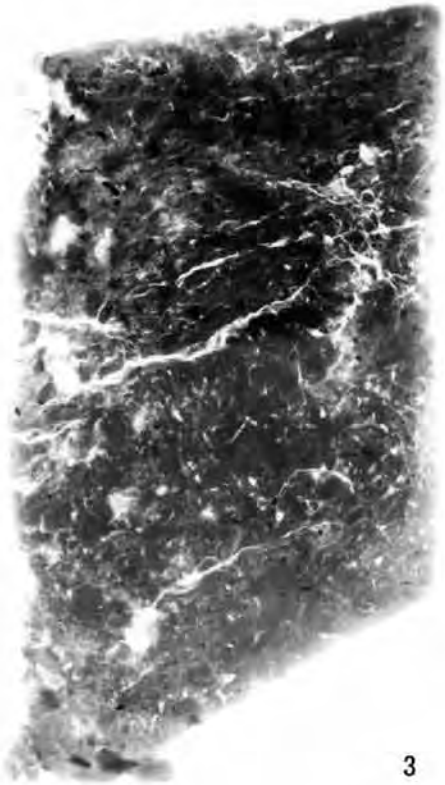
図版１　軟X線写真



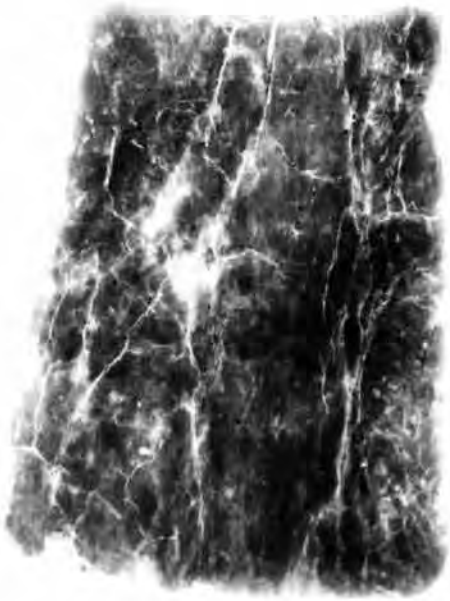
1



2



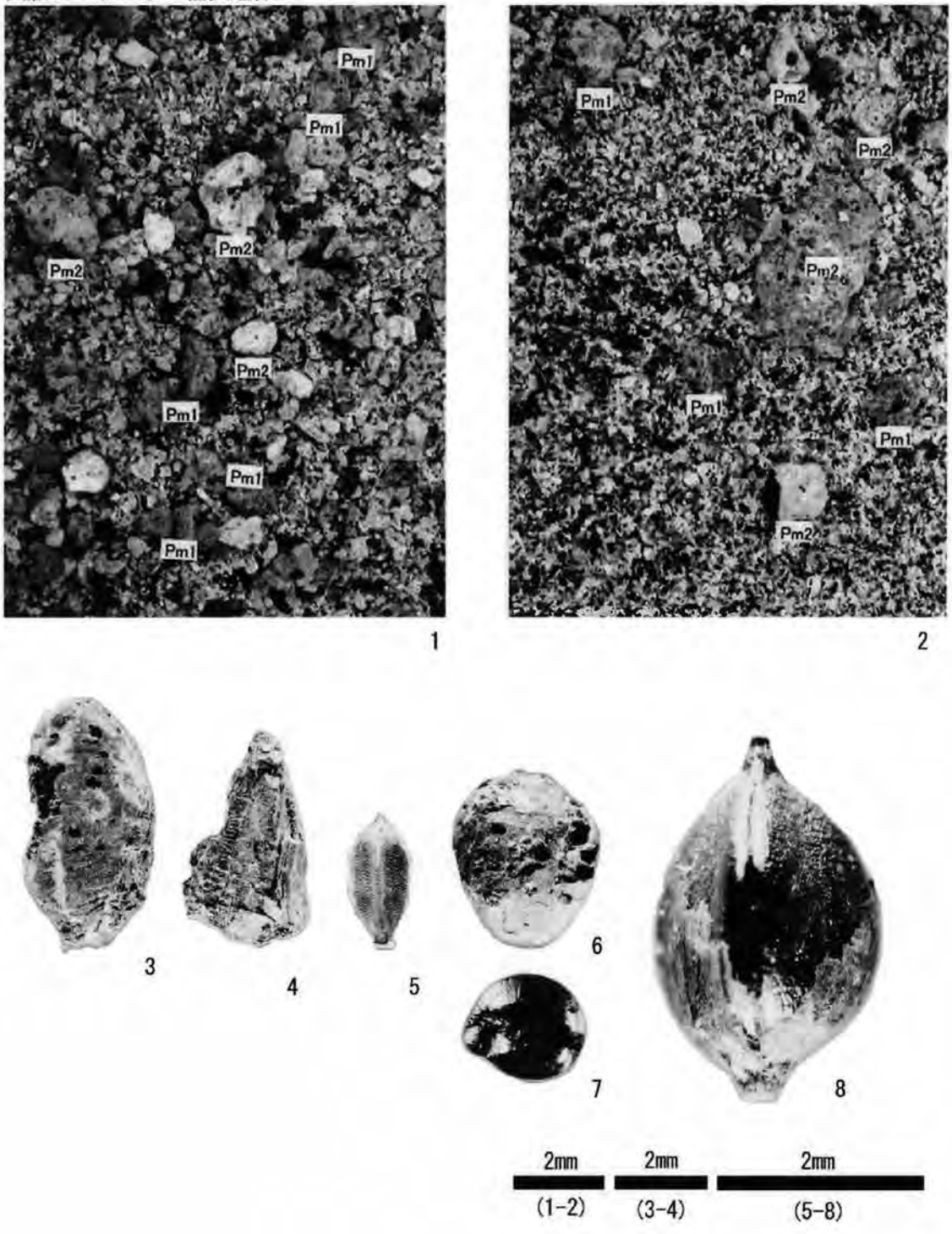
3



4

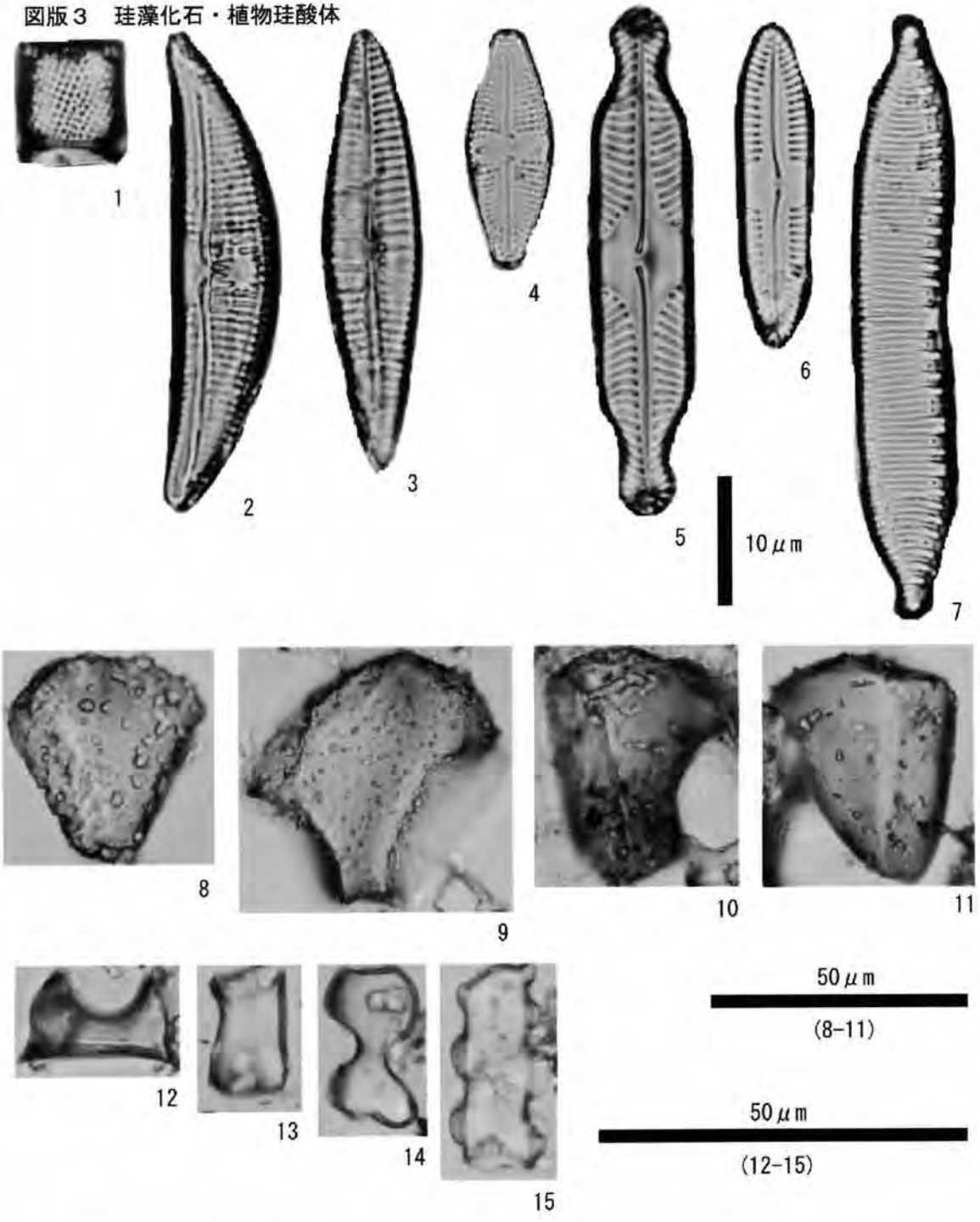
1. 試料番号1　　2. 試料番号2
3. 試料番号3　　4. 試料番号4

図版２　テフラ・種実遺体



1. Hr-FP
2. Hr-FP
3. イネ胚乳
4. イネ穎
5. カヤツリグサ科果実
6. ナデシコ科種子
7. アカザ科種子
8. タデ属果実

図版３　珪藻化石・植物珪酸体



1. Aulacoseira ambigua (Grun.)Simonsen
2. Amphora affinis Kuetzing
3. Gomphonema gracile Ehrenberg
4. Navicula mutica Kuetzing
5. Pinnularia mesolepta (Ehr.)W.Smith
6. Pinnularia schroederii (Hust.)Krammer
7. Hantzschia amphioxys (Ehr.)Grunow
8. タケ亜科機動細胞珪酸体
9. ウシクサ族機動細胞珪酸体
10. ウシクサ族機動細胞珪酸体
11. タケ亜科機動細胞珪酸体
12. タケ亜科短細胞珪酸体
13. タケ亜科短細胞珪酸体
14. ススキ属短細胞珪酸体
15. イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体

Ⅵ　調査のまとめ

調査の成果

遺構

大道第１遺跡の調査では、平安時代の住居跡６軒、土師器焼成坑３基、時期不詳の掘立柱建物跡１軒、溝跡５条を検出した。遺構は平安時代または時期不詳のものに分かれるが、本節では平安時代の様相をまとめておきたい。

住居跡は分布が１箇所に集中するが重複するものはなく、おおむね５ｍ前後の間隔をおいて配置される。いずれも北カマドまたは東カマドであり、軸方向も概ね一致するとみられ、計画的な配置を窺わせる。ただし、第５号住居跡だけはカマドが検出されず、平面プランが台形であるなど異質な要素を含み、単なる居住とは異なる用途の施設としての可能性をもつ。

その他のいずれの住居跡においても、カマドは奥壁から突出して設けられるが、なかでも第６号竪穴住居のカマドでは、内部に多数の土器が並べられ、支脚の上には土器をかぶせ、その前には完形土器を正位で置くなど、住居の廃絶に伴い何らかの儀礼的行為があったことが、出土状況から推察された（橋本2002）。

土師器焼成坑はいずれも２～３ｍ間隔で配置され、少ないながらも群集する。円形を基調とし、壁面に被熱痕跡をもたず、奥・手前の位置関係がないことからＢⅡ類焼成坑に該当し、９世紀以降に普及・展開するものとされる（望月1997、望月・木立1997）。

大道第２遺跡の調査では、平安時代の住居跡２軒、土師器焼成坑２基、土坑３基、時期不詳の掘立柱建物跡３軒、柱列跡５基、溝跡１条、土坑12基、ピット11基を検出した。

平安時代の様相についてまとめると、住居の配置は近接し方位・主軸も近似するが、各住居の規模には大きな隔たりがある。土師器焼成坑は密集せず、やや離れた配置をとる。いずれもＢⅡ類焼成坑に該当するものだろうが、大道第１遺跡ＳＫ１～３と比較すると深さがあり、後世の削平をあまり受けていないようである。

遺物

大道遺跡の出土遺物は土器が主体であり、特にロクロ土師器が大部分を占める。ロクロ土師器は坏・高台付坏が多く、坏は底部回転糸切り後無調整のものが大半を占める。これに対して須恵器の出土量はごく少ない。南比企、常総、新治、猿投、湖西産など各窯の製品がみとめられるものの、いずれも数点のみの出土である。このほか、数点だが灰釉陶器も出土している。

近隣において、大道遺跡の土器様相に近い遺跡としては春日部市八木崎遺跡（金子・田中2002）、八潮市八條遺跡（福田2013）が挙げられる。出土した武蔵型甕の形態的特徴などを考慮すると、集落の経営期間は９世紀第３四半期（八木崎遺跡Ⅵ期）～第４四半期（八木崎遺跡Ⅶ期）に比定してよいだろう。前者には大道第１遺跡ＳＩ１～３、大道第２遺跡ＳＩ１、後者には大道第２遺跡ＳＩ２が対応する。なお、大道第１・第２遺跡ともに、ロクロ土師器の高台付坏が八木崎・八條の住居跡出土土器よりも明らかに多く組成しており、本地域における供膳具の特色といえるかもしれない。

土器以外の出土資料としては漁労具、鍛冶関連遺物がある。

大道第１遺跡ＳＩ１では土錘が16点出土した。いずれも法量としては、当該期に普遍的な形態・サイズである。谷口榮氏の分類ではＶｂ類またはＶｃ類に該当し、「小型の刺網程度のもの」による「共同性の薄い漁法」が想定されている（谷口1999）。河川における小規模な漁労活動が生業の一端を担いつつも、土錘の保有が１軒の住居に偏る状況は、「共同性の薄さ」を裏付けるものといえよう。

鍛冶関連遺物としては、大道第１・第２遺跡ともに釘・刀子・くさび等の鉄製品が出土し、羽口破片も出土した。また、鉄滓が大道第１遺跡では合計317.8ｇ、大道第２遺跡では合計292.1g出土した。鉄滓の量は決して多くなく、炉跡も検出されていないが、集落内では小規模ながら鍛冶活動が行われていたものと推察される。

自然科学分析

大道第２遺跡における自然化学分析の成果としては、①AMS法による放射性炭素（以下、Ｃ14）年代測定、②大道遺跡周辺における古環境の復元、③土師器焼成坑内の珪藻・花粉分析が挙げられる。

Ｃ14年代測定を行った結果、大道第２遺跡ＳＫ１採取の炭化物からはA.D.820 ± 30という測定結果が得られ、９世紀後半という土器の年代観に対して、大筋では整合性ある結果となった。

基本層序の珪藻・花粉分析では、河川の氾濫による影響を受けやすい環境であったのが、集落形成期には湿地帯へと移行し、その後、次第に陸化していった様子が窺われた。

ＳＫ１の採取資料からは、タケ亜科、イネ属、ススキ属のプラントオパールが多く検出され、加えて炭化米が検出されたことなどは、燃焼材についての従来の見解を裏付けるものといえるだろう（北野1997）。

まとめ

大道第１遺跡・大道第２遺跡はどちらも平安時代に営まれた集落であり、その存続期間は９世紀中葉から９世紀末までという短期間のうちに収まっている。竪穴住居跡と土師器焼成坑が組み合わさる景観は両遺跡ともに変わらず、それぞれ同一集落の別地点であるか、あるいは短期間のうちに集落の小規模な移動を繰り返しつつ土師器の生産を行っていたと考えられる。

時期・地域は異なるが、同じく元荒川沿岸に位置し、なおかつ土師器焼成坑を多数検出した蓮田市荒川附遺跡では、元荒川の舟運を利用して土師器等の売買を行う川津的な機能が想定されている（富田2007、福田2014）。大道遺跡についても同様に、当地域における手工業生産を担った集落としての可能性もあろう。今後、両遺跡の中間地点や周辺の発掘調査などにより、集落の全体像や時間的推移の詳細について把握が望まれるところである。

引用・参考文献

赤熊浩一2012「第一章　奈良・平安時代」『春日部市史　庄和地域　原始・古代・中世・近世』

金子直行・田中広明2002『八木崎遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第281集

木立雅朗1997「第１章　第１節　土師器焼成坑を定義するために」『古代の土師器生産と焼成遺構』窯跡研究会（編）

北野博司1997「第３章　第１節　古代の土師器の焼成技術」『古代の土師器生産と焼成遺構』

久保田正寿1997「第３章　第２節　土師器の焼成方法　－二つの「覆い焼き」－」『古代の土師器生産と焼成遺構』

桜岡正信2003「武蔵型甕について－上野地域の生産と流通－」『高崎市史研究』第17号

草加・八潮遺跡確認調査団1981『中川低地遺跡確認調査報告書』草加市史編さん室・八潮市史編さん室

高橋一夫1975「国分期土器の細分・編年試論」『埼玉考古』第13・14号

富田和夫2007『荒川附遺跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第338集

福田　聖2013『八條遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第407集

福田　聖2014『荒川附遺跡Ⅲ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第411集

谷口　榮1999「東京低地の土錐とそのあいかた」『毛長川流域の考古学的調査』足立区伊興遺跡調査会

橋本充史2002「越谷市大道遺跡の調査」『第35回遺跡発掘調査報告会　発表要旨』埼玉考古学会

望月精司1997「第１章　第２節　土師器焼成坑の分類」『古代の土師器生産と焼成遺構』

望月精司・木立雅朗1997「第４章　第１節　土師器焼成坑」『古代の土師器生産と焼成遺構』

写真１　大道第１遺跡遠景（北から）

写真２　調査区空中写真（上が北）

巻末図版２

写真３　ＳＩ１　遺物出土状況（南から）

写真４　ＳＩ１　東カマド　検出状況（西から）

写真５　ＳＩ１　北カマド　支脚出土状況（南西から）

写真６　ＳＩ１　完掘状況（南から）

写真７　ＳＩ２　遺物出土状況（南から）

写真８　ＳＩ２　完掘状況（西から）

写真９　ＳＩ３　完掘状況（南から）

写真10　ＳＩ３　完掘状況（東から）

写真11　ＳＩ４　遺物出土状況（南西から）

写真12　ＳＩ４　カマド　土層断面（南から）

写真13　ＳＩ４　完掘状況（東から）

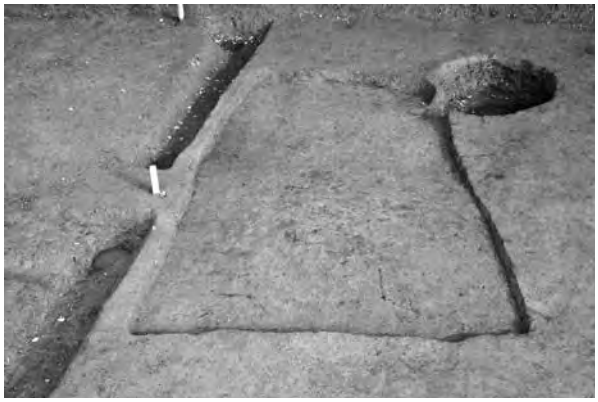


写真14　ＳＩ５　完掘状況（西から）

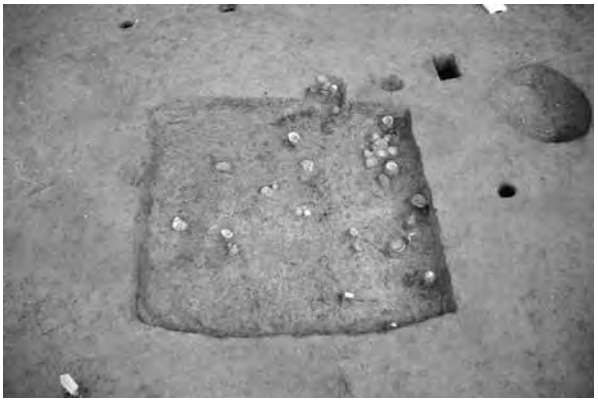


写真15　ＳＩ６　遺物出土状況（西から）

写真16　ＳＩ６　完掘状況（西から）

写真17　ＳＩ６　カマド　遺物出土状況（西から）

写真18　ＳＩ６　カマド　支脚出土状況（西から）

巻末図版４

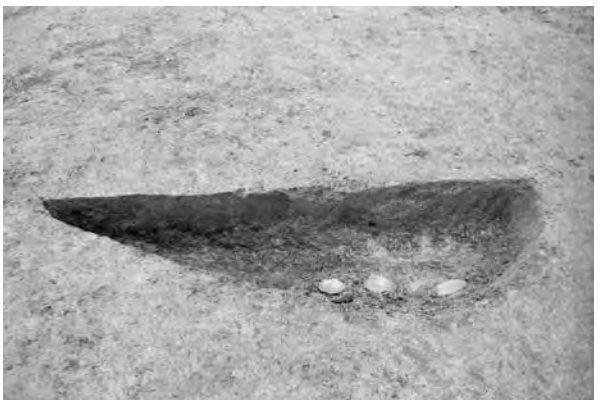


写真19　ＳＫ１　土層断面（南から）

写真20　ＳＫ１　遺物出土状況（北から）

写真21　ＳＫ２　遺物出土状況（西から）

写真22　ＳＫ２　完掘状況（南から）

写真23　ＳＫ３　土層断面（南から）

写真24　ＳＫ３　遺物出土状況（南から）

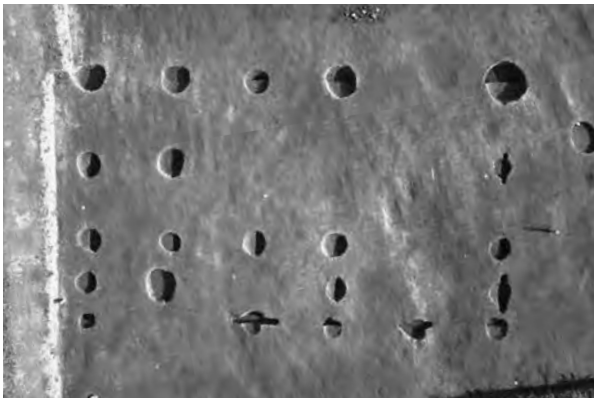
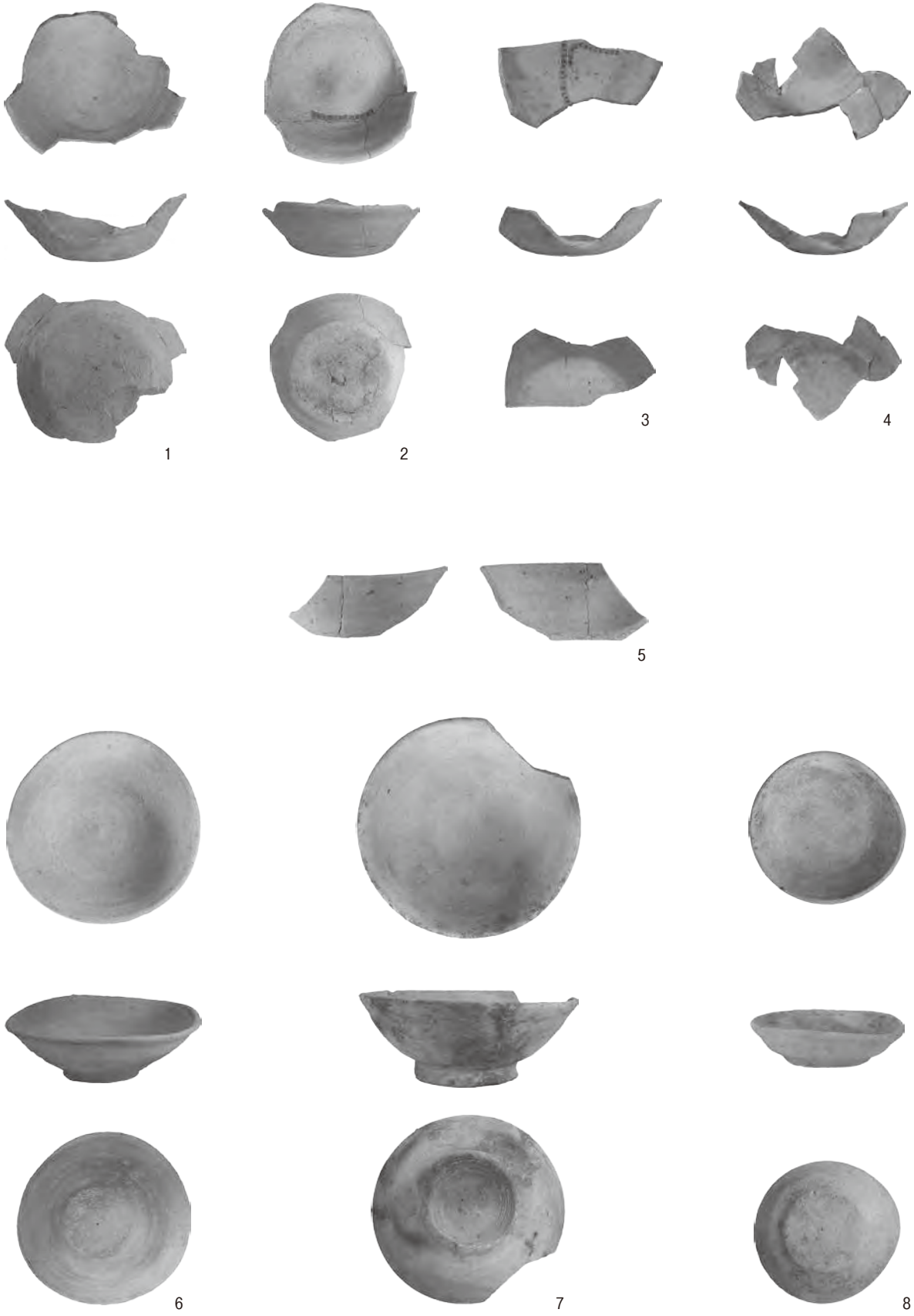


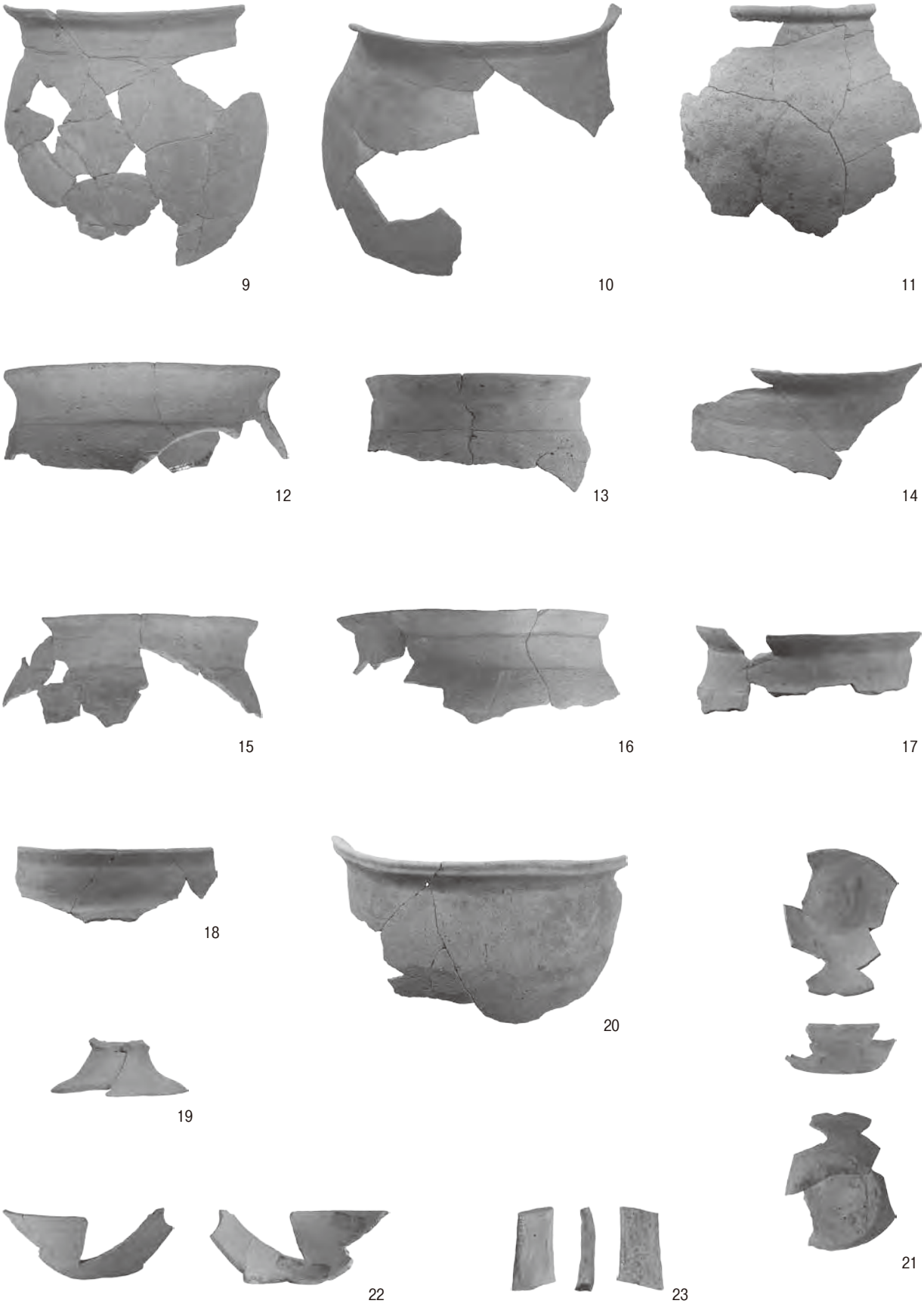
写真25　ＳＢ１　完掘状況（上が東）

写真26　ＳＤ１～５　完掘状況（北西から）

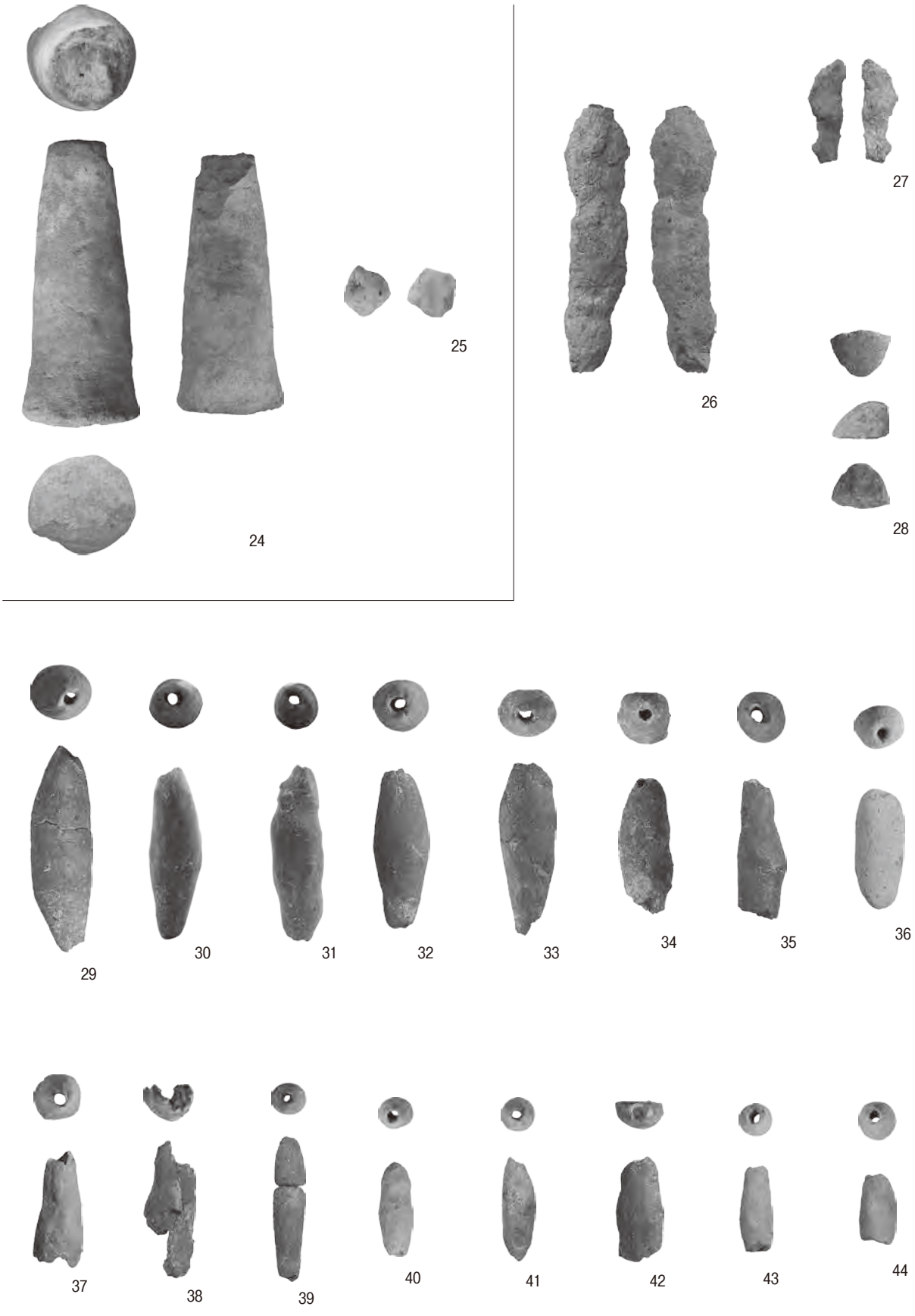


ＳＩ１出土遺物（１）（1/4）

巻末図版６

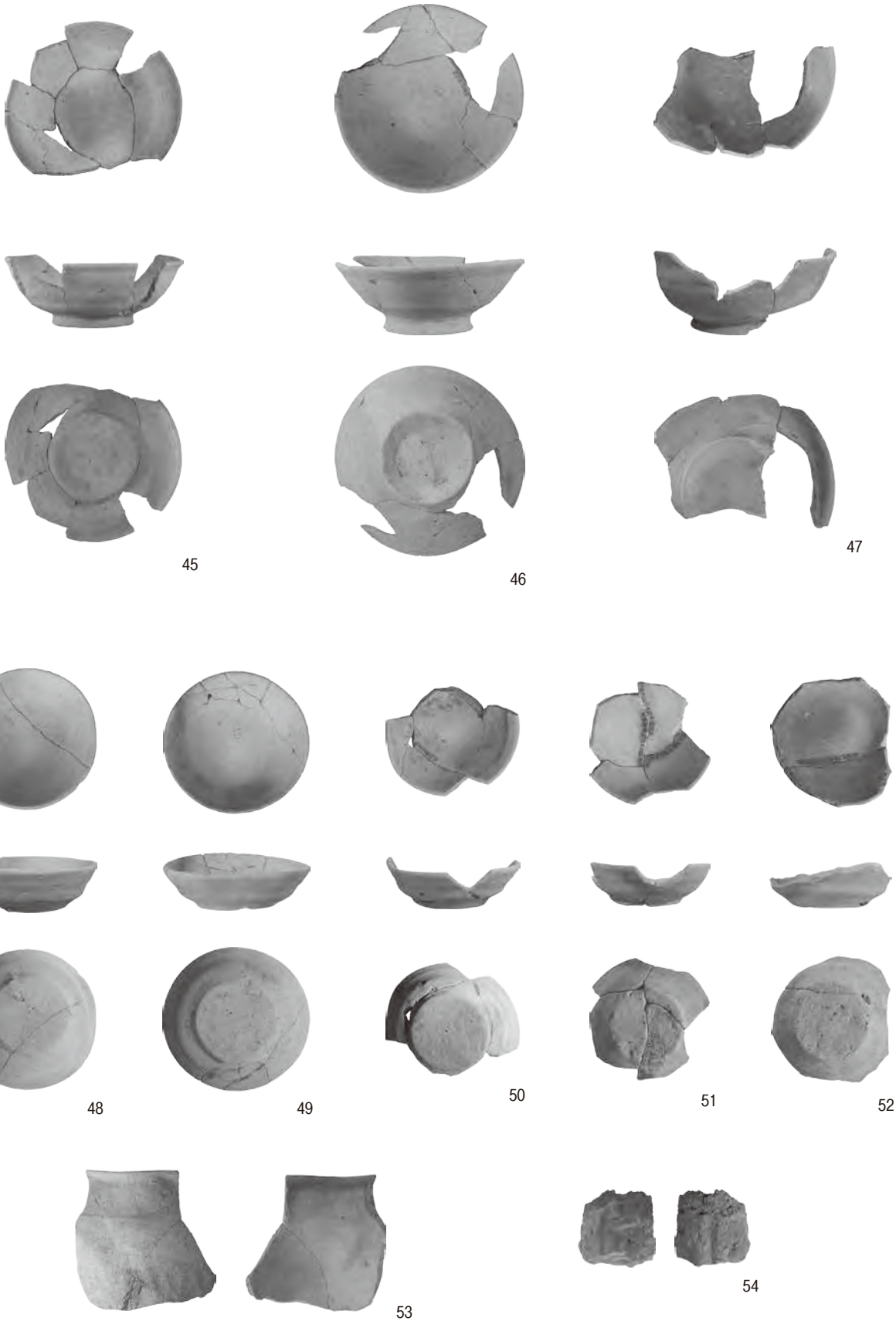


ＳＩ１出土遺物（２）（1/4）

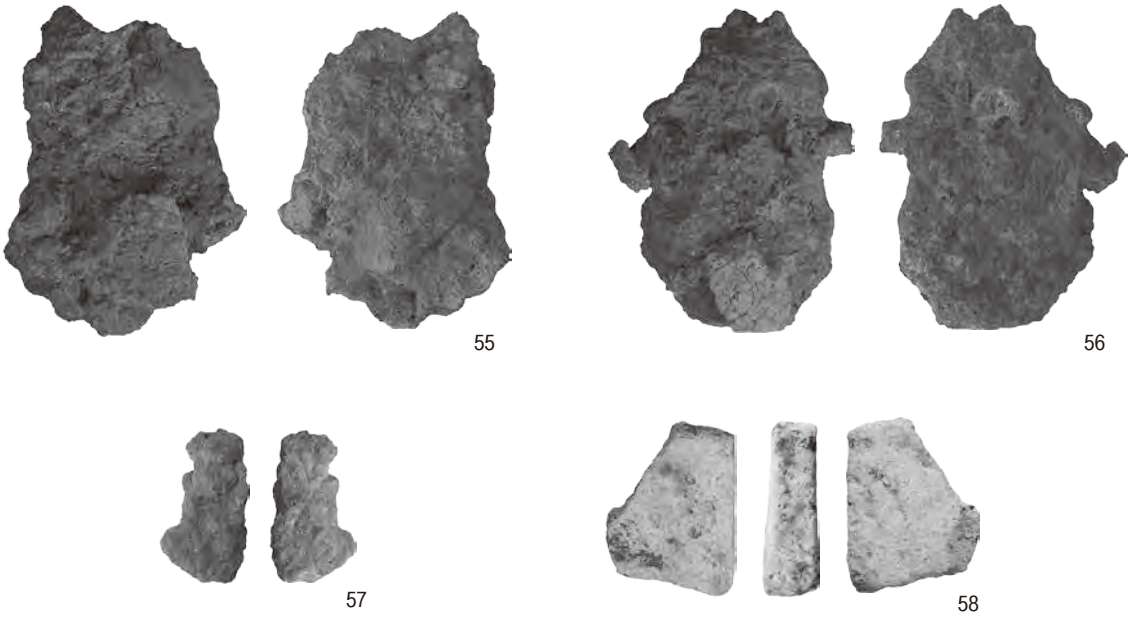


ＳＩ１出土遺物（３）（1/4・1/2）

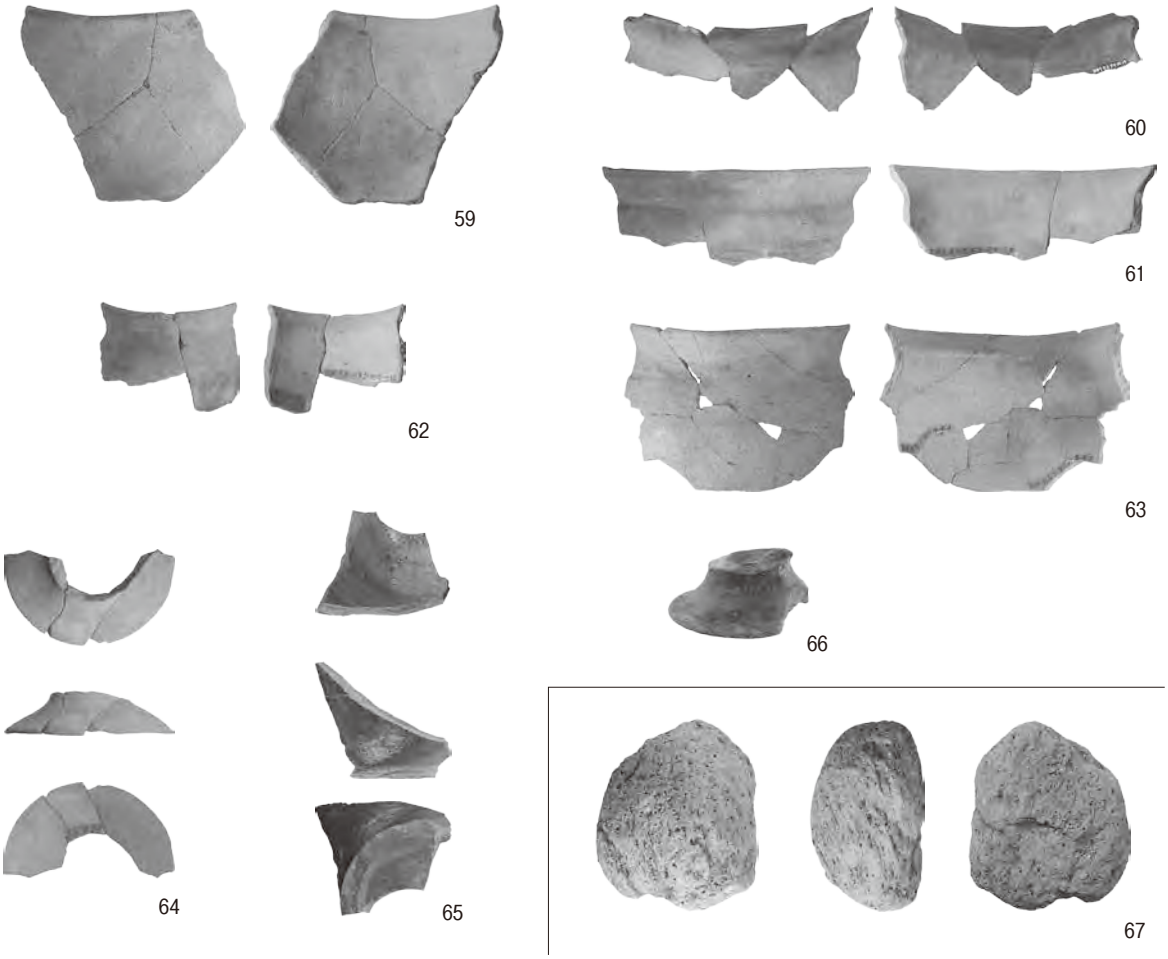
巻末図版８



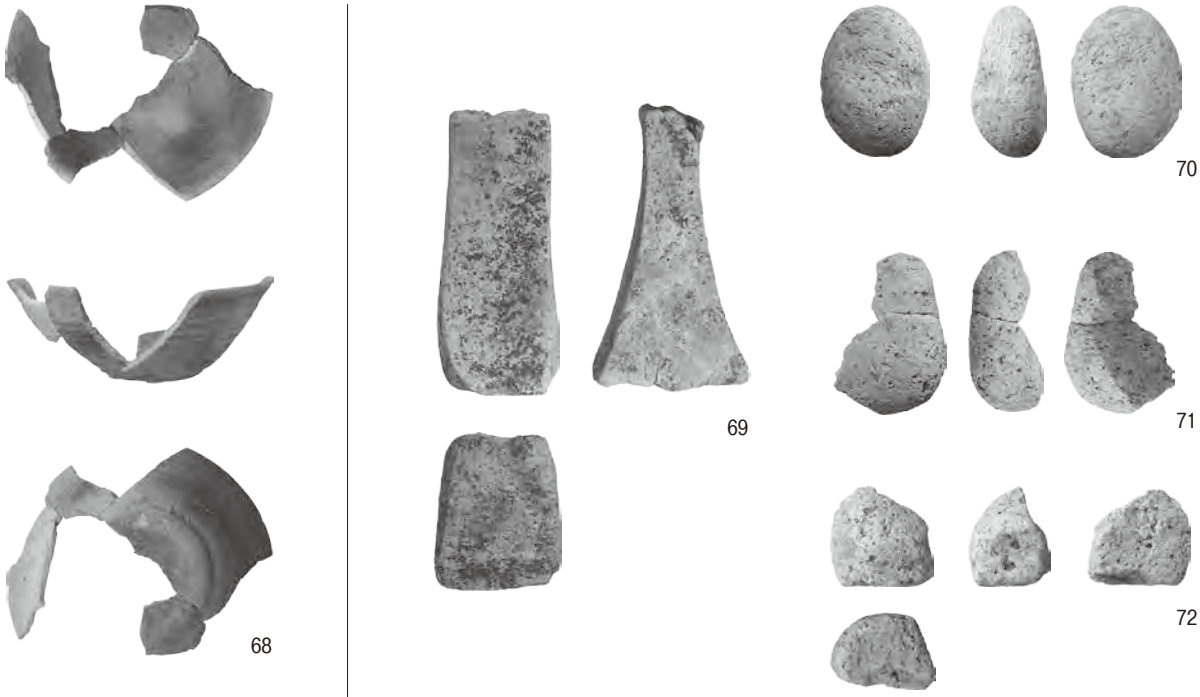
ＳＩ２出土遺物（１）（1/4）



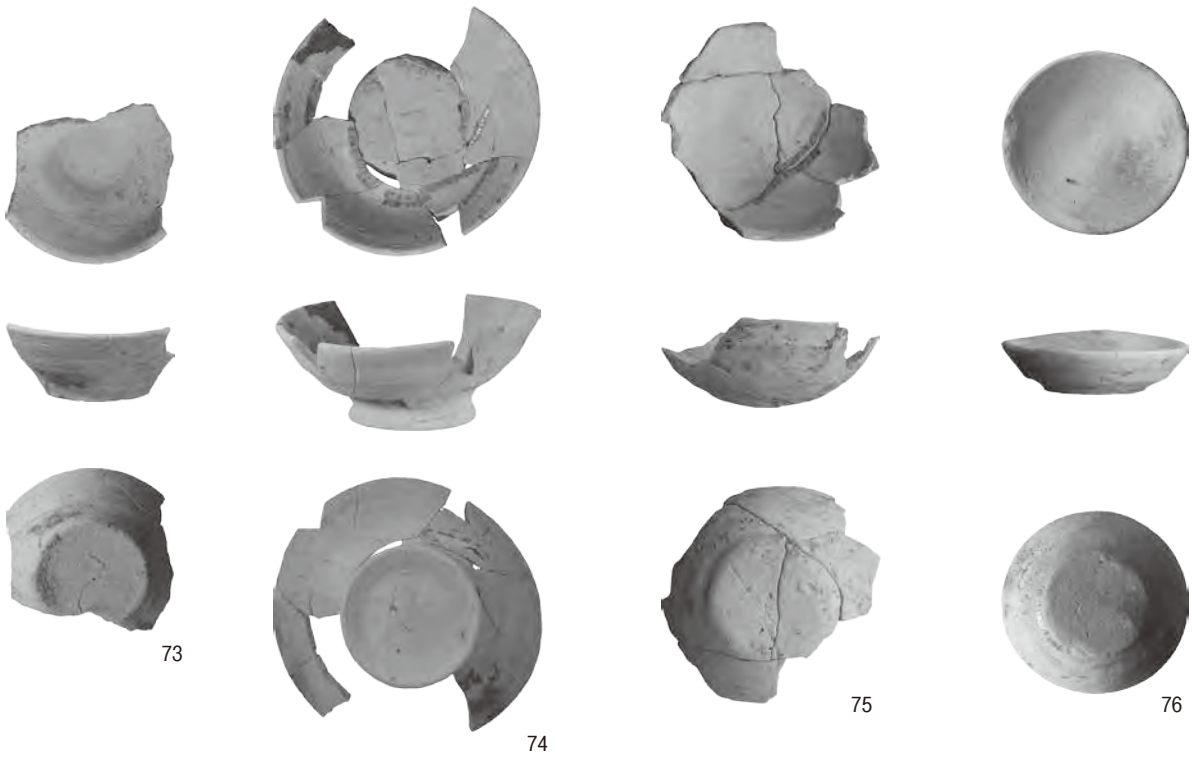
ＳＩ２出土遺物（２）（1/2）



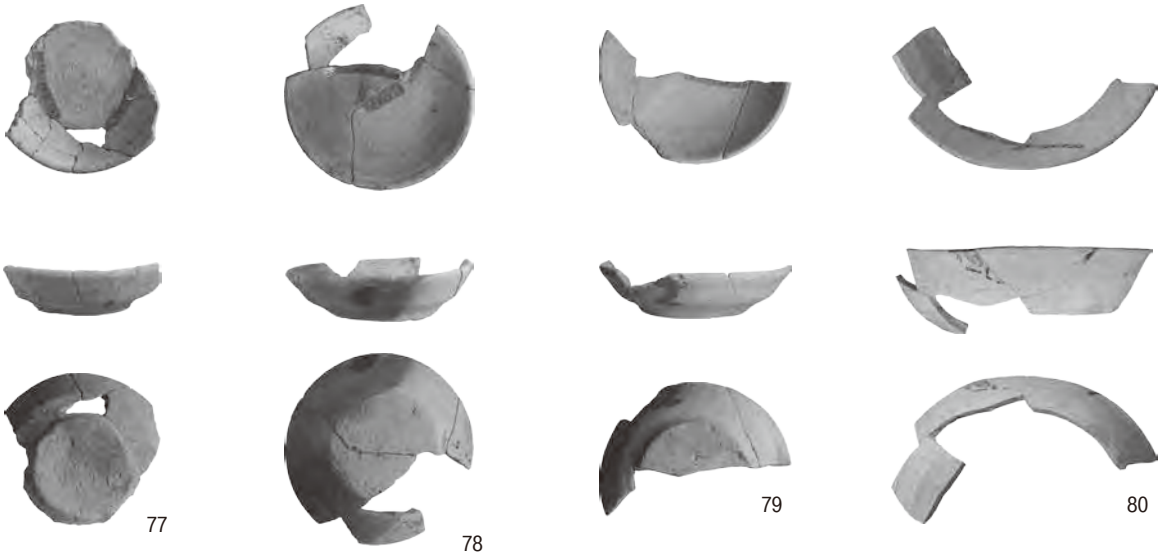
ＳＩ３出土遺物（1/4・1/2）



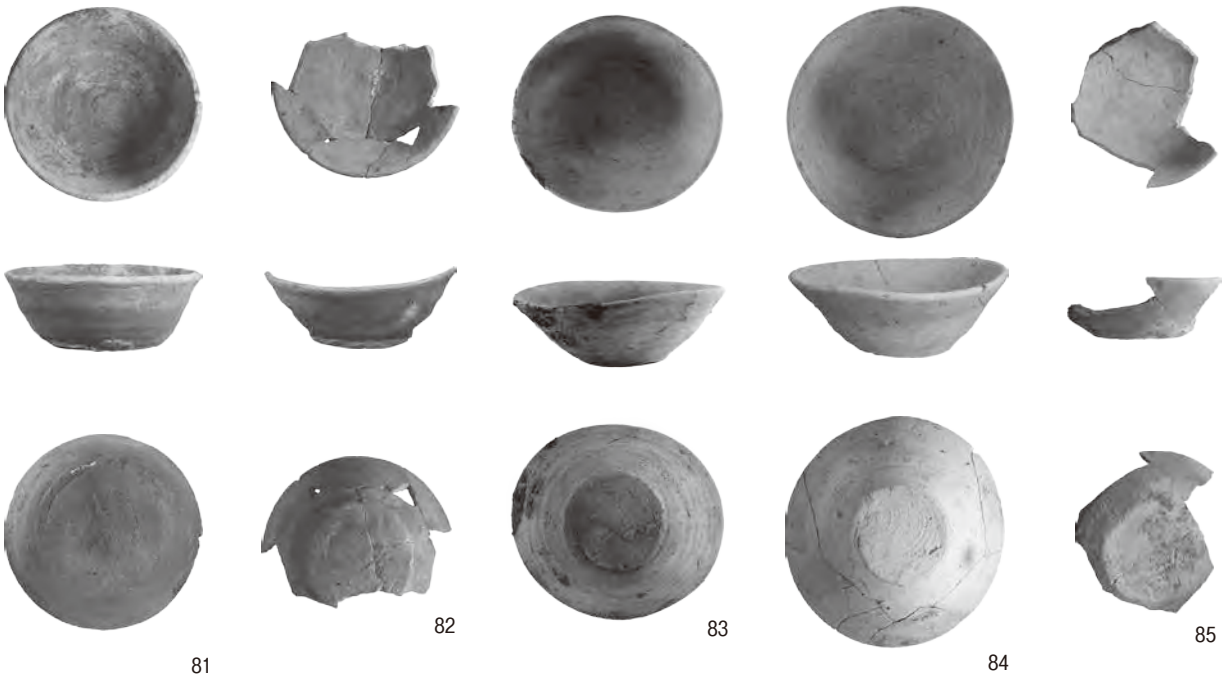
ＳＩ４出土遺物　(1/4・1/2)



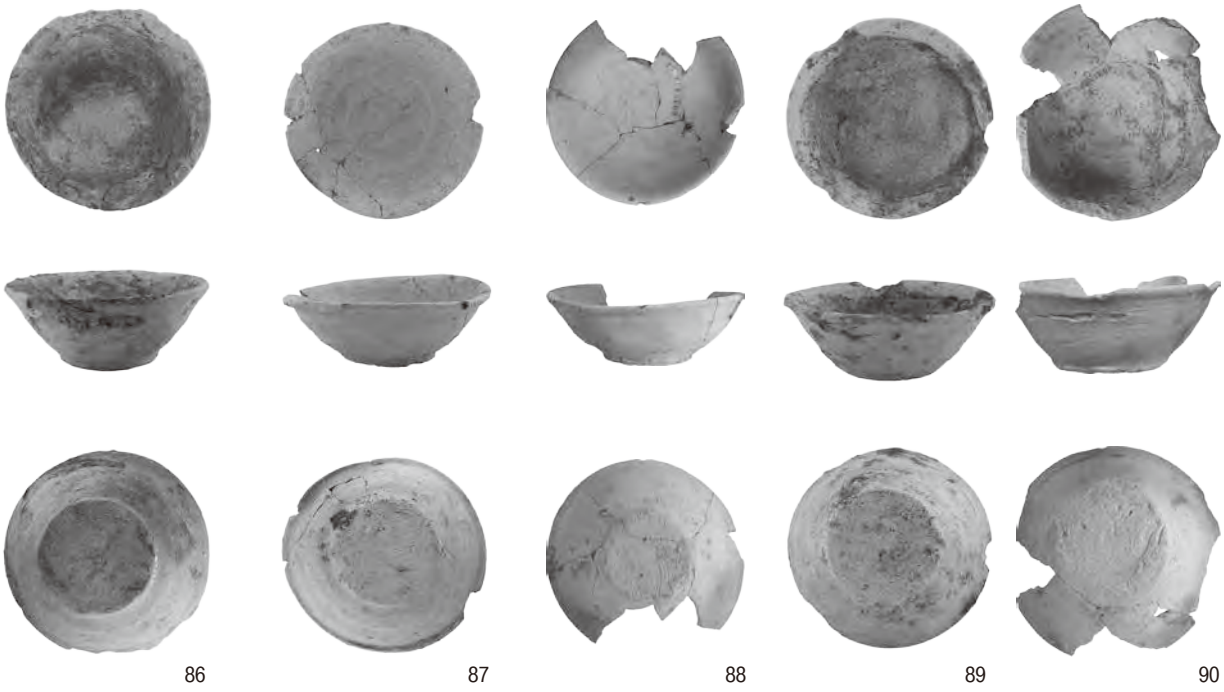
ＳＩ５出土遺物（１）　(1/4)

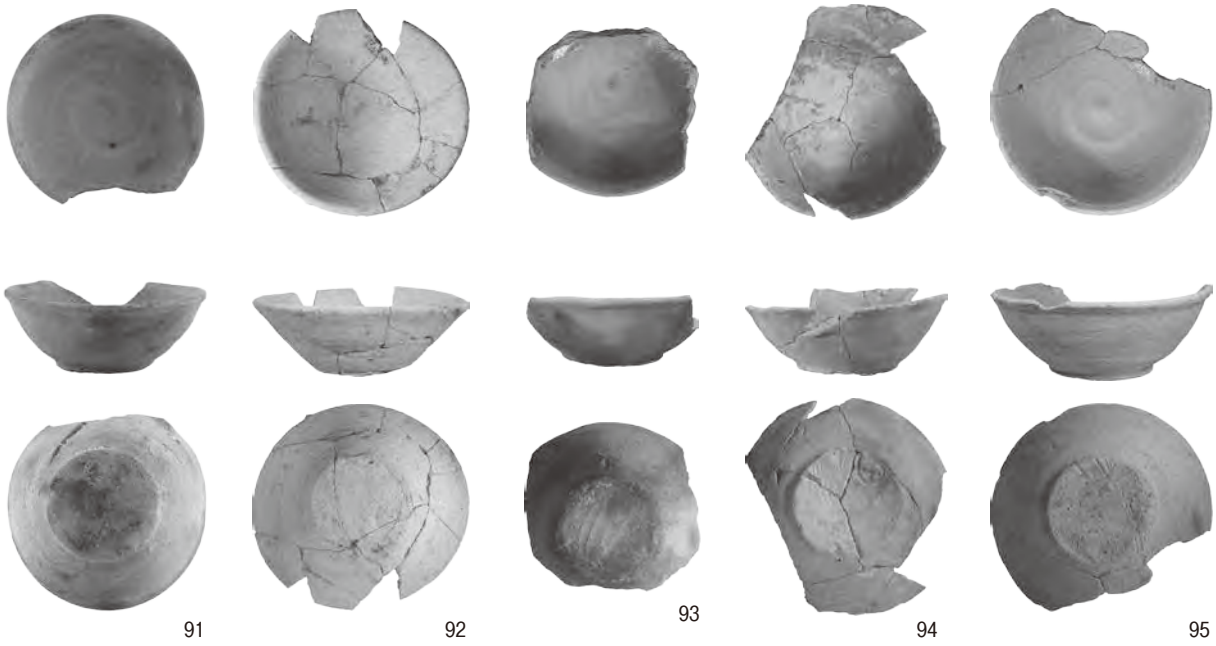


ＳＩ５出土遺物（２）（1/4）

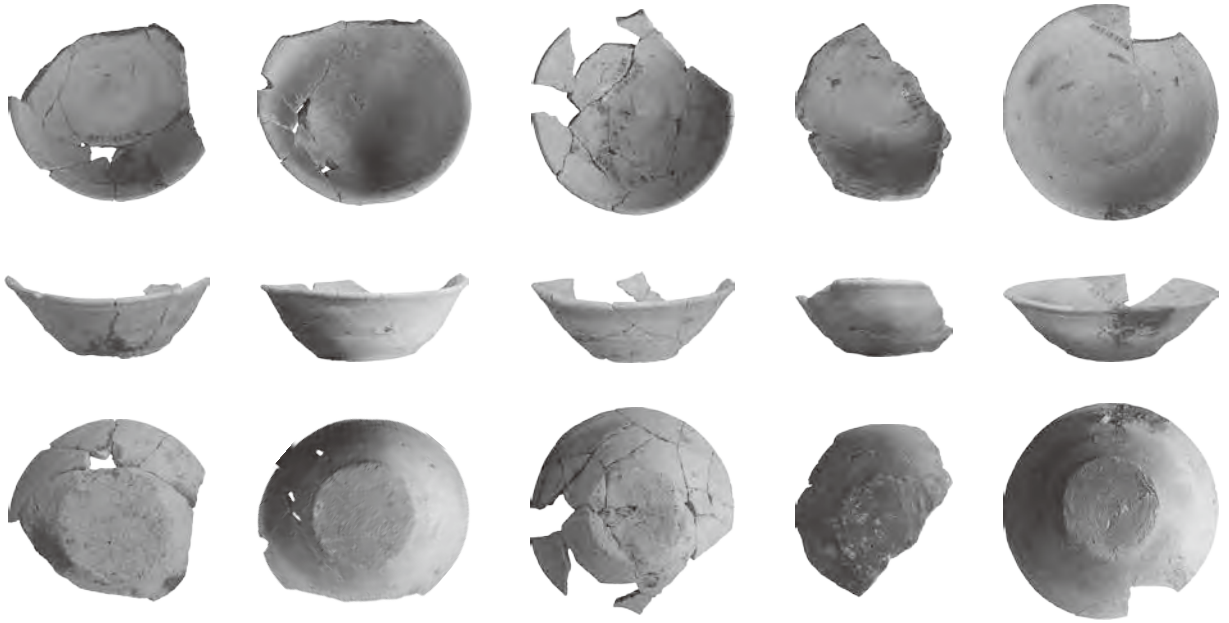


ＳＩ６出土遺物（１）（1/4）

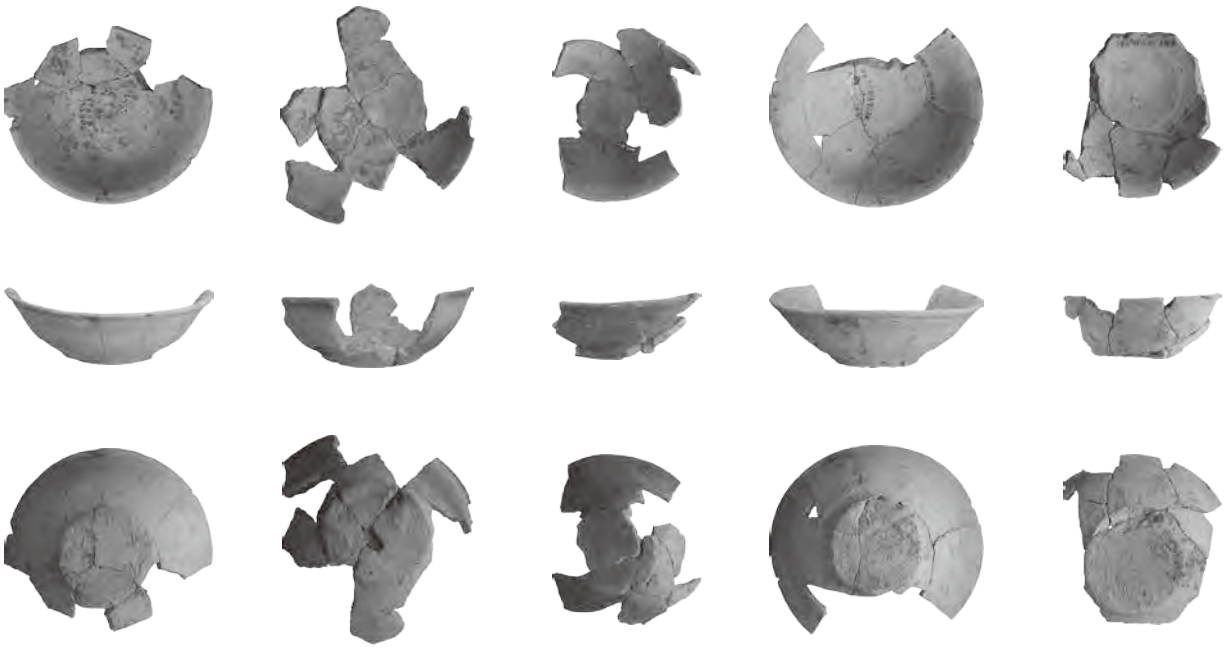




ＳＩ６出土遺物（２）（1/4）

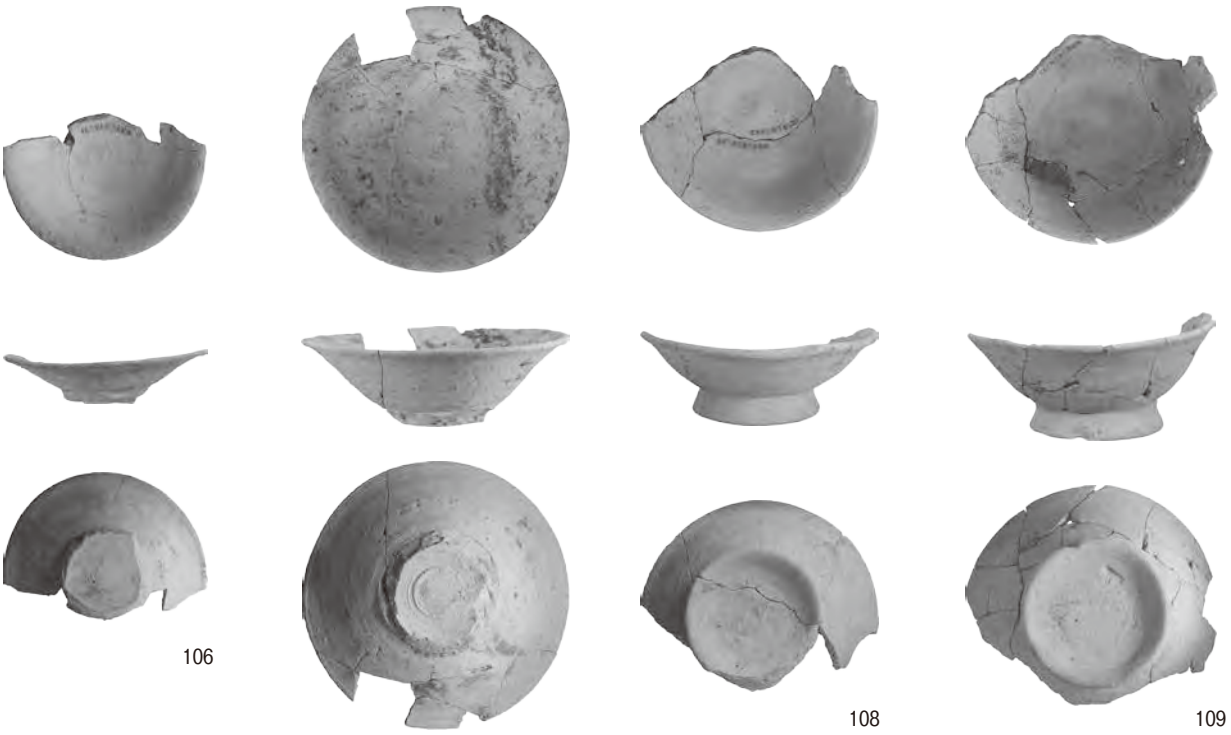


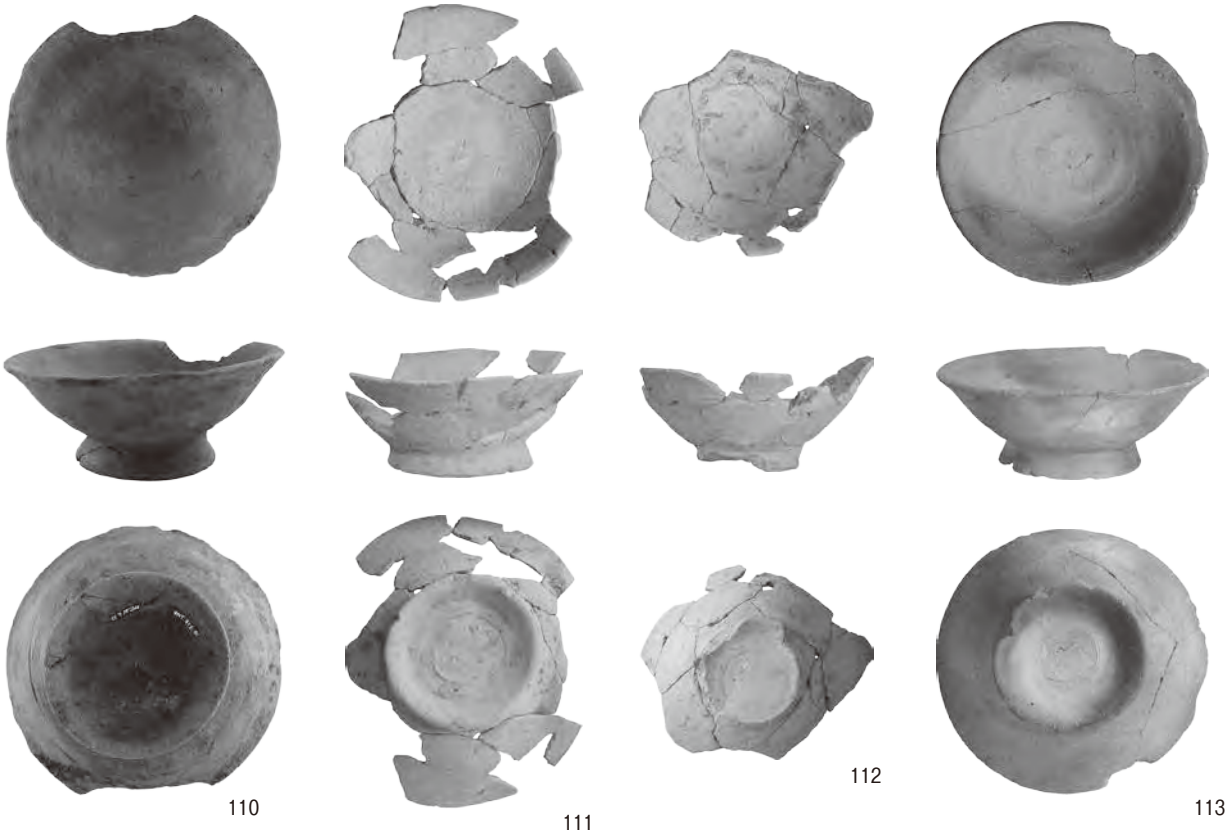
96　97　98　99　100



101　102　103　104　105

ＳＩ６出土遺物（３）（1/4）





ＳＩ６出土遺物（４）（1/4）

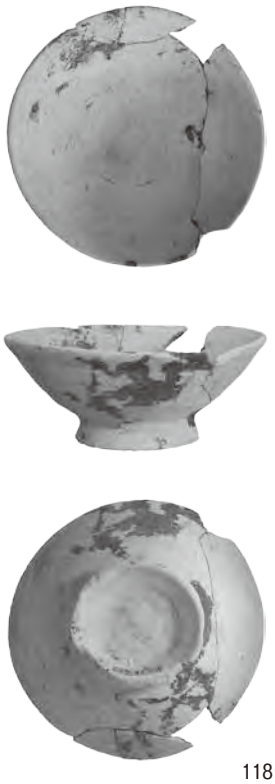
114

115

116

ＳＩ６出土遺物（５）（1/4・1/2）

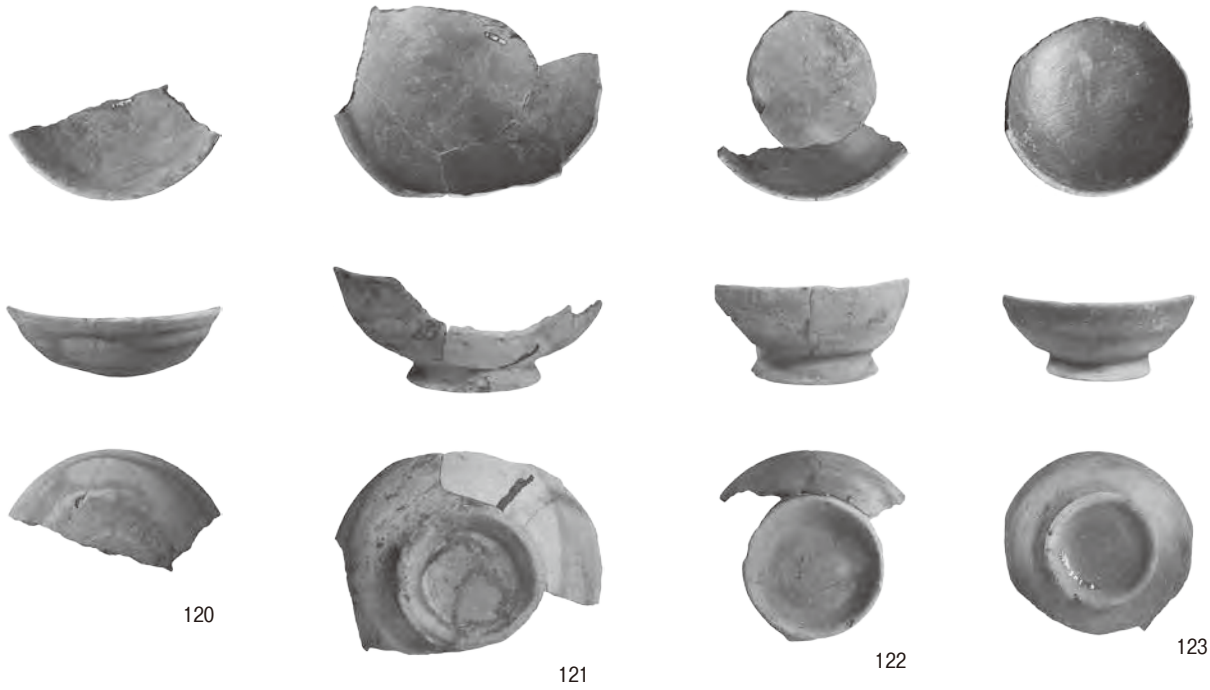
117

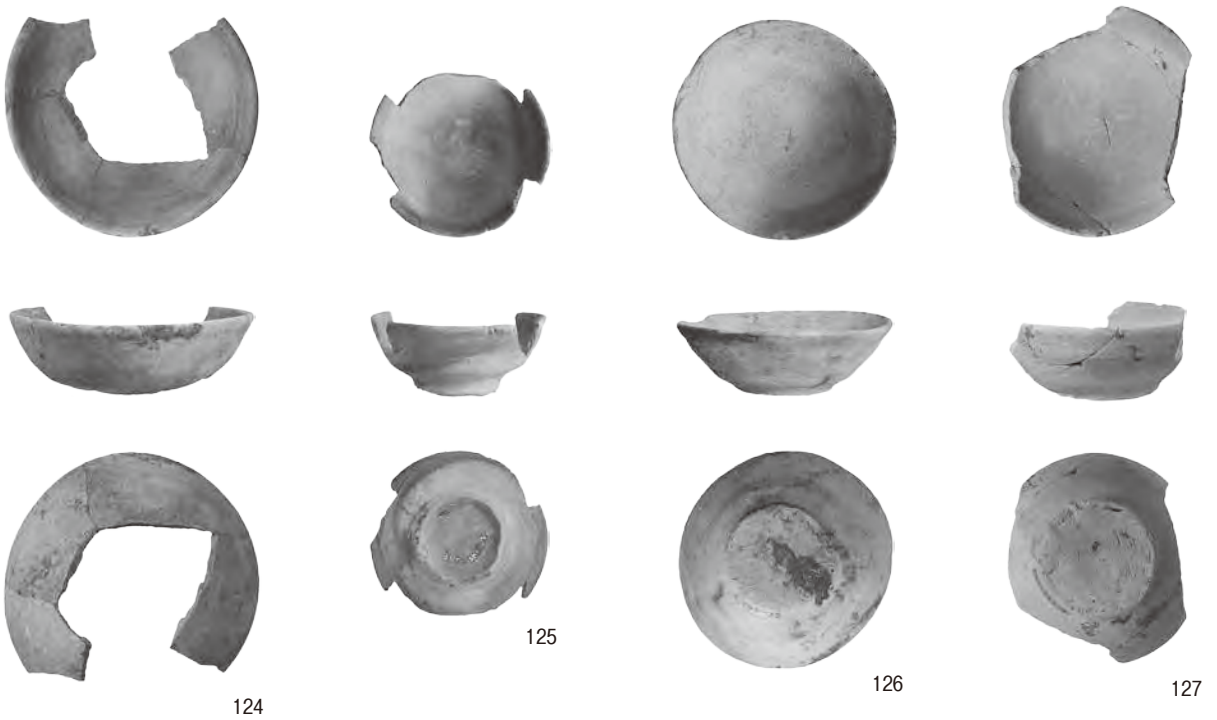


118

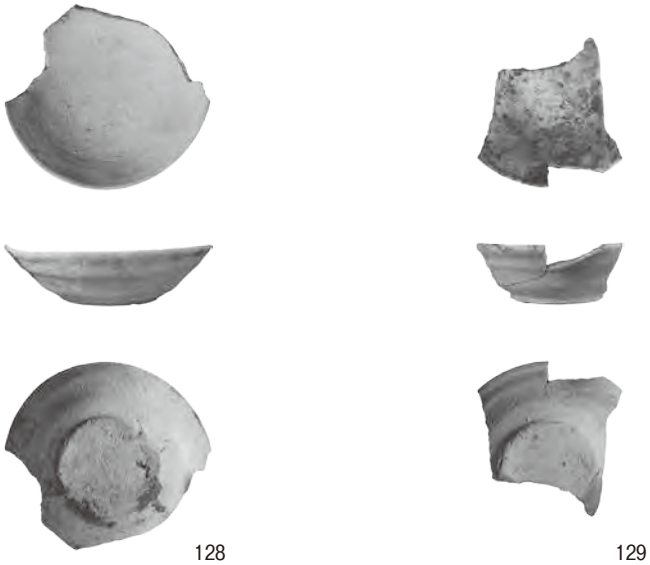
119

ＳＫ１出土遺物（１）（1/4）



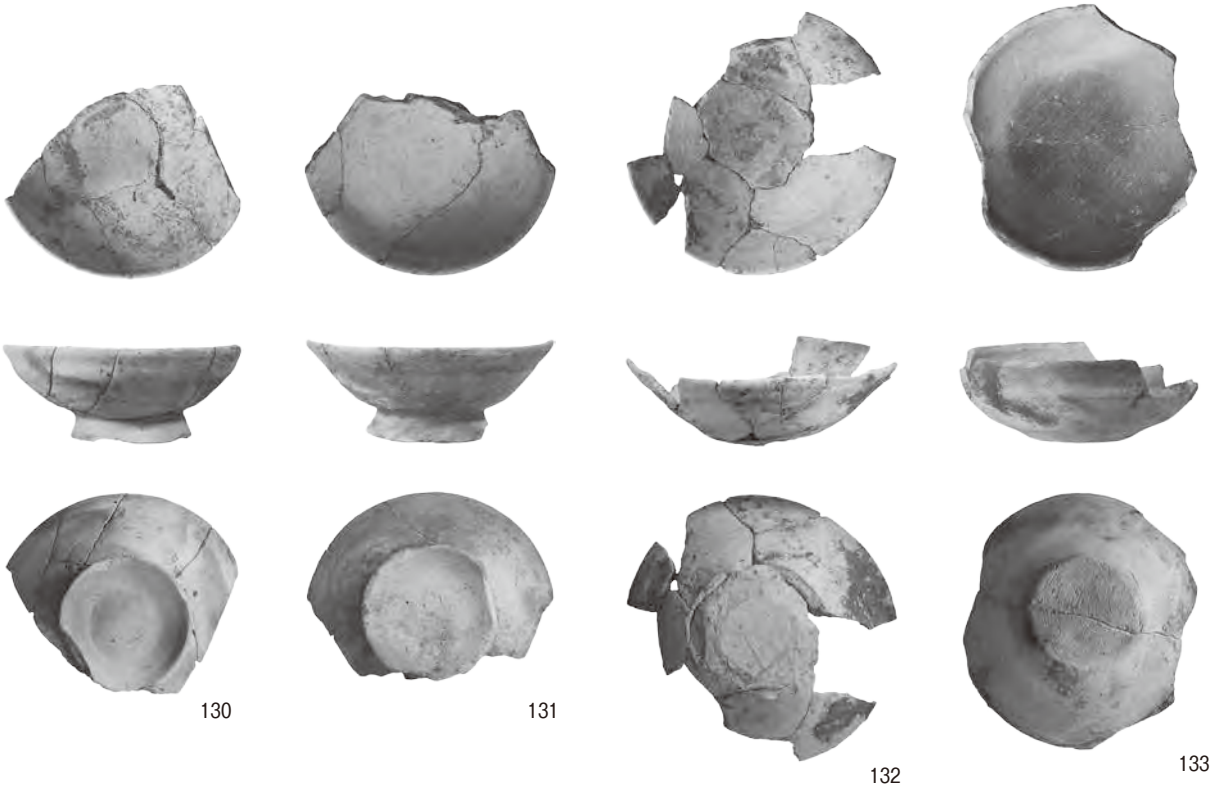


ＳＫ１出土遺物（２）（1/4）



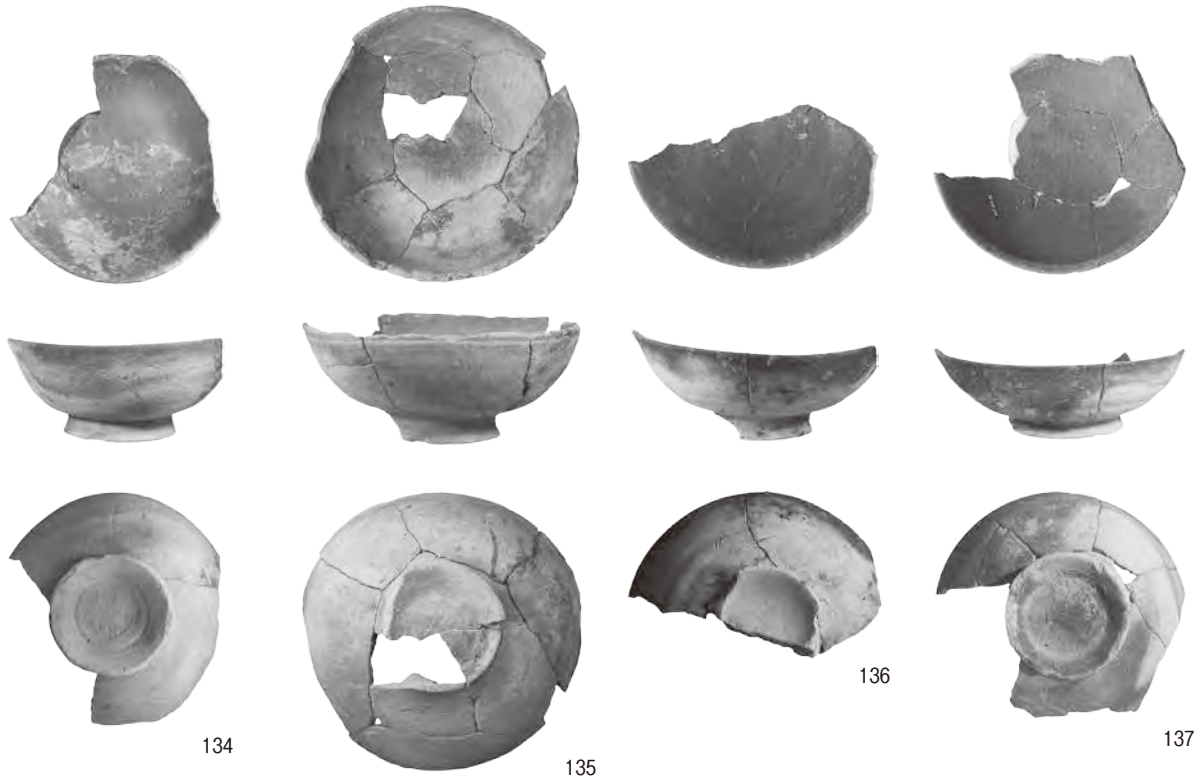
128　129

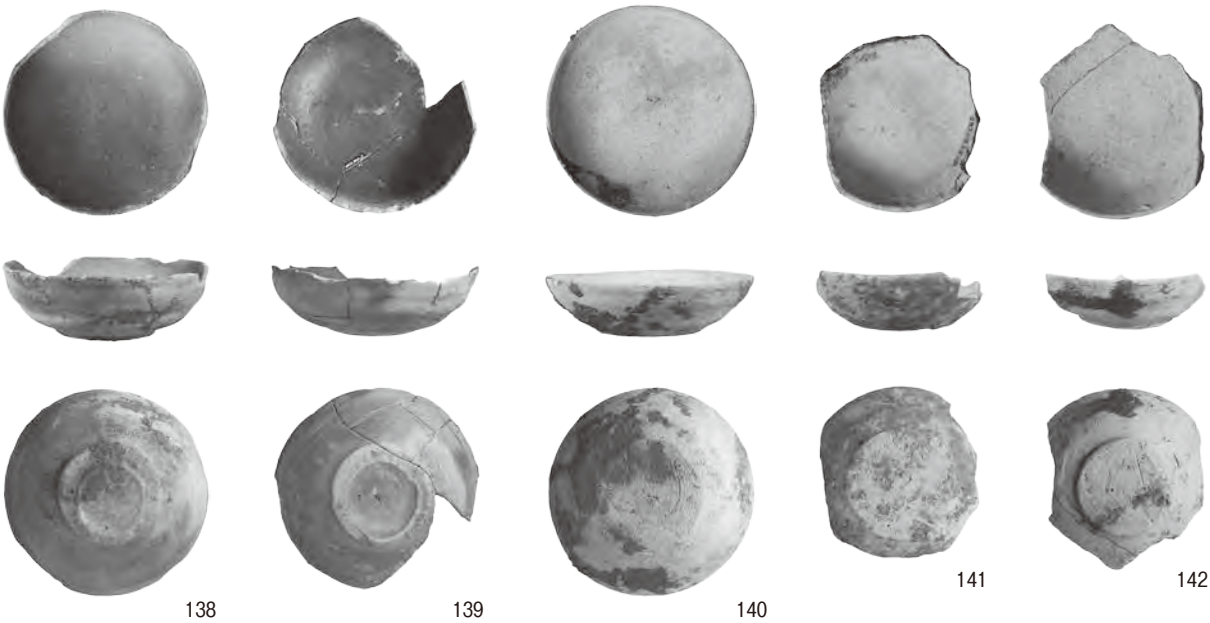
ＳＫ１出土遺物（３）　(1/4)



130　131　132　133

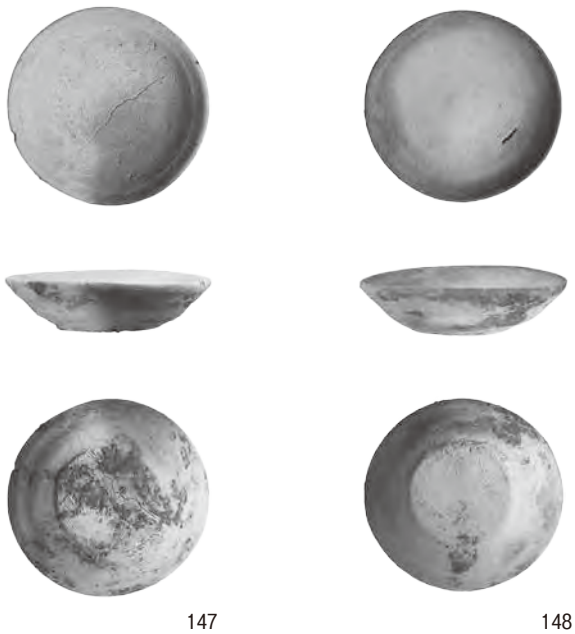
ＳＫ２出土遺物（１）　(1/4)





ＳＫ２出土遺物（２）（1/4）

ＳＫ２出土遺物（３）（1/4・1/2）



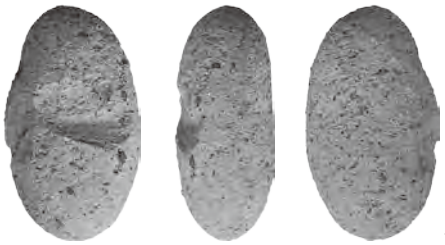
ＳＫ３出土遺物（1/4）

巻末図版20

149

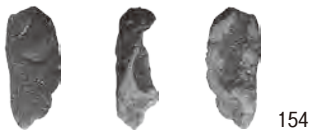
150

151



152

153



154

ＳＤ１出土遺物　(1/4・1/2)

155

ＳＤ５出土遺物　(1/4)

写真27　大道第２遺跡遠景（東から）

写真28　調査区空中写真（上が北）

巻末図版22

写真29　ＳＩ１　遺物出土状況（東から）

写真30　ＳＩ１　完掘状況（南から）

写真31　ＳＩ１　カマド　遺物出土状況（南から）

写真32　ＳＩ１　ピット内　遺物出土状況（南から）

写真33　ＳＩ２　完掘状況（南東から）

写真34　ＳＩ２　完掘状況（南から）

写真35　ＳＩ２　カマド　土層断面（東から）

写真36　ＳＩ２　カマド　完掘状況（南から）

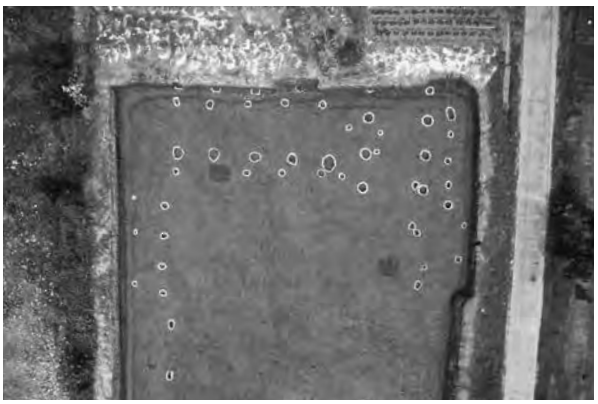


写真37　ＳＢ・ＳＡ　完掘状況（上が北）

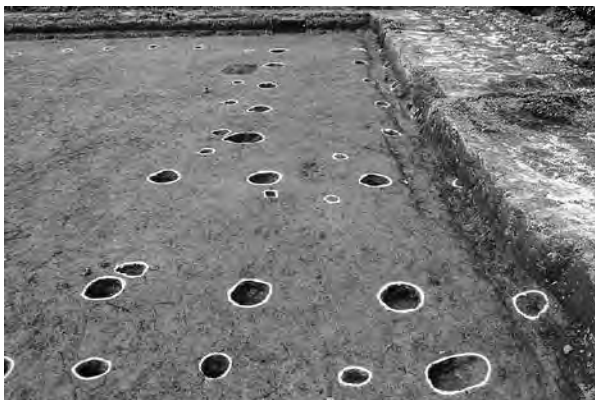


写真38　ＳＢ・ＳＡ　完掘状況（東から）

写真39　ＳＡ１　完掘状況（南から）

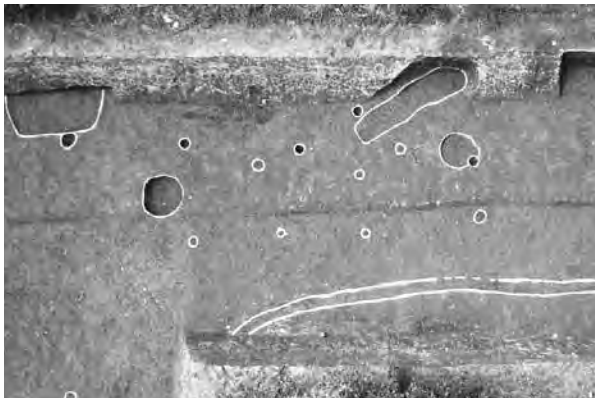


写真40　ＳＡ５　完掘状況（上が西）

写真41　ＳＤ１　完掘状況（北から）

写真42　ＳＫ１　土層断面（北から）

写真43　ＳＫ２　完掘状況（東から）

写真44　ＳＫ３　完掘状況（東から）

巻末図版24

写真45　ＳＫ４　土層断面（東から）

写真46　ＳＫ４　完掘状況（西から）

写真47　ＳＫ５　完掘状況（西から）

写真48　ＳＫ６　土層断面（東から）

写真49　ＳＫ７　土層断面（西から）

写真50　ＳＫ８　土層断面（東から）

写真51　ＳＫ９　完掘状況（東から）

写真52　ＳＫ10　完掘状況（南から）

写真53　ＳＫ11　完掘状況（東から）

写真54　ＳＫ12　完掘状況（東から）

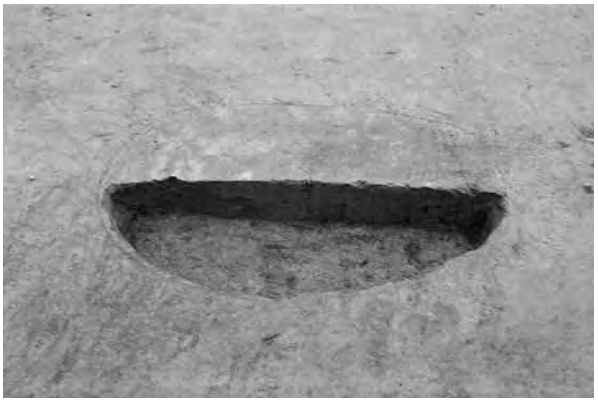


写真55　ＳＫ13　土層断面（東から）

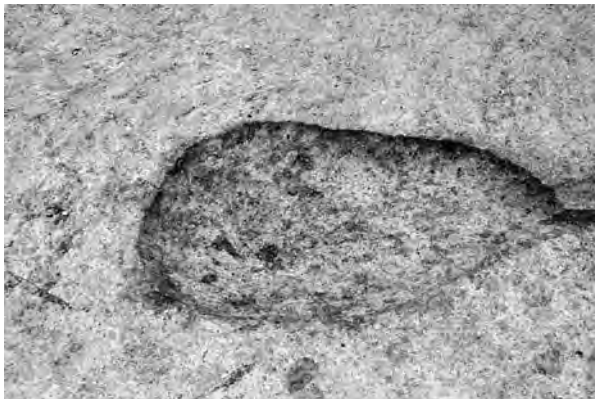


写真56　ＳＫ14　完掘状況（西から）

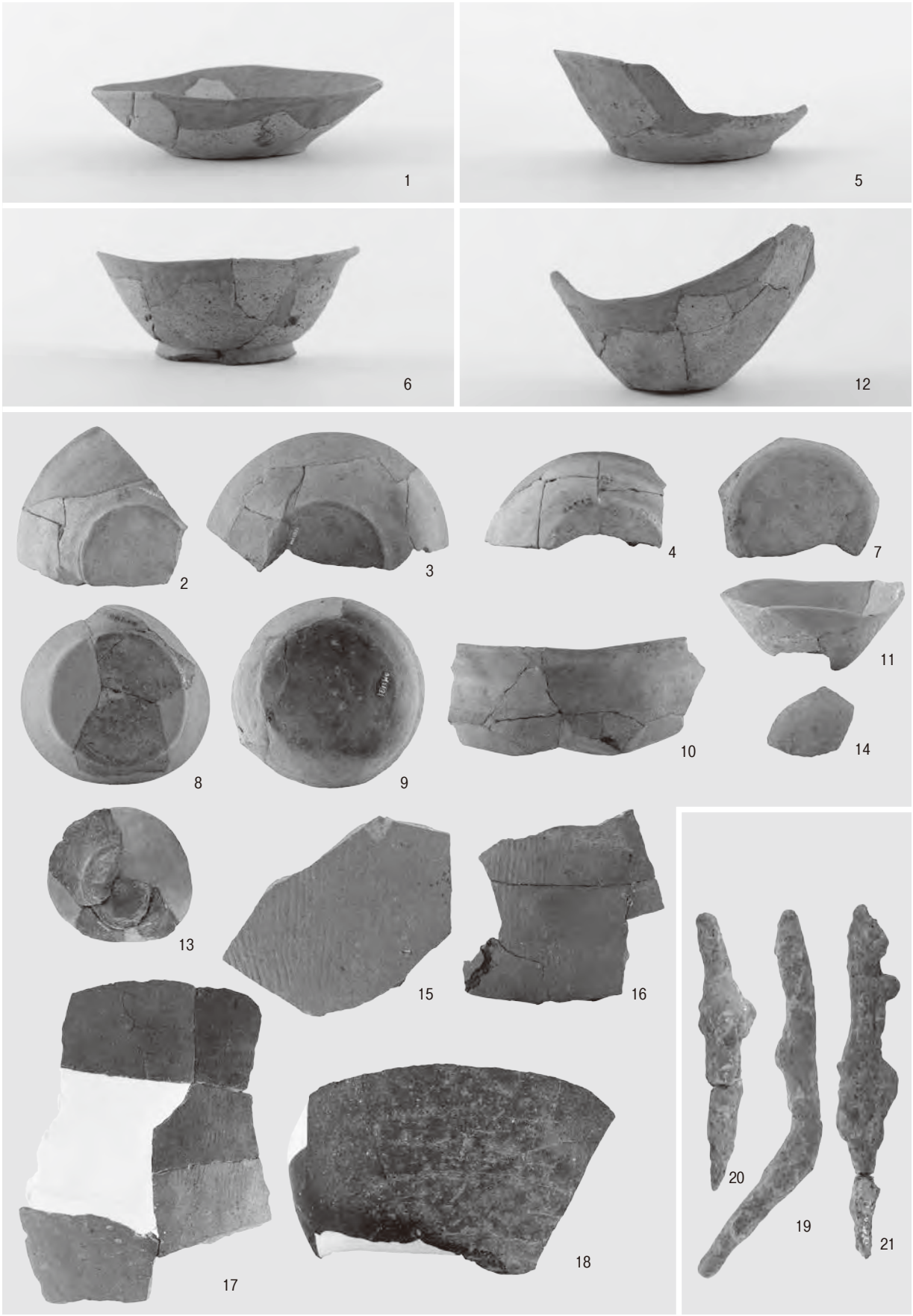
写真57　ＳＫ15　完掘状況（西から）

写真58　ＳＫ16　土層断面（西から）

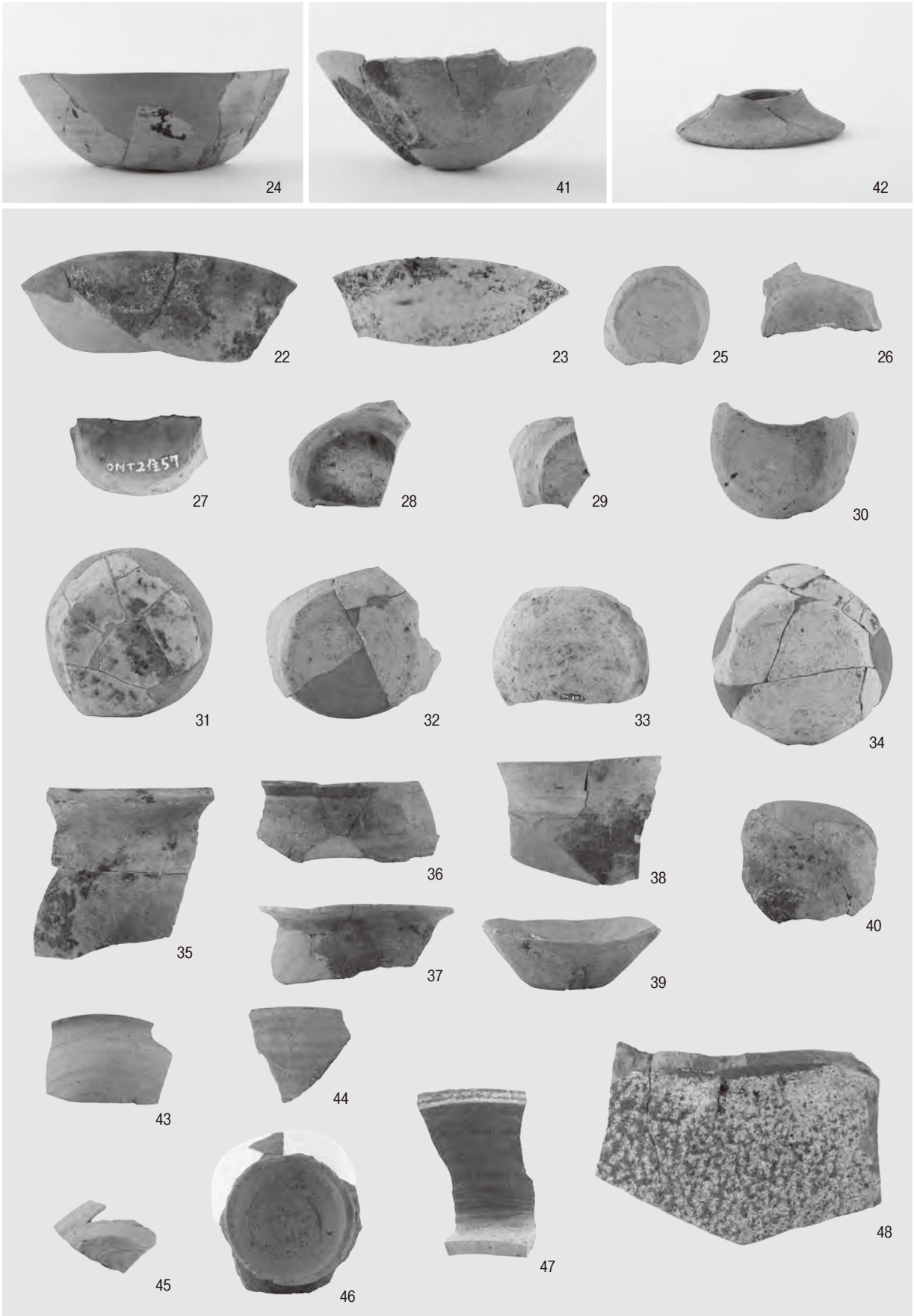
写真59　１区全景（南から）

写真60　２区全景（南から）

巻末図版26

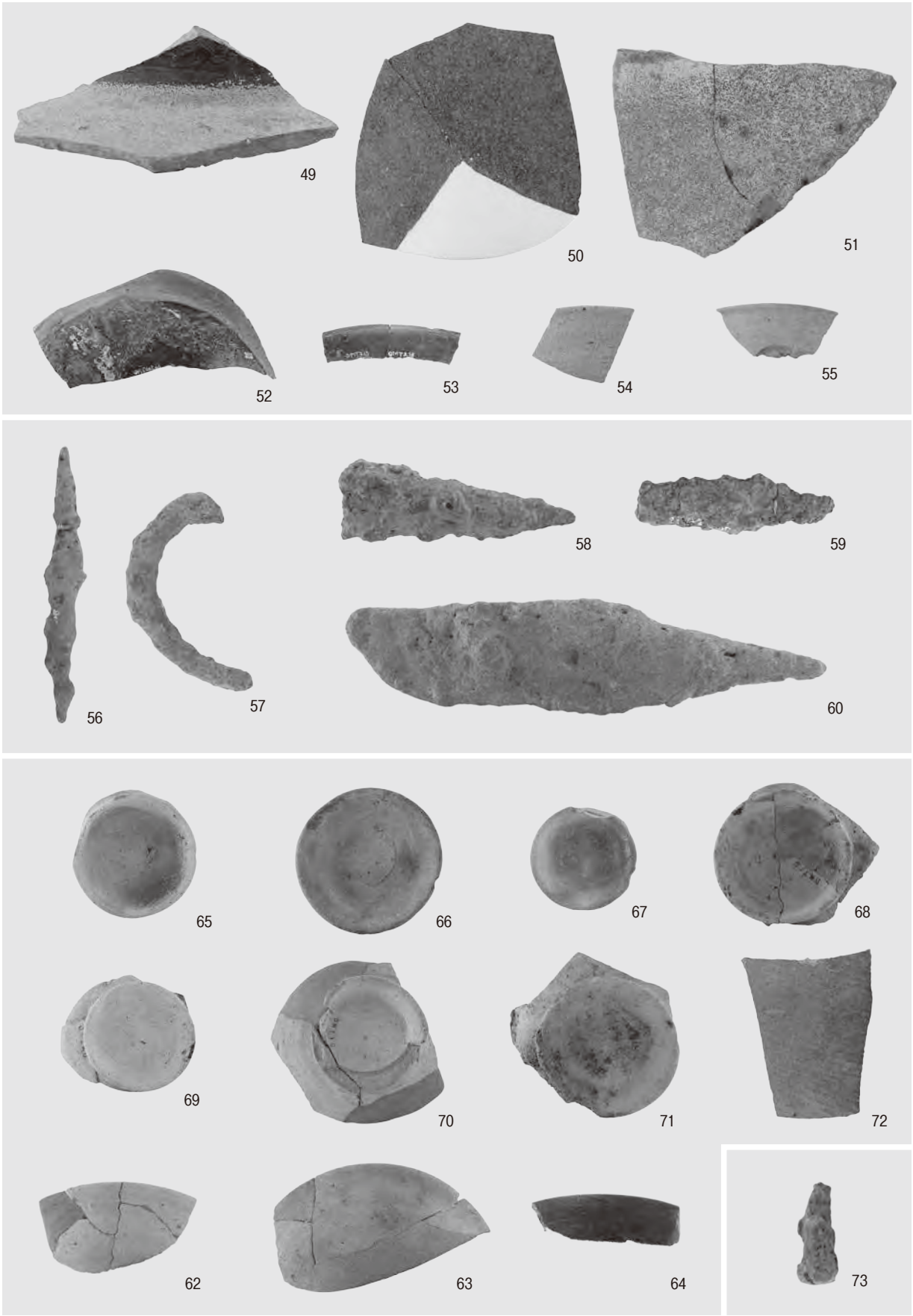


ＳＩ１出土遺物

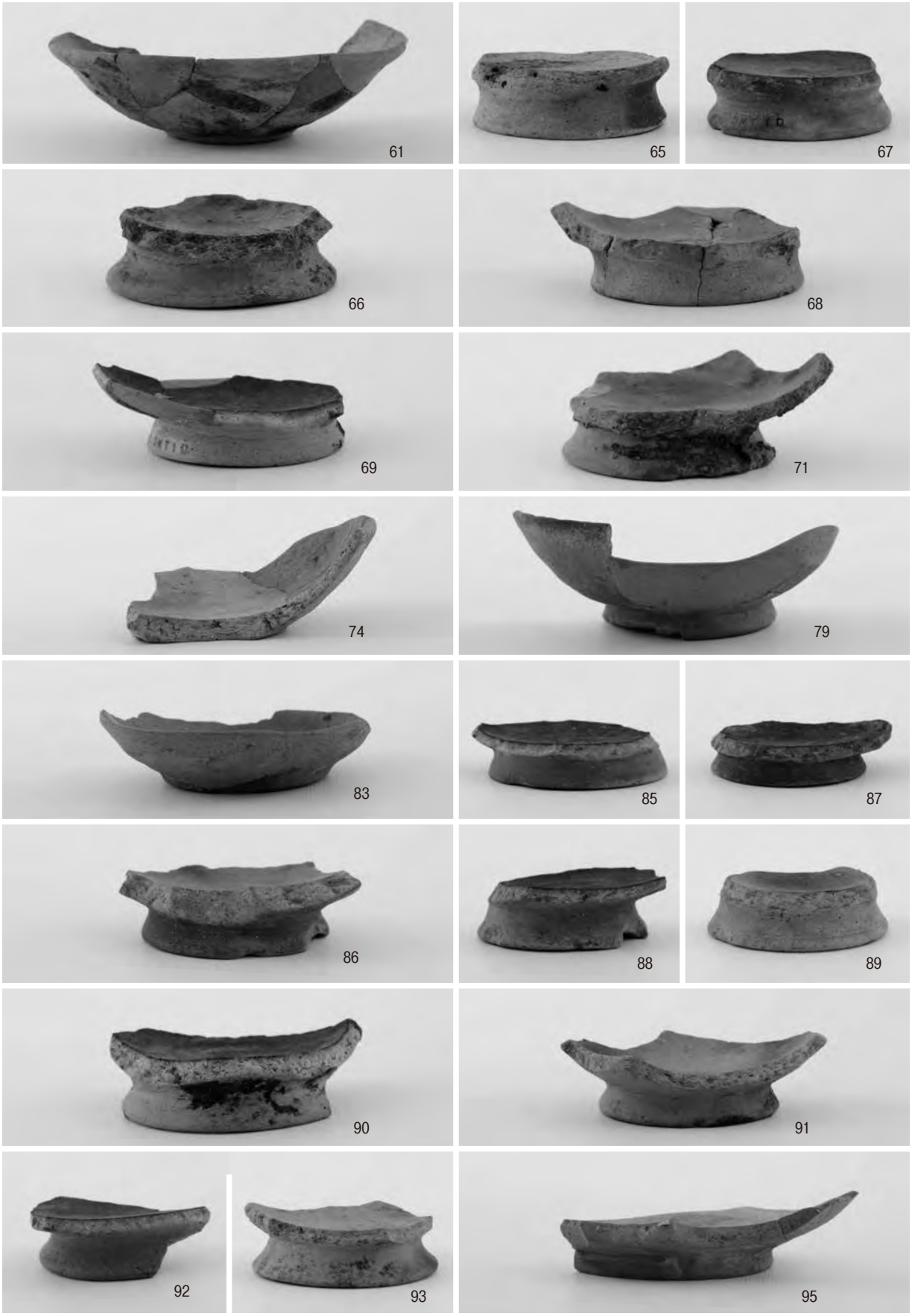

24
41
42
22
23
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
38
40
37
39
43
44
45
46
47
48

ＳＩ２出土遺物（１）

巻末図版28

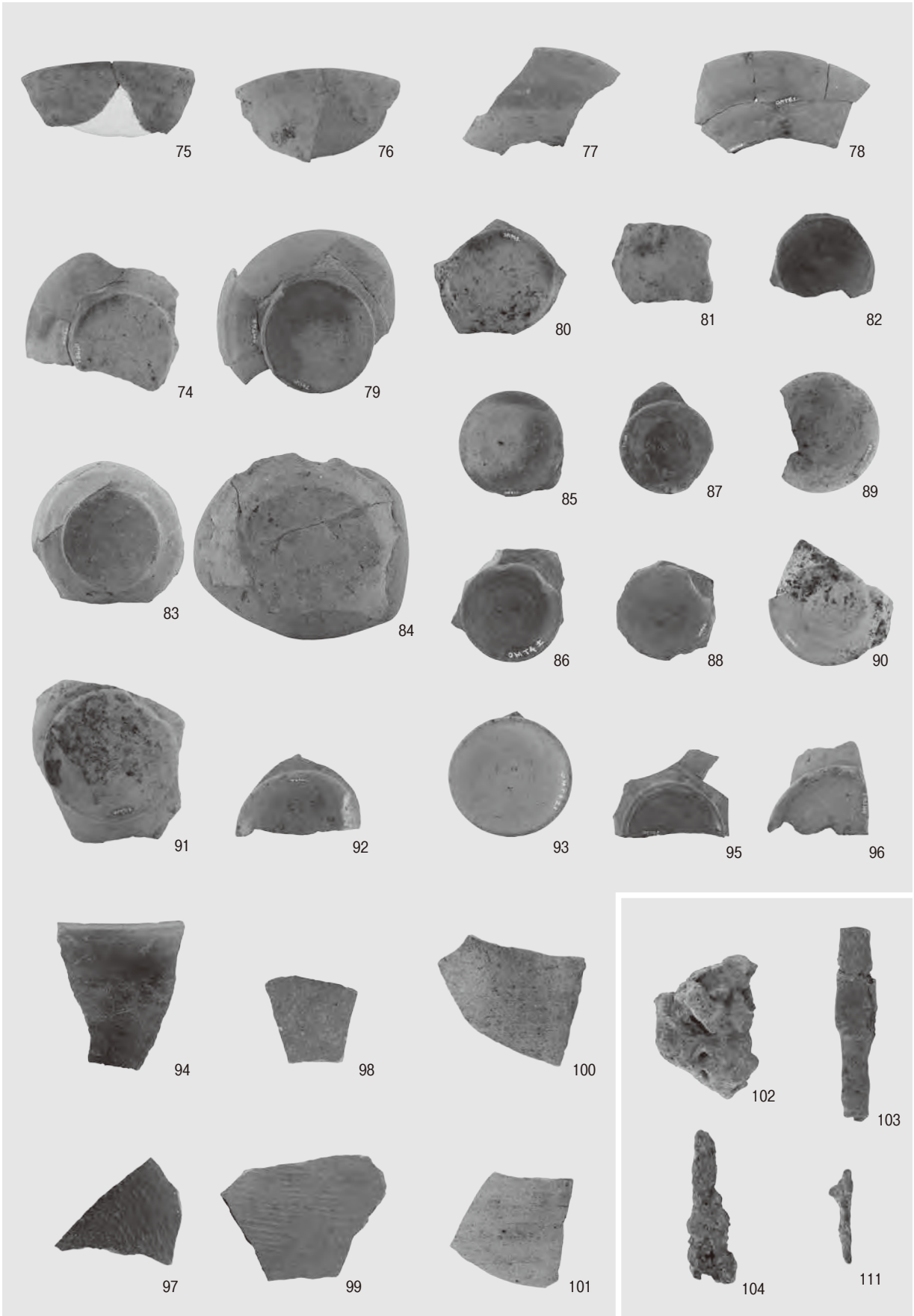


ＳＩ２出土遺物（２）・ＳＫ１～４出土遺物（１）

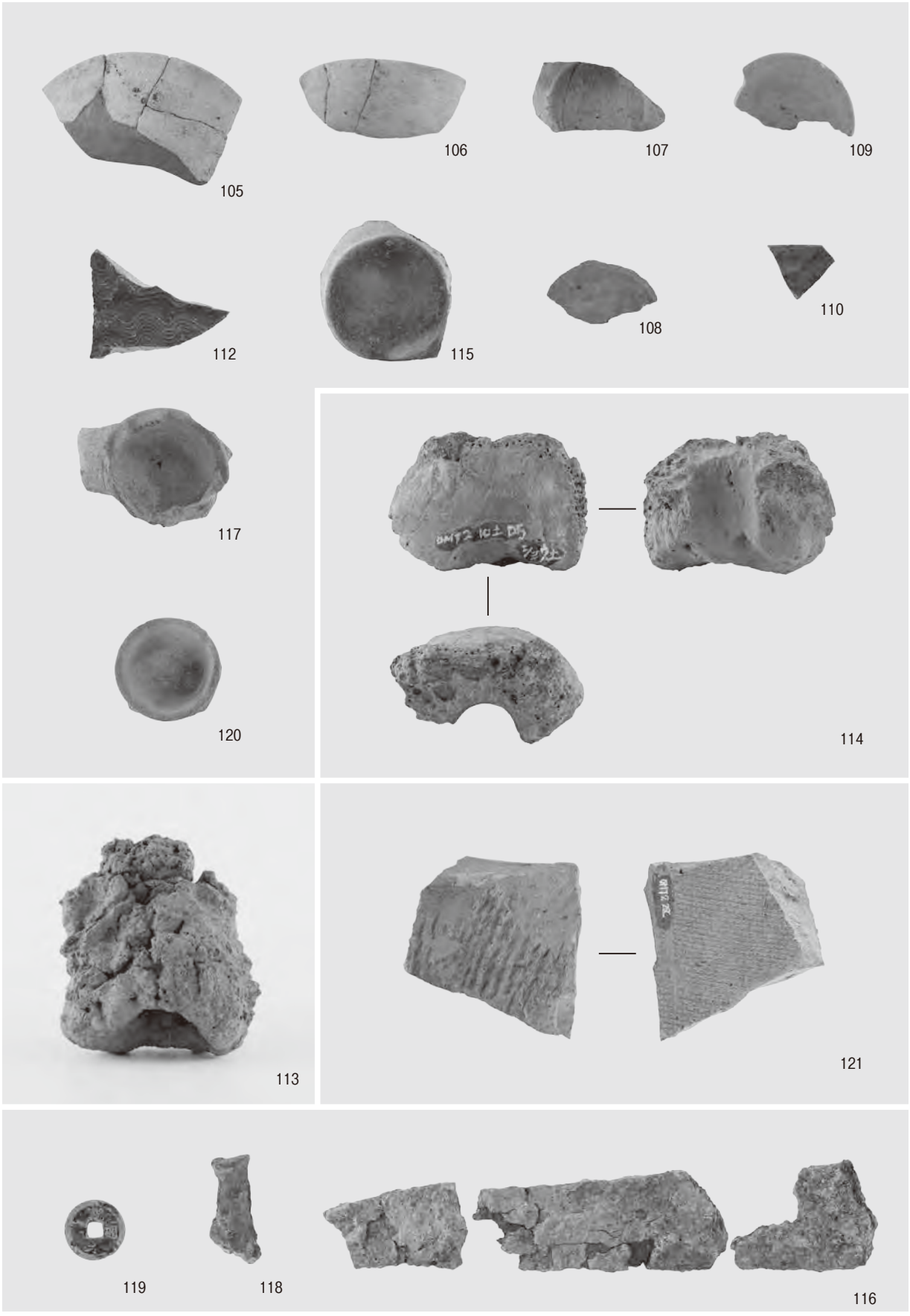


ＳＫ１～４出土遺物（２）

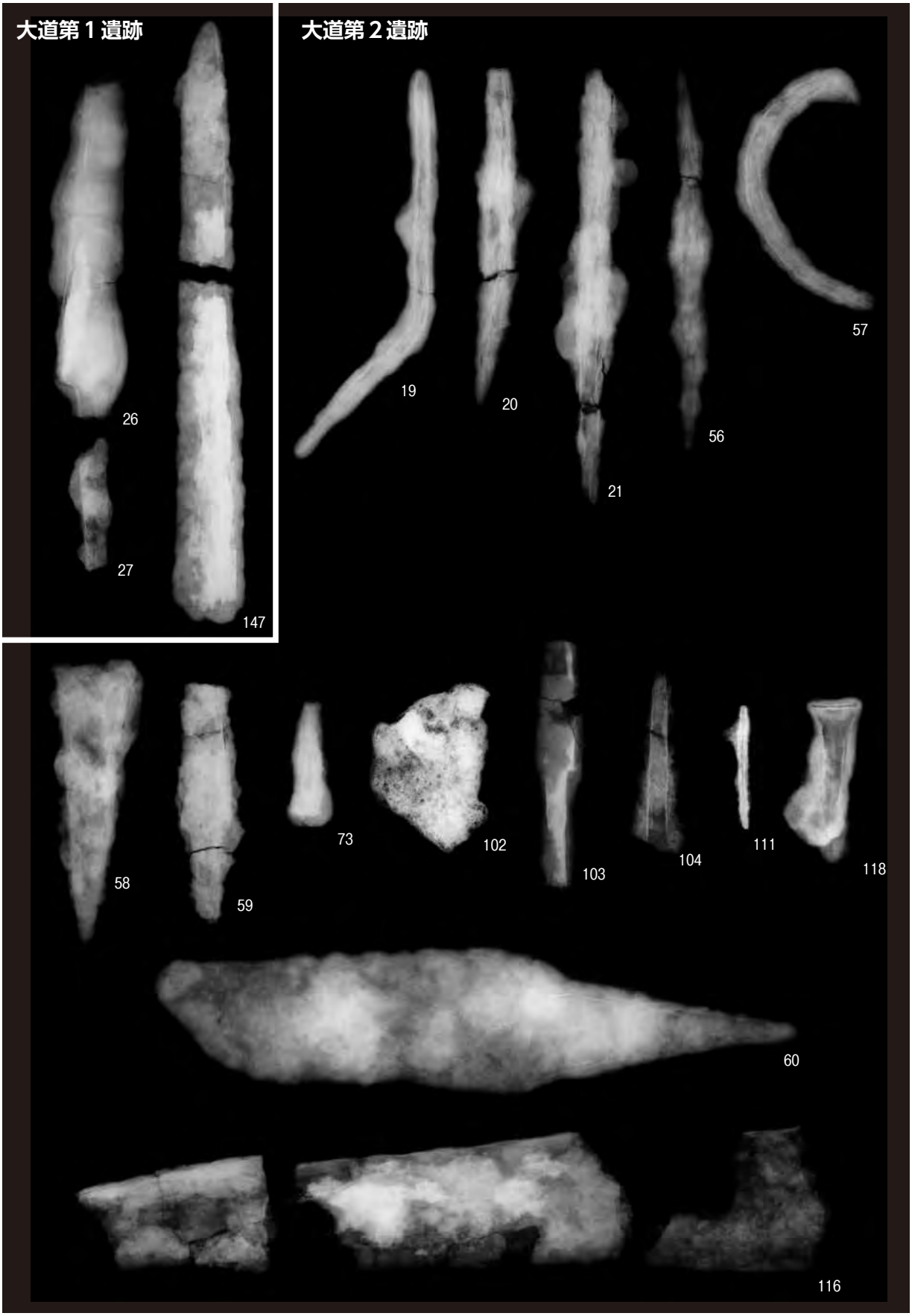
巻末図版30



ＳＫ１～７出土遺物



ＳＫ・ピット・遺構外出土遺物


大道第１遺跡
26
27
147
大道第２遺跡
19
20
21
56
57
58
59
73
102
103
104
111
118
60
116

鉄製品Ｘ線撮影写真

報 告 書 抄 録

ふ り が な	おおみちいせきはっくつちょうさほうこくしょⅠ
書　　名	大道遺跡発掘調査報告書Ⅰ
副 書 名	西大袋土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　　次	―
シリーズ名	越谷市埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	第１集
編 著 者 名	植木雅博　菟原雄大　鬼塚千花
編 集 機 関	越谷市教育委員会
所 在 地	〒343-8501 埼玉県越谷市越ヶ谷四丁目２番１号　　ＴＥＬ 048（964）2111
発行年月日	西暦2016（平成28）年３月25日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
おおみちだいいちいせき 大道第１遺跡	さいたまけんこしがやしおおあざ 埼玉県越谷市大字 おおみちばんちほか 大道92番地外	11222	78-011	35°55′16″	139°45′31″	20010731 ～ 20011116	950	土地区画整理
おおみちだいいちいせき 大道第１遺跡	さいたまけんこしがやしおおあざ 埼玉県越谷市大字 おおみちばんちほか 大道96番地外	11222	78-011	35°55′16″	139°45′31″	20140512 ～ 20140513	41	土地区画整理
おおみちだいいちいせき 大道第１遺跡	さいたまけんこしがやしおおあざ 埼玉県越谷市大字 おおみちばんちほか 大道98番地外	11222	78-011	35°55′16″	139°45′31″	20141201 ～ 20150313	33	土地区画整理
おおみちだいにいせき 大道第２遺跡	さいたまけんこしがやしおおあざ 埼玉県越谷市大字 おおみちばんちほか 大道185番地外	11222	78-012	35°55′16″	139°45′36″	20030714 ～ 20030916	862	土地区画整理

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大道第１遺跡	集落跡	平安時代	住居跡　6軒 土坑　3基 掘立柱建物跡　1棟	土師器、須恵器、鉄製品、羽口、鉄滓、土製品、砥石	土坑３基は土師器焼成坑である。
大道第２遺跡	集落跡	平安時代	住居跡　2軒 土坑　17基 掘立柱建物跡　3棟	土師器、須恵器、鉄製品、羽口、鉄滓、古銭、瓦	土坑中２基は土師器焼成坑である。

要約	大道遺跡は元荒川左岸の自然堤防上に立地している。調査では平安時代の住居跡のほか、土師器焼成坑が検出され、手工業生産を行う集落であることが明らかになった。

越谷市埋蔵文化財発掘調査報告書　第１集

大道遺跡発掘調査報告書Ⅰ

－西大袋土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－

発　行　越谷市教育委員会
埼玉県越谷市越ヶ谷四丁目２番１号
電話　０４８（９６４）２１１１

発行日　平成28年３月25日

印　刷　株式会社　秀飯舎